

The irregular
at magic high school

魔法科高校の 少男學生 9

來訪者編(上)

佐島 勤

Tsutomu Sato

illustration 石田可奈
Kana Ishida



電撃文庫

魔法科高校の 劣等生

*The irregular
at magic high school*

來訪者編(上)

9

佐島勤

Tsutomu Sato

Illustration 石田可奈
Kana Ishida

Illustrator assistant ハムーストーン・未永康子

design BEE-PEE



光井ほのか

みつい・ほのか

1年A組。深雪のクラスメイト。光を操る光波振動系魔法を使える。思い込みがやや激しいタイプ。

「リーナ、あんまり勝ち負けなんて
考えない方が良いと思うけど」

「競い合うことは大切よ。
例え実習でも勝ち負けには拘った方が
上達すると思うわ」

アンジェリーナ=クドウ=シールズ

Angelina=Kudou=Shields

北山零との『交換留学』で魔法科高校にやってきたUSNA(北アメリカ大陸合衆国)の高校生。類い希なる魔法技術を持つ、金髪碧眼の美少女。

司波深雪

しば・みゆき

司波兄妹の妹。1年A組所属。魔法科高校に主席で入学したエリート。『花冠(ブルーム)』と呼ばれる一科生徒で、得意分野は『冷却魔法』。唯一の愛すべき欠点は『重度のブラコン』。

「痛えじやねえか！」

西城レオンハルト

さいじょう・れおんはると

通称「レオ」。達也と同じく一年E組所属。父親がハーフ、母親がクォーター。『硬化魔法』を得意とする。



吉田幹比古

よしだ・みきひと

1年E組。達也のクラスメイト。古式魔法の名家。エリカとは幼少時からの顔見知り。

「簡単に行かないのは
コッチも同じだ」

千葉エリカ

ちば・えりか

達也のクラスメイト。明るい性格で、周囲も巻き込むトラブルメーカー。実家は剣技と魔法の複合戦闘術である『剣術』の大家である。

「ミキはコートの方を。
あたしは仮面を抑える！」

「君たちに私は倒せない」

吸血鬼

きゅうけつき

夜間に紛れ、魔法師たちの血液を抜き取る謎の存在。



アンジー・シリウス

Angie Sirius

USNAの魔法師部隊『スターズ』総隊長。階級は少佐。戦略級魔法師「十三使徒」の一人でもある。

「スターズ総隊長の権限により、貴方を処断します」

「全力で叩き潰す！」

「絶対に、負けられない！」



2095年現在の世界情勢

世界の寒冷化を直接の契機とする第三次世界大戦、二〇年世界群発戦争により世界の地図は大きく塗り替えられた。現在の状況は以下のとおり。

USAはカナダ及びメキシコからパナマまでの諸国を併合して北アメリカ大陸合衆国(USNA)を形成。

ロシアはウクライナ、ベラルーシを再吸収して新ソビエト連邦(新ソ連)を形成。

中国はビルマ北部、ベトナム北部、ラオス北部、朝鮮半島を征服して大亞細亞連合(大亞連合)を形成。

インドとイランは中央アジア諸国(トルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、アフガニスタン)及び南アジア諸国(パキスタン、ネバ

ール、ブータン、バングラデシュ、スリランカ)を呑み込んでインド・ペルシア連邦を形成。

他のアジア・アラブ諸国は地域ごとに軍事同盟を締結し新ソ連、大亞連合、インド・ペルシアの三大国に対抗。

オーストラリアは事実上の鎖国を選択。

EUは統合に失敗し、ドイツとフランスを境に東西分裂。東西EUも統合国家の形成に至らず、結合は戦前よりむしろ弱体化している。

アフリカは諸国の半分が国家ごと消滅し、生き残った国家も辛うじて都市周辺の支配権を維持している状態となっている。

南アメリカはブラジルを除き地方政府レベルの小国分立状態に陥っている。

戦略級魔法師・十三使徒

現代魔法は高度な科学技術の中で育まれてきたものである為、軍事的に強力な魔法の開発が可能な国家は限られている。その結果、大規模破壊兵器に匹敵する戦略級魔法を開発できたのは一握りの国家だった。

ただ開発した魔法を同盟国に供与することは行われており、戦略級魔法に高い適性を示した同盟国の魔法師が戦略級魔法師として

USNA

アンジー・シリウス:「ヘビィ・メタル・バースト」
エリオット・ミラー:「リヴァイアサン」

ローラン・バルト:「リヴァイアサン」

※この中でスターズに所属するのはアンジー・シリウスのみであり、エリオット・ミラーはアラスカ基地、ローラン・バルトは国外のジブラルタル基地から基本的に動くことはない。

新ソビエト連邦

イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフ:「トゥマー・ン・ボンバ」

レオニード・コンドラチェンコ:「シムリヤー・アールミヤ」

※コン德拉チェンコは高齢の為、黒海基地から基本的に動くことはない。

大亞細亞連合

劉雲徳(りゅううんとく)「霹靂塔」

※劉雲徳は2095年10月31日の対日戦闘で戦死している。

インド・ペルシア連邦

バラット・チャンドラ・カーン:「アグニ・ダウンバースト」

認められている例もある。

2095年4月段階で、国家により戦略級魔法に適性を認められ対外的に公表された魔法師は13名。彼らは十三使徒と呼ばれ、世界の軍事バランスの重要なファクターと見なされていた。十三使徒の所属国、氏名、戦略級魔法の名称は以下のとおり。

日本

五輪 濠(いつわ・みお):「深淵(アビス)」

ブラジル

ミゲル・ディアス:「シンクロライナー・フュージョン」

※魔法式はUSNAより供与されたもの。

イギリス

ウィリアム・マクロード:「オゾンサークル」

ドイツ

カーラ・シュミット:「オゾンサークル」

※オゾンサークルはオゾンホール対策として分裂前のEUで共同研究された魔法を原型としており、イギリスで完成した魔法式が協定により旧EU諸国に公開された。

トルコ

アリ・シャーヒーン:「バハムート」

※魔法式はUSNAと日本の共同で開発されたものであり、日本主導で供与された。

タイ

ソム・チャイ・ブンナーク:「アグニ・ダウンバースト」

※魔法式はインド・ペルシアより供与されたもの。

ある欠陥を抱える劣等生の兄。

全てが完全無欠な優等生の妹。

二人の兄妹が魔法科高校に入学した時から、

波乱の日々の幕が開いた——。

魔法科高校の9 劣等生

来訪者編(上)

佐島 勤
Tsutomu Sato
illustration
石田可奈
Kana Ishida

Character

キャラクター紹介



Yoshida

吉田幹比古 *Mikihiko*
よしだ・みきひこ
1年E組。達也のクラスメイト。
古式魔法の名家。エリカとは
幼少時からの顔見知り。



光井ほのか *Mitsui Honoka*
みつい・ほのか
1年A組。深雪のクラスメイト。
光波振動系魔法が得意。
思い込むとやや直情的。



北山 雪 *Kitayama Shizuku*
きたやま・しづく
1年A組。深雪のクラスメイト。
振動・加速系魔法が得意。
感情の起伏をあまり表に出さない。

Shiba Tatsuya

司波達也

しば・たつや

1年E組。『雑草』と
揶揄される二科生(劣等生)。
全てに達観している。



Shiba Miyuki

司波深雪

しば・みゆき

1年A組。達也の妹。
主席入学した優等生。
冷却魔法が得意。兄を溺愛する。



Saijou Leonhart
西城レオンハルト

さいじょう・れおんはると
1年E組。達也のクラスメイト。
硬化魔法が得意。明るい性格。



Chiba Erika
千葉エリカ

ちば・えりか
1年E組。達也のクラスメイト。
剣術が得意。チャーミングな
トラブルメーカー。



Shibata Mizuki

柴田美月

しばた・みづき

1年E組。達也のクラスメイト。
靈子放射光過敏症。
少し天然が入った真面目な少女。



里美スバル

さとみ・すばる

1年D組。美少年と見まごう少女。 1年A組。深雪のクラスメイト。
明るくノリの良い性格。

森崎 駿

もりさき・しゅん

CAD早撃ちが得意。

一科生としてのプライドが高い。

明智英美

あけち・えいみ

1年B組。クオーターで、フルネームは
アメリカ=英美=明智=ゴールディ。



Nakajou Azusa

中条あづさ

なかじょう・あづさ

二年生。生徒会書記。

オドオドした性格で

引っ込み思案。

その能力は歴代最高クラス。

Saegusa Mayumi

七草真由美

さえぐさ・まゆみ

三年生。生徒会会長。

魔法科生徒の中でも



Ichihara Suzune

市原鈴音

いちはら・すずね

三年生。生徒会会計。

冷静沈着な頭脳派。

真由美の右腕。



Hattori Gyoubushoujo Hanzou

服部刑部少丞範蔵

はっとり・ぎょうぶしょうじょう・はんぞう

二年生。生徒会副会長。

Watanabe Mari 渡辺摩利

わたなべ・まり

三年生。風紀委員会委員長。

真由美の親友で、

物事全般にやや好戦的。



辰巳鋼太郎

たつみ・こうたろう

三年生。風紀委員。

豪快な性格の持ち主。

五十里 啓

いそり・けい

二年生。魔法理論の成績は

学年トップ。千代田花音とは

許嫁同士。

千代田花音

ちよだ・かのん

二年生。活発な印象の少女。

五十里啓とは許嫁同士。

沢木 碧

さわき・みどり

二年生。風紀委員。

女性的な名前がコンプレックス。

Juumonji Katsuto

十文字克人

じゅうもんじ・かつと

三年生。全クラブ活動の

統括組織である

部活連の会頭。



*Kirihara Takeaki***桐原武明**

きりはら・たけあき
二年生。

剣術部所属。関東剣術大会
中等部のチャンピオン。

*Mibu Sayaka***壬生紗耶香**

みぶ・さやか
二年生。

剣道部所属。
中等部剣道大会女子部の
全国二位。

平河小春

ひらかわ・こはる
三年生。

九校戦ではエンジニアで参加。
論文コンペメンバーを辞退。

平河千秋

ひらかわ・ちあき
一年G組所属。

達也に敵意を向ける。

安宿怜美

あすか・さとみ
保険医。

おっとりホンワカした
笑顔が男子生徒に人気。

甘楽計夫

つづら・かずお
教師。

専門は魔法幾何学。
論文コンペの世話役。

*Ichijou Akane***一条 茜**

いちじょう・あかね
一条家の長女。

将輝の妹。
小学生だが、
ややマセている。

**一条 瑠璃**

いちじょう・るり
一条家の次女。

将輝の妹。
マイペースなしっかりもの。

*Kirihara Takeaki**Isori Kei***五十里 啓**

いそり・けい
二年生。

生徒会会計。

魔法理論の成績は

学年トップ。千代田花音とは

許嫁同士。

*Chiyoda Kanon***千代田花音**

ちよだ・かのん
二年生。

摩利にかわり、

風紀委員長となる。

五十里啓とは許嫁同士。

*Juumonji Katsuto***十文字克人**

じゅうもんじ・かつと
三年生。

元・部活連の会頭。

*Ichijou Masaki***一条将輝**

いちじょう・まさき
第三高校の一年生。

九校戦に出場。

十師族・一条家の次期当主。

*Kichijouji Shinkuro***吉祥寺真紅郎**

きちじょうじ・しんくろう
第三高校の一年生。

九校戦に出場。

「カーディナル・ジョージ」の
異名で知られている。

**一条美登里**

いちじょう・みどり
将輝の母親。

温和な性格で

料理上手。



九重八雲

ここえ・やくも

古式魔法「忍術」の使い手。
達也の体術の師匠。

千葉寿和

ちば・としかず

千葉エリカの長兄。警察省のキャリア組。
一見は遊び人風。

千葉修次

ちば・なおつぐ

千葉エリカの次兄。摩利の恋人。
千刃流剣術免許皆伝で
「千葉の麒麟児」の異名をとる。

牛山

うしやま

フォア・リーブス・テクノロジーCAD開発
第三課主任。達也が信頼を置く人物。



リン

森崎が助けた少女。
フルネームは『孫美鈴(スンメイリン)』。
香港系国際犯罪シンジケート
「無頭竜」の新たなリーダー。



陳祥山

チェンシャンシェン
大亜連合軍
特殊工作部隊隊長。
非情な性格の持ち主。



呂剛虎

リュウカンフウ
大亜連合軍
特殊工作部隊所属の
エース魔法師。
別名『人喰い虎』。

小野 遙

おの・はるか

1年E組の総合力カウンセラー。
いじられ気質だが、裏の顔も持つ。

Kazama Harunobu

風間玄信

かざま・はるのぶ

陸軍101旅団・
独立魔装大隊・隊長。
階級は少佐。



Sanada Shigeru

真田繁留

さなだ・しげる

陸軍101旅団・
独立魔装大隊・幹部。
階級は大尉。



柳 連

やなぎ・むらじ

陸軍101旅団・独立魔装大隊・幹部。
階級は大尉。

山中幸典

やまなか・こうすけ

陸軍101旅団・
独立魔装大隊・幹部。
軍医少佐。一級の治癒魔法師。

藤林響子

ふじばやし・きょうこ

風間の副官を務める女性士官。
階級は少尉。

九島 烈

くどう・れつ

世界最強の魔法師の一人と目されていた人物。
敬意を以て「老師」と呼ばれる。

周

チョウ

呂と陳を日本に手引きした
美貌の青年。





Angelina Kudou Shield
アンジェリーナ＝
クドウ＝シールズ

USNAの魔法師部隊『スターズ』総隊長。
階級は少佐。愛称はリーナ。
戦略級魔法師
「十三使徒」の一人でもある。

ベンジャミン・カノープス

USNAの魔法師部隊『スターズ』ナンバー・ツー。
階級は少佐。シリウス少佐が不在時は総隊長を代行する。



シルヴィア・
マーキュリー・ファースト

USNAの魔法師部隊『スターズ』
惑星級魔法師。階級は准尉。
愛称はシルヴィで、『マーキュリー・
ファースト』はコードネーム。
日本での作戦時は、
シリウス少佐の
補佐役を務める。



ミカエラ・ホンゴウ

USNAより日本に送り込まれた
諜報員(ただし本職は国防総省
所属の魔法研究者)。
愛称はミア。

アルフレッド・
フォーマルハウト

USNAの魔法師部隊『スターズ』一等星魔法師。
階級は中尉。愛称はフレディ。現在は脱走兵。

チャールズ・サリバン

USNAの魔法師部隊『スターズ』衛星級魔法師。
『デーモス・セカンド』のコードネームで呼ばれる。
現在は脱走兵。

クレア

ハンターQ——『スターズ』になれなかつた
魔法師部隊『スターダスト』の女兵士。
Qは追跡部隊の17番目を意味する。

レイチェル

ハンターR——『スターズ』になれなかつた
魔法師部隊『スターダスト』の女兵士。
Rは追跡部隊の18番目を意味する。

司波小百合

しば・さゆり
達也と深雪の義母。
二人を嫌悪している。

四葉真夜

よつば・まや
達也と深雪の叔母。
深夜の双子の妹。
四葉家の現当主。

葉山

はやま

真夜に仕える老齢の執事。

Shiba Miya

司波深夜

しば・みや

達也と深雪の実母。故人。

精神構造干渉魔法に長けた
唯一の魔法師。



Sakurai Honami

桜井穂波

さくらい・ほなみ

深夜の『ガーディアン』。故人。
遺伝子操作により魔法資質を
強化された調整体魔法師
「桜」シリーズの第一世代。



黒羽 貢

くろば・みつぐ

司波深夜、四葉真夜の従弟。
亜夜子、文弥の父。

黒羽亜夜子

くろば・あやこ

達也と深雪の

再従妹(はとこ)にあたる少女。
文弥という双子の弟を持つ。

黒羽文弥

くろば・ふみや

四葉の次期当主候補者。

達也と深雪の

再従弟(はとこ)にあたる少年。
亜夜子という双子の姉を持つ。12

Glossary

用語解説

魔法科高校

国立魔法大学付属高校の通称。全国に九校設置されている。この内、第一から第三までが一学年定員二百名で一科・二科制度を採っている。

ブルーム、ウイード

第一高校における一科生、二科生の格差を表す隠語。一科生の制服の左胸には八枚花弁のエンブレムが刺繡されているが、二科生の制服にはこれが無い。

CAD〔シー・エー・ディー〕

魔法発動を簡略化させるデバイス。内部には魔法のプログラムが記録されている。特化型、汎用型などタイプ・形状は様々。

フォア・リーブス・テクノロジー〔FLT〕

国内CADメーカーの一つ。元々完成品よりも魔法工学部品で有名だったが、シルバー・モデルの開発により一躍CADメーカーとしての知名度が増した。

トーラス・シルバー

僅か一年の間に特化型CADのソフトウェアを十年は進歩させたと称えられる天才技術者。

エイドス〔個別情報体〕

元々はギリシア哲学用語。現代魔法学においてエイドスとは、事象に付随する情報体のこと、「世界」にその「事象」が存在することの記録で、「事象」が「世界」に記す足跡とも言える。

現代魔法学における「魔法」の定義は、エイドスを改変することによって、その本体である「事象」を改変する技術とされている。

イデア〔情報体次元〕

元々はギリシア哲学用語。現代魔法学においてイデアとは、エイドスが記録されるプラットフォームのこと。魔法の一次的形態は、このイデアというプラットフォームに魔法式を出力して、そこに記録されているエイドスを書き換える技術である。

起動式

魔法の設計図であり、魔法を構築するためのプログラム。CADには起動式のデータが圧縮保存されており、魔法師から流し込まれたサイオン波を展開したデータに従って信号化し、魔法師に返す。

サイオン(想子)

心靈現象の次元に属する非物質粒子で、認識や思考結果を記録する情報素子のこと。現代魔法の理論的基盤であるエイドス、現代魔法の根幹を支える技術である起動式や魔法式はサイオンで構築された情報体である。

プシオン(靈子)

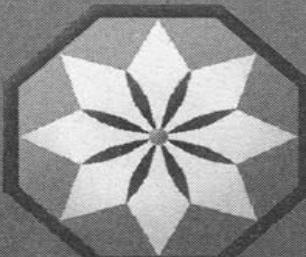
心靈現象の次元に属する非物質粒子で、その存在は確認されているがその正体、その機能については未だ解明されていない。一般的な魔法師は、活性化したプシオンを「感じる」ことができるにとどまる。

魔法師

『魔法技能師』の略語。魔法技能師とは、実用レベルで魔法を使用するスキルを持つ者の総称。

魔法式

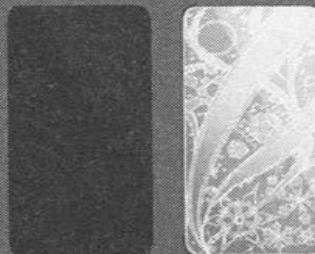
事象に付隨する情報を一時的に改変する為の情報体。魔法師が保有するサイオンで構築されている。



一科生のエンブレム



司波達也のCAD



司波深雪のCAD

魔法演算領域

魔法式を構築する精神領域。魔法という才能の、いわば本体。魔法師の無意識領域に存在し、魔法師は通常、魔法演算領域を意識して使うことは出来ても、そこで行われている処理のプロセスを意識することは出来ない。魔法演算領域は、魔法師自身にとってもブラックボックスと言える。

魔法式の出力プロセス

- ①起動式をCADから受信する。これを「起動式の読み込み」という。
 - ②起動式に変数を追加して魔法演算領域に送る。
 - ③起動式と変数から魔法式を構築する。
 - ④構築した魔法式を、無意識領域の最上層にして
意識領域の最下層たる「ルート」に転送、意識と無意識の
狭間に存在する「ゲート」から、イデアへ出力する。
 - ⑤イデアに出力された魔法式は、指定された座標の
エイドスに干渉しそれを書き換える。
- 单一系統・単一工程の魔法で、この五段階のプロセスを
半秒以内で完了させることが、「実用レベル」の
魔法師としての目安になる。



魔法の評価基準(魔法力)

サイオン情報体を構築する速さが魔法の処理能力であり、
構築できる情報体の規模が魔法のキャパシティであり、
魔法式がエイドスを書き換える強さが干渉力、
この三つを総合して魔法力と呼ばれる。

基本コード仮説

「加速」「加重」「移動」「振動」「収束」「発散」「吸収」「放出」の四系統八種にそれぞれ対応した
プラスとマイナス、合計十六種類の基本となる魔法式が存在していて、
この十六種類を組み合わせることで全ての系統魔法を構築することができるという理論。

系統魔法

四系統八種に属する魔法のこと。

系統外魔法

物質的な現象ではなく精神的な現象を操作する魔法の総称。
心靈存在を使役する神靈魔法・精靈魔法から読心、幽体分離、意識操作まで多種にわたる。

十師族

日本で最強の魔法師集団。一条(いちじょう)、一之倉(いちのくら)、一色(いっしき)、二木(ふたつき)、
二階堂(にかいどう)、二瓶(にへい)、三矢(みつや)、三日月(みかづき)、四葉(よつば)、五輪(いつわ)、
五頭(ごとう)、五味(いつみ)、六塚(むつづか)、六角(ろっかく)、六郷(ろくごう)、六本木(ろっぽんぎ)、
七草(さえぐさ)、七宝(しちぱう)、七夕(たなばた)、七瀬(ななせ)、八代(やつしろ)、八朔(はっさく)、
八幡(はちまん)、九島(くどう)、九鬼(くき)、九頭見(くずみ)、十文字(じゅうもんじ)、十山(とおやま)の
二十八の家系から四年に一度の「十師族選定会議」で選ばれた十の家系が『十師族』を名乗る。

数字付き

十師族の苗字に一から十までの数字が入っているように、百家の中でも本流とされている家系の
苗字には『千』代田、『五十』里、『千』葉家の様に、十一以上の数字が入っている。
数値の大小が力の強弱を表すものではないが、苗字に数字が入っているかどうかは、
血筋が大きく物を言う、魔法師の力量を推測する一つの目安となる。

数字落ち

エクストラ・ナンバーズ、略して「エクストラ」とも呼ばれる、「数字」を剥奪された魔法師の一族。
かつて、魔法師が兵器であり実験体サンプルであった頃、「成功例」としてナンバーを与えられた
魔法師が、「成功例」に相応しい成果を上げられなかった為に捺された烙印。

様々な魔法

●コキュートス

精神を凍結させる系統外魔法。凍結した精神は肉体に死を命じることも出来ず、この魔法を掛けられた相手は、精神の「静止」に伴い肉体も停止・硬直してしまう。精神と肉体の相互作用により、肉体の部分的な結晶化が観測されることもある。

●地鳴り

独立情報体「精霊」を媒体として地面を振動させる古式魔法。

●術式解散〔グラム・ディスパージョン〕

魔法の本体である魔法式を、意味の有る構造を持たないサイオン粒子群に分解する魔法。魔法式は事象に付随する情報体に作用するという性質上、その情報構造が露出していかなければならず、魔法式そのものに対する干渉を防ぐ手立ては無い。

●術式解体〔グラム・デモリッシュ〕

圧縮したサイオン粒子の塊をイデアを経由せずに対象物へ直接ぶつけて爆発させ、そこに付け加えられた起動式や魔法式などの、魔法を記録したサイオン情報体を吹き飛ばしてしまう無系統魔法。魔法といっても、事象変更の為の魔法式としての構造を持たないサイオンの砲弾であるため情報強化や広域干渉には影響されない。また、砲弾自体の持つ圧力がキャスト・ジャミングの影響も撥ね返してしまう。物理的な作用が皆無である故に、どんな障害物でも防ぐことは出来ない。

●地雷原

土、岩、砂、コンクリートなど、材質は問わず、とにかく「地面」という概念を有する固体に強い振動を与える魔法。

●地割れ

独立情報体「精霊」を媒体として地面を線上に押し潰し、一見地面を引き裂いたかのような外観を作り出す魔法。

●ドライ・ブリザード

空気中の二酸化炭素を集め、ドライアイスの粒子を作り出し、凍結過程で余った熱エネルギーを運動エネルギーに変換してドライアイス粒子を高速で飛ばす魔法。

●這い寄る雷蛇〔スリザリン・サンダース〕

『ドライ・ブリザード』のドライアイス気化によって水蒸気を凝結させ、気化した二酸化炭素を溶け込ませた導電性の高い霧を作り出した上で、振動系魔法と放出系魔法で摩擦電気を発生させる。そして、炭酸ガスが溶け込んだ霧や水滴を導線として敵に電撃を浴びせるコンビネーション魔法。

●ニブルヘイム

振動減速系広域魔法。大容積の空気を冷却し、それを移動させることで広い範囲を凍結させる。端的に言えば、超大型の冷凍庫を作り出すようなものである。発動時に生じる白い霧は空中で凍結した氷やドライアイスの粒子だが、レベルを上げると凝結した液体窒素の霧が混じることもある。



●爆裂

対象物内部の液体を気化させる発散系魔法。

生物ならば体液が気化して身体が破裂、

内燃機関動力の機械ならば燃料が気化して爆散する。

燃料電池でも結果は同じで、可燃性の燃料を搭載していないなくても、

バッテリー液や油圧液や冷却液や潤滑液など、およそ液体を搭載していない機械は存在しないため、「爆裂」が発動すればほぼあらゆる機械が破壊され停止する。

●乱れ髪

角度を指定して風向きを変えて行くのではなく、「もつれさせる」という曖昧な結果をもたらす

気流操作により、地面すれすれの気流を起こして相手の足に草を絡みつかせる古式魔法。

ある程度丈の高い草が生えている野原でのみ使用可能。

Capítulo 0

El Laboratorio Nacional de Aceleración de Partículas ubicado en Dallas, Texas, en la USNA (no en la parte norte de los Estados Unidos, ahora los Estados Unidos abarcan a toda Norteamérica). Con una longitud total de 30 km, el acelerador de partículas lineales estaba listo para experimentar con la creación de micro-agujeros negros y su evaporación, basándose en la teoría de la radiación de Hawking.

A decir verdad, los preparativos ya estaban listos desde hace dos años, sin embargo, la razón por la que este proyecto se reinició a pesar de no haber recibido aprobación debido de sus enormes y desconocidos riesgos, fue por lo sucedido en el Extremo Oriente cerca del final del mes pasado.

Una explosión titánica erradicó el puerto militar situado en el extremo sur de la península de Corea y a la flota estacionada allí, en un instante. Este no era un evento cualquiera, era digno de calificarse como una crisis nacional.

Esto no era debido a la escala de destrucción, sino al proceso al que se le atribuía dicha masacre.

Después de un feroz debate entre los científicos del Departamento de Defensa Nacional, se determinó que la causa de la detonación, era la conversión de materia en energía. Hace tres años, sólo una pequeña parte de los investigadores estaba de acuerdo con esto, pero esta vez hubo consenso entre todos ellos.

Al calcular la escala aproximada de la explosión, la cantidad de materia transformada en energía fue de aproximadamente 1kg. La conversión de la materia a una escala tan grande nunca se había detectado antes, pero ya que utilizaron un dispositivo experimental para registrar la reacción de aniquilación, pudieron deducir lo que había ocurrido.

Lo que exigía una explicación era, que basándose en los datos de la “explosión titánica” registrada por los satélites, las propiedades individuales de la reacción de aniquilación no coincidían con las creadas bajo condiciones experimentales. Tampoco detectaron los restos dejados por la fisión o fusión nuclear. En otras palabras, sin importar si era a través de alguna tecnología o poder mágico, alguien utilizó un método desconocido para crear una aplicación práctica y una gigantesca explosión de energía.

Este resultado prendió las alarmas de los escaños superiores de la USNA.

Si esto era causado por magia, entonces sólo podían lamentar el hecho de que nadie podría replicar este logro. Si bien la magia en sí, era sistemática, los genes humanos eran, después de todo... el factor dominante.

De cualquier forma, si en primer lugar no tenían idea de cómo se logró este fenómeno, crear una contramedida era simplemente imposible.

Una vez que el enemigo apuntara esa arma contra ellos, el único camino que les quedaba era la destrucción total.

Esta fue una pesadilla que cobró vida.

¿Cómo se produjo la explosión? Las claves de la materia y el sistema de conversión de energía estaban más allá de su alcance... Sin embargo, este fue el impulso que revitalizó el experimento de la creación del micro-agujero negro y su evaporación.

En cuanto al efecto observable de la conversión de materia en energía mediante la evaporación del micro-agujero negro, la prueba teórica era sólida. El experimento fue diseñado para llevar estas teorías a la realidad. Y luego estaba la cuestión de ver cómo los datos de la “explosión titánica” diferían de las estimaciones experimentales.

Sin embargo, según las predicciones de los científicos de la USNA, aunque el efecto de aniquilación no coincidía perfectamente con la observación experimental de la radiación de Hawking, aún existía la posibilidad de obtener resultados que fueran completamente diferentes de las estimaciones teóricas.

En resumen, la posibilidad de observar las mismas propiedades distintivas observadas durante la “explosión titánica”, existía. La probabilidad no era cero.

El hecho de que esta mínima posibilidad fuera suficiente para reabrir un experimento tan peligroso, era una clara demostración del punto de desesperación al que habían llegado los altos mandos de la USNA.

Habían llegado al punto en que podrían ignorar los peligros de lo desconocido.

El resultado de esa decisión estaba a punto de invadirlos, y no solo a ellos, al mundo entero.

Este desastre hasta entonces desconocido, se acercaba cada vez más.

Capítulo 1

Todavía quedaba un mes del año 2095 dC.

Pensando en esto, este fue un año bastante caótico. Mientras pensaba en lo sucedido el último año, Tatsuya no pudo evitar sentirse ensimismado. Los terroristas en abril, el sindicato del crimen internacional en agosto, luego vinieron los invasores extranjeros durante octubre. Incluso la palabra “turbulento” debería tener un límite.

Sin embargo, Tatsuya no tenía tiempo para relajarse y reflexionar sobre el año pasado. Esto no se debía a que tuviera la actitud pesimista de “todavía queda un mes, quién sabe qué más podría pasar”. De hecho, sus motivos eran un poco más prácticos.

“... ¡Wah-! Sigo sin entender no importa cuántas veces lo repita.”

“¡No hay necesidad de gritar, guárdatelo para ti mismo!”

“Relájense, Leo-kun, Erika-chan...”

No importaba si se trataba de un estudiante de secundaria, un estudiante de preparatoria o un estudiante universitario, siempre y cuando fueran estudiantes, este era sin duda, su enemigo más odiado. El obstáculo inevitable que todos tenían que superar. - Los inevitables exámenes finales estaban a la vuelta de la esquina.

El grupo de costumbre se reunía actualmente en la casa de Shizuku – aunque la llamaban casa, siendo exactos, era más como una mansión.

Tatsuya, Miyuki, Erika, Leo, Mizuki, Mikihiko, Honoka y Shizuku, todo el mundo estaba aquí y participó en la sesión de estudio en preparación a los próximos exámenes finales.

A pesar de llamar a esto una sesión de estudio, el grupo reunido aquí, en gran parte, eran muy capaces en la parte escrita del examen. La única excepción aquí, era Leo, cuyas notas eran promedio, pero no al punto de correr peligro de fracasar. El área de gran preocupación, era en realidad la parte de habilidades prácticas, pero eso no estaba siendo cubierto en la sesión de estudio.

Aparte de los extraños gritos aquí y allá, el estado de ánimo de la sesión de estudio se parecía más al de una alegre fiesta de té. - Eso hasta que Shizuku soltó la bomba.

“¿Eh? Shizuku, ¿puedes repetir eso?”

“La verdad, es que me estoy preparando para estudiar en el extranjero, en Estados Unidos”.

Honoka preguntó de forma frenética, mientras Shizuku le respondía con su usual tono débil.

“¡Pero nunca me dijiste al respecto!”

“Lo siento, se me prohibió hablar sobre esto hasta ayer”

Viendo a la completamente pálida Honoka, la cabeza de Shizuku cayó con una clara señal de culpabilidad. Shizuku quería contárselo desde hace mucho tiempo, así que en vista de eso, Honoka no presionó más sobre el tema.

“Sin embargo, ¿eres capaz de estudiar en el extranjero?”

La pregunta de Honoka no cuestionaba la habilidad de Shizuku.

En la era moderna, para evitar que los magos de clase alta, y especialmente su genética, así como sus capacidades militares, estuvieran a la deriva en el extranjero, varios gobiernos restringían fuertemente los viajes internacionales no oficiales.

La USNA seguía siendo uno de los aliados de Japón, al menos en la superficie, pero en realidad eran uno de los competidores directos del país en el Pacífico occidental. Por lo tanto, las solicitudes para estudiar en el extranjero, más específicamente en Estados Unidos, normalmente eran negadas.

En otras palabras, decir que iba a estudiar en el extranjero insinuaba que ya tenían la aprobación.

“Ah, bueno, ya hemos recibido la aprobación, mi padre dijo que esto era debido a que se trataba de un intercambio, o algo así”.

“¿Así que los estudiantes de intercambio son calificados automáticamente?”

“Quién sabe.”

Aunque la pregunta de Mizuki parecía razonable, cualquier esperanza de una respuesta positiva murió cuando Shizuku inclinó la cabeza y respondió. Incluso Tatsuya no sabía de ningún método que concediera excepciones especiales a los estudiantes de intercambio.

“¿Por cuánto tiempo? ¿Cuándo te vas?”

Mientras que él quería analizar correctamente la situación, había muy poca información a la mano. Tatsuya renunció francamente a cualquier pensamiento sin sentido y se concentró en la situación que tenía en frente.

“Me voy después de terminar este periodo, la duración es de tres meses”.

“Así que son sólo tres meses... No nos asustes así”.

Honoka lanzó un suspiro de alivio después de escuchar las palabras de Shizuku. Al parecer, ella pensó que se trataba de un arreglo a largo plazo.

Sin embargo, según el “conocimiento común” de Tatsuya, incluso tres meses eran una duración bastante larga *¿hubo algún trato de fondo que llevó a la aceptación del gobierno?*

Sin embargo, eso no era importante en este momento.

“Entonces, tenemos que preparar una fiesta de despedida”.

Y así, Tatsuya propuso que “tenían que preparar algo”.



Los exámenes finales iban y venían sin ningún problema. Hoy era sábado, 24 de diciembre. Hoy era el último día del segundo semestre y también Nochebuena.

Desde la Tercera Guerra Mundial hasta ahora, la ciudadanía japonesa permanecía indiferente hacia la religión. Esto no era precisamente porque este fuera un país de ateos, era más porque ellos creían que el único dios verdadero en el que otros creían, era solo uno más de los millones de espíritus en el mundo. Por lo tanto, siempre había preparativos para los eventos de celebración, independientemente de si era el año nuevo lunar o Navidad.

Las calles estaban llenas de alegría navideña.

Cada tienda estaba involucrada en la guerra mercantil de Navidad, incluso si este era el tema de la temporada, ir de compras solo, sin duda era clasificado como una decisión tonta. Dejando a un lado a las personas que aún no encontraban a esa *persona especial*, si alguien decidiera montar una rabieta debido a que no estaba rodeado de chicas lindas y arruinara el estado de ánimo de las demás personas que sí estaban disfrutando de la atmósfera, una paliza sería inevitable. (Por supuesto, ese es únicamente el punto de vista masculino. Las chicas jóvenes probablemente no querrían ser “Rodeadas de jóvenes fornidos”).

Así que... Incluso si se trataba de la “fiesta de despedida”, decidieron celebrarla el 24 de diciembre. Ahora mismo, había un enorme pastel de crema frente a ellos con una placa de chocolate que tenía escritas las palabras “Merry X’mas”. No importa qué, esto emitía una sensación extraña. Y para colmo, de acuerdo al estilo del restaurante, la Navidad debe ser escrita con “Weihnachten” en lugar de “X’mas”. Aun así, el ambiente era perfectamente encantador a su manera.

“Onii-sama, ¿en qué piensas?”

Mirando a su hermana, quien sobresalía con la belleza de una flor a pesar de estar vestida con su uniforme escolar, Tatsuya sacudió la cabeza indicando que “no era nada”.

De hecho, no podía simplemente describirlo como ‘nada’. Sin embargo, estaba siendo invitado a participar de la celebración, por lo que no podía arruinar el estado de ánimo antes del acto principal.

“¿Todos tienen sus bebidas? Entonces, esto está un poco fuera del tema principal de una fiesta de despedida, pero ya que rara vez se puede tener una tarta tan exquisitamente preparada, todo el mundo... ¡Feliz Navidad!”

“¡Feliz Navidad!”

Utilizando el tintineo de las copas para unirse a los demás, Tatsuya respondió a los gritos de sus amigos y levantó su copa junto a todos los demás.

Frente a la cafetería “Eine Brise”, un letrero que decía “Reservado” colgaba de la entrada.



En el centro de América del Norte, al otro lado del Océano Pacífico, éste era todavía el día anterior a la víspera de Navidad. En un par de minutos sería 24 de Diciembre.

En comparación con la mayoría de los japoneses que veían la Navidad como una celebración más, aquellos estadounidenses que sobrevivieron a los 20 años de guerra, aquellos que pasaron soportaron diversas catástrofes y especialmente los nuevos “estadounidenses”, recibían la Navidad con sinceridad, devoción y gratitud. Y con el fin de prepararse para la víspera de Navidad, todos se iban a la cama temprano.

O al menos, así debería ser.

En la noche más profunda antes de la víspera Navideña, varias figuras brillaban a través de las esquinas de una de las grandes ciudades del sur de Estados Unidos, Dallas, Texas.

Varias figuras más, saltaron de un edificio a otro a través de los tejados.

Además, varios más formaron una red de contención usada contra individuos sospechosos. Dado que estaban equipados con CAD especializados con Magia de Tipo Vuelo que aún no estaba en el mercado, posiblemente se trataba de policías o magos de combate.

“¡Deténgase, teniente Alfred Fomalhaut, no tiene a dónde huir!”

De pie frente al individuo que huía, una pequeña figura equipada con una máscara que le cubría los ojos, bloqueó su camino.

La voz femenina que exigía su rendición, sonaba tan clara como una campana. El fugitivo, Alfred Fomalhaut, se detuvo inmediatamente al ver esa pequeña figura.

“... ¿Qué te pasó Fred? Tú recibiste la ‘Estrella de Honor de Primera Clase’, así que... ¿por qué estás desertando?”

Su actual tono arrogante se alteró. Esta vez, la voz de la joven enmascarada contenía impaciencia, desconcierto y los tonos infantiles que se esperaban de alguien con su aspecto.

“.....”

Sin embargo, la otra parte no respondió.

“Hubo una serie de incendios y homicidios a lo largo de esta calle que se dice que son causados por tu Pyrokinesis*, eso es una broma, ¿verdad?” (*Capacidad de crear y controlar el fuego*)

“.....”

“¡Respóndeme, Fred!”

Sin embargo, la respuesta del otro lado no vino en forma de palabras.

La joven saltó rápidamente hacia atrás.

Lo único que dejó atrás fue la capa que llevaba sobre sus hombros.

Sin ninguna advertencia, la capa que cubría el cuerpo de la joven estalló en llamas y fue quemada hasta las cenizas.

Pyrokinesis, la habilidad de crear fuego.

Esto no era magia moderna de ningún sistema, sino una habilidad especial que una vez fue conocida como un súper poder.

La capa que la chica llevaba sobre su uniforme, así como las cazadoras fáciles de quitar y las capas que usaban los hombres que lo rodeaban no eran para protegerse del frío, sino para proteger sus cuerpos físicos de la línea de visión directa y la magia de ese hombre.

En el instante en que las llamas desaparecieron, cada luz alrededor del hombre, se desvaneció.

Estableciendo al objetivo como el origen, cada fuente de luz dentro de cierto radio fue revertida para que ninguna luz externa pudiera penetrar esta prisión de completa oscuridad. Esta era la magia de área de efecto [Miller Cage].

Uno de los sujetos alrededor activó esta habilidad defensiva para bloquearle la visión al objetivo.

“¡Teniente Fomalhaut, de acuerdo con la disposición especial otorgada bajo la ley militar federal y bajo mi propia autoridad como comandante de STARS, por la presente ejecutaré su castigo!”

Aquella declaración se escuchó como un lamento.

La joven enmascarada, la Mayor Angie Sirius, comandante de STARS, alzó su pistola automática equipada con un silenciador y la apuntó al teniente Fomalhaut, quién seguía prisionero dentro de la celda de oscuridad creada con magia.

Potenciada con Fortificación de Datos para ignorar toda interferencia mágica, la bala atravesó el corazón del Teniente Fomalhaut mientras permanecía atrapado dentro de la barrera oscura.



Aunque la llamaban una fiesta de despedida, sabían que se reunirían en la primavera después del viaje y que este tipo de viajes de estudio en el extranjero no eran muy comunes, así que en lugar de sentirse solos, sería más apropiado decir que las expectativas estaban en el aire.

“Oye, ¿dónde será tu programa de estudio en el extranjero?”

“Berkeley”.

A la pregunta de Erika, Shizuku respondió con una sola palabra. Esto no se debía a que Shizuku estuviera en un estado de ánimo oscuro, sino a que así era su personalidad.

“Así que no es Boston”.

Entre los magos japoneses, la creencia de que el centro de las instalaciones modernas de investigación de magia en Estados Unidos era Boston, estaba profundamente arraigada. El comentario de Miyuki se hizo a partir de ese rumor.

“Eso es porque la Costa Este no es muy estable en este momento”.

“Ah, los ‘ideólogos humanistas’ se están agrupando por allá, los vemos muy a menudo en las noticias.”

Mikihiko aceptó sinceramente la respuesta de Shizuku.

“Así que las ‘cacerías de brujas’ se han convertido en ‘cacerías de magos’. Incluso si dices que la historia se repite, esto es simplemente ridículo.”

Leo replicó fríamente.

“No es una réplica perfecta de la historia, aunque no tenemos idea del trasfondo de las cacerías de brujas del siglo XVII, las recientes ‘cacerías de magos’ y el nuevo movimiento de supremacía blanca son fundamentalmente dos cosas distintas”.

Tatsuya intervino con un tono conciliador.

“Aun así, es mejor evitar la costa este”.

Las palabras de Tatsuya no tenían la intención de defender las ‘cacerías de magos’ de ninguna manera.



“No sabía nada de eso”.

Miyuki se interpuso mientras incitaba a su hermano con la mirada para que continuara.

Comprendiendo la petición de su hermana, Tatsuya continuó.

“Esto se debe a que las listas de ambas organizaciones comparten un buen número de miembros, pero las listas de miembros no son algo abierto al público, por lo que es natural ignorar este detalle”.

“Huelo actividad criminal en las palabras de Tatsuya-kun... Vamos a terminar esta inquietante conversación aquí”.

Viendo que Erika hizo una broma intencionalmente y sacudió su cabeza, Tatsuya y Miyuki rieron entre dientes y asintieron con la cabeza.

Los dos sabían que este no era ni el momento ni el lugar adecuado para tratar ese tema de conversación.

“¿Sabes algo del estudiante de intercambio?”

Tal vez porque quería cambiar el ambiente rápidamente, el cambio de tema de Miyuki fue un poco brusco.

“¿Intercambio?”

“La persona que llegará como estudiante de intercambio a nuestra escuela”.

Como era de esperar, Shizuku inicialmente no entendió el significado detrás de las palabras de Miyuki hasta que Miyuki se repitió, así que dejó salir un “Ah” junto con una expresión comprensiva. Pero, como de costumbre, era difícil distinguir los cambios en su expresión.

“Creo que es una chica de nuestra misma edad”.

“¿Eso es todo lo que sabes?”

“Sí”.

“¿Eso es todo?” Todos se miraron inexpresivamente. Tatsuya rio mientras hacía esa pregunta y Shizuku asentía con la cabeza como si esto fuera perfectamente natural.

“...Es verdad, no importa cuánta curiosidad tengas, no es como si te dijeran quién iba a llegar en tu lugar”.

Con el comentario de Mizuki, el tema llegó a su fin.

Basados en el hecho de que seleccionaron el día de hoy para su fiesta de despedida, las ocho personas reunidas aquí no parecían tener ningún plan especial para la víspera de Navidad. Sin embargo, fue un poco sorprendente ver que Shizuku, Erika y Mikihiko no estaban obligados a asistir a ninguna reunión familiar, lo que daba a entender que las Familias Kitayama, Chiba y Yoshida probablemente tendrían galas para los adultos, así que ellos no estarían obligados a asistir. Y no porque sus padres hicieran algún tipo de arreglo.

Frente a la tentación de una libertad sin restricciones, les hubiera gustado mantener la fiesta hasta altas horas de la noche y profundizar su amistad, pero como todos vestían sus uniformes escolares, no podían quedarse hasta muy tarde.

“Creo que el dueño se pondrá de mal humor si nos quedamos más tiempo”.

Aquella frase tan inocente, pero al mismo tiempo ligeramente perversa, sorprendió al dueño del café. (Quién dijo esto en voz alta, era irrelevante.) Los ocho empacaron sus cosas y se prepararon para marcharse a casa.

Honoka y Shizuku tomaron el mismo autobús, así que Honoka probablemente se estaba quedando en casa de Shizuku. De cualquier forma, esto no era nada nuevo en las preparatorias mágicas, aunque la razón principal era que Honoka no era muy cercana a sus padres.

Erika, Leo, Mizuki y Mikihiko se subieron a un tren. Se esperaba que hicieran una escena, pero claramente estos cuatro no llegarían tan lejos.

Finalmente, Tatsuya y Miyuki subieron a otro tren sin más preocupaciones y disfrutaron felizmente de su viaje a casa juntos. Mientras que las cabinas modernas habían sido diseñadas en compartimientos privados, Tatsuya nunca olvidó el antiguo refrán de “las paredes tienen oídos”. Además, Miyuki tampoco tenía nada que decir, así que regresaron a casa sin decir ni una palabra. La verdadera conversación sólo podía comenzar cuando los dos pudieran relajarse en la comodidad de su casa.

“De alguna manera siento que algo anda mal con el viaje de Shizuku al extranjero”.

Después de cambiarse de ropa en sus respectivas habitaciones, Miyuki sirvió dos tazas de café y los dos se sentaron uno junto al otro en el sofá antes de que Miyuki finalmente mostrara sus pensamientos.

“Es raro... Ahí tienes un punto”.

Tatsuya apartó la taza de café de sus labios, y bajo el silencioso asentimiento de su hermano, Miyuki definió su sospecha.

“Primero que nada, la idea de que un individuo con un talento mágico como el de Shizuku pudiera obtener permiso para estudiar en el extranjero ya es algo antinatural. Dicho esto, esto podría pasarse por alto si ella estuviese estudiando en el exterior como la hija de un gran empresario y no como una estudiante de magia, pero nuestra completa falta de información sobre la estudiante que será transferida es demasiado sospechosa. Además, seleccionar específicamente esta época para salir con un programa de intercambio repentina suena a un propósito oculto, es casi como si...”

“Como si estuvieran tratando de vigilarnos en secreto, según Oba-ue, estamos bajo sospecha”.

Tatsuya sonrió levemente y continuó como si se tratara del problema de alguien más.

“[Material Burst]. Parece que no podemos pasar por alto esta situación”.

Una vez que escuchó el tema tan serio que su hermano no quiso mencionar, los ojos de Miyuki se abrieron en shock, pero al mismo tiempo, ella pareció relajarse y mostró una sonrisa.

“¿Es así...? Parece que Onii-sama ya consideró esa situación”.

“Dejando de lado el tema del intercambio de estudiantes, después de tomar en cuenta las advertencias de Oba-ue, esto no se trata de una simple coincidencia”.

Tatsuya ya le había revelado la conversación entre él y Maya a Miyuki ese mismo día. El por qué estaba exactamente bajo sospecha y quienes eran sus enemigos.

“Entonces, ¿realmente se trata de STARS...?”

“En ese caso, no poder contactar con el Mayor lo hace un poco más difícil”.

Como castigo para Tatsuya por activar magia de clase estratégica sin obtener permiso de antemano, Maya le prohibió hacer contacto con el Batallón Independiente equipado con magia. Aunque no planeaba seguir órdenes obedientemente al pie de la letra, pero con el fin de evitar riesgos innecesarios, seguir órdenes era el movimiento más inteligente en este momento.

“Incluso si le preguntamos a Oba-ue... Es probable que ella no nos diga nada”.

“Y dado que el programa de intercambio ya ha sido confirmado, esto significa que Oba-ue ya ha aceptado este acuerdo”.

La Familia Yotsuba actualmente se encontraba al nivel de la Familia Saegusa, quienes lideraban a los Diez Clanes Maestros, así que era imposible que no estuvieran enterados sobre algún mago talentoso saliendo del país en un programa de intercambio educativo.

“Por otro lado, este no es un resultado completamente desfavorable para nosotros. Incluso si el oponente que enviaron sea solo para investigarnos, Oba-ue no los subestimaría. En su lugar, podría haber una serie de acontecimientos problemáticos del lado americano. La intención de Oba-ue puede ser que seamos nosotros quienes los tomemos por la cola en su lugar”.

En lugar de ser una sonrisa irónica, la sonrisa de Tatsuya era más cercana a la de una sonrisa resignada.

“No podemos estar seguros de que las cosas se desarrollarán de esa forma... No nos hará ningún bien pensar demasiado en esto”.

“Es verdad, tienes toda la razón, Miyuki”.

No importaba lo que se hubiera dicho, tanto el lado reconfortante como el lado reconfortado sabían que estas palabras eran suficientes para relajarlos.



Después de tomar el avión VTOL* exclusivo de STARS de regreso a la base y hacer su informe a los Jefes del Estado Mayor Conjunto a través de comunicaciones encriptadas, la Mayor Angelina Sirius, también conocida como Angie Sirius, usaba su uniforme mientras rodaba hacia adelante y hacia atrás en la cama de su habitación. (*Vertical Take-Off and Landing, «despegue y aterrizaje verticales»*)

Ella se volteó y enterró su rostro en la almohada.

No importaba cuántas veces las hubiera realizado, aún no podía acostumbrarse a las misiones de búsqueda y destrucción. Aunque no vomitó como lo hizo la primera vez que completó una misión de este tipo, esto se debía a que su cuerpo físico se había acostumbrado a su dolor mental.

Sin embargo, su sufrimiento mental sólo empeoró.

Un Mago Americano, un miembro de STARS bajo el mando directo de los Jefes del Estado Mayor Conjunto de la USNA, quien fue su compañero en varias situaciones, acababa de ser ejecutado por sus propias manos.

Cuando se enteró de que era el deber del Comandante, a quien se le concedía el título de Sirius, no tenía sentimientos reales al respecto.

Incluso si esto era un gran honor, ella aún no lo entendía. Aún no comprendía el significado detrás de matar a sus propios compañeros.

Se dio la vuelta una vez más y usó su mano para cubrir sus ojos de la penetrante luz. Fue entonces cuando se dio cuenta de que había olvidado apagar las luces.

En ese momento el timbre de la puerta sonó. Los labios de la mayor Sirius se curvaron en una sonrisa irónica.

Parece que esta noche, su subordinado entrometido venía a ver cómo se encontraba.

Los STARS constaban de doce unidades, cada una dirigida por un capitán bajo el mando del Comandante. Su subordinado era exactamente uno de esos capitanes responsables de cuidar de su propia unidad.

Normalmente, él no debería tener tiempo para interferir con sus asuntos.

“Adelante.”

Al levantarse de la cama, la Mayor Sirius habló al micrófono que conducía a la puerta e hizo un ademán antes de tomar el control remoto para abrir la puerta.

“Perdón por molestarte, Comandante”.

La persona que entró, era justo la persona esperada.

El Mayor Benjamin Canopus, también llamado el número “Dos” dentro de STARS, era el capitán de la primera unidad y cumplía las funciones del Comandante cuando ella estaba ausente.

Las posiciones dentro de STARS no están necesariamente relacionadas con el rango militar, lo cual era bastante extraño dentro de una unidad militar. Era inaudito que un capitán superara en rango al Comandante, pero era bastante común ver al Comandante y a los capitanes compartiendo el mismo rango.

Actualmente, ya que había seis que tenían el rango de capitán, los otros seis compartían el mismo rango del Comandante.

Si a la Mayor Sirius le disgustara algo, sería que aunque Canopus era claramente mucho mayor que ella aún estaba en el mismo rango, lo que realmente servía para hacerla sentir incómoda.

“Premio de consolación”.

El Mayor Benjamin Canopus parecía un oficial de alto rango en cada centímetro de su persona. Un duro pero vigoroso hombre en con alrededor de 40 años, la atmósfera a su alrededor era completamente distinta a la de soldados y civiles quienes han pasado su vida escalando rangos.

“Gracias Ben”.

Sobre la mesa al lado de la cama, había una humeante taza de leche con miel. La Mayor Sirius aceptó fácilmente las condolencias de su subordinado, el cual tenía la misma edad que su padre.

Esta no era uno de esos vasos usados durante las operaciones de combate, sino una hermosa taza con leche caliente y miel que provenía directamente de un termo. La mayor Sirius levantó ligeramente la taza y tomó un sorbo.

La cálida dulzura se extendía gradualmente a través de sus papilas gustativas, y el dolor en su corazón parecía disminuir.

“De nada, Comandante, ¿terminaste de prepararte?”

El mayor Canopus echó un vistazo al equipaje personal en una esquina de la habitación y preguntó.

“Sí, más o menos”.

“Llevas muchas cosas”.

“Soy una chica, después de todo”.

El mayor Canopus se encogió de hombros mientras intercambiaba palabras con alguien que por su edad, bien podría ser su hija. En realidad tenía una hija que era dos años más joven que ella.

“El hecho de que te preocunes por algo inconsecuente como tu género... ¿Se debe a tu ascendencia japonesa?”

“La idea de que la cortesía y el decoro se espera de los japoneses es completamente anticuada”.

Cuando la otra persona mencionó su ascendencia japonesa, esta vez fue el turno de la Mayor Sirius para encogerse de hombros.

No por irritación.

Alguien que se molestara por asuntos triviales como éste, no iba a durar mucho en STARS.

“Tienes un punto, aunque dejémoslo de lado por ahora... ¡Ahora, olvídate de tu misión por un momento y ten un buen D & R!” (D & R: Descanso y relajación)

“Esto no es un permiso, sino una misión secreta...”

La mayor Sirius hizo una mueca cuando se escuchó la alegre sugerencia del Mayor Canopus.

Esa expresión encajaba perfectamente con el estado de ánimo de una joven de su edad.

“Debería decir que esto es algo deprimente. Enviarme a investigar si el objetivo es un Mago de Clase Estratégica. Una cosa es que uno de los dos sea la persona en cuestión, pero hay una enorme posibilidad de que ninguno de los dos sea la persona que estamos buscando. ¿Por qué me están enviando en una misión de infiltración cuando esa no es mi especialidad...? Incluso si consideramos el factor de la edad como un requisito, debe de haber mucha gente con entrenamiento especial para esto”.

La misión dada a la Mayor Sirius era investigar al culpable detrás de la explosión titánica observada en el sector del lejano oriente a finales de octubre, la cual probablemente fue causada por Magia de Clase Estratégica, lo que significaba esencialmente... la verdadera identidad del mago. Inteligencia hizo su mejor esfuerzo y redujo la lista de sospechosos a 51 objetivos, y dentro de estos había 2 estudiantes de una preparatoria en Tokyo. En vista de esto, se le ordenó a la Mayor Sirius ir encubierto a causa de su edad (Lo cual fue pura coincidencia).

“Vamos, no se deprima”.

Con el fin de consolar a su suplicante oficial superior, el Mayor Canopus hizo un gesto hacia adelante y hacia atrás con la mano.

“Sospecho que los jefes de estado esperan que este oponente sea extremadamente difícil. Si el objetivo en verdad es una existencia de la talla de nuestras predicciones, eso lo convertiría en un oponente sumamente peligroso con el poder de fuego suficiente para superar a un arma nuclear. Además aún desconocemos su identidad. De esta forma, no es difícil simpatizar con los jefes de estado al usar la habilidad de combate pura en lugar de entrenamiento como el criterio principal para elegir al encargado de esta operación”.

“Lo entiendo”.

“Ya que nuestro sospechoso es un estudiante de preparatoria, establecer contacto como una estudiante de la misma escuela sería mucho más fácil, por lo que la única persona que podría llevar a cabo esta investigación sería usted, comandante”.

Aunque esta cuestión era un hecho, en realidad, había una gran cantidad de personal de apoyo trabajando en las sombras para ayudar a la Mayor Sirius a establecer contacto con el objetivo. STARS también

estaba enviando a un mago de clase planetaria para apoyar a la mayor. No había forma en que ella pudiera olvidar todo eso.

“Eso también lo entiendo”.

Por lo tanto la respuesta de la Mayor Sirius tomó todo con calma.

“¿Por qué no lo piensas así...? La misión del Comandante es ponerse en contacto con el objetivo sospechoso y hacer que él o ella vacile”.

“Hm... Esa es una forma mucho mejor de abordar esto. Después de todo, soy completamente inútil en el trabajo de Inteligencia”.

“En ese caso, siga adelante y relájese un poco. No hay nada malo en ser un poco más alegre. Esto también hará que sea más fácil encontrar la debilidad de nuestro oponente”.

“Ha... Eso es verdad, espero que todo salga como dices, Ben.”

Después de soltar un suspiro, la Mayor Sirius puso la taza sobre la mesa y se puso de pie frente al Mayor Canopus.

“Ben, te dejaré las defensas a ti, el resto de los desertores no han sido atrapados todavía, así que la tarea que originalmente era mi responsabilidad tendrá que recaer sobre ti... Sin embargo, eres la única persona en quien puedo confiar”.

“Tranquila comandante, esto es un poco temprano, pero le deseo buena suerte”.

Ante la cariñosa sonrisa y el saludo del mayor Canopus, la joven le devolvió una sincera sonrisa de gratitud.

Capítulo 2

Como en el pasado, Tatsuya y Miyuki dieron la bienvenida a Año Nuevo juntos.

Este año, como de costumbre, su padre pasó la noche en el hogar de su primer amor. Esto en realidad no los incomodaba en lo absoluto, así que no hubo quejas.

Ni Tatsuya ni Miyuki eran del tipo que perdía el tiempo durante las vacaciones. Tatsuya se levantó a la hora habitual y esperó a Miyuki en la entrada, levantando la mirada cuando la escuchó gritar “Lamento hacerte esperar”.

Usando un furisode* carmesí con flores blancas, Miyuki descendió elegantemente por las escaleras.
(Kimono de mangas largas)

Su hermosa tez pálida, libre de cualquier maquillaje extraño, sólo servía para acentuar el rojo brillante alrededor de sus hermosos labios.

Sus sedosas trenzas atadas con una horquilla podían dar una impresión algo infantil, pero eso sólo servía para aumentar el encanto único de una doncella joven vistiendo un traje maduro.

En adición, lo que robaba miradas no eran solo los productos de la naturaleza.

Los kimonos del pasado fueron diseñados para confinar el área del pecho, mientras que los diseños modernos incorporaron un método de corte 3D. Sin embargo, el kimono tradicional que vestía Miyuki lucía milagrosamente apretado el busto y en la zona de la cintura, conservando la tradición y manteniendo una apariencia modesta.

‘La hermana menor las linda del mundo’, estos eran los verdaderos sentimientos de Tatsuya, ella parecía estar buscando elogios de su hermano mayor.

“Hm, simplemente hermosa”.

De pie frente a su hermana mientras se ponía los zapatos, Tatsuya no se guardó sus elogios.

El rostro de Miyuki enrojeció de inmediato.

“En serio, Onii-sama... No te burles de mí”.

A pesar de la vergüenza, no apartó su mirada y le hizo una mueca juguetona a su hermano. Un hombre de menor calibre con un sistema inmunológico más débil, no lo habría soportado y hubiese sido aniquilado al instante.

“No estoy bromeando en lo más mínimo... Bueno, vámonos”.

Para ser capaz de controlarse, incluso en esas condiciones, no era de extrañar Tatsuya fuera el Onii-sama que había vivido con Miyuki durante los últimos 16 años (15 años y 9 meses para ser precisos).

Había un automóvil automático estacionado frente a su casa. Sin embargo, el hecho de que fuera un vehículo automatizado no implicaba que nadie estuviera a bordo. En el coche de cuatro asientos estaban un hombre adulto y una mujer adulta sentados en el asiento trasero.

“Feliz año nuevo Maestro”.

“Feliz año nuevo Kokonoe-sensei, por favor siga cuidando de nosotros”.

Viendo el saludo simple de Tatsuya y la elegante inclinación Miyuki, Yakumo respondió con una sonrisa alegre.

“Aya, te ves más hermosa que de costumbre, como si un ser divino hubiera descendido del cielo, si vieran a Miyuki hoy, incluso las hadas de Sumeru ocultarían sus rostros con vergüenza”.

En cierto nivel, esta fue una respuesta con el tinte distintivo de Yakumo.

“Maestro... No creo que eso sea lo que se supone que debes responder”.

Quien replicó fue la mujer que estaba sentada junto a él.

Al ver que alguien replicó antes que él, Tatsuya bajó ligeramente la cabeza hacia la mujer antes de que Yakumo pudiera defenderse.

“Ono-sensei, Feliz Año Nuevo. No obstante, ¿está bien que te vean con el maestro?”

“Feliz Año Nuevo, Shiba-kun, primer día del nuevo año y ya estás siendo desagradable”.

Tatsuya estaba realmente un poco preocupado, pero parecía que Haruka ya se estaba cansando de él. Reflexionando sobre su comportamiento habitual y sus encuentros anteriores, Tatsuya se encogió de hombros llegando a la conclusión de que “no puedo hacer nada si me malinterpretó”.

“Me reuní con sensei por pura coincidencia, hoy estoy sirviendo de guía”.

“Ya veo, con que así son las cosas. Aun así, si está aquí en su papel como guía... entonces el honorífico ‘sensei’ que acaba de usar puede ser un poco problemático”.

Con las palabras de Tatsuya, Haruka frunció las cejas en el asiento trasero.

De hecho, un estudiante de preparatoria moderno no requería un acompañante adulto para una visita de un solo día al santuario.

En pocas palabras, ser una ‘guía’ era sólo una excusa, ya que el propósito real era que ellos los ‘acompañaran’.

Además, incluso para cualquier extraño que esté cerca, que no fuera un miembro de facultad, usar el honorífico “sensei” puede llevar fácilmente a un malentendido que roce el territorio de lo prohibido.

“Pensémoslo en el camino, ¿no deberíamos irnos ya?”

Miyuki hizo esta sugerencia después de que Tatsuya abriera la puerta del coche. Sin prestar ninguna atención a la inconforme Haruka, Tatsuya esperó hasta que Miyuki subiera al vehículo, cerró la puerta y se sentó en el asiento del conductor. Después de que Tatsuya cerrara la puerta de su lado, el automóvil arrancó automáticamente.

Después de cambiarse a un tren en la estación, los cuatro se bajaron en el punto de reunión bajo una intensa observación y caminaron durante cinco minutos.

“Hey, Miyuki, te ves genial”.

Esta fue la primera frase que saludó a Tatsuya y Miyuki en el punto de reunión. Llevando una chaqueta de cuero sobre un vestido largo, Mizuki miraba a Miyuki completamente hipnotizada. A su lado, incluso Tatsuya estaba bajo una mirada sospechosamente cálida.

“Feliz Año Nuevo, Shiba-kun, tu atuendo te luce bien, aunque es un poco inesperado”.

Vestida con un kimono al igual que Miyuki, Honoka parecía un poco intimidada por la belleza de su compañera de clase, pero en cuanto vio a Tatsuya y su sencilla y totalmente diferente aura, su ritmo cardíaco se disparó e inmediatamente mostró una sonrisa tímida.

“Feliz Año Nuevo, Honoka, también te ves genial”.

Tatsuya no sólo ofrecía elogios vacíos. Él creía honestamente que el kimono de Honoka era exquisito.

Tatsuya sonrió levemente ante la extasiada Honoka y bajó su mirada hacia su propia vestimenta.

“Ya que mencionaste que esto era inesperado, ¿realmente luzco tan fuera de lugar?”

“De qué estás hablando, Tatsuya, te queda muy bien. Luces como un jefe”.

“Así que ahora soy de la Mafia”.

Quien irrumpió en la conversación con este comentario el cual no se sabía si era con buena o mala intención resultó ser Leo quien vestía una chaqueta.

Los tres que se unieron a ellos en el santuario fueron Mizuki, Honoka y Leo. Erika y Mikihiko no pudieron presentarse debido al gran número de discípulos en sus respectivas familias, y Shizuku estaba por irse a estudiar al extranjero y no pudo asistir debido a los negocios de su padre.

“No es exactamente como un mafioso, pero sigue siendo algo muy peculiar ver a un estudiante de preparatoria vestir una haori hakama tan bien”.

“En lugar de ser un mafioso, pareces más un jefe de policía”.

Justo como los ligeramente tardíos Haruka y Yakumo habían dicho, hoy Tatsuya vestía la tradicional hakama japonesa y zuecos de bambú. Muy acorde a lo que dijeron después Honoka y Leo, realmente se veía bien. Lo único que le faltaba eran un par de katanas y una macana de policía.

“Ho, Haruka-san, Feliz Año Nuevo”.

“Feliz Año Nuevo, Ono-sensei... Tatsuya-kun, ¿quién es él?”

Inmediatamente después de los buenos deseos de Leo, Honoka siguió con su habitual saludo a una maestra mientras con un ojo observaba a Yakumo y con el otro observaba cuidadosamente a Tatsuya.

Al oír la introducción de Tatsuya, tanto Honoka como Mizuki ensancharon sus ojos en estado de shock. Honoka era consciente del nombre de Yakumo, pero incluso Tatsuya se sorprendió al saber que Mizuki también había oído hablar de Yakumo.

“Ya veo, así que es por eso que estamos en el santuario”.

Tatsuya estaba impresionado por la demostración de conocimientos que no esperaba de Leo, pero esto no era de ninguna forma de menospreciar a Leo.

“¿Qué?”

Dado que Haruka no estaba al tanto de la conexión que había, esto definitivamente no era de conocimiento común.

“¿Hmm? Cuando se trata de monjes budistas, ¿no serían monjes de la escuela de budismo Tiantai? La doctrina Sanno y la secta interior son prácticamente inseparables.”

Al escuchar la explicación sencilla de Tatsuya que por alguna razón fue formulada como una pregunta, el número de signos de interrogación flotando alrededor de la cabeza de Haruka sólo aumentó.

“Veo que eres muy conocedor a pesar de tu juventud, ¿si no me equivoco, eres Saijou Leonhard-kun?”

Haciendo caso omiso de una Haruka completamente confundida, Yakumo inició una alegre conversación con Leo.

“¿Eh? ¿Me conoces?”

Frente a alguien que conoció por primera vez, Leo respondió en un tono bastante serio.

“Eso es porque vi las grabaciones de la Competencia de las Nueve Escuelas”.

Sin embargo, la respuesta de Yakumo también fue una respuesta perfectamente seria, pero eso sólo hizo que Leo le frunciera las cejas por reflejo. Esto probablemente se debía a la imagen de él vistiendo un abrigo con capucha que pertenecía a una época diferente lo cual sería un recuerdo que se quedaría en su mente sin importar qué tanto quisiera olvidarlo.

Después de las introducciones, los cinco estudiantes y el hombre calvo (que vestía un kimono masculino normal en vez del tradicional kasaya*) y la mujer, caminaron juntos hacia el santuario. Afortunadamente, nadie preguntó por qué Haruka estaba ahí. (*Kasaya es la prenda tradicional que visten los monjes budistas*).

El paisaje que rodeaba el camino había permanecido intacto por los últimos 100 años. Sin embargo, este paisaje fue posible sólo después de que la crisis alimenticia mundial hubiera terminado. Era una escena

que conmovía a cualquier persona de avanzada edad que hubiera vivido en ese tiempo, pero ni Tatsuya ni sus compañeros tenían motivos para ponerse sentimentales.

Sin senderos curvos, y después de subir un gran tramo de escaleras, cruzaron el umbral, y llegaron al patio del santuario. Allí, Tatsuya notó repentinamente un par de ojos mirando en su dirección.

No era una mirada descortés o desagradable como la de un acosador, sino un par de ojos que lo miraban de vez en cuando.

“Shiba-kun, ¿sucede algo?”

“No”.

“Parece que los extranjeros sienten curiosidad por el vestuario de Tatsuya”.

A pesar del disfraz, no había forma de escapar de los ojos de Yakumo. Incluso Tatsuya descubrió la fuente sin usar [Elemental Sight], y excluyendo a Haruka por el momento, era obvio que Yakumo se percataría.

La ‘extranjera’ de la que Yakumo hablaba, era una joven modelo con cabello rubio y ojos azules. Sin embargo, en este día y época, sólo esto es insuficiente para determinar la ascendencia de alguien. Sin embargo, las facciones de esa joven daban la impresión de tener ascendencia japonesa.

Su edad era aproximadamente la misma que Tatsuya. Después de tener en cuenta las diferencias entre blancos y asiáticos, la diferencia sería mínima, pensó Tatsuya.

“Onii-sama, ¿qué estás mirando?”

Tatsuya sólo observó a la joven durante menos de un segundo, pero eso fue suficiente para llamar la atención de Miyuki.

Siguiendo la mirada de su hermano, sus ojos brillaron cuando un “Oh” escapó de sus labios.

“... Que chica tan hermosa”.

Miyuki expresó suavemente sus pensamientos internos.

A los ojos de Miyuki, esa joven era una persona quién merecía por completo el adjetivo de “hermosa”.

Su cabello y ojos eran ambos de color brillante. En cierta forma, tenía rasgos que rivalizaban con la misma Miyuki.

Sin embargo, Tatsuya no la observaba por estas razones.

Le lanzó una mirada a Yakumo para pedirle ayuda – pero viendo la sonrisa de Yakumo, se vio forzado a tratar con esta situación por su cuenta.

Tatsuya soportó la mirada de su hermana mientras respondía a sus quejas con un tono neutro.

“No hay forma en que ella pueda competir contigo”.

“...Me lo dices siempre. Esta vez no te va a funcionar”.

Aunque estas palabras parecían un contraataque, su expresión apenada y su rostro ruborizado despejaron cualquier indicio de amenaza detrás de sus palabras.

“No te estoy persuadiendo, lo creo en verdad. Además, esa no es la razón por la que la estoy viendo”.

“En serio, Onii-sama”.

Miyuki volteó su rostro hacia un lado al descubrir la advertencia implícita que no podía ser ignorada en las palabras de Tatsuya.

“... ¿Hay algo sospechoso en ella?”

“En términos de sospecha... supongo que su atuendo es un poco sospechoso”.

Tatsuya respondió en un tono amargo. A causa de esto, Miyuki dio otro vistazo a la joven rubia y finalmente se dio cuenta de lo su hermano trataba de decir.

Llevaba un abrigo color canela claro sobre una falda plisada, medias de encaje y un par de botas largas. En verdad, si eso fuera todo, entonces no era digno de mención. Sin embargo, la longitud de su abrigo era aproximadamente la misma que su falda, que estaba a unos 10 cm por debajo de las caderas, por lo que sólo se podía ver el dobladillo inferior de la falda plisada. Además, llevaba botas altas con un grueso cojín que era muy elástico, y unas medias de encaje casi transparentes. Para rematar el conjunto, llevaba un bolso cubierto en piel artificial a juego con un sombrero con patrones de animales. En general, esto solo la hacía resaltar como un pulgar dolorido si hablaran de la moda actual. Era casi como si llevara una combinación de diseños al estilo de las Spice Girls de la época antes de la guerra. Con esto en mente, no era sorprendente para Tatsuya pensar que ella era muy extraña.

Sin embargo, Miyuki sabía que su hermano no estaba prestando atención a su apariencia externa.

“Pero eso no es todo”.

Miyuki dirigió una mirada completamente diferente —y más maliciosa— hacia la joven.

Tal vez fue porque se dio cuenta de que había sido descubierta, la joven comenzó a caminar como si nada hubiera pasado.

Se dirigía directamente hacia el grupo de Tatsuya.

Ella pasó silenciosamente junto a ellos antes de bajar por el largo tramo de escaleras.

Aun así, la profunda mirada que envió en su dirección mientras casi se tocaban hombro con hombro definitivamente no fue la imaginación de Tatsuya.



La misión de infiltración asignada a la Mayor Angelina Sirius también incluía cometer errores evidentes. Entre ellos, el contacto inicial con el objetivo incluía permitir que el objetivo la viera, por lo que fue un éxito. Aunque al principio estaba preocupada de que ocultar su presencia evitaría que su objetivo la descubriera, pero al parecer, esto era una preocupación innecesaria, tal como su subordinado le había dicho. Sin embargo, ser descubierta tan fácilmente no le sentaba muy bien. Reflexionando sobre esto, la mayor Sirius regresó y abrió la puerta del apartamento de clase alta que serviría de cuartel durante el tiempo de la misión.

“Bienvenida de vuelta”.

Originalmente, la Mayor Sirius creía que su compañera de cuarto no debería haber regresado todavía. Sin embargo, contrariamente a sus expectativas, una respuesta de bienvenida vino de dentro de la casa.

“Silver, regresaste”.

La comandante usó un apodo para saludar a su adulta compañera de cuarto con quien intencionalmente se encontró en la puerta.

Su compañera de cuarto se llamaba Sylvia Mercury First. Además de su primer nombre Sylvia, el resto eran todos nombres código, lo que significaba que ella ocupaba el primer lugar entre los STARS de clase planetaria “Mercury”. Rango de Suboficial. 25 años de edad. Ella era bastante reconocida entre las oficiales femeninas ya que alcanzó el título de "First" a una temprana edad. Al principio, Sylvia no quería unirse al ejército y tenía la intención de convertirse en periodista después de graduarse de la universidad. Pero, su extraordinaria habilidad en el análisis de datos hizo que fuera elegida como el personal de apoyo de la Mayor Sirius.

“¿Silver?”

Esta talentosa compañera de cuarto no le prestó atención a las palabras de Sirius y sólo se quedó viéndola fijamente. Sintiendo que algo estaba mal, la Mayor la llamó de nuevo antes de que Sylvia respondiera con sus ojos aún fijos en ella.

“Lina... ¿Qué puedo decir sobre eso?”

Lina era el apodo de la Mayor Sirius. Teniendo en cuenta los requisitos de la misión de infiltración, ocultar su identidad era vital, así como evitar los términos ‘Comandante’ o ‘Mayor’, por lo que se le ordenó usar su apodo, Lina. Además, Sylvia originalmente poseía una personalidad alegre, así que rápidamente se olvidó de las diferencias en el rango militar y se abrió a Lina.

Aunque su vocabulario no contenía ningún honorífico al dirigirse a un oficial superior, Lina no le prestó mucha atención.

“Ah, ¿te refieres a mi apariencia...? Para evitar llamar la atención, pasé un tiempo investigando las revistas de moda japonesa del siglo pasado, fue muy agotador. Así que, ¿cómo me veo?”

“Antes de responder... ¿puedo preguntar algo?”

“Por supuesto”.

Aunque Sylvia estaba frotando sus sienes con un dolor de cabeza severo, Lina no notó nada.

“¿No tuviste problemas caminando con esas botas?”

“De hecho, casi me caí un par de veces, me asombra que las chicas japonesas puedan caminar con estas botas sin torcerse los tobillos”.

“¿Has visto a alguna otra chica usando ese tipo de botas?”

La pregunta original se había convertido en dos preguntas, pero de nuevo, Lina no se dio cuenta.

“Hmm, ahora que lo mencionas... creo que no”.

La expresión de Sylvia cambió de dolor a impotencia.

“Lina, permíteme decirlo sin rodeos, ¡esas botas tuyas están pasadas de moda desde hace mucho tiempo!”

“¡Eh~!”

KALEID WORD TRANSLATIONS



Los ojos de Lina se abrieron en shock ante las palabras de Sylvia. Viendo esta reacción, la frustración de Sylvia finalmente explotó.

“¿Qué quieres decir con ‘eh~’? No sólo las botas. Las medias y el sombrero también están pasados de moda. ¡Es la moda de hace 100 años! Además, tu guardarropa no encaja muy bien y es completamente diferente de algo que una jovencita debería usar. No hay forma en que puedas salir sin llamar la atención”.

La expresión facial de Lina se puso rígida al oír esta reprimenda, probablemente, porque ella misma era consciente de ello. En realidad, ella notó que llamaba mucho la atención cuando se fue en la mañana. Sin embargo, en ese momento, pensó que esto era sólo porque la gente no veía extranjeros muy a menudo.

“No importa lo mucho que quisieras llamar la atención del objetivo... ¿Por qué diablos estás llamando la atención de gente sin importancia?”

Como si no pudiera soportarlo por más tiempo, Sylvia dio un enorme suspiro de derrota.

“Comandante”.

El tono era muy tranquilo y estable, pero Lina sintió que una fría gota de sudor corriendo por su espalda.

“Hoy, por el resto del día, su itinerario queda cancelado. Permita que yo, Mercury, le dé una explicación simple y fácil para entender sobre la moda japonesa actual”.

Sylvia hizo esta declaración con ambas manos en sus caderas. Mientras Lina superaba ampliamente a Sylvia en aptitud de combate, pero por alguna razón, no pudo reunir un solo argumento en contra.



Después de las breves pero densamente ocupadas vacaciones de invierno, el tercer semestre comenzó.

“Densamente ocupadas” incluía acompañar a Shizuku al aeropuerto, donde una inesperada ‘despedida entre lágrimas’ (protagonizada por Honoka y Shizuku, con Miyuki y Mizuki como co-estrellas) los acorraló (esto no era algo que pudiera resolverse con fuerza bruta), lo cual sirvió como una valiosa experiencia de vida, pero Tatsuya creía firmemente que todo esto no sería nada más que un ‘maravilloso recuerdo’.

Al menos, sería demasiado deprimente si no se decía eso así mismo.

Supuestamente, el estudiante transferido que tomaría el lugar de Shizuku en la clase A llegaría hoy, pero Tatsuya sintió que este asunto no se relacionaba con él. Si bien esta persona iba a ser compañero/a de clase de Miyuki, por lo que no es como si no tuviera ninguna relación, pero había suficientes grados de separación para no necesitar saludarlo/a voluntariamente.

Hablando de clases, a partir del primer día del tercer semestre, el horario del curso duraría todo el día. Mientras los rumores del misterioso estudiante transferido en la Clase A comenzaron en el momento en que terminó el primer período, Tatsuya no estaba del todo interesado y no prestó mucha atención a los rumores que se estaban extendiendo.

Sin embargo, su actitud distante estaba entre la minoría. Durante el tiempo de descanso después del segundo período, fue arrastrado al rumor gracias a sus demasiado curiosos amigos.

“Escuché que es una chica increíblemente hermosa”.

Viendo a la tan emocionada, o quizás expectante mirada en Erika mientras iniciaba la conversación, Tatsuya finalmente se rindió.

“Tiene el cabello rubio brillante, incluso los senpais fueron a verla”.

“¿Erika no pudo echar un vistazo?”

En cualquier caso, la base de una conversación tan animada no era más que rumores, lo cual era algo preocupante para Tatsuya, lo que provocó su intervención.

“Hay una multitud de gente allí, así que no hay forma de entrar”.

“Sé exactamente qué es lo que más te preocupa”.

En el momento en que Leo entró a la conversación, ya se había cubierto la cabeza con una mano.

Un segundo después, Leo croaba como una rana fuera de tono mientras caía hacia el suelo con sus manos agarrándose la garganta.

(Si sabías que esto iba a suceder, entonces guárdate tus pensamientos innecesarios).

Tatsuya miró con asombro a Leo, quien había quedado inconsciente por el golpe repentino en la garganta con un cuaderno enrollado, mientras la responsable, Erika, continuaba como si nada hubiera pasado.

“Soy una chica después de todo ~ No importa lo bonita que sea esa chica, ten por seguro que no quiero pasar a través de esa multitud”.

Aunque Tatsuya apoya la idea de no ir más allá para echar un vistazo, su perspectiva que juntaba curiosidad y lujuria en una sola categoría podría indignar a cualquier estudiante masculino que estuviera presente.

“Eso se debe a que esta preparatoria mágica no tiene precedentes de estudiantes transferidos. Todo el mundo estaría curioso acerca de un estudiante extranjero. Después de todo, esto no había ocurrido en los últimos 10 años”.

“No tengo muy claro lo que ocurrió en el pasado, pero no somos los únicos que recibieron estudiantes transferidos”.

El que interrumpió fue Mikihiko, quien recién llegaba de la Sala de Preparación Geométrica.

“Las Preparatorias Segunda, Tercera y Cuarta, también recibieron estudiantes transferidos a corto plazo, y las universidades también recibieron a personas que vinieron en nombre de la investigación. Lo escuché de algunos discípulos de la familia”.

La magia antigua y la magia moderna pertenecían a campos separados. Las familias Yoshida y Chiba tenían un gran número de discípulos, así que naturalmente su nivel de información era superior a lo normal. Al parecer, la USNA había invertido una cantidad sorprendentemente alta de personal. Al juntarla con la información sobre el movimiento independiente de STARS que recibió en noviembre, la situación parecía ser grave, pensó Tatsuya.

“¿Entonces el estudiante transferida de la Clase A es un espía?”

“Que idiota...”

Ante la pregunta completamente inesperada del recién resucitado Leo, no solo Erika, sino incluso Mizuki y Mikihiko parecían superados.

“Leo-kun, puedes pensar en eso, pero no lo digas en voz alta...”

“Como estudiantes, tenemos que mantener una relación amistosa...”

A pesar de sufrir un golpe doble de Mizuki y Mikihiko, Leo continuó.

“¿Por qué tendríamos que ser amistosos, ella está en clase A, no es así? No hay conexión, ¿verdad?”

“Idiota, Miyuki está en clase A. Ella es una estudiante transferida que aparece una vez en cada luna azul. Siendo la Vicepresidenta del Consejo Estudiantil. Miyuki tendrá que cuidar a la estudiante transferida hasta que se haya acostumbrado a la escuela. Mientras que esto afecta a Miyuki, no hay forma en que no estemos conectados”.

Erika inmediatamente anuló la objeción de Leo.

No queriendo atraer más problemas, Tatsuya suspiró internamente “Es justo como ella dijo”.

Esa “relación” se materializó más rápido de lo esperado.

No, sería más preciso decir, que de las millones de posibilidades, la primera oportunidad apareció sin piedad.

En el comedor estudiantil, Miyuki, Honoka, y la chica de cabello rubio y ojos azules llegaron tarde. Al ver a la joven, aunque Tatsuya estaba impactado, aún se sentía un poco sorprendido.

Él ya había oído hablar del cabello y el color de los ojos junto con los rumores de gran belleza. Y si su belleza fuera todo, entonces los nervios de Tatsuya ya habían sido afilados por Miyuki. El motivo de su sorpresa no vino de esto, sino debido a que era la misma chica que él vio en el santuario, o más apropiadamente, la joven que él detectó en el santuario.

“Disculpen, ¿puedo sentarme con ustedes?”

La joven hablaba japonés con fluidez. Su pesado acento no podría evitarse, como se espera de una estudiante transferida estudiando en Japón - o de una infiltrada disfrazada de estudiante transferida.

“Por supuesto, adelante por favor”.

Su mirada recorrió a Tatsuya. Aun así, no había necesidad de estar precavido, así que Tatsuya accedió rápidamente.

“Lina, vamos primero por una bandeja”.

“Bandeja... Ah, te refieres a los alimentos, entendido”.

El grupo de Tatsuya ya tenía su comida.

Bajo el impulso de Miyuki, las tres caminaron hacia el mostrador de la cafetería.

Y debido a esto, el alboroto que rodeaba el mostrador fue mayor de lo habitual.

Impresionados por esa formación, los demás estudiantes decidían escabullirse fuera del camino más rápido de lo habitual.

“Esas dos juntas, son ciertamente una fuerza a considerar ~”

Como una belleza por sí misma, pero ciertamente sin dar esa impresión, Erika no podía más que suspirar con aceptación.

“Parece que se están llevando bastante bien...”

No parece que se hubieran conocido hoy, era probablemente lo que Mizuki realmente quería decir.

“Oye, Tatsuya... Creo que la he visto en alguna parte”.

“Wow, ¿una vieja conocida tuya?”

En cuanto Leo abrió la boca para hablar, Erika interrumpió. Aunque sabía que Leo estaba diciendo esto debido a las facciones de la chica, Erika se interpuso porque el enunciado de Leo era demasiado directo.

“Ahora que lo mencionas, de hecho...”

“¿Eh, Shibata-san también? A menos que ella sea una artista o una modelo... Pero eso es bastante improbable, ¿verdad?”

Como era evidente del comentario de Mizuki, las palabras de Mikihiko eran pura especulación.

Por supuesto, Tatsuya sabía exactamente cuál era la verdad del asunto. Más bien, la incapacidad de recordar a una chica disfrazada de forma tan exagerada era aún más asombrosa. Justo cuando Tatsuya dudaba si disipar el desconcierto de sus amigos, el tema de su conversación ya había regresado con Miyuki.

Tatsuya sintió una cantidad enorme de ojos en su dirección. Mientras fingían seguir sus asuntos sin poder contener su curiosidad, las miradas llegaban a ellos desde las cuatro direcciones. Aunque Miyuki atraía una gran cantidad de miradas, el número de miradas discretas había aumentado sustancialmente en comparación con el habitual.

“Siento hacerte esperar, Onii-sama”.

Como si ignorara totalmente estos detalles, Miyuki se sentó junto a Tatsuya como si esto fuera lo más normal del mundo.

“Tatsuya-kun, permítanme hacer algunas presentaciones”.

Naturalmente, Honoka se sentó frente a Tatsuya y habló hacia la chica sentada junto a ella.

“Angelina Kudou Shields. Tal vez ya has oído hablar de esto, pero ella es la estudiante transferida que se unirá a nosotros en la clase A, a partir de hoy”.

Al escuchar la introducción de Honoka, no sólo Tatsuya, sino los otros tres, también revelaron expresiones confusas.

“Honoka, no sólo a mí, ¿no deberías de presentar a los demás?”

Como la persona en cuestión, la estudiante transferida manifestó los sentimientos de todos.

“Eh, ah, l-lo siento”.

“...Bueno, esa es nuestra Honoka”.

“De hecho, así es Honoka después de todo”.

Encarada por los comentarios de Erika y Mizuki, que eran más como ataques críticos, Honoka se puso totalmente roja y fue incapaz de decir una sola palabra.

“Entonces, permítanme hacer presentaciones, esta es Angelina Kudou Shields de Estados Unidos”.

Después de que Miyuki hizo la segunda ronda de presentaciones, el cabello de la estudiante transferida se balanceó ligeramente mientras se inclinaba ligeramente en su asiento.

“Por favor, llámenme Lina”.

Mientras decía esto, entrecerró sus ojos mientras mostraba una sonrisa deslumbrante.

Sus pupilas azules, no del color del agua o del hielo, sino que recordaban a la gente un zafiro, o el azul del cielo.

Las dos trenzas onduladas en los costados de su cabeza estaban aseguradas por cintas, y si se liberaban, probablemente llegarían hasta la cintura. Su cabello podría ser más largo que el de Miyuki.

Para una estudiante de primer año de preparatoria, una mirada tan madura no iba muy bien con un peinado tan infantil, pero esto coincidía perfectamente con esa mezcla perfecta entre impacto y belleza, con un grado de familiaridad para acompañarlo.

Parece que la mayoría de las miradas fueron definitivamente por ella. Al escuchar la introducción de Miyuki, Tatsuya lideró las presentaciones en lugar de sus amigos que estaban un poco abrumados por

esa sonrisa tan deslumbrante (especialmente los 2 chicos) y llevaban expresiones de shock como diciendo: “¿Oh?”

“Clase E, Shiba Tatsuya. Para diferenciarme de Miyuki, por favor llámame Tatsuya”.

“Gracias, y por favor llámame, Lina, y te agradecería mucho que no usaras honoríficos”.

“Entendido Lina”.

“Encantada de conocerte Tatsuya”.

Tal vez por costumbre, Lina extendió su mano sobre la mesa, así que Tatsuya la agarró ligeramente desde abajo.

Esto fue sólo un apretón de manos, y no algo ridículo como una dama extendiendo su mano para ser besada.

“¿De casualidad, Tatsuya es el hermano de Miyuki?”

Sus ojos azules mostraron algo de vacilación, pero Lina fingió que nada había sucedido y continuó.

No parece capaz de esconder sus expresiones, pensó Tatsuya, mientras él no sabía si reírse accidentalmente o simplemente sonreír, asintió con la cabeza. Justo ahora, Miyuki se refirió claramente a Tatsuya como ‘Onii-sama’, lo que claramente indicaba su relación.

“Soy Chiba Erika, por favor llámame Erika, Lina”.

Uno de los puntos fuertes de Erika era no acobardarse en este tipo de situaciones.

“Mi nombre es Shibata Mizuki, por favor llámame Mizuki”.

“Saijou Leonhard, pero Leo está bien, soy un poco duro y hablo así, así que no te ofendas”.

Su tono era más grosero que de costumbre, pero no lo suficiente como para reprenderlo.

“Yoshida Mikihiko, por favor llámame Mikihiko”.

Animados por su valor, Mizuki, Leo y Mikihiko se presentaron a sí mismos.

“Erika, Mizuki, Leo y Mikihiko, encantada de conocerlos”.

Sin pedirle a nadie que se repita, Lina recordó todos sus nombres al primer intento. Aunque esto fue sólo el comienzo, logró obtener una impresión favorable en este primer paso crucial.

Sin embargo, al oír a Mikihiko pronunciar su nombre como “Mikhiko”, este nombre puramente japonés parecía haber atropellado su japonés.

“Es un poco difícil de pronunciar, así que si no puedes decir Mikihiko, solo usa Miki”.

Si la persona en cuestión hubiera dado permiso, entonces todo debería estar bien. Sin embargo, viniendo de otra persona, y especialmente de Erika, no había sentido de cordialidad. Al menos, así fue como Mikihiko se sintió dispuesto a rechazar la propuesta de Erika.

“Ah, ¿es así? Entonces permíteme hacerlo. ¿Miki, está bien?”

Sin embargo, esa encantadora sonrisa lo despojó de su voluntad con ese ‘está bien’, Mikihiko sólo pudo aceptarlo.

Lina, quien intencionadamente seleccionó el trigo sarraceno del menú, estaba batallando con sus palillos mientras trataba de contener su frustración y responder las ocasionales preguntas. Por supuesto, todo el mundo era muy cortés y no hicieron ninguna pregunta maleducada. Justo cuando todo el mundo estaba a punto de terminar de comer, Lina finalmente parecía dominar sus palillos. Viendo esto, la pregunta que burbujeaba entre los miembros de la clase E fue finalmente expresada por su representante, Tatsuya.

“Hablando de eso, ¿es Lina familiar de Elder Kudou?”

El término típico entre los magos japoneses era “sensei”, pero Tatsuya personalmente no usaba este título. En lugar de eso, usó el término general “Elder”, que era un título honorable para los oficiales jubilados mientras le formulaba la pregunta a Lina.

“Recuerdo que el hermano menor de Elder Kudou fue a América y formó una familia allí”.

Esa era una época en la que los magos eran alentados a casarse a través de las fronteras internacionales. En ese momento, la noticia de que el hermano menor de Kudou Retsu, el ‘Astuto’ entre los magos del mundo, se había dirigido a América y había iniciado una familia con una maga americana era un tema de debate acalorado.

“Ara, me sorprende que hayas oído hablar de eso, Tatsuya. Esa es definitivamente, una noticia de hace mucho tiempo”.

La conjectura de Tatsuya parecía haber dado en el blanco.

Además, para un mago americano, decir que el hermano menor de Kudou Retsu fue a América ‘hace mucho tiempo’ tenía sentido.

“El abuelo de mi madre es el hermano menor de Shogun Kudou”.

Ella usó la palabra ‘Shogun’ para General. Tatsuya no la oyó de manera incorrecta.

Ese fue el término que los Magos de Europa y América usaron cuando se referían a Kudou Retsu, quien pasó muchos años en una posición de liderazgo entre los Magos Japoneses. Aunque tuviera un cuarto de la ascendencia, por muy fluido que hablara japonés, seguía siendo una maga americana.

“Gracias a eso, puedo venir aquí para estudiar en el extranjero”.

“¿Así que Lina no vino aquí por su voluntad propia?”

魔法科高校の劣等生 (MAHOUKA KÔUKOU NO RETTOUSEI) VOLUMEN 9 /

Traducción: CanisLycaon; Silver Horn - Corrección: CanisLycaon.

Erika preguntó repentinamente.

El nerviosismo y la ansiedad que Lina reveló tampoco parecían ser la imaginación de Tatsuya.



Capítulo 3

Aquellos que rondan en la oscuridad de la noche no se limitan a los bajos fondos.

Que los ciudadanos pudieran moverse libremente sin la amenaza de los malhechores, era gracias a los esfuerzos incansables de parte de los ‘apóstoles del orden’. Esta noche, un joven que (supuestamente) era uno de estos pilares del orden le estaba protestando a su compañero.

“En serio, un problema tras otro”.

“.....”

“¿Acaso nuestra mala suerte del año pasado no ha llegado a su fin?”

“.....”

“Algo debe haber sucedido, así es fácil saber si son inmigrantes ilegales o invasores extranjeros”.

“...Investigarlos es nuestro deber, tenemos trabajo gracias a esta serie de incidentes, así que, ¡deje de quejarse!”

Mientras utilizaba su voz clara y capaz para aconsejar a su superior, que todavía estaba murmurando suavemente “Cosas como esta no debería estar pasando en absoluto...” soltó un suspiro.

“Sí, habla Inagaki”.

Al oír un estallido corto de su auricular, Inagaki respondió de inmediato en un tono suave.

“Afirmativo, estaremos en la escena en breve”.

Después de apagar el dispositivo de transmisión, Inagaki barrió con una mirada severa a su superior, que llevaba una mirada fatigada en su rostro mientras examinaba su entorno.

“Inspector, 5 cuerpos, la causa de la muerte es la misma, y al igual que antes, no hay heridas externas”.

Al escuchar el informe del sargento Inagaki, el inspector Chiba Toshikazu suspiró mientras sus ojos se movían hacia el cielo.

“Y toda su sangre parece haber desaparecido... En serio, 5 cadáveres extraños cada mes. Debe haber un límite para tratar de llamar la atención de los medios de comunicación”.

Sin hacer alusión a las víctimas o al asesino, el inspector Chiba Toshikazu solo suspiraba para aclarar lo problemático que era todo esto. Sin embargo, en medio de la inconveniente expresión de su rostro, sus pupilas se movían con la afilada mirada de un cazador.



Angelina Shields estaba dando una actuación digna de ser llamada ‘una entrada emocionante’.

Desde el primer día de su traslado, su apariencia era tal que no podía pasar desapercibida.

Antes de esto, el trono de la chica más hermosa de la escuela le pertenecía únicamente a Miyuki. Esto era algo con lo que tanto los senpais como el cuerpo estudiantil femenino en su totalidad estaban de acuerdo.

Sin embargo, con la adición de Lina, el título de ‘Reina’ se había transformado en ‘Bellezas Gemelas’. Añadido al hecho de que ellas a menudo se movían juntas, esto sólo servía para profundizar la impresión de que ‘su belleza rivaliza con la de Miyuki’.

Su cabello rubio que brillaba luminosamente bajo el sol y sus pupilas azules que ponían en vergüenza incluso a los zafiros.

Las trenzas de un oscuro más profundo que la noche misma y los ojos brillantes que superaban el resplandor de las perlas negras.

Miyuki y Lina, iguales en belleza, pero diametralmente opuestas en apariencia. Teniéndolas a ambas, la Primera Preparatoria tenía un brillo especial.

Sólo tener ese nivel de belleza era suficiente para dejar a todos boquiabiertos —.

“Miyuki, ahí voy”.

“Siéntete libre de comenzar cuando quieras, te dejaré la cuenta atrás, Lina”.

Las dos se pararon frente a frente a una distancia de 30 metros.

Entre ellas, una pequeña bola de metal con un diámetro de 30 cm se encontraba sobre una barra delgada.

Aunque había muchos instrumentos similares en la Sala de Habilidades Prácticas, todos sus compañeros abandonaron lo que estaban haciendo y concentraron toda su atención en las dos chicas.

No, no sólo sus compañeros. En los puestos de observación en el segundo piso, había bastantes senpais de tercer año que poseían la libertad de seleccionar su horario.

Mayumi y Mari estaban incluidas.

“...Un poder mágico que rivaliza con el de Miyuki, ¿crees que eso es posible?”

“De cierta forma, ella es la representante de Estados Unidos en Japón, por lo que era de esperarse, pero aún es difícil creer que alguien con la misma edad de Miyuki pueda enfrentarse a su Poder Mágico”.

“Estoy de acuerdo, pero bueno, ver para creer, solo lo creeré cuando lo vea con mis propios ojos”.

“Estamos aquí precisamente para confirmar la veracidad del asunto”.

El objetivo del ejercicio consistía en que ambos lados activaran sus CAD al tiempo, con el ganador tomando el control de la bola de metal. Este ejercicio práctico, no sólo era simple, sino que también contenía un grado competitivo bastante alto.

Debido a su simplicidad, se trataba de una forma simple de determinar la diferencia de poder entre ambas.

Desde que comenzaron con este ejercicio el mes pasado, Miyuki había alcanzado un nivel al que sus compañeros no podían aspirar a llegar. La diferencia entre ella y el resto de sus compañeros era tan grande, que los instructores habían considerado que la práctica contra otros estudiantes carecía de sentido.

Era un secreto a voces que ni siquiera los miembros recién egresados del Consejo Estudiantil (ni los miembros del Comité Moral Pública) que vinieron a desafiar a Miyuki fueron rivales para ella.

Sin embargo, Miyuki estaba a punto de medirse contra una estudiante transferida.

Dado que los senpai quedaron completamente en vergüenza a pesar de aceptar el resultado (por supuesto, Miyuki no es del tipo de persona que exagera sus logros, en su lugar estaba un poco avergonzada por todo el asunto), Mayumi y Mari tenían que asistir a este ejercicio.

“Tres... Dos... Uno...”

En el momento en que Lina gritó “uno”, ambas pusieron sus manos sobre el tablero.

“¡Ahora!”

Gritaron al mismo tiempo.

Miyuki golpeó el tablero con las yemas de los dedos, mientras que Lina presionó con toda su mano.

Calma y excitación, sus personalidades se reflejaban en sus movimientos iniciales. Sin embargo, esto sólo reflejaba el aspecto físico de las cosas.

Una brillante cantidad de psiones se combinaban y explotaban en el Eidos de la bola de metal que servía de blanco. Ya que se trataba de una luz que no podía verse a simple vista, cerrar los ojos no servía de nada.

Algunos de los observadores quienes no habían dominado las técnicas de interferencia y supresión de magia presionaban sus sienes y no podían dejar de sacudir la cabeza.

La luz se desvaneció después de un instante mientras la bola de metal rodaba lentamente en dirección a Lina.

“Ah, perdí de nuevo”.

“Fufu, ahora estoy adelante por dos rondas, Lina”.

Lina declaró en voz alta su falta de voluntad para aceptar la derrota, mientras Miyuki sonreía ligeramente al tiempo que secretamente soltaba un suspiro de alivio.

Basados en sus reacciones, era evidente que la vencedora de esta competencia (aunque no era una competencia real) era Miyuki. A pesar de decir “adelante en dos rondas”, una frase que normalmente estaba reservada para el vencedor no dejaba la impresión de una victoria abrumadora, era más como...

“Están muy parejas”.

“En términos de velocidad de activación, la estudiante transferida es más rápida, ¿no?”

“Hm, pero Miyuki gana en fuerza de interferencia, por lo que tomó el control antes de que la magia de su oponente estuviera terminada. La iniciativa contra el poder... En lugar de llamar a esto una competición de fuerza, fue más como una victoria táctica”.

En la opinión de Mayumi y Mari, en términos de procesos sistemáticos simples, ambas poseían un poder mágico similar.

Posteriormente, el mismo ejercicio se repitió cuatro veces más, con ambos lados resultando en un 2-2, por lo que el día terminó con Miyuki en la delantera por dos rondas.

Mediodía en la cafetería de la escuela.

Lina estaba sentada con ellos hoy, pero esto no podría describirse como ‘habitual’. Desde la transferencia hace una semana, ella había estado sentándose con un grupo diferente cada vez durante el almuerzo.

Al maximizar sus posibilidades de ‘crear conexiones’, se podría decir que era una estudiante transferida ejemplar. En términos de comer con el grupo de Tatsuya, esta era realmente la primera vez desde su primer día de transferencia.

“Eres bastante popular, Lina”.

“Gracias, me alegra que todo el mundo sea tan amable”.

Ante el elogio de Erika, Lina optó por no responder con falsa humildad y eligió responder con una actitud despreocupada.

No había forma de decir si esta actitud era su verdadera personalidad o simplemente su trasfondo cultural, pero Tatsuya y compañía (sin contar a Erika) lo tomaron como un cambio de actitud bastante agradable.

“Sin embargo, Lina es sorprendentemente competente, aunque sabía que cualquier persona seleccionada para estudiar en el extranjero definitivamente tendría las habilidades para respaldarlo, pero en serio es increíble que puedas igualar a Miyuki a ese nivel”.

“No, creo que yo debería ser la sorprendida”.

Al escuchar a Mikihiko, Lina abrió los ojos con incredulidad.

Hablando de eso, al menos en comparación con Miyuki, Mikihiko encontraba más fácil hablar con Lina. Cuando hablaba con Miyuki, Mikihiko todavía hablaba formalmente mientras que con Lina podía hablar más casualmente.

“Yo solía estar invicta en competiciones de alto nivel como esta, pero no creo poder vencer a Miyuki, y al enfrentarme a Honoka, puedo ganar en habilidad general, pero todavía pierdo en la complejidad del diseño. Como se esperaba de Japón, uno de los países mágicos más fuertes”.

“Lina, los ejercicios prácticos son sólo eso y no una competencia. Creo que no vale la pena hablar de la victoria o la derrota”.

“Las competencias mágicas son muy importantes. Aunque estos son sólo ejercicios prácticos, creo que elegir temas altamente competitivos donde la victoria está en juego, es la única manera de mejorar”.

Ante el comentario de Miyuki, Lina refutó soltando su contra-argumento, sin temor ante cualquier posible confrontación.

Esta era su forma de ser, lo que por sí misma, era un cambio de actitud agradable.

“La voluntad de competir es muy importante durante las competencias, pero no hay necesidad de llevar eso más allá, ¿verdad? Los ejercicios prácticos son, en última instancia, sólo práctica... y son fundamentalmente diferentes a los exámenes de habilidades prácticas que determinan la habilidad personal”.

“Es cierto, Tatsuya tiene razón, tal vez me emocioné demasiado”.

“La emoción no es algo malo, Miyuki también está más motivada con la llegada de un nuevo oponente, así que en ese punto, debo darte las gracias, Lina”.

Al principio, Lina asintió francamente con la cabeza ante las palabras de Tatsuya, pero su expresión cambió a una de incredulidad.

“¡Ahí está! El comentario sis-con de Tatsuya-kun”.

A un lado, Erika soltó un comentario “Ah ha” mientras fingía suspirar.

“Ah... Oh, así que de eso se trata... Tatsuya y Miyuki se llevan bastante bien”.

Tragándose un comentario aún más descortés, Tatsuya pareció sentir que la mirada que Lina había enviado en su dirección estaba bajando la temperatura rápidamente.

“Cambiando de tema, Lina, aunque esto no es realmente importante...”

Detectando que la atmósfera que se dirigía en una dirección molesta, Tatsuya cambió el tema.

“¿De qué se trata?”

Ella envió una mirada fría en su dirección, estaba desprovista de condescendencia, por lo que probablemente fuera acorde al chiste de Erika.

Aunque este era el resultado esperado basándose en sus observaciones, no estaba completamente seguro. Aun así, estamos hablando de Tatsuya, y Tatsuya no es tan amable como para callarse y retroceder solo por esto.

“Si mal no recuerdo, ¿no es ‘Angie’ la abreviación habitual de ‘Angelina’?”

Esto no se suponía que fuera una pregunta extraña. Al menos eso pensaban, Erika, Mizuki y Honoka quienes estaban sentadas en la mesa con ellos.

Sin embargo, por un instante, la expresión de Lina definitivamente vaciló.

“No, recuerdas bien, pero el apodo ‘Angie’ no es tan raro como tú piensas. Por ejemplo, tuve una compañera de clase en la escuela primaria llamada ‘Angela’ a quien llamaban ‘Angie’”.

“Así que por eso prefieres que te llamen ‘Lina’ en vez de ‘Angie’, ¿huh?”

Tatsuya asintió con la cabeza como si entendiera la situación.

Él no mostró ningún indicio de haber notado la vacilación en el rostro de Lina.

KALEID WORD TRANSLATIONS





La Primera Preparatoria no contaba con dormitorios para estudiantes.

Como sólo había nueve preparatorias mágicas en todo el país, era inevitable que los estudiantes del extranjero estuvieran presentes.

Por lo tanto, mientras que los dormitorios de los estudiantes no parecían estar completamente fuera de cuestión, en este día y época, además de algunos internados especializados que consideraban los dormitorios de los estudiantes como una parte integral del plan de estudios, las instalaciones como los dormitorios de los estudiantes ya no eran necesarias.

En la era moderna, los HAR (Home Automation Robot*) ya han entrado en el mercado de las masas, la compra de artículos diarios se puede hacer a través de internet y se entregan directamente en la puerta de tu casa, para que los estudiantes puedan vivir libremente por su cuenta y sin molestias, convirtiendo a los dormitorios de estudiantes en algo innecesario. Debido a las razones anteriores, la mayoría de los estudiantes que por alguna razón no podían regresar a sus hogares familiares, normalmente elegían alquilar departamentos cerca de la escuela. Como estudiante transferida, no había nada raro para Lina en alquilar un departamento. Su casa estaba a sólo dos paradas de autobús de la escuela, lo cual se consideraba muy cerca gracias al transporte público moderno. La razón por la que no alquiló un estudio personal o un apartamento de una sola habitación y en cambio eligió un apartamento pequeño de tamaño familiar era debido a que Lina no vivía sola. (*Robot de automatización del hogar*).

“Bienvenida Lina”.

“Sylvie, ¿ya regresaste?”

En el momento en que Lina abrió la puerta del departamento, la Auxiliar Sylvia, que servía de apoyo a esta misión, la saludó inmediatamente como si llevara algún tiempo esperándola.

“Es muy tarde, ¿no?”

Lina sonrió irónicamente al oír esto después de desviarse un poco de camino a casa y caminó hacia el comedor en su uniforme. Ahí estaba,

“Mina, viniste”.

Una mujer joven que llevaba una expresión tensa saludó a Lina. Estaba de pie frente a la mesa y probablemente había estado conversando con Sylvia.

“S-sí, siento molestarla Comandante”.

La mujer llamada Mina respondió en un tono rígido. Con una sonrisa perpleja en su rostro, Lina se sentó junto a la mesa.

“Siéntate, Mina, Sylvie, ¿podría molestarte con un té?”

Normalmente, Sylvia ignoraría completamente la cadena de mando y respondería con “Ya que eres una chica, debes preparar tu propio té”.

Sin embargo, ella no era incapaz de leer el ambiente.

“¿Está bien el té de leche? Mina, ¿quieres una taza?”

“Ah, está bien, perdón por las molestias”.

La pregunta de Sylvia pareció aterrorizar a Mina, pero al menos ella se relajó unos cuantos grados mientras respondía.

El nombre completo de la mujer era Michaela Honda, o Mina para abreviar. Ella al igual que Lina tenía ascendencia japonés-americana, pero a diferencia de Lina, Mina podía mezclarse completamente debido a su aspecto. Tal vez su tono de piel era un poco más, ¿oscuro? Pero no al punto de sobresalir en Japón.

Ella era una de las espías que habían entrado en Japón antes que Lina. Dicho esto, esta tampoco era su ocupación original. Su verdadera identidad era una investigadora mágica adscrita al Departamento de Defensa que se especializaba en la Liberación de Magia Sistématica. Ella era una mujer talentosa que participó en el experimento del agujero negro del pasado mes de noviembre en Dallas. Ella se ofreció para esta misión en busca de un avance alternativo para la “conversión de la energía” que fuera diferente a la “reacción de aniquilación partícula-antipartícula” después del desastre en el centro de investigación de Dallas.

Como muchos investigadores mágicos, ella también era un mago. A diferencia de los falsos estudiantes que vinieron este mes bajo el disfraz de investigación mutua, ella se había infiltrado en las universidades mágicas bajo la identidad de un vendedor e ingeniero de la rama japonesa de Maximilian Industries, “Mia Honda”. Hablando de eso, su vivienda actual estaba justo al lado del departamento alquilado de Lina. A pesar de no ser personal de combate o de inteligencia, ella todavía servía de apoyo y estaba lo suficientemente oculta como para ser un miembro activo durante esta misión de infiltración.

“¿Tienes alguna pista?”

La pregunta inicial de Lina fue para Sylvia, que acababa de sentarse después de dejar las tazas.

“He revisado la información publicada, pero hasta ahora no he encontrado ningún dato relevante”.

“Ya veo, parece que no hay forma de obtener resultados rápidamente desde esa dirección”.

Esta vez se giró hacia Michaela.

“¿Y tu lado, Mina?”

“Nada aquí tampoco... Lo siento”.

Michaela se había relajado un poco antes de volver a llenarse de ansiedad.

No era la intención de Lina hacer que todos estuvieran tan nerviosos como si fuera una persona estricta. Sin embargo, desde el final del año pasado, Michaela siempre había estado extremadamente nerviosa alrededor de Lina desde el primer día. Se debía a una división entre los investigadores y el personal de combate, la causa más probable era porque Lina se situó en el pináculo de los magos de la USNA como “Sirius” a pesar de su juventud. Simplemente decirle que se relajara no iba a lograr nada. A pesar de que ya había pasado dos semanas desde ese día y ahora podían tener cierto grado de interacción, esto sólo se restringía a las conversaciones cotidianas. En ese corto periodo de tiempo, Lina misma sabía que era imposible lograr el mismo tipo de relación de trabajo que tenía con Sylvia.

“¿Cómo está tu lado Lina, te has acercado al objetivo?”

Al escuchar la pregunta de Sylvia, la expresión de Lina parecía estar envuelta en niebla.

“Siento que no me he acercado en absoluto”.

Lina suspiró y puso una sonrisa amarga en su rostro.

“No he obtenido una sola pieza de información valiosa y parece que ya han visto a través de mi disfraz”.

“... ¿De qué estás hablando?”

“Tatsuya me preguntó, ‘¿no es Angie la abreviatura habitual de Angelina?’ y casi me hace dar un infarto”.

“¿No podría haber sido una coincidencia?”



“No tengo ni idea, soy un fracaso, así que supongo que realmente no estoy preparada para este tipo de trabajo, ¿huh?”

Lina siguió suspirando profundamente. Sylvia volvió a llenar su taza de té de leche. Al notar que Sylvia y Michaela estaban enviando miradas preocupadas en su dirección, Lina logró encontrar su segundo aire.

“No se preocupen, mi oponente es sólo un estudiante de preparatoria, después de todo, no podría descubrir mi identidad como Sirius, aunque sospeche algo, no hay forma en que se consiga información concreta”.

No se necesitaba ser un genio para decir que estas palabras valientes eran pura palabrería. Al principio, a Lina le había sido encargada la misión de identificar a su objetivo bajo cualquier circunstancia, por lo que decir “no ser identificada” eran palabras vacías. Sylvia era muy consciente de esto, pero decidió abstenerse después de considerar que esto dañaría demasiado la moral. Además, no podía decir que su oponente no era un estudiante ordinario.



KALEID WORD TRANSLATIONS

Después de entregarle una bata a su hermana, que acababa de levantarse de la cama del dispositivo de examen de ondas psion en nada más que su ropa interior, Tatsuya observó los resultados del examen mientras su rostro de póquer habitual, contenía rastros de preocupación que no podían escapar de los ojos de Miyuki.

“... ¿Estás preocupado por algo? Onii-sama, por favor siéntete libre de decirme cualquier cosa, no importa lo que Onii-sama necesite decir, Miyuki siempre está dispuesta a escuchar”.

En lugar de llamar a esto una reacción exagerada, era más como excesivamente motivada.

Mientras este pensamiento corría a través de la mente de Tatsuya, él estaba desconcertado en cuanto a cómo responder y con qué expresión abordar esto, y al final sólo adoptó una risa seca.

“No, más que decir que algo me preocupa, creo que esta vez es mi propio problema. Ya que el límite de la escala de diseño mágico excede las expectativas originales, la capacidad de procesamiento del CAD ya no puede seguir el ritmo de tu Poder Mágico. Estaba planeando instalar un área de cálculo mágico más grande... Estás pensándolo demasiado”.

“Lo siento”.

“¿Por qué te disculpas? Yo debería estar elogiándote”.

Acariciando suavemente el cabello de su hermana mientras mantenía la cabeza inclinada, Tatsuya le sonrió cálidamente a Miyuki en cuanto levantó la cabeza.

Miyuki siguió el ejemplo de su hermano, devolviéndole la sonrisa a su hermano. Todo estaba bien hasta este punto.

(... No es momento para sonrojarse).

Consciente del peligro inherente —en gran parte presentado por la división que se asomaba a través de las brechas de la bata—Tatsuya rápidamente restableció la conversación.

“Parece que la transferencia de Lina a tu misma clase se convirtió en un excelente estímulo”.

Al oír el nombre de Lina, el rubor en el rostro de Miyuki se desvaneció inmediatamente.

“En efecto... Esto puede sonar un poco arrogante, pero no había conocido a un oponente de su calibre”.

Esto no era porque el humor se había arruinado. Miyuki no era el tipo de mujer que estaría molesta porque el nombre de otra mujer provenía de los labios de Tatsuya. Su expresión contenía un grado visible de transparencia por una razón completamente distinta. Un espíritu de lucha calmado pero ardiente se escondía en los ojos de Miyuki.

“Oh, sí, Onii-sama, ¿respecto a tu pregunta de esta mañana...?”

“¿Lo notaste?”

Tatsuya se rio entre dientes al decir esto.

“Como sospechaba, Lina es ‘Sirius’”.

Tatsuya declaró esto mientras su sonrisa era reemplazada por una expresión intrépida.

“Como supuse, no hay forma de esconder estas cosas de Miyuki”.

Al ver a Tatsuya reírse una vez más y levantar los brazos para estirarse, Miyuki no pudo mantener una expresión seria y sonrió maliciosamente mientras levantaba un dedo hacia Tatsuya.

“Por supuesto, porque Miyuki observa a Onii-sama más que nadie”.

Tatsuya se rio en voz alta. No había forma de saber si sentía que Miyuki estaba bromeando o simplemente estaba tratando de considerarlo una broma.

Al ver a su hermano reír, la única cosa en la mente de Miyuki era lo mucho que ella realmente quería saber lo que Tatsuya estaba pensando.

La verdadera razón de por qué ninguno de ellos podía relajarse, era porque en el sótano (más como instalación subterránea) el aire acondicionado seguía funcionando, agitando la delgada bata que apenas cubría su ropa interior.

Miyuki necesitaba regresar a su habitación y cambiarse, así que los dos regresaron a la casa.

Lo que cubría las delgadas y exquisitas piernas de Miyuki no eran un par de leggins o pantimedias, sino unas medias largas negras. La ropa alrededor de su parte superior del cuerpo estaba bastante floja y había un rastro de la pálida piel de Miyuki entre la minifalda y las medias.

Todo estaba bien mientras ella permaneciera de pie, pero en el momento en que Miyuki se sentó, Tatsuya se dio cuenta inmediatamente, *¿no es esta una terrible situación?*

Y sabía exactamente por qué era terrible, calculó Tatsuya.

Ignorando los sentimientos de su hermano (aunque no es como si pudiera evitarlo) Miyuki colocó la taza de café delante de su hermano.

Ella normalmente se sentaba en el sofá junto a él, excepto hoy, ya que estaba sentada frente a él.

Ella no adoptó una postura parecida a un loto ni puso sus piernas una encima de la otra.

Más bien, colocó las rodillas juntas y las mantuvo inclinadas diagonalmente.

Esta era una postura muy amorosa que apenas insinuaba los encantos secretos debajo de su falda.

Confuso de la intención de Miyuki (la intención superficial era obvia, pero su significado real permanecía oculto), Tatsuya optó por no centrarse en eso.

Después de tomar esa decisión, la mirada de Tatsuya dejó de vacilar.

Al otro lado de la mesa, pudo detectar un rastro de disgusto proveniente de Miyuki, pero eligió no mencionarlo y comenzó a hablar mientras miraba a Miyuki.

“Continuando nuestra conversación anterior, creo que hay una alta probabilidad de que Lina sea ‘Angie Sirius’”.

El mes pasado, Tatsuya recibió una advertencia de su tía Yotuba Maya de que la unidad de magos del Ejército de la USNA, ‘STARS’, había comenzado a investigar al Mago responsable de la Magia de Clase Estratégica [Material Burst]. En ese momento, Maya había dejado muy claro que Tatsuya y Miyuki serían incluidos entre los posibles sospechosos.

Tatsuya creía que el hecho de que Lina viniera a la Primera Preparatoria era a causa de la guerra de inteligencia que se estaba llevando a cabo.

“En este momento, el problema es que hemos descubierto la identidad de Sirius a pesar de los esfuerzos de nuestro oponente por ocultarla, además, también podemos ver que están tratando de desentrañar nuestras verdaderas identidades”.

Era normal que Tatsuya estuviera confundido, dadas las increíblemente débiles defensas personales y mentales de Lina, al menos para los estándares de la USNA. La razón para esto permanecía más allá del entendimiento de Tatsuya.

“Además...”

Tal vez se pondría a reír al enterarse de la verdad, pero en este momento Tatsuya tenía una expresión seria mientras continuaba con su análisis.

“¿Por qué la USNA enviaría aquí a Sirius, quien es prácticamente su carta de triunfo?”

Miyuki hace mucho tiempo que había cambiado su actitud y seguía el ejemplo de Tatsuya adoptando un tono serio.

“Basándome en las observaciones de la semana pasada, creo que la fuerza de Lina no reside en el trabajo de inteligencia, y me temo que su verdadera misión puede estar en otra parte y lo cual explicaría su fachada”.

“Sirius’ simplemente cubre demasiados aspectos...”

“Asumiendo que Lina es Sirius... Su misión de infiltración puede ser sólo una fachada. Su objetivo real puede estar en otro lugar”.

“Para forzar a la USNA a poner en movimiento a Sirius en una misión internacional... ¿Qué podría ser?”

Podrían estar dejándose llevar un poco, pero afortunadamente, los dos seguían a oscuras de la situación actual.

“No tengo idea... Sin embargo, creo que ahora mismo no tenemos que enfocarnos en eso”.

Desde una perspectiva global, la especulación de Tatsuya ya se había alejado del tema principal y su tono perdía su intensidad anterior.

“Somos muy afortunados de que la USNA te haya proporcionado una excelente oponente, Miyuki”.

Sin embargo, su tono serio no desapareció.

“En efecto, Onii-sama”.

Ante el tono y la mirada sinceros de su hermano, Miyuki cambió su tono.

“Compete contra Lina con todas tus fuerzas, lo estábamos hablando esta mañana, pero tal vez debamos preocuparnos por la victoria o la derrota, eso te empujará a un plano superior”.

“¡Sí!”

“La competencia mutua a modo de combustible para el crecimiento también se aplica a Lina, pero ahora mismo no tienes que preocuparte por eso, es una oportunidad bastante rara”.

Al escuchar las poderosas palabras de Tatsuya, Miyuki reveló una sonrisa tranquila sin ningún rastro de inquietud.

“Es cierto, Miyuki tiene a Onii-sama con ella, mientras Onii-sama esté a mi lado, no temeré a ningún enemigo, aunque se trate del mismísimo Sirius”.

Las palabras de Tatsuya hablaban de un rival y no de un oponente.

Hubo un ligero sentimiento en las palabras de Miyuki de que ella lo entendió de forma distinta.

Sin embargo, frente a la fe ilimitada de Miyuki, Tatsuya asintió con la cabeza sin vacilar.



Había bastantes alteraciones en las actividades extracurriculares de Tatsuya. En el papel sólo había dos, permanecer en la biblioteca o patrullando los terrenos como miembro del Comité de Moral Pública, pero ésta presentaba muchas interrupciones.

Suficiente para dar una pausa y considerar si alguien estaba conspirando en su contra.

Hoy, esta sensación era particularmente superior.

Mientras que a los miembros del Comité de Moral Pública se les permitía llevar su CAD en el campus, Tatsuya no usaba uno mientras ejecutaba sus deberes en el comité.

Originalmente, los CAD eran herramientas que acortaban el tiempo necesario para activar las Cuatro Mágicas Sistemáticas. Tenían un uso limitado en otras magias, como Magia Sistemática-Exterior, Magia No-Sistemática y Magia Antigua, especialmente la Magia No-Sistemática ya que era una simple liberación de psions al punto que la ausencia de un CAD no significaba ningún problema.

Después de revelar accidentalmente su habilidad para usar Gram Demolition durante la competencia de las Nueve Escuelas, Tatsuya se restringió a la Magia No-Sistemática fuera de clases desde el comienzo del segundo semestre. Esto era más que suficiente para manejar cualquier problema, así que no había necesidad de llevar un CAD.

La razón por la cual portaba los CAD del comité mientras estaba de patrulla era para usarlos como una demostración de poder. Aunque no poseían gran poder, Tatsuya normalmente regresaba al cuartel general del comité antes de patrullar y se colocaba un CAD en cada muñeca.

Como de costumbre, Tatsuya se dirigía al cuartel del comité después de clase y vio la figura de Lina. Incluso desde lejos, el brillo de su cabello dorado era inconfundible.

Suprimiendo su deseo de huir basado en el presentimiento de problemas, Tatsuya se esforzó por mantener su tono de voz.

“Buenos días”.

Se había acostumbrado durante mucho tiempo a los saludos de los miembros del comité, que no prestaban mucha atención a la hora del día. Pasó junto a la multitud, que en realidad no superaba las cinco personas y terminó hábilmente sus preparativos.

“Ah, Shiba-kun, perfecto”.

Desafortunadamente, Tatsuya fue atrapado por Kanon.

Su capacidad para ocultar su decepción fue el producto de su entrenamiento diario.

“¿De qué se trata?”

La voz de Tatsuya no contenía ninguna emoción. Era tanto un punto fuerte como uno débil para Kanon quien no prestaba atención a detalles como este.

“Esta es Shields-san. ¿Ya la conoces verdad?”

No era una pregunta del todo. Por supuesto, la única opción de Tatsuya era asentir.

“Shields-san desea observar las actividades del Comité de Moral Pública. Creo que quería ver cómo es que las preparatorias mágicas japonesas se autogobernaban. Shiba-kun estás de servicio hoy, así que, ¿podrías llevarla contigo?”

Qué molesto, pensó Tatsuya. No tenía claras las intenciones de Lina, pero sintió que esto aumentaba la probabilidad de que ocurriera algún evento problemático. Esto era un hecho, ya que estaba seguro de que se encontrarían con los estudiantes varones (todos los senpais) enamorados de Lina observándolo con miradas penetrantes. Incluso si se ahorraba las miradas celosas de los miembros del comité, no se atrevía a imaginar lo increíblemente molesto que sería caminar por el campus acompañado por Lina. Por desgracia, tanto la petición de Lina como la aparición de Tatsuya eran giros perfectamente lógicos.

“Entendido”.

Tatsuya no tenía más opción que ofrecer una rendición inmediata e incondicional.

Lina había sido transferida recientemente, de modo que no había mucha sorpresa, pero era la primera vez que caminaban juntos. Estrictamente hablando, con todos los estudiantes mirándolos fijamente no estaban caminando solos por el campus, pero la atmósfera incómoda no cambiaría independientemente de si estaban o no solos.

Primero que nada, en defensa de Tatsuya, esta sensación de incomodidad no se debía a que tuviera a su lado a una belleza del nivel de Lina, sino porque Lina no dejaba de inspeccionarlo. Cada cierto tiempo, ella le daba una mirada de “Hm~” a Tatsuya, y a pesar de sus esfuerzos por ocultar estas miradas, Tatsuya sintió que sólo estaba haciendo las cosas más difíciles.

Aun así, Tatsuya no podía simplemente decirle “Eres un espía, ¿no?” La presión seguía creciendo como un volcán listo para estallar.

“¿Tu anterior escuela no tenía este sistema?”

Tatsuya sentía que ya no podía soportar este drama silencioso (técnicamente, estaban a sólo una docena de yardas de la sede*). *¿Qué tipo de silencio incómodo es este?* Pensó Tatsuya mientras entraba en su

modo de servidor público y formulaba la pregunta inicial. —Ahora que lo pensaba, era una pregunta terriblemente maliciosa. (*10 metros aproximadamente*)

“¿Eh?...Uh...”

Maliciosa, debido a que podía ver la ansiedad de Lina.

Se rumoreaba que todo el mundo que el mago conocido con el título de ‘Sirius’ era un luchador de primera línea. Seguramente Lina nunca recibió entrenamiento de infiltración, pensó Tatsuya, incapaz de decidir si reírse o llorar.

“...No hay nada que hacer si un estudiante del primer año no sabe nada al respecto”.

Sintiéndose un poco culpable por el afligido estado de Lina, Tatsuya trató de darle un salvavidas. No había necesidad de destrozar su fachada, ya que poner todas las cartas sobre la mesa sólo haría las cosas más problemáticas.

“Eh... Ah, por eso quería entender el secreto de por qué un estudiante de primer año podría participar en esta actividad en este campus”.

No era muy hábil en recibir indirectas, pero tenía una buena cabeza sobre los hombros, pensó Tatsuya. Era lo suficientemente ágil como para agarrar los salvavidas que otras personas le arrojaban, lo que en realidad podría ponerla en una mejor posición que su propia hermana.

Como él sospechaba, estaba siendo apuñalado a izquierda y derecha por todo tipo de miradas. Sin embargo, probablemente cautelosos de no dejar una impresión negativa frente a la estudiante transferida, nadie hizo un movimiento en su contra.

Y así, Tatsuya llevó a Lina a través de las salas de ejercicios prácticos y laboratorios de investigación. Esta patrulla acompañada de explicaciones dio la impresión de que estaba dando un tour por el campus.

Lina detuvo sus pasos en un extremo del edificio junto a los laboratorios de investigación cerca de la escalera que conducía al edificio contiguo.

“¿Estás cansada? ¿Quieres regresar?”

Por supuesto, sabía que esa no era la verdadera razón por la que se había detenido. Solo estaba usando esto para iniciar una conversación.

“No, estoy bien”.

Su tono dio la impresión de que no estaba segura de por dónde empezar.

“¿Qué sucede?”

Instada de Tatsuya, Lina finalmente se liberó de su vacilación.

“Tatsuya es un sustituto —un estudiante de Curso 2, ¿no es así?”

“Eso es cierto, ¿hay algún problema?”

Había pasado mucho tiempo desde que alguien hizo esa pregunta directamente. *¿Esto de nuevo?* En lugar de tener ese sentimiento, se sintió bastante aliviado por esto y respondió con una pregunta suya.

“Cuando le pregunté a Miyuki por qué usabas un uniforme diferente al de todos los demás en la Clase A, me respondió con una voz un poco molesta”.

Lina se echó a reír cuando recordó ese incidente. Eso ciertamente parecía un tabú para Miyuki, Tatsuya rio irónicamente.

“Pero, cuando le pregunté a Kanon antes, ella dijo que Tatsuya está en uno de los primeros escaños entre los Magos de la Primera Preparatoria”.

Cuando Tatsuya oyó el nombre de Kanon pronunciado como “Cannon” (*Cañon*), él lo interpretó como canon en lugar de un cannon —llamar cañón a Kanon era un poco ofensivo.

Con tantas cosas innecesarias en su cabeza, comprender lo que Lina estaba tratando de decir tomó más tiempo que de costumbre.

“Tatsuya, ¿por qué estás fingiendo ser un estudiante mediocre? Y si estás fingiendo ser un estudiante mediocre, ¿por qué revelaste tu verdadera fuerza tan fácilmente?” El comportamiento de Tatsuya es demasiado raro, así que no entiendo por qué lo haces”.

Después de escuchar la pregunta de Lina hasta el final, finalmente comprendió lo que Lina realmente quería decir.

“No tengo ni idea de lo que le preguntaste a Chiyoda-senpai, pero no es como si yo estuviera fingiendo, realmente soy un estudiante mediocre”.

Afortunadamente, Lina dio una explicación detallada antes de transmitir su pregunta y no dejó a Tatsuya sólo, o él realmente podría haberse avergonzado. Realmente necesitaba deshacerse de esos pensamientos innecesarios, pensó Tatsuya.

“El examen de habilidades prácticas depende de la velocidad, la escala y la resistencia a la interferencia basado en las normas internacionales. Sin embargo, la victoria o la derrota en el combate real no dependen estrictamente de esas tres variables. Originalmente, la destreza física juega un papel importante en el combate real. Mientras que mi examen de habilidades prácticas me etiquetó como un estudiante mediocre, puedo mantenerme en una pelea. Es tan simple como eso”.

Esa era una verdad indiscutible. Tatsuya creía que esto era suficiente para responder a la pregunta, o en algún nivel, desviar la pregunta.

“...Estoy de acuerdo en que las calificaciones de habilidades prácticas y la capacidad de combate son dos cosas diferentes”.

Sin embargo, las palabras de Lina eran inesperadas y parecían sugerir algo más.

“Yo tampoco era asombrosa en la escuela, pero era un Mago útil en el campo de batalla”.

Un aura sospechosa parecía emanar lentamente del cuerpo de Lina.

¿No es maravilloso?

El calor de los ojos de Tatsuya desapareció.

“Puedo afirmarlo, eres bueno”.

Antes de esa mirada fría o más bien de acero, Lina soltó una deslumbrante sonrisa.

Esto no era como una floreciente primavera, su belleza se asemejaba a la de una cuchilla perfectamente afilada.

¡La mano de Lina se movió de repente!

Tatsuya rápidamente la interceptó.

La mano derecha afilada con la que Lina utilizó el movimiento más pequeño posible para apuñalar hacia adelante fue atrapada por Tatsuya.

El ataque apuntado a la barbilla de Tatsuya fue interceptado antes de que pudiera llegar hasta la garganta.

Lina movió la mano derecha capturada en forma de pistola y apuntó hacia adelante con su dedo índice.

Una garra aterradora salió silbando hacia el rostro de Tatsuya.

En un instante, Tatsuya lanzó la mano derecha de Lina hacia un lado.

Lina frunció el ceño cuando la luz de psión que se reunía en la punta de su dedo índice se dispersó antes de que el golpe aterrizara.

“Eso fue peligroso”.

“Creí que lo esquivarías”.

“¿Quieres explicarme esto?”

“Antes de eso, ¿puedes soltar mi mano? Eso duele, y esta posición es un poco embarazosa para mí”.

Con el fin de arrojar su mano a un lado, la distancia entre los cuerpos de Tatsuya y Lina se había cerrado bastante. Desde un lado, parecía que Tatsuya estaba atacando a Lina tratando de robarle un beso.

Tatsuya soltó la mano de Lina inmediatamente.

Sin embargo, sus ojos no dieron ningún indicio de vergüenza o arrepentimiento.

“En serio, eso dolío. Incluso me dejaste una mar... ¿Eh? ¿Sin rastro alguno? ¿Control preciso de fuerza?”

Lina llevaba una expresión perpleja mientras usaba su mano izquierda para acomodar su manga derecha.

“Después de golpear el punto de presión en la cara de otra persona, dejarte experimentar un poco de dolor es lo mínimo que mereces”.

“Sólo era un simple bloqueo de psión que no contenía amenaza alguna, lo máximo que podía hacer era dar la impresión de ser golpeado por una pistola”.

“Creo que eso es más que suficiente para justificar mi violenta respuesta.”

Incluso después de ver una sonrisa tan cálida, la expresión de Tatsuya no se relajó en lo más mínimo.

Lina solo podía suspirar y levantar ambos brazos.

“Lo entiendo, lo entiendo. Perdona mi rudeza, Tatsuya-sama”.

Lina reajustó su actitud y se inclinó formalmente ante Tatsuya antes de levantar la cabeza.

Por alguna extraña razón, la expresión una vez severa, en el rostro de Tatsuya se curvó repentinamente en las comisuras de sus labios.

“... ¿Hay algo más?”

“No, eso es suficiente, creo que podemos hablar normalmente en el futuro, aunque esa actitud refinada no te queda para nada, Lina”.

Parecía que el cambio en la expresión de Tatsuya era porque él sentía que esa actitud no le quedaba.

“¿De qué modo no soy refinada?”

“Tu personalidad”.

No estaba seguro si entendería el significado de un término vago como “personalidad”, pero dado el fluido japonés de Lina no debería haber ningún problema, por lo tanto Tatsuya omitió la explicación.

Entonces, para bien o para mal, ella interpretó sus palabras con éxito.

“¡Eso no es verdad, para tu información, incluso he sido invitada a tomar el té con el Presidente!”

Impulsada hacia adelante, Lina intentaba demostrar su elegancia.

“Oh...”

Al oír esto, Tatsuya se rio ligeramente.

En medio de esa risa, había rastros de una frío glaciar.

En un reflejo, Lina se cubrió la boca.

En la expresión de Tatsuya, ella pudo ver a Mefistófeles sonriéndole.

“El presidente, ¿huh?”

Había muchos en posiciones con poder incluso para frenar magos, capaces de asesinar sin ningún arma. Incluso en un país como Japón que era más liberal, había algunas personas especiales en el poder que incluso los magos tenían que tomar los antídotos periódicamente para suprimir el veneno en sus cuerpos antes de conocerlos.

En la USNA, el único Mago que podría encontrarse cara a cara con el Presidente probablemente sería...

“Me atrapaste, ¿verdad?”

No queriendo aceptar el resultado, Lina miró furiosamente a Tatsuya, pero este desastre era totalmente culpa de Lina.

“Mi infamia me precede, fue pura coincidencia que la conversación fuera en esa dirección. En cuanto a esa pregunta, creo que Lina lo dijo por su cuenta, ¿verdad?, después de todo, fuiste tú quien instigó esto”.

Y eso es lo que significa sufrir en silencio. Lo único que Lina podía hacer era seguir mirando a Tatsuya con frustración.

“Entonces, ¿podrías explicarme por qué hiciste esto?”

“...Sólo quería saber qué tan capaz es Tatsuya”.

“¿Qué tan capaz soy? ¿Para qué?”

Los ojos de Lina se alejaron de Tatsuya mientras él se quedaba allí con el ceño fruncido con sospecha.

“Nada realmente... Fue por pura curiosidad”.

“Curiosidad... Hiciste todo esto solo por curiosidad”.

Viendo fácilmente a través de esta descarada mentira, Tatsuya continuó murmurando.

Lina respondió una pequeño “Hmph”.

“... Estrictamente hablando, eso es cierto. Realmente...”

Murmurando suavemente, Lina arrastró su mirada hacia Tatsuya.

“Quería saber si querías venir a la USNA”.

“¿Yo, a América?”

“En mi opinión, tienes un nivel tan alto de habilidad sin embargo estás relegado a una posición baja, ¿no quisieras estar en un escenario en el que recibas el reconocimiento que mereces? Mientras que en Estados Unidos la calificación de un Mago se evalúa de igual forma a la norma internacional, hay lugares que no son así. América es un país libre y diverso. No hay forma de que seas relegado como un sustituto simplemente porque careces de una habilidad. Creo que Tatsuya será reconocido de acuerdo a su verdadero potencial”.

“Una propuesta interesante”.

Ante una invitación inesperada, la actitud de Tatsuya se suavizó un poco.

“En ese caso...”

Viendo esto, Lina inmediatamente atacó a esa apertura.

“Si esa fue una verdad sin adulterar”.

Sin embargo, la sátira de Tatsuya tomó inmediatamente vuelo.

“Lina, ¿dónde está exactamente ese lugar poco ortodoxo que pone el mérito por encima de todo? Tal vez... ¿Arlington?”

Arlington solía ser una academia naval, pero ahora era uno de los principales proveedores de magos y de investigadores mágicos en el ejército de la USNA.

“...Sí. Pero, hay otros lugares”.

“Lina, la evaluación basada en el mérito está diseñada para seleccionar la mejor forma de usar herramientas”.

A pesar del hecho de que el tono de Tatsuya seguía siendo burlón, carecía del frío escalofriante que congelaba el alma.

“En lo que respecta a la selección de los magos más adecuados para el ejército, Arlington y el JSDF (*Fuerzas Japonesas de Autodefensa*) son dos caras de la misma moneda. Hasta cierto punto, hay muy pocas diferencias”.

Al final, Tatsuya parecía estar aconsejando a un amigo.

“Bueno, olvídalos”.

“¿Eh...?”

De repente, Tatsuya murmuró algo como si nada importara.

Lina no pudo seguir este brusco cambio de actitud y sólo pudo responder con una voz y una expresión confundidas.

“Lina estaba tratando de probar mis habilidades, ¿verdad?”

“Uh... Sí”.

“Entonces, dejémoslo allí, por favor, abstente de hacer esas cosas en el futuro”.

“¿No es hora de que te vayas?” Instándola a hacerlo, la expresión de Tatsuya regresó a ser la misma de siempre.

Lina ya no podía distinguir la diferencia entre el Tatsuya actual y el habitual.

“¿No tienes nada que quieras preguntarme?”

Era comprensible que Tatsuya quisiera fingir que esa escena nunca ocurrió. Esto también era el mejor camino para Lina. Sin embargo, ella no tenía idea de por qué Tatsuya haría esto, o cuales eran sus intenciones.

Fue increíblemente afortunado que Tatsuya no hiciera ninguna pregunta y Lina supo que podía estar pisoteando su gesto, pero no pudo evitar soltar esa pregunta.

“¿Preguntar qué?”

“¿Quéquieres decir con eso? ... Mi verdadera identidad o algo así, ¿noquieres saberlo?”

“No te preocupes, hay algunas piedras en el mundo que es mejor no tocarlas”.

Lina no estaba segura si estaba siendo sincero o evasivo.

El ser humano conocido como Shiba Tatsuya era demasiado incomprensible para Lina.

“Eres increíblemente irritante”.

Tatsuya se encogió de hombros y le dio la espalda a la acusación de Lina.

Mientras lo seguía, Lina estaba convencida que la palabra “irritante” no estaba ligada a su significado superficial.

Capítulo 4

14 de enero de 2096, Shibuya 11:00 p.m.

Tarde en la noche un sábado, aunque no había coches en la calle, estaba lleno de gente joven.

No había coches a la vista debido a los cambios en el sistema de tráfico y los horarios habituales de trabajo. Los tranvías de auto-conducción (*piloto automático*) funcionan las 24 horas del día. Además, en una ciudad tan grande como Shibuya, no había necesidad de emplear estos vehículos que son para uso común, gracias a las aceras motorizadas que se han establecido en el subsuelo, se puede llegar a la estación de tren con facilidad.

Por otra parte, en la era actual, donde los medios para trabajar desde el hogar han aumentado, no hay necesidad permanecer hasta tarde en la noche en la oficina. En caso de un trabajo urgente, lo habitual en las empresas es terminarlo en casa y devolverlo a la empresa a través de una línea privada. Las oficinas modernas son lugares para negociaciones, no para el papeleo. En primer lugar, siempre y cuando uno esté haciendo un negocio honesto, la necesidad de programar las negociaciones a medianoche desaparecía.

Shibuya en la noche es una ciudad de gente joven donde no se ven adultos.

De hecho, este tipo de escena no se puede ver en cualquier ciudad que no sea Shibuya.

Shibuya, Shinjuku, Ikebukuro, Roppongi... Antes de la guerra, esas ciudades florecieron como distritos comerciales para los jóvenes; pero ahora, ver a los jóvenes vagando y reuniéndose por la noche es una escena que sólo se veía aquí en Shibuya.

Durante la era del caos que duró dos décadas, en diferentes períodos, en Shinjuku, Ikebukuro y Roppongi, tuvieron como resultado actividades destructivas causadas por extranjeros, junto con la devastación extrema causada por las actividades xenófobas de los furiosos jóvenes nativos, en respuesta a los actos causados por los extranjeros, dejando las ciudades en ruinas. Durante el proceso de reconstrucción se tomaron medidas para la restauración completa del orden público, y estas ciudades se han reconstruido como ciudades densamente agitadas.

Pero, Shibuya era la excepción.

Desde antes de la guerra, el grado de devastación se había profundizado y las disputas entre los jóvenes se intensificaron, y como resultado de ser el primero en expulsar a los extranjeros, Shibuya se había ahorrado la destrucción total que había sucedido en las otras ciudades. Y como la anarquía de las noches en Shibuya se dejó en paz, incluso ahora, no se podía afirmar que un resultado fuera mejor que el anterior.

Sí, esta era un área sin ley, ya fuera de día o de noche, el ‘re-desarrollo’ iniciado por el gobierno local que se había vuelto muy intolerante a la ausencia de orden en comparación con los días anteriores a la guerra, procedía como se había planeado. Las autoridades administrativas actuales se habían vuelto muy estrictas con respecto a las restricciones de los derechos privados relacionados con bienes inmuebles.

Sin embargo, Shibuya tiene una fachada completamente diferente durante el día y la noche.

Durante el día, es un centro de negocios donde los empleados honestos van y vienen.

Por la noche, es un barrio de placer donde se reúnen jóvenes con apariencia de delincuentes.

Como no pueden completarla de inmediato, es difícil para las autoridades dar paso a la reconstrucción de la ciudad.

Y también, en esta misma noche, al comienzo del Año Nuevo, había muchos jóvenes reunidos en las calles haciendo tanto ruido como querían, riendo, coqueteando e intercambiando golpes.

Entre ellos, la figura de un joven con rasgos finamente definidos y una constitución robusta, podía diferenciarse del resto.

Vestido con una sudadera y un jersey, lo cual era ropa increíblemente ligera para el invierno, Leo caminaba en mitad de la noche a través Shibuya con paso vacilante. Aunque usamos la palabra “vacilante”, sus piernas y pies estaban cubiertos adecuadamente con jeans y zapatillas deportivas respectivamente. Sin embargo, a juzgar por los pasos que estaba tomando, parecía no tener un destino específico en mente.

Leo tenía un pasatiempo algo raro. No, más que un pasatiempo, probablemente era un mal hábito.

El hábito de la vagancia.

No era solo caminar, correr, o gritar, sino deambular en la noche.

Mientras más se acercaba la noche, él más querría vagar aleatoriamente por la ciudad.

Leo pensó que esto se debía a los instintos que habían sido tallados en sus genes.

Él es la tercera generación del “Burg Folge” (*Serie Fortalecida*) que se desarrolló en Alemania, la cual puso la técnica de afinar a los magos a través de la manipulación genética en uso práctico por primera vez en el mundo.

Burg Folge fue una técnica de ajuste corporal desarrollada con énfasis en mejorar la durabilidad del cuerpo. En aquellos días, con el fin de aumentar la capacidad de combate en espacios cerrados, que era el punto más débil de los magos, en lugar de fortalecer la habilidad mágica, el Burg Folge, que fortalecía las habilidades físicas contenidas en los genes, produjo una raza de “Súper soldados que podían usar

magia”, o “humanos mejorados que pueden usar habilidades físicas sobrehumanas y habilidades mágicas simultáneamente”, pero la forma más práctica de llamarlos sería, ‘magos aumentados’.

Aunque las medidas de quimerización¹ no se incluyeron en los métodos de ajuste, no es difícil imaginar que los mamíferos de gran tamaño que son mucho más tenaces que los humanos fueron utilizados como referencia al inicio del método de remodelación genética.

Al eliminar el limitador del cuerpo con medios externos, ya se sabía que dicho método tendría una alta probabilidad de dañar la capacidad mágica del individuo al elevar el rendimiento físico del cuerpo.

Como resultado de esa irracional remodelación genética, muchas de las primeras generaciones de Burg Folge murieron durante la infancia, e incluso la mayoría de los que llegaron a la adultez se volvieron locos y murieron.

El abuelo de Leo fue uno de los pocos sobrevivientes.

Leo tenía miedo.

Alguien que solo lo conociera en el exterior no podría saberlo, pero él había estado llevando ese miedo en el fondo de su corazón durante toda su vida.

Se preguntaba si también se volvería loco algún día.

Con un factor no humano devorando su factor humano, se preguntaba si terminaría perdiendo sus sentidos.

Desde que pensó que ya sea que él fuera o no capaz de retrasar el momento, su corazón ya estaba roto. Intentó ser franco con sus propios impulsos. Él sabía, que por ejemplo, su abuelo podría vivir libremente un período de vida natural.

Por eso, él no iba en contra de su impulso de “vagar por la noche”.

Al capricho de este impulso, bajo la luna, bajo las estrellas, bajo las nubes negras como el azabache, él caminaba sin rumbo.

Una noche en el centro de la ciudad, una noche en los distritos comerciales, una noche en los suburbios, una noche en una montaña aislada. Sin destino, elegía su camino de acuerdo a su humor del día.

Que hoy haya venido a Shibuya era pura coincidencia.

¹ Convertir personas en quimeras. A través modificar el ADN humano combinándolo con ADN animal.

Había una figura de un joven con un traje oscuro y una gabardina gris que, aunque era nueva, tenía arrugas aquí y allá.

“¿Huh? ¿El hermano mayor de Erika, el Inspector?”

La persona que acaba de pasar fue casualmente, un conocido. Era solo eso, pero Leo llamó al joven. Sólo por capricho, ya que uno no siempre llama a un conocido al verlo.

En ese instante, una ola de ruido surgió hacia él.

La voz de Leo no era muy fuerte. Pero fue suficiente para hacer detener a la persona que pasaba junto a él.

A pesar de eso, miradas que uno ciertamente no podía llamar *amistosas* aparecieron en ambos lados de la calle.

“Tú, ven conmigo por un momento”.

Respondiendo con un chasquido, un hombre caminaba junto al “hermano mayor de Erika”. Leo también recordó el rostro del hombre, que estaba en la edad en que era difícil llamarlo ‘un hombre joven’. Él no solo recordó el rostro, sino también el nombre.

“Inagaki-san, ¿verdad? ¿Qué hacen ustedes aquí?”

Sin responder la pregunta, que podría ser considerada grosera, Inagaki agarró la muñeca izquierda de Leo.

Aunque sacudirlo sería fácil, Leo siguió a Inagaki en silencio.

Fue llevado a un pequeño bar dentro de un callejón. Aunque en el letrero estaba escrito “BAR”, la apariencia de la tienda hacía sentir a Leo que el uso de caracteres de estilo occidental no era necesario en absoluto.

“Gerente, tomaré prestado el piso de arriba”.

Inagaki llamó al propietario de la tienda, que estaba puliendo un vaso al otro lado del mostrador, y subió las escaleras sin esperar una respuesta. Leo fue llevado a una pequeña habitación que estaba ocupada solo por cuatro sillas puestas alrededor de una pequeña mesa redonda. La puerta, era una puerta voluminosa y hermética, tanto, que parecía la escotilla de una nave espacial, era muy diferente al desgastado interior.

“Aunque no lo parezca, aún soy menor de edad”.

Leo lo dijo en tono de broma, evitando que Inagaki, que estaba a punto de hablar después de rotar el mango con ambas manos, cerrara la puerta con fuerza.

Junto a Inagaki, quien parecía masticar un bicho amargo, Chiba Toshikazu se rio gratamente, no en el sentido de divertirse, sino en el sentido de un profundo interés.

“Saijou-kun, ¿verdad? Hiciste bien en detectarnos. Aunque debimos haber ocultado nuestra presencia correctamente”.

Solo con eso, Leo entendió lo que Toshikazu estaba tratando de decir.

“... ¿Acaso interrumpí una investigación?”

Toshikazu parecía estar sorprendido por esa buena suposición.

“Heeh... No eres sólo músculos. Bueno, supongo que Erika no apoyaría un simple cabeza de músculos”.

Aunque Leo frunció el ceño en su interior, él era consciente del hecho de que ella le había enseñado técnicas, prestado un arma especializada, y también lo había apoyado de varias formas, así que se abstuvo de refutar.

“¿No está confundiendo la Casa del Inspector la forma de criar a sus hijas?”

El contraataque era, en el mejor de los casos, de un grado que sería considerado un lenguaje abusivo.

“Eso es seguro”.

Toshikazu respondió con una sonrisa irónica. Pero, contrariamente a su tono de voz, la luz dentro de sus ojos entrecerrados se sentía más profunda.

Sintiendo el peligro de haber cruzado donde no debía, Leo cerró la boca.

“No importa la investigación. Intentamos ocultar nuestra presencia para evitar problemas sin sentido, no es como si estuviéramos siguiendo a alguien en específico. Durante la noche, este es un lugar donde la policía recibiría muchas miradas de resentimiento”.

“Miradas de resentimiento, eh... sin duda es así”.

Leo asintió profundamente como si recordara algo. Ese gesto demostró que sentía más simpatía hacia la policía que hacia los jóvenes de esta ciudad.

Si se trata a los demás con buena voluntad, su actitud se suavizará; es uno de los patrones más básicos de las relaciones interpersonales. (Sin embargo, esto puede no ser necesariamente cierto con el sexo opuesto).

Por lo tanto, el brillo en los ojos de Inagaki hacia Leo se hizo mucho más amistoso.

“Inspector, ¿no es el momento adecuado? ¿Por qué no le preguntas ‘eso’?”

Leo no tenía idea qué era “eso”, pero no pidió una explicación. Leo estaba mirando tranquilamente a Toshikazu, quien asintió y se giró para mirarlo.

“Saijou-kun, ¿qué negocio tienes hoy en Shibuya?”

“No tengo ningún negocio en particular”.

“Hmm, ¿vienes a Shibuya a menudo?”

“No, no a menudo, solo vengo de vez en cuando. La última vez que estuve aquí fue en la víspera de Año Nuevo”.

“Hace dos semanas, eh... Entonces, ¿sabes de los extraños incidentes que han ocurrido en los distritos de compras?”

Inagaki no detuvo a Toshikazu, quien estaba a punto de revelar detalles de un incidente restringido. En cualquier caso, Inagaki sabía que para mañana sería una “primicia”.

“Los ‘acontecimientos extraños’ suceden todos los días. Por cierto, señor inspector, ¿no estaba usted a cargo de la ciudad de Yokohama? ¿Por qué está investigando los incidentes en Shibuya?”

“Somos miembros del Departamento de Policía. Somos transferidos aquí y allá por todo Japón. Por eso, ahora estamos investigando el incidente de la serie de muertes anormales en el área metropolitana”.

Las palabras fluyeron lenta y suavemente. Sin embargo, Leo no fue engañado por su tono.

“Muertes anormales... ¿Asesinatos extraños, y en serie?”

Frunciendo el ceño, Leo preguntó. Toshikazu evaluó a Leo de arriba hacia abajo con mucho disimulo.

“Eso es correcto. Bueno, esto es algo que se sabrá para mañana...”

Diciendo eso, Toshikazu e Inagaki intercambiaron miradas. Inagaki asintió, y sacó una terminal móvil del bolsillo de su abrigo. Al abrir la terminal de tipo plegable, mostró un archivo de imagen en la pantalla. Al ver la foto en la terminal, cambiando como una presentación de diapositivas, Leo respiró y tragó saliva.

“La última víctima fue encontrada en el parque Dougenzaka hace tres días. La hora estimada de muerte es entre la 1:00 y las 2:00 AM”.

“¿Justo en el medio de la ciudad?”

Leo pensó que “justo en el medio de la ciudad” era una expresión extraña, pero no podía encontrar una forma mejor para expresar con claridad lo que estaba sintiendo.

Al parecer, pensó que este tipo de cosas suceden en áreas escasamente pobladas.

“Dejando a un lado el momento del día, no sería extraño incluso si algo así sucediera por la noche en medio de la ciudad. Al menos en esta ciudad”.

Sin embargo, viendo como Toshikazu respondía con una expresión amarga, Leo no pudo evitar asentir con la cabeza: “Tienes razón”. Leo sabía por experiencia, que el actual Shibuya tenía una extraña doble naturaleza.

“Por lo tanto, me gustaría preguntar algo, ¿sabes algo sobre algún tipo extraño? No importa incluso si solo se trata de rumores”.

“Hay mucha gente extraña por esta ciudad merodeando en la oscuridad de la noche. Exactamente, ¿qué tipo de hombre están buscando?”

Viendo la razonable pregunta de Leo, Toshikazu mostró una sonrisa irónica.

“Ciertamente, no está claro. Pero la investigación habría sido bastante fácil si conociéramos de antemano las características del delincuente...”

Leo estaba mirando silenciosamente a Toshikazu, quien parecía reflexionar “*¿Por dónde debería empezar a explicar?*”

“Bueno... Los cadáveres de las víctimas que te mostramos...”

Inagaki no interfirió. No tenía intención de detener a su superior, quien había empezado a filtrar información de una investigación secreta, a un civil.

“La causa de todas las muertes fue antinatural. No habían lesiones externas en las siete personas”.

“¿No hubo heridas? ¿Fue veneno?”

A la pregunta de Leo, quien había cambiado su expresión, Toshikazu negó con la cabeza.

“Las pruebas de reacciones a venenos fueron todas negativas. Y aunque no hay lesiones, alrededor del 10% de la sangre ha desaparecido de los cuerpos de las víctimas”.

“¿De todas las víctimas?”

“Sí, de todas”.

“Ya veo... Ahora entiendo lo de ‘muertes anormales’, es un incidente extraño”.

Sin pizca de incomodidad o miedo, Leo murmuró con voz sorprendida.

“Aunque parece un fenómeno sobrenatural, el incidente es real”.

Mientras estaba sorprendido por la actitud de Leo, Toshikazu repitió la pregunta original.

“Entonces, me pregunto si conoces a alguien que sepa de los movimientos ocultos de ese estilo. Especialmente sobre los extranjeros, como rumores extraños que se extiendan sobre ellos”.

“¿Extranjeros, eh?”

Antes de que le repitieran nuevamente la pregunta, Leo se cruzó de brazos, pero al poco tiempo los soltó con una expresión de resignación.

“Lo siento, no se me ocurre nadie”.

Fue un tono grosero, o más bien confuso, como si dijera “*¿Qué clase de comportamiento es ese?*” Pero sin sentimientos de asombro u odio.

“Parece que te estamos molestando un poco”.

“Eh, no, está bien. Ese tipo de cosas son trabajo de la policía, y tampoco se limita a husmear”.

“Pero inspector, es Shibuya por la noche, ¿sabe? Creo que tener adultos, y además, policías, harán las cosas más difíciles”.

“... Bueno, ahí tienes razón, pero...”

Incluso sin la necesidad de entrar en detalles, tanto Toshikazu como Inagaki realmente se dieron cuenta de la dificultad de la investigación. De lo contrario, no irían tan lejos como para revelar los detalles de una investigación a un chico que no era más que un conocido.

“No pretendo meter mi nariz en el peligro. Y aunque pudiera verlo, confío en mi olfato”.

“¿En serio? Entonces”.

“¡¿Inspector?!?”

Habiendo dicho eso, hacer que un estudiante de preparatoria coopere en una investigación criminal es ir demasiado lejos y demasiado peligroso. Inagaki levantó la voz rápidamente en un intento de detenerlo, pero Toshikazu sacó una tarjeta de presentación del bolsillo de su pecho.

“Si encuentras algo, envíame un correo aquí. Ingresa manualmente la primera vez y se actualiza automáticamente a partir de la segunda”.

La protesta de Inagaki fue ignorada por ambos.

“Es realmente estricto. Bueno, si encuentro algo, me pondré en contacto”.

Diciendo eso, Leo se puso de pie, y con una mano, giró fácilmente la manija de la cerradura hermética con la que Inagaki tuvo que usar las dos manos, y bajó las escaleras.



14 de enero de 2096 AD, USNA Washington D.C. 11:30 hora local.

15 de enero, 01:30, hora de Japón, medianoche.

Lina, quien ya se había ido a la cama, fue despertada por su compañera de piso, Sylvia.

“Sylvie, ¿qué ocurre?”

Lina se había convertido en una oficial regular hace no menos de tres años; incluso si se tomara en cuenta el tiempo después de tomar el puesto de Comandante Supremo de STARS, ella tenía una carrera militar de un año y medio. Ella estaba acostumbrada a ser arrastrada fuera de la cama en casos de emergencia. Recuperando su conciencia en un instante, pidió una explicación a Sylvia con una voz clara.

“Es una transmisión urgente del Mayor Canopus”.

Con la respuesta de Sylvia, Lina corrió silenciosamente hacia el dispositivo de comunicación.

“Ben, siento haberte hecho esperar. Disculpa que sólo sea audio”.

「No te preocunes, soy yo quien debería disculparse por molestarte mientras estabas durmiendo.」

Por lo que Lina sabía, Benjamin Canopus era un hombre con un gran sentido común, incluso dentro de STARS. Entre la primera clase de STARS, él podría ser quien tuviera el mayor sentido común. Él estaba consciente de la diferencia horaria, en otras palabras, había llamado a Lina aun sabiendo que aquí en Japón era medianoche.

Así que no podría ser un asunto trivial.

“No hay problema. ¿Qué demonios sucedió?”

「Hemos encontrado el paradero de quienes escaparon el mes pasado.」

“¡¿Qué?!”

El incidente de deserción de un oficial de clase estrella, Alfred Fomalhaut, que ocurrió el mes pasado, no se limitó a un asunto interno de STARS, sino que causó un gran impacto en los ejecutivos de la USNA.

Ese incidente no terminó con la ejecución del Teniente Primero Fomalhaut a manos de Lina. El hecho es, que en el mismo período, siete magos e ingenieros mágicos se habían escapado de las fuerzas de la USNA.

Dentro de ellos, aunque eran de la clase satélite (rango más bajo), miembros de STARS también estaban incluidos.

La misión confiada a Lina por el Mayor Canopus en aquel entonces, era la persecución y eliminación de estos fugitivos. Se trataba de ellos, y se había descubierto su paradero.

“¡¿Dónde?!”

「En Japón. Aterrizaron en Yokohama, y parece que actualmente se están escondiendo en Tokyo.」

“¿Por qué en Japón...? Y además, ¿justo aquí en Tokyo?”

Lina se giró sorprendida. Pero Canopus no tenía la respuesta a esa pregunta. No fue solo Lina quien hizo esa pregunta, y no fue solo Canopus quien no pudo responderla.

「...Los Jefes del Estado Mayor Conjunto decidieron enviar un equipo de rastreo adicional.」

“¿El Gobierno Japonés está enterado?”

「No, es una operación secreta.」

En una operación de persecución de fugitivos junto con espionaje y combate en un territorio extranjero, la impresión que se le daría al gobierno local podría ser totalmente diferente. Incluso existía la posibilidad de que pudiera considerarse como un acto de provocación grave de la soberanía y convertirse en una ruptura de las relaciones diplomáticas. Lina fue consciente de la importancia que el Pentágono atribuía a este asunto.

「Comandante, transmitiremos las instrucciones desde la Oficina Central del Estado Mayor. La misión actualmente asignada a la Mayor Angie Sirius debe asumir una prioridad de segundo grado, y dar la máxima prioridad al rastreo de los fugitivos.」

Lina respondió al dispositivo de comunicación después de respirar profundamente.

“Ben. Por favor, transmítele al cuartel general que acepto”.

「Entendido. Comandante, cuídese.」

La comunicación se cortó con esas palabras de preocupación.

“Parece que no podré dormir más esta noche”, pensó Lina.



En el aula al comienzo de la semana, el extraño evento de asesinatos era el tema de conversación.

El domingo por la mañana, cada compañía de noticias salió con lo que fue un verdadero festival de artículos sobre los ‘extraños asesinatos’ como un intento de compensar el haber sido superado por el sitio de noticias nacionales clasificado segundo. Su conducta era más bien maníática, o más bien sus tornillos estaban algo sueltos, tratando de compensar a sus suscriptores decepcionados, uno podría decir que se trataba de un acto de gratitud.

Sin embargo, debido a eso, las noticias se extendieron como la pólvora. Pero, el punto principal enfatizó especialmente lo extraño, lo que causaba controversia.

“Buenos días. Oye, oye, Tatsuya-kun, ¿viste las noticias de ayer?”

Sin embargo, las únicas personas que entendieron que estaban siendo agitadas, pero aún se atrevieron a tomar ventaja de eso, eran probablemente, personas de la edad de Tatsuya. Como de costumbre, definitivamente sin ser guiado, la persona que normalmente iniciaba las conversaciones fue la primera voz que lo llamó.

“Noticias, ¿te refieres al ‘vampiro’?”

Aunque era obvio, solo estaba tratando de asegurarse de que estuvieran hablando de lo mismo. Entonces Erika, como él pensó, asintió felizmente.

“Sobre eso, después de todo es imposible que lo haga una sola persona, ¿verdad? ¿Es una sociedad de crimen organizado profesional? Mi voto es que es una organización ilegal que se dedica al tráfico de órganos y sangre”.

Antes de que Tatsuya se sentara en su silla, ella se sentó rápidamente en su escritorio, se giró y acercó su rostro.

En este momento, Tatsuya pensó “no es realmente importante en este momento, pero su cuerpo es bastante flexible”, lo cual no era algo en lo que debiera estar pensando, así que puso una mirada seria y negó con la cabeza.

“Si ese fuera el caso, entonces no entiendo por qué solo se extrajo el 10% de la sangre”.

Para evitar problemas, era seguro que las autoridades querrían ocultarlo, pero el hecho de que las víctimas había perdido alrededor del 10% de su sangre ya se había extendido, haciéndolo conocido como “El incidente del vampiro”.

“¿No tenían la intención de matar? ¿No pensaron que era posible usar la sangre para crear un sangre de un banco de sangre si la usaban más eficientemente?”

“De ser así, no habrían dejado los cadáveres en la ciudad. Además, es un misterio que no hubiera ninguna señal de la extracción de la sangre”.

Los artículos dicen, “después de extraer la sangre con una aguja, borraron los rastros con magia”; aunque asumieron que los magos estaban involucrados, es imposible borrar completamente una marca de inyección usando simple magia curativa.

“Hmm, ya veo... Es realmente extraño que no haya heridas”.

“Como dijeron en la televisión, ¿es un homicidio mediante ocultismo?”

Frunciendo el ceño desde un asiento cercano, y con una expresión algo nerviosa, Mizuki se unió a la conversación.

“Ocultismo, huh... Si realmente existe algo como los vampiros, entonces es probable que se supiera hace mucho tiempo”.

La Magia Moderna, el proceso de la teoría de la sistematización, fue bien recibida por aquellos que trajeron la Magia Antigua desde el otro lado del velo de las leyendas. Si los duendes o similares realmente existían, su existencia debió haber sido revelada junto con la de los “magos”. Esa era la forma de pensar de Tatsuya.

“Entonces, ¿Tatsuya opina que fue un acto hecho por humanos y no ocultismo?”

“¿Y tú, Mikihiko? ¿Crees que los Youkai², demonios o ese tipo de seres están involucrados?”

Él respondió a la pregunta de Mikihiko con una pregunta igual.

Mikihiko dijo “Hmm...”, sacudiendo su cabeza hacia adelante y hacia atrás.

“...Dudo que este sea el trabajo de un simple humano, pero no puedo hacer una afirmación...”

Ante la incómoda respuesta de Mikihiko, Tatsuya reveló una desagradable sonrisa.

“Hablando de ocultismo, hasta hace solo 100 años, la magia era el principal ejemplo de lo oculto”.

² *Youkai* (妖怪) son una especie de criaturas o demonios pertenecientes al folclore japonés.

Erika rápidamente se inclinó hacia adelante con emoción.

“¿Tatsuya-kun piensa que este crimen está relacionado con los magos?”

“No lo había pensado hasta este momento. Pero ni las cámaras de la calle ni los radares Psion instalados captaron ninguna reacción”.

Poco después de haber terminado de decir eso, Tatsuya, había reconsiderado, y negó con la cabeza.

“... Sin embargo, si es un mago de alto rango, podría engañar a los radares, y si es un profesional capaz de usar Magia Sistémica Externa de Interferencia Mental, también podría cometer el crimen en el centro de la ciudad sin que nadie lo notara”.

“Aunque es desagradable. Es bueno que la tendencia humanista no se vuelva más fuerte”.

Mizuki murmuró en una voz sombría.

El “humanismo” de la era actual, hablando claramente, es una especie de movimiento anti-mago.

Es un movimiento que intenta prohibir el uso de la magia, diciendo que “la magia no es un poder permitido para los humanos”, que es la esencia de la ideología de culto, una sub-secta del cristianismo.

Afirman que: “Los humanos deberían vivir solo con el poder otorgado a los humanos”, o quizás debería decirse que la postura pública llamada “Humanismo”, es un partido que ha estado expandiendo su influencia en los últimos años en la costa este de América.

Si se trata simplemente de “dejar de usar la magia”, entonces no hay ningún daño en particular (muchas personas estarían de acuerdo), pero los elementos radicales del Humanismo llevaron a cabo actos violentos como muestra del rechazo a la propia existencia de los magos. Incluso en la USNA reciben la vigilancia de sus propias autoridades como una forma de tropas de reserva contra el crimen (Una acción violenta, la USNA siempre supervisa a las organizaciones).

“Ahora que lo mencionas, vi esas ovejas clamando por eso en televisión”.

“Buenos días, ¿de qué están hablando?”

Interrumpiendo a Erika como de costumbre, en el asiento frente a Tatsuya, era Leo.

“¿No te parece que llegas bastante tarde hoy?”

Alzando su mano para saludarlo, Tatsuya se lo preguntó. A juzgar por su apariencia externa, puede ser sorprendente, pero es raro que Leo llegue en el último momento.

“Ah, tuve algunos asuntos que atender y terminé quedándome despierto hasta tarde... Pero volviendo al tema, ¿de qué estaban hablando?”

“Estamos hablando del supuesto ‘Incidente del vampiro’ del que se informó”.

Leo frunció el ceño ante la respuesta de Mizuki.

Un pequeño murmullo “*¿Otra vez...?*” se filtró de su boca, y en ese preciso instante, la terminal de información mostraba que era hora del inicio de las clases. Sin tiempo para seguir la ociosa charla, la mañana llegó a su fin.



No había ningún compañero de cabello dorado junto a Miyuki, quien apareció en la cafetería de la escuela.

Tatsuya no sintió ninguna duda o insatisfacción ya que tampoco tenían una cita programada. Debido a eso, esta pregunta, no fue debido a que él estuviera interesado, simplemente le vino a la mente.

“*¿Hoy no estás con Lina?*”

Sin embargo, la respuesta de su hermana menor estaba fuera de las expectativas de Tatsuya.

“*Ella está ausente hoy, Onii-sama. Tenía prisa con respecto a algunos problemas con su familia y cosas por el estilo*”.

“*¿Hmm...?*”

¿Ausente justo después de transferirte desde el extranjero? Pensó Tatsuya, pero como él no conocía a un mago extranjero aparte de ella, no afirmó que fuera extraño. En primer lugar, si se considera su identidad, debe haber muchas cosas que tienen prioridad sobre la escuela. Además, sería imposible que Lina le hubiera dicho a Miyuki o a Honoka otra cosa que no fuera “problemas familiares”. Por lo tanto, Tatsuya no preguntó más.

Erika y Mizuki habían mostrado preocupación por su comportamiento, pero —de hecho, la diferencia era que Mizuki estaba “preocupada” y Erika “tenía curiosidad”— más que eso, incluso si le preguntaban a Miyuki, entendían que la respuesta que se les daría no sería necesariamente la verdad. Y así, como de costumbre, aunque faltaba una persona (la persona faltante era Shizuku, no Lina), las siete personas se sentaron alrededor de la mesa.

“*Hablando de eso, ¿Shizuku está bien?*”

La línea de visión de Erika se giró hacia Honoka.

“Sí, parece estar bien. También dijo que las lecciones no son tan difíciles”.

Sin siquiera considerar la pregunta, Honoka respondió inmediatamente. Debido a la infraestructura de comunicación de la era actual, el otro lado del Océano Pacífico no era una distancia significativa.

“Sin embargo, dijo que estaba sorprendida de que los formularios de discusión en clase, y que los maestros aún permanezcan”.

En ese momento, todos mostraron expresiones mezcladas con sorpresa e interés. Debido a que el sistema de estudiantes de intercambio extranjero es prácticamente inexistente, el sistema de enseñanza que se usaba en otros países era información que apenas estaba disponible.

“Entonces, tal vez Lina también esté sorprendida de nuestro sistema, ¿cierto?”

“La verdad no parecía ser así”.

Miyuki, negó la preocupación de Mizuki mientras sonreía. De hecho, Lina no parecía perpleja ante la diferencia de las lecciones entre Estados Unidos y Japón. “Como si sólo hubiera asistido a una Preparatoria Mágica Japonesa desde el principio”, Miyuki secretamente reveló una desagradable sonrisa.

Era una pequeña y diabólica sonrisa, afortunadamente nadie lo había notado. La conciencia de sus amigas estaba enraizada en la siguiente bomba que soltó Honoka.

“Hablamos un poco por teléfono ayer, pero a Shizuku le sorprendió la noticia del ‘incidente del vampiro’. Al parecer, en Estados Unidos también ocurrió un incidente similar”, dijo.

“¡Eeeh! ¿Enserio?”

“Le pregunté lo mismo a Shizuku. Parece que no ocurrió en la costa oeste, donde está ella, sino en el área central, en la parte sur de Dallas”.

“Es la primera vez que escucho sobre eso...”

Habiendo recibido advertencias de su tía, Tatsuya, quien comprobó diligentemente las noticias relacionadas con la USNA, murmuró inesperadamente en un tono de admiración.

“Incluso del otro lado, parece que tienen una restricción de la información que funciona de manera eficiente. Shizuku también mencionó que no lo escuchó en las noticias, sino por un estudiante bien informado que resulta ser un antiguo estudiante de intercambio”.

Naturalmente feliz de llamar la atención de Tatsuya, Honoka tenía el rostro tímidamente sonriente mientras explicaba.

En los ojos de Tatsuya, quien asintió, una llama lo suficientemente fuerte como para no ser simple curiosidad estaba ardiendo.



Mientras que el grupo de Tatsuya había estado entusiasmado con el tema de su amiga que estaba estudiando en el extranjero, la estudiante rubia de ojos azules que había venido a estudiar desde el extranjero, estaba en una reunión secreta en la embajada de la USNA.

“En otras palabras, ¿dices que la corteza cerebral del primer teniente Fomalhaut, tenía una estructura neuronal nunca vista en un humano normal?”

Aunque la reunión estaba llevándose al mediodía, nadie, ni siquiera Lina, pidió un descanso.

“Puede ser erróneo decir humano normal”.

Quien respondió fue un hombre que, aunque no llevaba la bata de laboratorio blanca, tenía la apariencia de un científico.

“De los resultados de la autopsia, en el cerebro de Alfred Fomalhaut, se ha identificado una estructura neuronal, que nunca se ha observado en la corteza cerebral de un ser humano hasta ahora, ni siquiera en magos. Siendo exactos, se formó una estructura similar a un pequeño cuerpo calloso en la corteza pre frontal”.

Al ver que había muchos participantes que mostraban una expresión confusa (por supuesto, Lina también era una de ellos), el científico comenzó a explicar una vez más, excepto esta vez de una forma más fácil de entender.

“Sabes que el cerebro humano está dividido en el hemisferio izquierdo y el hemisferio derecho, ¿verdad?”

Al ver que todos los participantes asentían, continuó.

“Entonces, los hemisferios izquierdo y derecho están conectados por el cuerpo calloso ubicado en el centro del cerebro. Por el contrario, esto significa que el cerebro de una persona común no suele tener una estructura que conecta los hemisferios derecho e izquierdo del cerebro en la parte central”.

“La corteza pre-frontal es la porción superficial del cerebro... Originalmente no debería haber una estructura que conecte los hemisferios izquierdo y derecho del cerebro, ¿verdad?”

“En efecto. En otras palabras, significa que hay algo en el cerebro del primer teniente Fomalhaut que un humano no debería tener”.

Lina finalmente entendió el por qué ella tenía que venir personalmente hoy. Ciertamente no es algo que pudiera discutirse por teléfono.

“¿Qué tipo de función desempeña? He oido antes que la corteza pre frontal es el área estrechamente relacionada con la capacidad de pensamiento y juicio, pero... ¿Pueden unas células cerebrales recién formadas afectar la capacidad mental en esa medida?”

“Los investigadores mágicos de la USNA creemos que el cerebro no es un órgano de pensamiento independiente, el núcleo de pensamiento real, es el Cuerpo de Información Pushion, el papel del cerebro es recibir la información enviada desde la llamada ‘mente’, y el órgano de comunicación transmite la información del cuerpo a la mente. Aunque todavía está en la etapa teórica, la probabilidad es muy alta”.

El científico, con una sonrisa insinuante, negó con la cabeza ante la pregunta de los altos oficiales sentados del otro lado.

“Si esta hipótesis es válida, es probable que la nueva estructura neuronal formada en el cerebro del primer teniente Fomalhaut esté vinculada con las funciones mentales desconocidas”.

Los asistentes una vez más tenían una expresión confusa. Entre ellos, Lina, quien todavía estaba perdida en sus pensamientos, levantó la mano para hablar.

“Comandante, ¿cuál es el problema?”

A pesar de que el científico le pidió que hablara, las palabras no salían de sus labios, Lina giró su cabeza después de tres segundos.

“...Doctor, con respecto a las funciones mentales desconocidas, ¿existe la posibilidad de la intervención de una magia externa?”

El científico fue rápido en responder.

“Creo que lo que la Comandante Sirius está tratando de decir es que si existe la posibilidad de que el Primer Teniente Fomalhaut estuviera siendo manipulado, pero desafortunadamente, esa posibilidad no existe. Aunque hay una hipótesis, no hay duda al suponer que la mente y el cuerpo interactúan uno a uno. Incluso si uno pudiera interferir con la mente de otra persona, no sería en la medida de afectar la estructura del cerebro. Además, una magia que altere la estructura de la mente no existe”.

Con la frase “Magia que altera la estructura misma de la mente”, Lina recordó la leyenda de un mago. Sin embargo, ese mago ya estaba muerto. Después de veinte años de hospitalización, sin estar casado, y ciertamente sin tener hijos, él ya debería haber abandonado este mundo.

Lina negó ligeramente con la cabeza, enfocándose en el asunto que tenía entre manos actualmente.



Aunque eran las clases de la tarde, los estudiantes de tercer año ya tenían asistencia libre a la escuela. Aprovechando el hecho de que los estudiantes de segundo año estaban atados en aulas y salas de práctica, dos estudiantes de tercer año, un hombre y una mujer, se encontraban en secreto en una sala vacía.

Sin embargo, la atmósfera no era de ninguna manera dulce. A pesar del hecho de que los padres de ambos lo consideraban como una posible pareja para el matrimonio. (Aunque se podría decir que ambos tenían más de un candidato).

Y por supuesto, esta reunión secreta solo podía describirse como una “reunión secreta” y no como una “cita”. Katsuto y Mayumi se reunían en representación del Clan Juumonji y el Clan Saegusa, respectivamente.

“Me pregunto por qué tenemos que reunirnos en un lugar como este”.

“Lo lamento. Pensé que era la forma menos sobresaliente. Como futuro líder del Clan Juumonji, quiero evitar llamar la atención de los Yotsuba, por ahora”.

“Hay un estado de la Guerra Fría en curso entre nuestro clan y los Yotsuba desde el mes pasado. Diablos, todo gracias a que ese zorro hizo algo innecesario”.

Girando hacia Mayumi mientras revelaba un pequeño gruñido de disgusto, Katsuto se rio.

“Incluso los Saegusa hablan de esa manera”.

“Ara, lo siento. ¿Fue vulgar?”

Mientras Mayumi comenzaba a poner un falso aire de coquetería, las risas de Katsuto se convirtieron en una sonrisa amarga.

“Cuando estoy contigo, a veces me pregunto si me tratas como un hombre mayor”.

“Es un malentendido, ¿sabes? Juumonji-kun es, entre mis conocidos, el más varonil. Es así de simple”.

“¿No puede convertirse en una relación entre un hombre y una mujer?”

“Somos rivales desde el examen de ingreso hace tres años”.

Después de que cada uno se riera del otro en un tono silencioso, las dos personas cambiaron su expresión al mismo tiempo. Dado que incluso mientras se reían, la pesada sensación de tensión permanecía en la habitación, uno no podría decir que la atmósfera hubiera cambiado desde el inicio.

“Juumonji-kun. Le transmitiré el mensaje de mi padre, no, el Líder del Clan Saegusa, Saegusa Koichi. El Clan Saegusa espera aliarse con el Clan Juumonji”.

“Qué precipitado. No una ‘cooperación’, sino una ‘alianza’, eh”.

Interrumpiendo su discurso, Katsuto pidió una explicación con su mirada. Por supuesto, Mayumi tenía la intención de explicar para que él pudiera entender las circunstancias.

“¿Qué tanto sabes sobre el incidente del Vampiro?”

“No sé nada aparte de lo que se informó. Nuestro Clan no tiene tanto personal como el Clan Saegusa”.

Con las palabras que podrían tomarse como la humildad de Katsuto, los labios de Mayumi se aflojaron un poco.

“Bueno, ‘uno que valga por mil’ es el lema del Clan Juumonji. Mientras que el Clan Saegusa, hasta donde yo sé, sólo es superior en cuanto a números”.

Mayumi detuvo persuasivamente sus palabras.

Y, antes de ser instada por Katsuto, continuó.

“Las víctimas del incidente del Vampiro son exactamente tres veces más de lo que se informó. Veinticuatro víctimas han sido confirmadas hasta ayer”.

Incluso siendo Katsuto, no pudo evitar sorprenderse con esto.

“... ¿Es solo en este barrio de Tokyo?”

“El área metropolitana de Tokyo, y además se concentra en las áreas urbanas”.

Katsuto se cruzó de brazos y mientras pensaba en silencio.

Mayumi esperó silenciosamente a que hablara.

“Hay víctimas que el Clan Saegusa conoce que la policía no. Además, se han producido ataques en un área limitada (la víctima aún está encerrada en una zona restringida)... ¿Los miembros del Clan Saegusa han sido víctimas?”

“Es mitad cierto. Las víctimas que la policía no conoce son todos nuestros magos y aquellos que cooperaban con nosotros. Incluso las víctimas que no son nuestros aliados han demostrado ser magos o tener disposición a la magia. Por ejemplo, estudiantes de la Universidad Mágica”.

“En otras palabras”.

La expresión de Katsuto estaba teñida de terror.

“Eso significa que el culpable está apuntando a los magos, huh”.

“...Juumonji-kun, eres un poco aterrador”.

Pero el estímulo de esa expresión parecía ser demasiado fuerte para una chica de preparatoria. Aparte de si eran sus verdaderas intenciones o una actuación.

“Hmm... Lo siento”.

Incluso si fue una actuación, tuvo un efecto suficiente para afectar a Katsuto.

“No sabemos si hay más de un perpetrador de esos asesinatos en serie; de cualquier forma, es seguro asumir que este ‘vampiro’ tiene a los magos como su objetivo”.

Por alguna razón, al regresar tranquilamente al tema sin hacer caso de Katsuto, quien parecía algo melancólico, la verdadera naturaleza de Mayumi demostró que ella era un poco “diabólica” después de todo.

KALEID WORD TRANSLATIONS



“En orden cronológico, primero los estudiantes y el personal de la Universidad Mágica fueron asesinados, el personal de nuestro Clan que investigaba fue asesinado mientras trataba de vengar la pérdida anterior, y mientras tanto las víctimas también habían aumentado, causando la situación actual”.

“De hecho, no podemos ignorarlo”.

Dejando la expresión facial de Mayumi, Katsuto asintió profundamente.

“¿No hay pistas? Si se trata de alguien que posee la capacidad de dañar a los magos del Clan Saegusa, solo podemos considerar a los soldados o magos mejorados. Y también, la posibilidad de que sea un extranjero es alta. ¿O alguien que ingresó al país antes y después del brote del caso, o una persona sospechosa entre los extranjeros que se han ido a Tokyo?”

A la pregunta de Katsuto, Mayumi negó con la cabeza. Es probable que los Saegusa también hubieran considerado lo mismo y ya hubieran investigado.

“Pero, hablando de extranjeros que ingresaron al país antes y después del brote del caso...”

Mayumi había titubeado allí, pero en respuesta a la mirada de Katsuto instándola a continuar, ella continuó hablando.

“Desde la USNA, hay muchos magos estudiantes extranjeros e Ingenieros Mágicos que ingresaron al país. También hay un estudiante de intercambio en esta escuela... Juumonji-kun, ¿crees que es sospechosa?”

“Creo que es sospechosa, pero probablemente no sea la culpable”.

La respuesta de Katsuto fue inmediata.

“No creo que ella esté completamente relacionada, pero ¿podemos dejarla por el momento?”

“Si Juumonji-kun lo dice...”

Mayumi tampoco parecía dudar seriamente de Lina. Para Mayumi, quien bajó la mirada aparentando una pérdida de confianza en sí misma, Katsuto le preguntó algo que le molestaba.

“Pero, si se trata de eso, creo que sería mejor cooperar con el Clan Yotuba”.

Ante la razonable propuesta de Katsuto, esta vez le tocó a Mayumi fruncir el ceño.

“En realidad, también lo creo, pero... esto estaría rompiendo una regla no escrita aquí. Si mi padre no se disculpa y admite sus fallas, creo que la cooperación será imposible”.

“Pero tu padre no tiene intención de disculparse con los Yotuba, eh... aunque es comprensible dada la discordia pasada entre Maya-dono y Koichi-dono... Sin embargo, es muy raro que los Yotuba no hayan intervenido hasta ahora”.

En la política, si se retrata positivamente es independencia, si se retrata negativamente es egocentrismo, los Yotuba siempre adoptaron la postura de no preocuparse por lo que los otros Clanes hacían.

Progresando sólidamente hacia la mejora de su propia eficiencia, clasificada junto con los Saegusa en la cima de los Diez Clanes Maestros solo por su poder mágico, eran un Clan que puede decirse que es herético incluso entre los Diez Clanes Maestros.

Katsuto a veces había pensado ‘qué demonios podían hacer tras bastidores’, pero aun así, el hecho de que mostraban una clara actitud de confrontación que perturbaba la reunión de clanes era todo lo que él sabía. Sin embargo, no pudo decírselo a Mayumi, fueron los Saegusa quienes sembraron las semillas del conflicto.

El pensamiento de “*¿Qué demonios había pasado?*” probablemente se reflejó en su rostro.

“Tampoco conozco lo detalles, pero...”

Mayumi con un sentimiento amargo abrió la boca de mala gana.

“Ese zorro astuto parece haberse entrometido secretamente en cierta sección de Inteligencia Militar de Defensa bajo el patrocinio de los Yotuba, y fue descubierto...”

“Ya veo...”

Entonces, la actitud de los Yotuba tenía perfecto sentido. Para Mayumi, quien tenía una expresión que parecía que probablemente comenzaría a rechinar los dientes en cualquier momento, Katsuto solo pudo responder eso.

Un lapso de tiempo no demasiado corto había transcurrido y Mayumi, quien finalmente recuperó una expresión calmada, se giró hacia Katsuto.

“Entonces, ¿qué piensas? ¿El Clan Juumonji colaboraría con el Clan Saegusa?”

Para Mayumi quien preguntó una vez más, Katsuto asintió de inmediato.

“Cooperaremos”.

“Aunque es lo normal... era una respuesta bastante sencilla”.

Ante la respuesta de Katsuto, sin ningún rastro de duda, Mayumi se agitó con una voz sorprendida.

“Lo he dicho antes. Desde que escuché la historia, pero incluso para el Clan Juumonji, no es una situación que pueda pasarse por alto”.

Por supuesto, él no sería Katsuto si eso fuera suficiente para trastornarlo.

Capítulo 5

Una corriente ininterrumpida de peatones avanzaba pesadamente bajo los cielos nocturnos de Shibuya. Sin embargo, desde una perspectiva exagerada, este era un problema restringido solo a Shibuya.

Más tarde en la noche, habría duraciones breves donde no habría nadie alrededor, creando pequeños espacios como el ojo de una tormenta. Como los estrechos callejones entre los edificios más altos y los rascacielos. Como los pequeños parques que salpicaban el paisaje entre las intersecciones de bulevares más grandes y carriles más pequeños. —Esto, era como las tierras verdes confinadas que solo permitían un paso a la vez.

Aun así, solo porque nadie estaba caminando no significaba que no hubiera nadie presente. Había dos entidades humanoides en el parque. Uno era una figura en forma de sombra que llevaba un abrigo largo y una bufanda con un sombrero redondo que le cubría los ojos, ocultando por completo cualquier rasgo o pista de su género. La otra llevaba un hermoso abrigo sobre un suéter de punto y una mini falda con un par de zapatos de tacón grueso, era claramente una mujer joven.

Después de cubrir el cadáver femenino en el banco, la persona que llevaba el sombrero se levantó cuando una nueva figura apareció en su parte posterior y entabló una conversación.

(¿Aún incompatible?)

Un abrigo largo, bufanda y sombrero. Esta nueva figura estaba vestida de la misma forma que la primera y preguntó con una voz que no vibraba en el aire.

(Negativo. La conexión se perdió después de transferir la réplica, pero al igual que antes, solo pudimos absorber psions de la sangre antes de que la réplica perdiera estabilidad y regresara).

El primer individuo respondió al segundo con la misma voz sin sonido. Las dos figuras se comunicaban usando telepatía.

(Entonces, ¿la reproducción permanece más allá de nosotros?)

(Eso es imposible. Después de todo, nosotros mismos somos réplicas del original.)

(Hm... Entonces, incluso si poseen compatibilidad física, no pueden convertirse en uno de nosotros sin que lo deseen por sí mismos).

(¿Hay personas en este mundo sin deseos?)

(¿Quieres decir que hay otras condiciones?)

(Para determinar la verdad, necesitamos más muestras).

(...Eso permanece sin cambios).

(Así como yo mismo soy yo y tú eres tú. Nada ha cambiado).

(Tienes razón... ¿Hm?)

Las dos figuras interrumpieron su conversación por el enlace telepático y giraron sus rostros hacia la misma dirección.

(Alguien rompió la barrera espiritual. Dos... ¿No, tres personas?)

(Elevé el poder de la barrera específicamente porque estaba realizando un experimento. Parece que estas personas son particularmente talentosas).

(Solo somos dos. ¿Nos retiramos?)

(No, esta es una oportunidad única. El recipiente físico de alguien capaz de atravesar nuestra barrera espiritual podría ser compatible).

Afortunadamente, el último miembro parece haberse separado de los otros dos. Deberíamos ser capaces de neutralizar a los dos primeros antes de que se reúnan).

(Entendido. ¿Entonces estamos de acuerdo?)

Señales de consentimiento fueron transmitidas. Dejando el cadáver en el banco, las dos figuras desaparecieron en las sombras más allá de las farolas.



Esta noche, Leo también caminaba por las calles de Shibuya. Sin embargo, este no era su habitual “vagar sin rumbo”. Había recibido detalles sobre personas sospechosas de un amigo cercano y se apresuraba a verificar la veracidad de los testigos oculares.

Incluso Leo mismo no sabía por qué estaba tan motivado en hacer este tipo de investigación.

¿Su sentido de justicia? Hubo otros crímenes más atroces.

¿Territorialidad? Shibuya no era su tierra natal.

¿Curiosidad? Honestamente, a él realmente no le importaba la identidad real de los asesinos.

En cualquier caso, sintió que esto no era algo que pudiera ignorar. Esta fue probablemente la razón que estaba más cerca a la verdad.

Después de buscar en sus sentimientos, Leo llegó a esta conclusión.

Caminando en la noche, moviéndose en la oscuridad justo ahora, escuchó una serie de ruidos rotos como el sonido de insectos agitando sus alas. Esto no era un sonido en el espectro audible, sino un sonido que rozaba los rincones más profundos de la conciencia de Leo.

No pudo explicar por qué, pero Leo era incapaz de ver esto como un simple ruido de fondo. Sin embargo, los instintos de Leo le dijeron que ese era el sonido de personas que conversaban. Se trataba de alguien que usaba el área de cálculo mágico en las profundidades de la conciencia para hablar. Siguiendo la fuente de la señal, Leo se acercó suavemente.



STARS es la fuerza principal de combate mágico dentro de la USNA. —Dicho esto, no todos los magos de combate estadounidenses son parte de STARS. En realidad, de los tres magos de clase estratégica oficialmente reconocidos dentro de la USNA, solo Angie Sirius estaba afiliada a STARS. Los otros dos estaban actualmente divididos entre una base en Alaska y una base en Gibraltar.

Aun así, siguió siendo un hecho inquebrantable que la fuente principal de la destreza mágica en el ejército de la USNA provenía de los Magos de STARS. Este fue especialmente el caso para los magos que obtuvieron el rango de planetas, ya que simbolizaban la “fuerza mágica de combate más poderosa del mundo”. Debido a que Alfred Fomalhaut también era de rango planeta, su deserción infligió un gran golpe al alto mando de la USNA. En este incidente de deserción, la USNA no pudo trazar la línea solo en Fomalhaut. Tuvieron que ejecutar a cada desertor como una advertencia para el resto.

Actualmente, las dos personas que avanzaban rápidamente a través de la noche de Shibuya también eran cazadores enviados por el ejército de la USNA para perseguir a los desertores y pertenecían a la unidad “Stardust” (Polvo de Estrellas). Al igual que los STARS, también estaban bajo el mando directo de los Jefes del Estado Mayor Conjunto, pero solo eran los remanentes de STARS que no podían convertirse en miembros por sí mismos. A pesar de esto, estos soldados aún poseían una considerable habilidad de combate. Habían dejado de estar bien balanceados y en su lugar perfeccionaron sus talentos específicos al nivel de los STARS. Eso era lo que significaba ser ‘Stardust’. Esta vez, los miembros fueron seleccionados para cazar a los desertores. Eran magos que habían sido trasladados a Japón, y se especializaban en identificar las ondas de Psion y los vestigios de magia.

Esta noche, finalmente encontraron el rastro de psión de uno de los desertores, un especialista de Clase Planeta de STARS, Charles Sullivan, con nombre clave “*Demus Second*”, ya habían acortado la distancia a pie

“El objetivo está despejado más adelante”.

Uno de los dos se detuvo y asintió ante las palabras del otro antes de sacar un terminal de información del abrigo que llevaban puesto. Después de ver un mapa, a través de la función de búsqueda verificaron que solo había un camino hacia el parque. Había una entrada a la izquierda de su posición actual, así como una entrada a la derecha a la vuelta de la esquina.

“Hemos detectado un objetivo. Atacaremos desde ambos lados. Voy a ir por la derecha”.

El gran abrigo y la falda desaparecieron, revelando un conjunto deslumbrante de medias y botas pesadas. El atuendo exterior se adaptaba más con las mujeres jóvenes que se mueven por la noche mientras ocultan

su identidad como soldados estadounidenses. El único aspecto típico de estas hechiceras era que hablaban de forma normal.

“Entendido... Vamos a ponernos en movimiento, no tenemos mucho tiempo. Recuerda, atacaremos al mismo tiempo”.

“Entendido”.

Los dos cazadores se separaron hacia ambos lados.

Debajo del sombrero y la bufanda, un paño gris con un patrón de murciélagos negros ocultaba su rostro. Las características físicas estaban completamente ocultas a la vista, la figura del gran abrigo caminó sin perder de vista la salida del callejón. Una sonrisa burlona se dibujó en las comisuras de sus labios cubiertos por la tela.

(Perseguidores de las Fuerzas Armadas. Me han subestimado mucho si creen que dos miembros de Stardust pueden atraparme).

(Eso se basa en quien solías ser antes).

Al recibir la señal cognitiva de su compañero, la criatura que alguna vez fue Charles Sullivan convirtió su sonrisa burlona en una irónica. Desde que tomó esta forma, no había forma de ocultar nada a sus compatriotas. No había ningún sentido de privacidad en absoluto. Sin embargo, el actual Charles Sullivan no estaba disgustado con este cambio. Para ellos, esto era solo el curso natural de las cosas y no constituía una fuente de irritación.

Una vez que puso toda su concentración en las profundidades de su mente, también pudo detectar en qué estaba pensando su camarada. A través del nuevo órgano sensorial ubicado entre los hemisferios derecho e izquierdo del cerebro, podrían comunicarse fácilmente entre ellos. Él era la entidad conocida como Charles Sullivan, pero al mismo tiempo también era parte de “ellos”.

(Ya veo. Dado su conocimiento de mi rango como clase planeta, también podemos predecir sus movimientos. No necesitaré la copia de seguridad).

En respuesta a la señal cognitiva de Sullivan, esta vez el sonido de abejas batiendo sus alas regresó.

(Por si acaso, haré algunos preparativos).

Esta respuesta formulada vino de su otro compañero en las cercanías. El contacto entre las dos partes llegó en un instante.

“Desertor, *Demus Second*. Ponga tus manos en el aire y manténgalas donde yo pueda verlas”.

La voz de una mujer joven se elevó frente a Sullivan. Al mismo tiempo, una tenue ola de ruido lo impactó como si fuera un cristal.

La verdadera identidad de este ruido fue la onda Psion proveniente de [Cast Jammer], un dispositivo desarrollado por el Departamento de R&D (*Research and Development // Investigación y Desarrollo*)

del Ejército de los EE. UU. Para inhibir el armamento y el equipo usado por los magos. Las ondas inhibidoras del [Cast Jammer] eran diferentes del ruido de fondo que afectaba indiscriminadamente a toda la magia, como las que se ven en [Cast Jamming] cuando se usa Antinita. Este [Cast Jammer] se dirige específicamente a las funciones del CAD. Al usar múltiples CAD intencionalmente para generar ondas de psions adicionales, esto interfería directamente con el procesamiento de la Secuencia de Activación. Generalmente, este tipo de interferencia solo podía ocurrir cuando las ondas de Psion de un individuo estaban interfiriendo entre sí, pero a través del análisis de las ondas de Psion de su oponente, la USNA había neutralizado con éxito los CAD (hasta cierto punto).

Esto no era algo que pudiera usar cualquiera. Para utilizar [Cast Jammer], se requería un alto nivel de magia no sistemática que liberara los tipos de onda Psion. Además, su alcance efectivo era de menos de 5 metros. Sin embargo, en términos de contramedidas mágicas que no requerían Antinita, [Cast Jammer] fue definitivamente el as del Ejército de los EE. UU. De la época.

Enfrentado con el cañón de un arma, Sullivan levantó ambas manos por encima de su cabeza según las instrucciones, con ambas manos fácilmente visibles. Este orden parecía bastante vago para el profano promedio, pero su intención era negarle al objetivo la capacidad de usar un CAD. Con base en los datos que poseían los perseguidores o los verdugos en este caso, *Demus Second* era incapaz de usar magia sin el uso de un CAD y sus habilidades físicas eran las de un soldado promedio. Normalmente, una vez que la magia queda fuera de escena, no podría ofrecer mucha resistencia contra ellos, que eran magos y soldados aumentados.

“Los superiores han ordenado que les avisemos de su muerte. Sin embargo, si va a proporcionar información sobre sus compañeros, una disminución de sentencia estaría disponible”.

Después de escuchar al cazador decir su parte con el dedo todavía en el gatillo, Sullivan se encogió de hombros.

“*Demus Second*. Tienes 10 segundos para decidir”.

“No, no es necesario”.

Debió haberse quedado perplejo ante la completa falta de terror o ansiedad en el tono de Sullivan, ya que no pudo disparar ninguna bala.

“Ustedes dos deben ser los Cazadores Q y R de Stardust”.

Al escuchar a Sullivan llamarlos por sus nombres clave en voz alta, el dedo ligeramente aflojado se tensó una vez más.

“No hay forma de que puedan vencerme”.

En el instante en que Sullivan hizo esta declaración, sonó un disparo. Gracias al silenciador, el sonido era más o menos equivalente al de una pistola de aire. Sin embargo, la bala disparada con esta arma podría acabar con una vida con poca o ninguna dificultad.

Un gemido amortiguado sonó desde detrás de Sullivan. La bala disparada no penetró el pecho de Sullivan que estaba directamente de frente, sino que pasó por el brazo del Cazador R.

“¿No oíste? Debieron haberte dicho que evites las armas de fuego cuando te enfrentas a mí”.

“¿Esto es [Alteración de Trayectoria]?”

Una vez que Sullivan dijo condescendientemente esas palabras, Q reveló una expresión de completo shock. Sabían que Sullivan se especializaba en magia que alteraba la trayectoria de los proyectiles, pero también escucharon que no podía usar la magia sin un CAD.

“¿Podría ser que el [Cast Jammer] fuera ineficaz...?”

“Incorrecto”.

Sullivan ni siquiera se dio vuelta ya que rechazó directamente las palabras de R cuando presionó una su brazo con una mano.

“[Cast Jammer] está funcionando normalmente. Excepto.”

Q y R notaron a través de la atmósfera circundante que el rostro de Sullivan bajo la tela con murciélagos negros se había torcido en una burla.

“Hace mucho que superé la necesidad de usar un CAD”.

Q enfundó la pistola debajo de su falda. Los dos cazadores sacaron dagas de sus mangas y atacaron a Sullivan desde adelante y desde atrás.

Un ser humano normal no debería poder evitar los ataques de cuerpos físicos aumentados. Sin embargo, el Sullivan supuestamente normal evadió fluidamente los ataques. Esto no era algo que se pudiera lograr con destreza atlética. La daga de R, que originalmente estaba dirigida al cuello de Sullivan, había cambiado su trayectoria de forma antinatural y se había deslizado hacia otra parte. Como si la hoja la empujara, Q se deslizó antes que R y logró sofocar a Sullivan antes de comenzar su ataque.

“¡¿Incluso puede cambiar la trayectoria de la daga que tengo en la mano!? ¿Cómo puedes manipular una magia tan poderosa?”

“No tengo ninguna razón para explicarte, ya que no soy quien era”.

“¡Silencio!”

Repentinamente estallando en un sprint, Q cambió la dirección de su golpe descendente y cortó un agujero en el abrigo de Sullivan para revelar la armadura de carbono que llevaba debajo. Girando rápidamente sobre sus talones, R se estaba acercando y golpeando la brecha entre la armadura y su daga.

“¡Uf!”

Aun así, la daga de R se deslizó sobre el pecho de Sullivan mientras giraba. La trayectoria de la daga una vez más terminó mal, haciendo que R perdiera el equilibrio y dejara escapar un grito ahogado.

Como si realizara un truco de magia, una daga que se parecía a las que los cazadores tenían se había materializado en su mano.

Sullivan giró la daga inmediatamente hacia la espalda de R. Sin embargo, su daga rebotó hacia atrás como si hubiera impactado en una pared invisible.

“¿[Inversión de inercia]? ¡Y en este nivel de fuerza!”

“¡Mayor!”

El grito de Sullivan se superpuso a la protesta de Q.

Sullivan inmediatamente se dio cuenta de la importancia detrás de esas palabras y se abalanzó directamente hacia R, quien aún estaba tratando de recuperar el equilibrio.

En este momento, las cuchillas descendieron de los cielos.

Cuatro dagas volaron hacia la espalda de Sullivan mientras saltaba. El cuerpo de Sullivan se deslizó masivamente hacia un lado.

Su trayectoria inicial de salto lo habría llevado directamente a R, pero se vio obligado a deslizarse hacia la derecha para evitar las cuchillas descendentes.

En el momento en que aterrizó, Sullivan tiró del cuerpo de R hacia Q y arrojó las cuatro dagas hacia ellos.

Las cuchillas que volaron hacia Sullivan se recuperaron justo antes de golpear el suelo y bloquearon las dagas dirigidas hacia Q y R.

Sullivan aprovechó esta oportunidad para saltar sobre las paredes de un rascacielos.

Después de patear tres veces desde los rascacielos, llegó a la azotea de los edificios que formaban uno de los callejones.

Un mago con cabello rojo llameante, ojos dorados y una máscara planeaba seguir los pasos de los otros y perseguir mientras observaba su forma huir.

Aun así, al tomar nota de los nuevos y activos psions que circulaban por el callejón, abandonó la persecución.

Corrección, para prevenir la aparición de víctimas adicionales, se lanzó de cabeza hacia las profundidades del callejón.



Sintiendo la creciente tensión en el aire que no podía significar más que un combate, los pasos de Leo se detuvieron en lugar de acelerarse. Él no le estaba mintiendo a Toshikazu cuando dijo que no planeaba hacer nada peligroso. Los instintos de Leo le indicaron que el área que tenía en frente no era un lugar que pudiera pisar con seguridad solo por curiosidad.

Sacó la terminal de información de su bolsillo y envió un mensaje conciso a la dirección que Toshikazu le enseñó. Los contenidos fueron simplemente “El vampiro está aquí”. Después de informar su ubicación actual, Toshikazu podría arrestar inmediatamente al sospechoso de los homicidios en serie si él estaba en alerta. Leo planeaba abandonar la zona actual antes de que pudiera verse envuelto en otro incidente, por lo que se dio la vuelta —para encontrar una figura en uno de los bancos del parque.

La preocupación y la cautela debatían dentro de él antes de que la cautela finalmente cediera al final. En lugar de llamarlo un buen samaritano, era más apropiado decir que era un poco deficiente en el departamento de miedo. Esta fue una debilidad con la que nacen los fuertes, por lo que basta con decir que un descendiente como él también heredó eso. A pesar de esto, no estaba del todo indefenso mientras Leo se aproximaba cuidadosa y exhaustivamente al lado de la joven.

“¿Oye, estás bien?”

Leo extendió una mano para tocar su hombro, pero la mujer no reaccionó de ninguna manera. Cuando presionó una mano en el cuello de la mujer, la expresión de Leo se puso rígida. La carne era vieja, sin signos de pulso. – Había algo, aunque muy débil, pero al menos todavía había algo.

Leo sacó frenéticamente la terminal de información y envió una llamada de socorro a emergencias, esta vez dirigida a la ambulancia en lugar de a la policía. Justo cuando Leo estaba a punto de enviar una llamada de auxilio sobre alguien que estaba al borde de la muerte,

Él giró su cabeza instintivamente y levantó la mano que sostenía la terminal frente a su cara.

La terminal se hizo añicos. Para cuando Leo pudo recuperarse después de retroceder varios pasos, ya sabía que el arma de su oponente era un bastón retráctil de policía.

Qué oponente más extraño. Debajo del sombrero redondo, solo se veían los ojos, ya que todo lo demás estaba cubierto por una fría máscara blanca. El abrigo que iba desde los hombros hasta los pies oscurecía cualquier forma o pista de su género. No, olvídate del sexo, Leo ni siquiera podía verificar si estaba peleando contra un ser humano.

En las profundidades de la conciencia de Leo, el sonido de los insectos agitando sus alas se podía escuchar, tan suavemente como antes. Pero esta vez, Leo sintió que esta era una “voz” que instaba a su camarada a retirarse.

Aprovechando el hecho de que estaba distraído por el ruido, el individuo enmascarado había cargado contra él en un instante. Leo sabía que esto era magia de aceleración personal, pero no pudo detectar ningún signo de una secuencia de activación. Era como si manipularan directamente la Secuencia Mágica antes de cargar hacia adelante. Ni siquiera tuvo tiempo de invocar la magia de fortificación, por lo que Leo solo pudo levantar el brazo izquierdo para bloquear el bastón policial que avanzaba en un arco horizontal.

En ese instante, un golpe sordo anunció algo que se estrelló.

Al ver el bastón de policía doblado en forma de escuadra el individuo enmascarado estaba visiblemente impactado.

“¡Eso duele!”

Leo golpeó al hombre enmascarado en el centro del pecho, creando el sonido de dos objetos duros impactando entre sí.

El extraño sujeto se tambaleó hacia atrás mientras Leo sacudía ambas manos como si sintiera un gran dolor. Aun así, parecía haberse salvado del destino de tener los huesos fracturados. El brazo izquierdo que recibió la mayor parte del bastón policial también pareció conservar su completa libertad de movimiento.

“Llevas una armadura de carbono debajo de ese abrigo, ¿eh? Viniste bien preparado”.

Mientras mantenía un ojo cauteloso sobre el sujeto enmascarado, Leo se arrepintió interiormente por no haber traído un arma, cayendo en una posición de combate desventajosa. La intuición de Leo le dijo que este enmascarado era el “vampiro”.

El extraño abandonó el bastón de policía y extendió ambas manos hacia adelante. En el lado izquierdo, el puño izquierdo se elevó a la altura de la barbilla, mientras que el puño derecho se sostuvo frente al pecho. Parecen artes marciales chinas, pensó Leo. Aun así, había otro detalle digno de mención. El tamaño de esos puños era pequeño, parecían pertenecer a una mujer.

El extraño avanzó como el viento. Usando magia de aceleración personal junto con magia de tipo movimiento.

Leo usó su chaqueta, ya con la Magia de Fortificación repartida por todas partes, para desviar las cuchillas estrechas que venían en el aire.

La mano del extraño se inclinó hacia el brazo izquierdo de Leo. El extraño logró agarrar el brazo izquierdo de Leo.

En ese instante, Leo de repente sintió que su fuerza cedía, causando que su puño derecho se detuviera.

Su oponente estiró la mano derecha hacia el pecho de Leo, justo encima del corazón.

Leo ejerció fuerza una última vez y movió su puño derecho otra vez.

Justo cuando la mano del enmascarado entró en contacto con el pecho de Leo, el puño de Leo golpeó un gran punto de presión en la cintura del enmascarado. El extraño se desplomó hacia atrás mientras Leo caía débilmente de rodillas.

Definitivamente sintió que su golpe había dado en el blanco, pero Leo no estaba seguro de si eso pudo haber sido un golpe fatal.

Perder el conocimiento aquí, sería firmar su sentencia. No había ninguna garantía de que su vida no terminaría ahí. Al darse cuenta de esto, Leo se obligó a levantar la cabeza.

El enmascarado ya se había levantado. Mientras eso seguía presionando su pecho, era evidente que no había perdido la efectividad en el combate.

Sin embargo, por alguna razón desconocida, este extraño no estaba enfocado en Leo o siquiera mirándolo.

Leyendo la atmósfera, Leo siguió la mirada del enmascarado para encontrar lo que se vio obligado a admitir que era un “demonio”.

Cabello rojo ardiente y ojos dorados. Tal vez debido a la distancia, el tamaño del cuerpo parecía un poco pequeño, o tal vez Leo estaba claramente perdiendo el conocimiento.

Dentro de su oscura conciencia, Leo pensó que vio al enmascarado huir hacia la calle lateral, con el demonio persiguiéndolo.

Completamente transformada en su personaje como el Enmascarado Mago *Sirius*, Lina titubeó brevemente después de mirar por encima de la figura de Leo al costado de la carretera. Sin embargo, eso solo duró un breve instante antes de que Angie *Sirius* eligiera perseguir al enmascarado. Un poco antes, el hombre con la máscara de murciélago, Charles “*Demus Second*” Sullivan, escapó mientras ella estaba ocupada cubriendo a sus aliados. No había forma de que pudiera permitirse el lujo de escapar también de esta persona de máscara blanca.

“Sylvie, ¿puedes rastrear las ondas de psion?”

La pregunta de Lina fue hecha a Sylvie, quien todavía estaba en su base. Desafortunadamente, la respuesta que regresó no era la deseada.

“Lo siento. Hay demasiado ruido de fondo, así que no puedo asegurarme”.

“¿Qué tal las cámaras?”

Al enterarse de que el radar de psion no era confiable, Lina inmediatamente preguntó si podían usar imágenes satelitales de baja altitud para continuar la persecución.

“Todavía tenemos contacto visual en el objetivo. Sin embargo, hay muchos obstáculos en la ciudad, por lo que no se sabe por cuánto tiempo podemos mantener el contacto visual”.

“Entendido. Continúa la búsqueda”.



Sabiendo que podía contar con el apoyo tecnológico, el ritmo de Lina se aceleró. Obviamente, las calles durante la noche estaban llenas del aura de hombres y mujeres jóvenes, lo que provocaba que los remanentes de los psion del extraño se extinguieran aún más rápido. Para mantenerse al día con la persona enmascarada que huía a una velocidad sobrehumana, Lina aumentó la producción de su propia Magia de aceleración personal.

Tal vez fue porque el objetivo notó que estaba cerrando la brecha, pero el objetivo con máscara blanca alteró su ruta de repente. El extraño cambió de las calles llenas de gente a las laderas del sector residencial. La vegetación aumentó mientras que los signos de la vida humana disminuyeron.

Esto en realidad lo hizo más fácil para Lina. Con menos gente alrededor, esto hizo que fuera más fácil diferenciar los psions. Mientras la frecuencia con la que perdía de vista a su objetivo aumentaba, ahora se estaba familiarizando cada vez más con las huellas de la onda psion de su objetivo. Estaba a punto de llegar, según Lina, basándose en su experiencia. Finalmente alcanzó a su objetivo, o al menos así es como se suponía que debía ser, en el parque.

Lina fue inmediatamente rodeada por el ruido de Psion.

(¡¡[Cast Jamming]!!?)

En el momento en que ese pensamiento cruzó por su mente, Lina rápidamente lo rechazó. Su magia de aceleración personal no había disminuido en lo más mínimo. Incluso si la magia aplicada a uno mismo recibiera un efecto reducido de [Cast Jamming], eso todavía era “algo más incómodo de lo habitual” y no una inmunidad completa. Incluso para Lina, no importa cuán enorme fuera la habilidad mágica de *Sirius*, era imposible ignorar por completo los efectos de [Cast Jamming]. Por lo tanto, este ruido de fondo debía provenir de otra cosa.

(¡Maldición!)

Lina se dio cuenta de inmediato de su verdadero propósito. Más bien, ella personalmente lo sintió.

Ella no fue capaz de perseguir a los remanentes psion del enmascarado. No habían desaparecido, ella era incapaz de diferenciarlos.

Lina finalmente entendió por qué su objetivo la llevó a un lugar donde había menos gente. Claro, era más fácil para ella reconocer las ondas psion de su oponente, pero lo contrario también era cierto. Este ruido de fondo era un tipo de magia de larga distancia. Con el fin de crear un ruido de fondo específicamente para Lina, la persona con máscara blanca le condujo a este lugar remoto donde no había nadie.

(... Es una pena, pero no puedo hacerlo sola.)

“Mayor, ¿qué pasó?”

Probablemente debido su preocupación por Lina, quien de repente había detenido sus pasos, la voz de Sylvie que se escuchaba en el auricular parecía bastante perturbada.

“Los perdí. Regresaré a la base”.

Arrepentida, pero franca, Lina admitió su fracaso.

◇ ◇ ◇

El día de Chiba Erika comenzó muy temprano en la mañana. Cada amanecer, su entrenamiento de sudor y sangre era su tarea.

Hasta la edad de 10 años, ella había seguido las instrucciones de su padre sin cuestionarlas.

A la edad de 14 años, cuando se le dijo quién era, quería ser un espadachín de la familia Chiba más que cualquier otra persona.

Hasta marzo pasado, ella siempre lo hizo por costumbre.

Sin embargo, desde el pasado mes de abril, desde que lo conoció, era su deseo.

Por su propia voluntad, para ser aún más fuerte.

Al amanecer, ella no sostenía una espada. Al leer con precisión la habilidad de Erika, su padre la crió diligentemente para ser la usuaria del Arte Secreto [Yamatsunami], no, la entrenó por el bien de convertirse en la portadora de [Yamatsunami]. La técnica impartida a ella, golpeaba como el viento y descendía como la iluminación, una espada veloz. De ahí que durante su entrenamiento, el acondicionamiento de sus piernas y la capacidad de correr fueran especialmente importantes. En días de ocio donde había perdido su objetivo, las carreras de larga distancia que había descuidado por mucho tiempo nunca se olvidaron una vez que juró por su propia voluntad “ser más fuerte cada día”.

Esta mañana, Erika despertó con el timbre de su despertador y se levantó de la cama. Por temperamento, Erika no era una persona madrugadora. Incluso si su cuerpo reaccionaba, mentalmente aún no estaba despierta del todo. Aun así, gracias a las decenas de miles de repeticiones que le dieron ese hábito, sus pies se balancearon fuera de la cama.

Luchando con un bostezo, sus pies se mantuvieron firmes mientras serpenteaba hacia su baño privado. A pesar de llamarlo un baño privado, las únicas instalaciones en el interior eran una zona de baño y un lavabo, pero el hecho de que Erika tuviera uno de estos en su propia habitación era debido a que era hija de un capitalista y no criada en cualquier familia normal.

El jefe de la familia Chiba no era suficientemente mezquino para tratar a sus hijos de manera diferente, al menos a nivel material.

El calentador de agua se había apagado incluso en pleno invierno, lo que le permitió a Erika usar agua helada para lavarse la cara y finalmente despertarse por completo. Mientras estaba de pie frente a su tocador y se preparaba para ponerse su ropa deportiva, notó que su buzón estaba iluminado con notificaciones de nuevos mensajes.

Todavía era antes del amanecer. Para la hora local, eran las 5:30 de la mañana. Se fue a la cama a las 23:30 horas de la noche anterior y no hubo mensajes sin leer, lo que significa que debió haber llegado tarde en la noche.

Debido a alguna corazonada que no pudo explicar, Erika abrió el mensaje inmediatamente.

Precisamente por su facilidad de uso, el correo electrónico se mantuvo en uso hasta estos días sin ser abandonado. Una vez que el encabezado del tema apareció, las cejas de Erika se frunció. Después de leer todo el mensaje, los dientes de Erika se chocaron audiblemente uno contra el otro mientras salía.

“Ese hermano idiota..... ¿Qué diablos le pidió a ese otro idiota que hiciera...?”

Arrojando violentamente su pijama, se cambió la ropa interior.

Desde su armario, Erika dejó su ropa deportiva donde estaba y sacó un suéter y un vestido.

Antes de que comenzara la escuela, las malas noticias llegaron a Tatsuya justo cuando estaba a punto de salir de la casa.

No por el teléfono de la casa, sino por mensaje de texto a su terminal personal. Normalmente, estas notificaciones estaban reservadas para grandes desastres, lo que definitivamente presagiaba una inquietante ansiedad en este mensaje. Por supuesto, esta ansiedad podría ser rápidamente reemplazada de acuerdo al contenido del mensaje.

El remitente de este mensaje fue Erika.

“Onii-sama, ¿son malas noticias?”

Aprendiendo sobre la fluctuación del humor de su hermano, Miyuki observó a Tatsuya con ojos preocupados.

Quitando de su hermana la semilla del malestar, este tipo particular de pensamiento no cruzó la mente de Tatsuya en este momento.

“Es un comunicado de Erika que dice que Leo fue atacado por el vampiro y actualmente está hospitalizado”.

“... ¿Debe ser una broma, verdad?”

Los medios tuvieron un efecto dramático. Por ejemplo, en lo que respecta a los eventos que ocurrieron en las ciudades vecinas, siempre que los medios tuvieran una amplia cobertura, o incluso exagerada, esto podría llevar a la idea errónea de que se trataba de un evento que no se relacionaba con uno mismo ni de un personaje proveniente de un mundo ficticio. Para complicar aún más las cosas, una existencia irregular como un “vampiro” cometiendo crímenes solo sirvió para profundizar la falta de realismo. No obstante...

“Es la verdad”.

No importa cuán repentinamente hubiera sucedido, no había beneficio en ignorar lo que sucedía frente a ellos. Solo enfrentando directamente estos incidentes podría crearse cualquier contramedida.

“Parece que está recibiendo tratamiento en un hospital de la policía en Nagano. Afortunadamente, su vida no está en peligro, así que podemos hacerle una visita después de la escuela”.

“Sí.”

Para Miyuki, Saijou Leonhard era solo uno de los amigos de su hermano. Como Tatsuya dijo que visitarlo después de la escuela estaría bien, Miyuki no tenía motivos para negarse. —Sin tener en cuenta, claro, lo que ella estuviera pensando.



Hoy, Erika pidió el día libre.

Como ya había notificado a Tatsuya, Mizuki, Mikihiko y a la administración de la escuela, casi todos los que lo necesitaban sabían.

Sin embargo, Erika estaba vigilando la habitación de Leo a modo de guardia (dicho esto, ella estaba sentada en el banco fuera de la habitación del enfermo), por lo que ningún estudiante de 2do o 3ro lo sabría.

Ya que la escuela era de asistencia libre, el tiempo no era un problema. Aun así, para la ex Presidenta del Consejo Estudiantil y el anterior Líder del Grupo de Clubes preguntar acerca de un estudiante no relacionado, no tenía sentido. Que la actual Presidenta del Consejo Estudiantil y el actual Líder del Grupo de Clubes aparecieran tendría más sentido.

Katsuto miró discretamente a Erika, quien todavía estaba en la entrada, antes de dirigir una mirada desinteresada hacia la puerta.

Mayumi mostró una sonrisa ligeramente maliciosa mientras saludaba a Erika con la cabeza y se giraba hacia la puerta.

Erika no detuvo a Mayumi de golpear suavemente la puerta de la habitación del enfermo.

Ella no estaba allí para cuidar de Leo, estaba allí para vigilarlo, para ser más precisos, ella tampoco lo atendía, estaba protegiendo a Leo de “invitados no deseados”, así que no había razón para detenerlos a ellos.

Erika se levantó y se fue sin despedirse de los dos estudiantes de último año.

El destino de Erika, era una de las salas administrativas del hospital.

Su hermano mayor y su confidente estaban en esa habitación.

Cuando Erika irrumpió en la habitación sin llamar, Toshikazu solo pudo tratar de evitar su mirada torpemente.

El enrojecimiento en su rostro era apenas visible. Al ver que la hinchazón se había desvanecido en gran medida de la cara de su hermano, Erika lamentó no haberlo golpeado más fuerte cuando tuvo la oportunidad. (Ella había usado su puño en vez de su palma).

Además, no era muy frecuente que su “estúpido hermano” quisiera recibir una paliza sin ninguna resistencia.

Incluso si fuera poco, si podía liberar algo del resentimiento reprimido que le quedaba de su adolescencia, no iba a dejar que la más mínima oportunidad se le escapara entre los dedos.

“... Umm, jovencita. No estás considerando más violencia, ¿verdad?”

Sus oscuras fantasías se interrumpieron, Erika dirigió su aguda mirada hacia Inagaki.

Superado por su presencia, los ojos de Inagaki vagaron por toda la habitación.

A pesar de la frialdad de su padre, Erika tenía la mayor cantidad de seguidores entre los discípulos.

Su personalidad brillante junto con su aspecto deslumbrante, y lo más importante, ella era la única portadora del Arte Secreto: [Yamatsunami]. En combate real, ella estaba optimizada para manejar a [Yamatsunami] con facilidad. En lugar de confiar en su línea de sangre como hija de la casa, usó su propia técnica, fuerza y carisma para adoptar una postura casi idílica en la Familia Chiba.

Frente a su mirada, muchos de los discípulos de su casa se derrumbarían.

Antes de todo eso, Inagaki no estaba en la misma categoría que Erika. Si se lo asignaran como compañero de entrenamiento, él simplemente sería un juguete para que ella jugara. Con su excepcional habilidad original y el meteórico ascenso en el último medio año, los únicos oponentes dignos de Erika en el estilo Chiba probablemente se limitaban solo a la actual cabeza y sus dos hermanos mayores. El hecho de que la capacidad de Erika excediera con creces su rango era en consideración a su hermana mayor, que solo era mundana en el manejo de la espada y el talento, un hecho que era bien conocido entre los discípulos de la familia.

“Hermano”.

Ante la llamada de Erika, Toshikazu giró la cabeza a regañadientes para mirarla. Aunque su tono era más grave, encajaba perfectamente con el desagrado disimulado que Erika llevaba en el rostro.

“En este momento, ese tipo debería recibir visitas de los descendientes directos de las familias Saegusa y Juumonji, ¿correcto?”

“Sabes exactamente por qué están aquí, ¿no?”

La mirada de Erika lo interrogó silenciosamente.

La espalda de Inagaki se volvió aún más recta ante las mordaces palabras y los furiosos ojos de Erika, pero Toshikazu no estaba tan impresionado por su hermana.

“Anoche, la mujer rescatada junto con Saijou-kun parecía ser miembro de la Familia Saegusa”.

“¿Y eso es todo lo que hay?”

“Órdenes desde arriba. Dijeron, ‘no investigues más’”.

Extendió sus manos de una forma exagerada y se encogió de hombros.

Al escuchar la respuesta que ya suponía, Erika chasqueó la lengua.

“Dejando a un lado a Kasumiseki, Sakuradamon todavía está dentro de la jurisdicción de nuestra familia, ¿verdad?”

“Pero nuestra división está dentro de la jurisdicción de Kasumiseki”.

“Qué inútil”.

A pesar de su furioso murmullo, Erika poseía un firme control sobre la lógica y no lo convirtió en una rabia más grande.

“¿Intervención a la línea telefónica?”

“Desactivada una vez que ingresaron a la habitación”.

“Nunca pensé que el [Multiscope] de ‘Elfin Princess’ fuera tan capaz”.

“Elfin Princess” se transformó en el sobrenombre de Mayumi “Elfin Sniper”, fue un término entrañable utilizado por sus seguidores en las competiciones de magia de tiro. Dado que el término elfo tenía a recordar criaturas de baja estatura, este era un término bastante apropiado para Mayumi, pero también era la razón por la que nadie usaba este término en su presencia.

“Entonces nos estamos volviendo aún más inútiles..... Entonces, ¿qué pasa si configuramos los dispositivos fuera de la habitación?”

“Neutralizado por la barrera del sonido. Eso es probablemente el [Phalanx] de Juumonji”.

Al escuchar la respuesta objetiva de Inagaki, Erika ni siquiera quería repetir sus palabras “qué inútil”.

“Entonces al menos podemos especular. Tienes una coronada, ¿verdad?” Bajo la mirada de Erika, Toshikazu solo pudo encogerse de hombros otra vez.

“¿Solo especulando? Parece que los Saegusa están escondiendo a la víctima”.

“... ¿Quieres decir que ocultan el cuerpo?”

Al escuchar una “especulación” que excedió sus expectativas, Erika no se molestó en esconder su sorpresa antes de volver a preguntar.

Ocultar el cuerpo recae en destrucción de la evidencia, y si bien era fundamentalmente diferente de deshacerse —abandonar o destruir— los cadáveres pertenecientes a los homicidios de los que era

responsable una persona, esto todavía estaba infringiendo la ley. Incluso si los Diez Clanes Maestros retuvieran privilegios más allá del alcance de la ley, obstruir la policía para investigar una gran cadena de homicidios en serie es...

Al llegar a este punto, Erika notó la connotación más oscura detrás de esto.

“En otras palabras, este incidente del ‘vampiro’ está relacionado con los magos, ¿verdad?”

“Probablemente. Excepto que no sabemos si es una víctima o un cómplice”.

“¿Víctima? En realidad, tendría sentido si un mago cometiera el delito, por lo que no quieren entregar el cuerpo y tratarán de deshacerse de él. Si incluso un mago es la víctima, ¿por qué lo mantienen lejos de la policía?”

Al escuchar las fuertes palabras de su hermana, Toshikazu reveló una sonrisa significativa.

“Sí, ese es precisamente el punto. Este caso no parece tan simple ahora, ¿verdad?”



Después de la Escuela.

Tatsuya llevó al grupo habitual al hospital de la policía en Nagano para visitar a Leo. Después de obtener el número de la habitación del paciente en el escritorio de la recepcionista, se dirigieron al ascensor. Sin embargo, fue aquí donde alguien gritó su nombre.

“Todos están aquí ahora”.

“Erika, ¿aún estás aquí?”

La esencia de la situación ya se transmitió a través del texto de la mañana. El hermano mayor de Erika era responsable del caso de los vampiros, se le pidió a Leo que ayudara en la investigación, pero desafortunadamente fue arrastrado al desastre. Para hacerle asumir la responsabilidad (pero no asumir la culpa), Erika pidió el día libre para visitar a Leo en el hospital. Al menos, eso es lo que decía el mensaje de texto.

Sin embargo, recibieron el comunicado antes de la escuela y ahora era casi el anochecer. Tatsuya usando la palabra “aún” probablemente fue bastante apropiado.

“No es como si hubiera estado aquí todo el día. Volví a casa una vez hoy y volví hace una hora. Supuse que Tatsuya-kun traería a todos esta vez”.

Cuando subieron al ascensor como un grupo, Erika respondió la pregunta de Tatsuya.

Su voz y expresión no eran anormales en la forma en que alguien estuviera mintiendo.

Excepto, el hecho de que ella era perfectamente normal solo sirvió para profundizar la idea de que todo era falso. En este punto, Erika fue probablemente la única que no se dio cuenta.

“Erika-chan, ¿Leo-kun va a estar bien...?”

Mizuki estaba de pie junto a Erika en el ascensor mientras tranquilamente hacía su pregunta. A pesar de que estaban a punto de descubrirlo con sus propios ojos, ella probablemente estaba intranquila. Estas emociones diferían de una persona a otra, por lo que algunas personas podían controlarse más.

“No te preocupes, Mizuki. ¿No lo mencioné en el mensaje de texto? Su vida no está en peligro”.

No obstante, esto también dependía de la compatibilidad entre las diferencias de las personas. Al ver a Mizuki soltar un suspiro de alivio y darse una palmadita en el pecho, Erika la miró cálidamente, pero si fuera un tipo el que hacía esto, Erika estaría gruñendo sin piedad.

Incluso si nadie más lo decía, Mizuki definitivamente no era la única que pensaba lo mismo. Después de unos momentos más de incómodo silencio, Erika tocó la puerta que conducía a la habitación del paciente.

“Ah, pasa”.

La voz de una mujer joven vino desde dentro de la habitación.

“Kaya-san, discúlpanos”.

Dejando a sus desconcertados amigos atrás, Erika abrió la puerta y rápidamente entró. En este momento, el primero en recuperarse, por supuesto, era Tatsuya.

Antes de que la cortina en la habitación pudiera oscurecer a Erika, entró en la habitación del paciente.

Miyuki estaba justo detrás de él. Al ver esto, Honoka se apresuró a entrar también, con Mizuki y Mikihiko entrando después de intercambiar una mirada y cerrar la puerta detrás de ellos.

Dentro de la espaciosa e indudablemente elegante habitación, quienes los saludaron fueron Leo, que estaba sentado en su cama con una expresión aburrida en el rostro, y una mujer joven con cabello rubio ceniza sentada en una silla plegable.

Ella era probablemente 4 o 5 años mayor que ellos. Su cabello era del mismo color que el dueño del Eine Brise, lo que daba la impresión de que compartían la misma nacionalidad. En cuanto a sus características, si fueran un poco escarpadas y obvieran las diferencias de género, se vería exactamente como Leo, lo que claramente demostraba su relación de sangre con él.

“Esta es Saijou Kaya-san, la hermana mayor de Leo”.

Antes de que alguien preguntara, Erika presentó a la joven. Su identidad era tal y como Tatsuya y compañía habían conjeturado.

Kaya se levantó y respetuosamente asintió con la cabeza al grupo de Tatsuya a modo de saludo. Si bien no era particularmente elegante ni bien ensayado, tenía un grado de etiqueta que los estudiantes de preparatoria no podían emular.

Después de que todos preguntaron sobre la salud de Leo, Kaya tomó el florero y salió de la habitación. Mientras se excusaba con cambiar el agua, la razón no declarada era porque quería darles algo de privacidad.

“Qué hermana mayor tan gentil”.

Mizuki murmuró una vez que Kaya desapareció por la puerta. Estos fueron sus verdaderos sentimientos, y no solo una retórica social.

Tatsuya compartió sentimientos similares, y nadie parecía estar visiblemente en desacuerdo.

Aun así, Leo reveló una expresión ligeramente conflictiva, recordándoles a todos que cada familia tenía sus problemas.

“Diablos, esto apesta”.

De ahí el por qué Tatsuya no indagó más. Después de todo, la situación familiar de Leo no tenía nada que ver con Tatsuya.

“No puedo creer que ustedes me estén viendo en ese estado”. Dijo Leo avergonzado. Ya no había ningún rastro de conflicto en su expresión.

“Ahora que te veo, no pareces herido”.

“No soy tan cobarde. No es como si no me hubiera defendido”.

“¿Dónde te golpearon?”

Ante la intrépida sonrisa de Leo, Tatsuya planteó la pregunta obvia. Con eso, la sonrisa de Leo desapareció.

“Ahí es donde yo no entiendo...”

Dicho esto, esto no fue porque estuviera poniéndose de mal humor. Su expresión declaró que no se había dado por vencido, pero estaba sinceramente inseguro de lo que sucedió.

“En el momento del contacto, de repente sentí que perdía todas mis fuerzas. Reuní mi voluntad de dar un último ataque, en el que el perpetrador huyó, mientras que yo estaba en el suelo hasta que el hermano mayor de Erika me encontró”.

“¿Fuiste envenenado?”

“Bueno, no importó dónde miraran, no habían señales de laceraciones o punciones en mi cuerpo. Tampoco hay elementos extraños en mi sangre”.

Es realmente una situación extraña. Tatsuya también inclinó la cabeza mientras Mikihiko intervenía.

“¿Viste sus características?”

“Bueno, vi algo. Llevaba un sombrero, un abrigo largo con armadura de carbono debajo y una máscara. No había forma de distinguir las características faciales o el físico, pero...”

“¿Pero?”

“Tengo la sensación de que era una mujer”.

“... ¿Una mujer tiene la fuerza suficiente en la muñeca para ir mano a mano con Leo?”

“Eso es casi inaudito”.

Erika inmediatamente replicó a Mikihiko con los ojos abiertos.

“Con la medicación adecuada, incluso una niña de primaria puede estrangular a un hombre adulto”.

“Eso es verdad... Pero”.

“¿Pero?”

“También existe la posibilidad de que no te enfrentaras a un ser humano en primer lugar”.

“¿Eh? Miki... ¿Me estás diciendo que estás de acuerdo con esa idea de que son vampiros?”

Al oír el murmullo de Mikihiko, Erika inmediatamente respondió con los ojos desorbitados.

“Mi nombre es Mikihiko”.

Su tono se mantuvo ligero, pero aun así se negó a aceptar ese apodo. Mikihiko parecía tener preparada esa respuesta automáticamente. Por otro lado, la respuesta de Erika tampoco fue su culpa. Mientras el tema fuera interesante en una conversación informal, pero las personas que realmente creían en los vampiros, incluso entre los magos, eran extremadamente minoritarias.

“¿Tienes alguna idea?”

Sin embargo, la reacción de Tatsuya no pertenecía ni a la mayoría ni a la minoría. Tatsuya tampoco creía en demonios o fantasmas, pero tampoco descartaba la posibilidad de una criatura inhumana.

Ante la pregunta de Tatsuya, Mikihiko dudó brevemente antes de abordar la pregunta con confianza.

“Creo que hay una posibilidad de que Leo se haya encontrado con un ‘parásito’”.

“¿Parásito no significa literalmente eso, verdad?”

Al ver que Erika inclinaba la cabeza en una dirección, no parecía pensar que las palabras de Mikihiko eran ridículas. Esta vez fue probablemente por genuina curiosidad. Con su estado de ánimo probablemente animado por semejante espectáculo, Mikihiko dio una conferencia.

“Parásitos paranormales, también conocidos simplemente como parásito. En la era moderna donde se ha divulgado la existencia y el poder de la magia, la magia moderna no es la única área que busca la cooperación internacional. La Magia antigua tampoco puede permanecer estancada, por lo que la

globalización es inevitable. Los herederos de La Magia Antigua han organizado muchas conferencias internacionales centradas en Inglaterra, con el objetivo de estandarizar los términos y conceptos para así refinarlos”.

“Sé que la Magia Antigua es más progresiva en el lado de la cooperación internacional. ¿Qué hay con eso?”

Mikihiko estaba comenzando a tomar fuerza cuando Tatsuya lo interrumpió, haciendo que Mikihiko tosiera y se recuperara.

“Parásito también es uno de los términos reconocidos. Monstruos, espíritus malignos, djinns, demonios, de todas las diversas entidades en los diferentes países, llamamos ‘parásitos’ a los seres mágicos que infectan a los seres humanos y los convierten en criaturas inhumanas. Incluso si la magia antigua se ha globalizado, eso no cambia el hecho de que guardan sus secretos para ellos, por lo que no es sorprendente que todos los que están aquí con un trasfondo mágico moderno no lo sepan”.

“No puedo creer que los monstruos y los demonios realmente existan...”

Después de escuchar la explicación de Mikihiko, Honoka murmuró con miedo. Tatsuya dejó caer una mano sobre su hombro.

“En el pasado, nadie creía que la magia existiera. Sin embargo, actualmente somos capaces de usar magia. Incluso si ignoramos su existencia, no hay razón para tener miedo”.

Esta no fue una reacción natural por parte de Tatsuya. Sabía que estas palabras tendrían una profunda reacción en Honoka debido a que provenían de él.

Por eso Tatsuya se retractó después de que Honoka saltó al contacto humano y estaba seguro de que disipó esa sensación de ciega inquietud. Por supuesto, también era consciente de cómo Honoka lamentó la oportunidad perdida, pero fingió ser no darse cuenta.

“Así que esa es la verdadera identidad del vampiro”.

Después, miró a Mikihiko. Ser demasiado temeroso no servía para nada, pero también era consciente de que la ignorancia podía agravar la amenaza.

Sin responder directamente a la pregunta de Tatsuya, Mikihiko dirigió una mirada decidida a Leo.

“Leo...”

“¿Umm, qué?”

Leo estaba abrumado por la fuerza de esa mirada.

“¿Puedo examinar tu forma espectral?”

“¿Forma espectral?”

Parecía que el término “forma espectral” no se registraba, ya que Leo solo podía repetir la pronunciación. En cierto nivel, esto no era culpa de Leo, ya que ni la “forma espiritual” ni el “recipiente del alma” eran términos usados en la magia moderna, y no porque Leo fuera demasiado lento para entenderla.

“La forma espectral se refiere al cuerpo de información que tiene la forma que el cuerpo físico, excepto que vincula la carne física con tu espíritu”.

Mikihiko usó la punta de sus dedos para trazar una gran “forma espectral”.

“La clave de la forma espectral es la vida o la fuerza vital. Se rumorea que los monstruos que devoran la carne y la sangre del hombre se aprovechan de la fuerza vital que obtienen de la carne”.

“En otras palabras, mientras los vampiros chupan sangre, ¿lo que realmente quieren hacer es absorber la fuerza vital?”

Mikihiko asintió con una expresión apretada ante las palabras de Erika.

“Los vampiros beben sangre y los demonios consumen carne, pero como en primer lugar no son seres materiales, solo deberían estar interesados en la fuerza vital. Al menos, si lo que los ancianos de la Magia Antigua me dijeron es verdad”.

“Basándonos en esa línea de razonamiento, no debería sorprendernos encontrarnos con un vampiro que se dedica a chupar la fuerza vital, eh.” Murmuró Tatsuya ante las palabras de Mikihiko.

En respuesta, Mikihiko asintió una vez más.

“Si puedo examinar la forma espectral de Leo, creo que debería ser capaz de averiguarlo... Hablando honestamente, nunca estuve convencido de que este incidente del vampiro fue causado por seres humanos normales. Siempre parecía algo más que simples homicidios en serie, y no solo porque no había rastros de la sangre absorbida. Mis instintos como usuario de Magia Antigua me decían eso, excepto que no tenía ninguna prueba. Debido a que era solo mi instinto, nunca le conté a todos sobre los parásitos”.

“Sin embargo, ahora que incluso Leo ha sido atacado”.

“Adelante, Mikihiko”.

Leo anuló las palabras incriminatorias de Mikihiko. Mikihiko tomó un segundo para procesar el significado detrás de esta frase concisa.

“... ¿Estás seguro?”

“Sí. En realidad, es más como si te estuviera pidiendo que lo hicieras. No hay forma de responder si no entendemos la causa”.

El significado subyacente de las palabras de Leo también contenía el perdón. En respuesta a este grado de confianza, la expresión de Mikihiko se tensó una vez más cuando llevó su mano hacia la bolsa junto a sus pies.

Blandiendo auténticos talismanes creados con tinta negra sobre papel, Mikihiko usó medios tradicionales que incluso Tatsuya veía por primera vez para verificar el estado de Leo, y no logró disimular su sorpresa.

Lo más probable es que nunca lo haya hecho en primer lugar.

“¿Cómo debería decir esto? ... Mientras que Tatsuya también está en una liga propia, Leo, ¿eres realmente humano...?”

“Oye, qué amable por tu parte”.

Era otra cosa más que una broma, pero cuando se enfrentaron con esas palabras pronunciadas en serio, ni siquiera Leo pudo reírse.

El estado de ánimo de Leo se vio claramente afectado.

Sin embargo, Mikihiko ya estaba lo suficientemente asombrado como para preocuparse de esto por completo, o más como si él no fuera capaz de detectar esto.

“No, pero... ¿Cómo es que estás despierto todavía? El mago promedio estaría inconsciente si perdiera tanta fuerza vital”.

“Dejando de lado exactamente qué es la fuerza vital, ¿también puedes detectar cuánto falta?”

La expresión de Tatsuya mostró lo impresionado que estaba, a lo que Mikihiko respondió con una sonrisa neutra y un asentimiento.

“Eso es porque la forma espectral y el cuerpo físico poseen la misma forma”.

Dado que el tamaño de la capacidad es un hecho, la cantidad original de fuerza vital en comparación con el nivel actual es más o menos detectable”.

Mikihiko entrecerró los ojos y una vez más le dio una mirada de medición a Leo.

“Con el nivel de fuerza vital de Leo actual, olvídate incluso de gatear, la persona promedio ni siquiera podría permanecer consciente. Para poder sentarse y conversar así, su capacidad física debe ser asombrosa”.

Para Mikihiko, esto fue algo que simplemente surgió.

Sin embargo, la frase “capacidad física asombrosa” golpeó a Leo en el corazón debido a sus modificaciones genéticas para aumentar la destreza física.

“Probablemente. Mi cuerpo está especialmente diseñado”.

Aun así, Leo mantuvo su sonrisa. No planeaba causar un escándalo a alguien que sin saberlo le causó daño.

“En cualquier caso, en este momento me siento impotente porque esa mujer enmascarada se comió mi fuerza vital. ¿No es así?”

Leo reprimió las fluctuaciones en su corazón y preguntó.

“Creo que sí, pero...”

“¿Pero?”

“...Como esto fue durante el combate y tienen la capacidad de consumir la fuerza vital al contacto, no debería haber ninguna razón para chupar sangre. Aunque no tengo idea de cómo pueden extraer la sangre sin dejar heridas, pero... ¿Por qué este parásito está desperdiciando tiempo y energía extra haciendo algo tan extraño como chupar sangre?”

Incluso Tatsuya no tenía respuesta a la pregunta de Mikihiko. En verdad, esto se debía a que la sangre se había perdido en lugar de ser absorbida, por lo que en este momento no tenían forma de llegar a la verdad.

Las horas de visita llegaron a su fin y cinco personas abandonaron la habitación del paciente.

Las cinco personas eran Tatsuya, Miyuki, Mikihiko, Honoka y Mizuki.

Erika dijo que tenía que encontrarse con su hermano Toshikazu y quedarse atrás.

Aunque ninguno de los cinco entendió esas palabras en su significado literal, una vez más, ninguno de ellos dijo nada.

“Hablando de eso, Mikihiko”.

“¿Hm?”

Repentinamente, Mikihiko se apartó de su conversación con Mizuki y cambió a Tatsuya.

Miyuki y Honoka flanquearon a Tatsuya.

Si bien no estaban agarradas a sus brazos, la distancia física era lo suficientemente cerca como para no hacer diferencia.

Que todos los hombres populares arden. Excepto que no había forma de saber si Mikihiko realmente estaba pensando en esto.

No importaba lo que pensara Mikihiko, era poco probable que Tatsuya le prestara atención.

“Hubo un detalle que olvidé preguntar”.

En realidad, él intencionalmente no hizo esta pregunta debido a la preocupación por los dispositivos de escucha. Incluso para alguien que no sea Mikihiko, lograr que Tatsuya soltara información peligrosa fue extremadamente difícil.

“¿Qué es?”

“En lo que respecta a criaturas como demonios y parásitos, ¿ocurren con frecuencia?”

A pesar de que no estaban comiendo, Mikihiko casi se atragantó.

Debido al tono indiferente de Tatsuya, Mikihiko escuchó con un humor casual, solo para escuchar una pregunta bastante profunda.

“...No, son realmente raros. Mientras que en las historias que existen se esconden listos para hacer el mal, en su mayoría son magos que pretenden ser criaturas oscuras. Por ejemplo, nuestro lado cree que han determinado la verdadera identidad del espíritu infame en el monte Oyama quien era un practicante de Medio Oriente”.

Inconscientemente, Mikihiko acariciaba su barbilla como alguien en una “postura pensante”.

“Las posibilidades de que un mago se encuentre con un espíritu real son aproximadamente... tal vez una de cada diez generaciones. Aun así, esos encuentros suelen ser un tropiezo accidental en nuestro mundo. Incidentes reales de espíritus que dañan a los humanos y que necesitaban el exterminio inmediato de los magos probablemente una vez cada varios cientos de años en todo el mundo”.

“Al final del día, la última vez en el registro que Japón exterminó a un espíritu verdadero fue probablemente cuando Yusanari Abe (Abe no Seimei)³ exorcizó al zorro de nueve colas hace 900 años”.

“Sin embargo, este incidente con el vampiro probablemente fue hecho por un ‘espíritu real’ o eso creo”.

“¿Crees que esto es una coincidencia?”

“Aunque no puedo decirlo con certeza, pero la probabilidad de que sea una coincidencia es prácticamente cero...”

La respuesta de Mikihiko fue extremadamente prudente.

“A medida que la historia ha progresado en la era moderna, los incidentes de actividad espiritual han ido disminuyendo. No estoy dispuesto a creer que este incidente salió de la nada”.

Después de escuchar la respuesta de Mikihiko, Tatsuya dijo suavemente

“De hecho...”

Después de asegurarse de que el grupo de Tatsuya se fue y Kaya regresó a la habitación, Leo colapsó en la cama exhausto. Aunque Erika todavía estaba en la habitación, él ya se había esforzado al máximo.

“...Meh, ya sé todo de todos modos. No hay necesidad de seguir alardeando por más tiempo, ¿de acuerdo? Ya has trabajado muy duro”.

“...Yo sólo... Lo tomaré como un honesto... cumplido.”

³ Abe no Seimei (安倍 晴明 Abe no Seimei[?]) (921?-1005?) fue un onmyōji, un especialista en onmyōdō a mediados de la Era Heian en Japón. Además de su importante papel en la historia, es una figura legendaria en el folclore japonés y ha aparecido en gran número de obras y películas.

“Fue honesto. Un cumplido, quiero decir”.

Al ver a Leo cerrar dolorosamente los ojos, Erika reveló una cálida sonrisa.

“Um, Erika-san… ¿Mi hermano realmente va a estar bien?”

Aun así, al ver esta interacción, Kaya no pareció encontrar nada gracioso.

“Sin preocupaciones. Ya llamé al mejor médico que conoce la familia Chiba. Sé que puede ser un poco difícil de entender, ya que no eres un mago, pero el agotamiento de la fuerza vital requiere más tiempo de recuperación que el agotamiento físico. Todos los procedimientos de recuperación necesarios ya se han hecho. Después, la mejor medicina sería descansar en la cama, así que estará bien después de un tiempo”.

Kaya se sacudió un poco al ser identificada como no-maga. Aunque Erika notó esto, no soltó ninguna palabra reconfortante de su boca.

“Entonces, me dirijo a donde se encuentra de mi hermano. Si necesitas algo, por favor no te detengas y llama a las enfermeras, a los subordinados de mi hermano, o incluso a mí misma”.

Erika le hizo una reverencia superficial a Kaya y se excusó de la habitación del paciente.

Leo no tenía intención de criticar a Erika por su actitud.

“Señorita, ¿puedes mostrar un poco de piedad?”

En el momento en que entró a la habitación donde estaban escuchando en la habitación de Leo, Inagaki llamó a Erika.

Aunque sus palabras fueron vagas debido a varias palabras omitidas, Erika sabía exactamente de lo que estaba hablando. Dicho eso, Erika también desprecio esas palabras.

“No planeo pedirle a ningún mago que lo cuide”.

No importa si son nuestros padres o hermanos, todos son una molestia de tratar. Creo que mantener este grado de relación aquí sería suficiente. Hablando de eso… Escuchaste lo que se dijo allí”.

La última oración fue dirigida a Toshikazu.

El hermano mayor de Erika estaba sentado de espaldas a una silla y con ambas manos detrás de la cabeza antes de quitarse bruscamente el auricular y enderezarse.

“Estuvo muy interesante. Entonces, suponiendo que el segundo hijo de la Familia Yoshida esté al tanto con su teoría, Erika, ¿qué planeas hacer?”

“Bajo estas circunstancias, no importa si está en lo cierto”.

Qué fastidio, la mirada condescendiente de Erika pareció acusar a Toshikazu mientras se sentaba en la silla.

“Incluso por un momento, ese tipo cuenta como un miembro del estilo Chiba y es uno de los nuestros. Además, lo instruí personalmente en el arte de la espada, por lo que técnicamente cuenta como mi primer discípulo. Ningún maestro podría simplemente esperar mientras su discípulo recibe una paliza”.

“Qué línea razonamiento más fría”.

“‘No hay nada allí, así que deja de pescar’. Incluso si no existen, hay muchas razones para aceptar la pelea. No tengo idea de si el vampiro es hombre o mujer, ellos fueron los únicos que cometieron la ofensa. Todo lo que tenemos que hacer en este lado es aceptar”.

Incluso su hermano Toshikazu no tenía idea de si estaba siendo sincera o prepotente.

Lo único seguro era que Erika hablaba en serio, eso es todo.



Al mismo tiempo que Tatsuya estaba visitando Leo, Lina llegó a la sucursal de Maximilian Devices en Tokyo. Aquí fue donde Michaela Honda estaba trabajando bajo el alias Mia Honda, y también uno de los terrenos de reunión secretos para la unidad de caza de los desertores.

Incluso si no fueran estudiantes de universidades mágicas, no era particularmente raro ver a estudiantes de preparatorias mágicas visitando los sitios de fabricación de CAD. Una carta de presentación de la embajada y el uniforme de la Primera Preparatoria le permitieron a Lina pasar por todas las medidas de seguridad y entrar a una sala de conferencias, donde conoció a los dos miembros de Stardust a los que rescató la noche anterior, vestidos con faldas y túnicas ajustadas.

“Mayor, gracias por la ayuda de anoche”.

“Con gusto”.

Lina hizo un gesto a los dos miembros para que se sentaran y se sentó en el sofá. Después de cerrar los ojos y respirar profundamente, un par de ojos dorados se abrieron bajo el llameante cabello rojo.

Un color completamente diferente a Angelina Kudou Shields, y un rostro completamente diferente.

Aun así, ninguno de los dos miembros de Stardust mostró sorpresa alguna en sus rostros. Esta jovencita de ojos dorados y rostro frío era Angie Sirius.

“Ustedes dos, ¿cuál es el alcance de sus heridas de la noche anterior?”

“Mayormente curado. No afectará nuestra misión”.

Al oír que los cazadores se refieren a sí mismos como simples herramientas, Lina, no, Angie Sirius frunció el ceño, pero eso solo sirvió para profundizar la cruel impresión en sus frías facciones en lugar de revelar su disgusto.

“Está bien. Entonces denme su reporte de la situación”.

“Sí, señora”.

Lina misma sintió que esas palabras no transmitían la imagen completa, pero parece que el otro lado entendió la indirecta.

“Después de seguir el rastro en *Demus Second*, utilizamos [Cast Jammer] basado en el perfil del objetivo. Sin embargo, [Cast Jammer] no tuvo ningún efecto en *Demus Second*”.

“¿Afectó la operación de [Cast Jammer]?”

“Negativo, [Cast Jammer] estaba funcionando normalmente. Según las palabras del mismo *Demus Second*, ya no necesita un CAD”.

“Ya no se necesita un CAD... ¿Eso significa que el Sargento Sullivan logró la espiritualización?”

“Estoy de acuerdo”.

En respuesta a la sospecha de Lina, los cazadores respondieron afirmativamente.

“El actual *Demus Second* no necesitaba un CAD para usar [Alteración de Trayectoria]”.

“Entonces no se usó ninguna otra magia”.

“Afirmativo”.

“Además, *Demus Second* posee capacidades físicas superiores a nuestros cuerpos aumentados”.

La destreza física de los desertores había aumentado según inteligencia. Lina le dio vueltas a esto en su cabeza antes de preguntarles a los dos la siguiente pregunta.

“¿Acaso la onda de psion del Sargento Sullivan cambió?”

“Al menos, aún podemos identificarlo”.

“Durante mi búsqueda de Sargento Sullivan, sospecho que hizo contacto con sus camaradas. Sin embargo, no pude observar la onda psion de esa persona”.

“...Mis disculpas. No detectamos ningún otro registro de onda psion aparte de la comandante y *Demus Second*”.

Lina cerró los ojos y consideró esto por un momento. “...Parece que nuestros datos antiguos ya no son confiables. De hoy en adelante, continúen vigilando a los desertores para los que haya encontrado rastro y no actúen. Esperen a que yo llegue antes de comenzar el asalto”.

“Sí, señora”.

Volviendo al saludo de los dos miembros de Stardust que se habían puesto de pie, Lina salió de la sala de conferencias.

En los pasillos de la sucursal de Tokyo de Maximilian Devices, Sylvia estaba esperando a Lina.

“Comandante, por aquí”.

Al oír esto, la pelirroja Lina de ojos dorados siguió a Sylvia. Su destino era el vestuario de las mujeres para los empleados.

“Sígame, Mayor. Ya he confirmado que las instalaciones están vacías”.

Siguiendo a Sylvia después de que ella abriera la puerta, Lina rápidamente miró alrededor del vestuario y solo dejó escapar un suspiro de alivio después de escuchar el candado en la puerta que hacía *click*.

Su cabello e iris cambiaron de color.

El pelo rojo se volvió rubio y los ojos dorados volvieron a su tono azul.

“Como se esperaba, de esta manera es mucho más fácil. En comparación con mantener [Parade] (Desfile) esconder la habilidad de usar magia es mucho más difícil”.

“Mayor, no hay tiempo. Por favor, cámbiese antes de que los empleados regresen”.

“Sylvia comenzó a molestar a la relajada Lina”.

Lina se encogió de hombros y comenzó a hablar con Sylvia mientras se cambiaba.

“Parece que la unidad de persecución tampoco pudo identificar la onda psion de la persona con la máscara blanca”.

“Realmente... Parece que hay enormes diferencias de poder individual entre los desertores”.

Tal vez era porque ya tenía una premonición de lo que Lina iba a decir, pero la voz de Sylvia no estaba muy sorprendida. Aun así, un aura de consternación colgaba de sus hombros.

“Hablando de eso, ¿por qué están atacando a los japoneses?”

Vestida con su ropa interior, Lina le preguntó a Sylvia mientras alcanzaba su uniforme de la Primera Preparatoria.

“¿Qué quieras decir con ‘por qué’?”

Incapaz de determinar el propósito de la pregunta, Sylvia respondió con otra pregunta.

“Actualmente están siendo perseguidos. Normalmente, ¿no tratarían de ocultar su presencia tanto como sea posible?”

“Ah, entonces eso es lo que quisiste decir”.

En este punto, Sylvia finalmente entendió, lo que Lina realmente quería preguntar era por qué los desertores estaban corriendo el riesgo de revelar su ubicación al atacar a los japoneses.

“No lo sé tampoco, excepto...”

“¿Excepto qué?”

Después de cambiar sus medias y en el medio de ponerse su vestido, Lina la instó a seguir hablando.

“Siento que hay una conexión entre esto y el nuevo poder que se les ha otorgado”.

“Nuevo poder... ¿Te refieres a la habilidad del vampiro para eliminar la sangre sin dejar heridas?”

Con la chaqueta exterior y el vestido en su lugar, Lina mantuvo sus preguntas mientras se ocupaba de su cabello.

“Aunque no estoy segura de sí deberíamos llamarlos vampiros, pero... Lina, ¿qué estás haciendo?”

Justo cuando Sylvia estaba tratando de organizar sus pensamientos, su mirada una vez más se desvió hacia Lina.

Solo para encontrar a la hermosa joven de cabello rubio usando ambas manos tranquilamente frente al espejo mientras hacía algunas poses.

“Eh, no, esto es...”

Al ver a su oficial superior recuperar su postura rápidamente y dejar caer la cabeza mientras se sonrojaba durante todo el camino, Sylvia solo pudo soltar un profundo suspiro.

KALEID WORD TRANSLATIONS

Capítulo 6

El oscilante puño impactó nuevamente.

Las posiciones físicas cambiaban al instante, con la ofensiva y la defensiva cambiando entre sí sin problemas.

Tatsuya y Yakumo estaban comprometidos en su combate matutino.

No solo se turnaban para golpearse el uno al otro.

Además de los ataques directos, también había ganchos de izquierda y derecha que venían de arriba y de abajo, golpes de karate y palmadas. Evitando el ataque, agarrando la extremidad del oponente extendida, todo mientras esquivaban la otra extremidad del oponente en busca de desarmar el contraataque en el último segundo posible.

En términos de artes marciales en este momento, Tatsuya y Yakumo eran iguales. Ambos extendieron sus brazos derechos.

Con ambos ataques desaparecidos simultáneamente, ambos se encontraban en una posición en la que estaban de espaldas el uno al otro.

Tatsuya cambió su centro de gravedad y levantó la pierna en la que originalmente estaba poniendo todo su peso y dio un paso adelante.

El esperado golpe en el codo no llegó.

Él se volteó.

Al igual que Tatsuya, Yakumo se había alejado a una distancia segura.

Al ver que ambos usaron el mismo tipo de ataque, ejecutaron la misma maniobra evasiva y finalmente crearon una brecha innecesaria entre los dos, la sonrisa irónica obligatoria —No había tiempo para nada de eso.

Tatsuya se acercó a Yakumo.

En términos de técnicas, los dos estaban mano a mano.

Tatsuya también mantuvo la ventaja en términos de destreza física.

La estrategia fue donde él se quedó muy atrás de Yakumo.

En resumen, el único camino hacia la victoria estaba en una corriente continua de ataques de Tatsuya para evitar darle a su oponente la oportunidad de idear cualquier estrategia. Cualquier situación que creara una separación innecesaria entre los dos dejaría a Tatsuya en una posición inevitablemente inferior. Tan

pronto como entró en el abismo y estaba preparado para mover su puño hacia adelante, Tatsuya sintió que la presencia de Yakumo vacilaba.

Tatsuya había sufrido bastante recientemente a manos de esta técnica. Reprimió a la fuerza su frustración y activó [Gram Demolition].

El cuerpo vacilante de Yakumo tembló brevemente antes de desaparecer. El [Gram Demolition] de Tatsuya logró anular la habilidad de Yakumo.

Tatsuya extendió por completo sus cinco sentidos y buscó la ubicación del verdadero cuerpo físico de Yakumo.

¿Derecha? ¿O tal vez la izquierda?

Incluso alguien tan fuerte como Yakumo no debería tener tiempo para escabullirse completamente detrás de él.

El análisis de Tatsuya fue perfecto.

Pero la hipótesis de Tatsuya era defectuosa. Yakumo estaba de pie justo en frente de él.

Estaba a treinta yardas detrás del lugar al que apuntaba Tatsuya. Solo tomó un instante aterrizar el golpe decisivo.

El puño voló una vez más.

Normalmente, esta era una distancia inalcanzable, pero Yakumo también había tenido en cuenta que, en el momento en que el golpe aterrizó, aún existía la posibilidad de una derrota mutua.

Exceptuando que, el cuerpo de Yakumo no estaba avanzando con su puño.

Completamente ciego por el puño que fue desplazado, el cuerpo de Tatsuya fue arrojado al aire por el lanzamiento de Yakumo.

“Wow, qué miedo, qué miedo”.

Yakumo finalmente liberó la articulación de Tatsuya después de arrojarlo al suelo mientras adoptaba palabras que no parecían contenerse.

Como su muñeca había sido capturada, Tatsuya no pudo ejecutar un aterrizaje perfecto. Si bien logró amortiguar el impacto y prevenir cualquier fractura, recibió el golpe y tuvo que toser un par de veces para restaurar su respiración a la normalidad.

“...Maestro, eso fue?”

Al escuchar las palabras de Tatsuya quien finalmente fue capaz de ponerse de pie, Yakumo se frotó la sien con una mano mientras respondía. —Probablemente porque se estaba limpiando el sudor.

“Hm, no pensé que pudieras atravesar mi [Mirage Cloak]”. (*Capa de Espejismos*)

Mientras su tono seguía bromeando, su asombro era muy serio. Su finta con la imagen posterior no era algo planeado con anticipación y fue una creación espontánea. Eso fue porque Yakumo nunca imaginó que Tatsuya pudiera atravesar el [Mirage Cloak].

“Entonces esa técnica se llama [Mirage Cloak], eh... Maestro, esa no es una técnica de ilusión ordinaria, ¿o sí?”

“Así que lo viste”.

Aunque Yakumo estaba suspirando de manera exagerada, no pudo ocultar el hecho de que estaba muy complacido. Lo más probable es que nunca planeó esconderlo en primer lugar.

“Tu habilidad para leer las técnicas oponentes puede ser una amenaza para tus enemigos, pero eso no significa que no haya una forma de aprovechar esto”.

“¿Cómo su ilusión anterior?”

“[Mirage Cloak] fue una técnica originalmente diseñada para protegerse contra ojos que no son de este mundo. En cuanto a su diseño... Bueno, piénsalo por tu propia cuenta. Si eres tú, deberías ser capaz de entenderlo en un instante”.

Tatsuya no le dijo a Yakumo que dejaría de desviarse por las ramas. Parte de la razón era porque estaba prohibido preguntar acerca de las técnicas de los otros, pero lo que llamó su atención aún más fue la elección de las palabras de Yakumo.

“Maestro”.

“¿Hm? ¿Qué pasa con esta expresión tan seria de repente...? Bueno, siempre eres así, pero ahora también tienes esa tenebrosa voz”.

Había una delgada línea entre el elogio y la burla al tratarse de ese comentario sobre el uso de una expresión seria, que Tatsuya finalmente decidió ignorarlo ya que no podía descifrar cuál era, lo que significaba que no hizo nada en absoluto.

De alguna manera, la expresión de Yakumo parecía menos que complacida, lo que probablemente denotaba que había tomado la decisión correcta. Además, Tatsuya no estaba de humor para caer en sus bromas.

“Antes hablabas de cosas que estaban fuera de este mundo”.

“Ah, entonces de eso se trata”.

No hubo necesidad de completar la oración a medio terminar.

Su respuesta no dejó lugar a interpretaciones erróneas, como si hubiera predicho que Tatsuya haría esta pregunta.

“Nuestros enemigos no están restringidos solo a los humanos. No es raro que algunos de ellos lleguen a un acuerdo con fuerzas más allá de este mundo”.

Si bien esta fue la respuesta esperada basada en su conversación anterior, esta respuesta fue contraria al conocimiento que ya tenía.

“Sin embargo, uno de mis amigos que es un usuario de Magia Ancestral afirma que los encuentros con espíritus reales extremadamente raros...”

Tatsuya no estaba diciendo esto porque creía en una persona más que en otra, sino porque quería una respuesta que él pudiera creer.

“Recuerdo que el amigo de Tatsuya-kun es el segundo hijo de la Familia Yoshida. Si bien sus palabras también son ciertas... En tu caso, creo que no consideraste el asunto lo suficiente”.

Yakumo se detuvo por un momento mientras hablaba. Después de recibir la solicitud de pensar las cosas un poco más a fondo, Tatsuya se sumergió en un mar de consideraciones y llegó a una solución después de un corto período de tiempo.

“Las palabras de Mikihiko son correctas, pero al mismo tiempo, imperfectas. ¿Esto es a lo que te refieres? Los encuentros reales con espíritus auténticos son extremadamente raros, pero las incursiones donde otra persona proporcionó la entrada no son tan infrecuentes, ¿verdad?”.

“Te daré la nota mínima aprobatoria”.

Como corresponde a sus palabras, la expresión de Yakumo demostraba estar lejos de ser satisfecha.

“Hm... Supongo que incluso un sabio como Tatsuya-kun sería presa del sesgo de asociación y las trampas cognitivas”.

Aparentemente, el listón estaba bastante alto y el puntaje era mucho más despiadado.

Aun así, Tatsuya sintió que era demasiado vergonzoso (y no embarazoso) que lo llamaran “sabio” y rezó para que no se repitiera.

Fue un testimonio de lo imperturbable que fue Tatsuya cuando fue alabado a pesar de su error.

Aun así, el equilibrio de Tatsuya fue dejado de lado por las siguientes palabras de Yakumo.

“Tú también deberías haber tenido un roce o dos con criaturas que no existen en este plano. Con respecto a lo que ustedes, modernos practicantes de magia llaman Magia Espiritual, ¿qué creen que usan como medio?”

Un pequeño “Oh” escapó de los labios de Tatsuya.

“Veo que conectaste los puntos. Lo que los magos modernos llaman seres espirituales son legítimamente ‘criaturas de otro mundo’”.

Este fue de hecho un punto ciego. Tatsuya se centró en Yakumo mientras continuaba explicando.

“Ah, el pensamiento consciente y la autoconciencia son ambos secundarios. Las bacterias no tienen conciencia o autoconciencia, pero pueden entrar y afectar las operaciones del cuerpo humano lo suficiente como para afectar la salud. Además, incluso tienen la capacidad incompleta de auto-rePLICARSE.

Sin embargo, incluso si no cumplen los requisitos de una ‘criatura viviente’ en el nivel intelectual, eso no es suficiente para negar que son ‘criaturas vivas’ con la capacidad de infectar el cuerpo humano”.

“¿Estás diciendo que los Seres Espirituales, nada más que cuerpos espirituales aislados removidos de los fenómenos físicos, también califican como ‘criaturas que no son de este mundo’?”.

“Estrictamente hablando, son más como criaturas que no poseen un cuerpo físico. Además, ¿alguien ha demostrado que los espíritus no poseen pensamiento propio?”

“...Es cierto que nadie ha hecho eso. Por otro lado, sé de una persona que podría”.

Además, Tatsuya había visto personalmente a ese amigo manipulando sus espíritus frente a él. En comparación con recibir órdenes y hacer que el espíritu decidiera por sí mismo, tenía más sentido que todo el proceso se incorporara dentro de la Secuencia Mágica y el espíritu poseyera conciencia propia.

“Maestro, ¿puedo hacer otra pregunta?”

“Adelante”.

“La magia moderna cree que un ‘Ser Espiritual’ es un cuerpo de información aislado dentro de la dimensión de información desde sus fenómenos naturales. Dado que se originó a partir de fenómenos naturales, es posible utilizar secuencias mágicas para recrear el efecto original. Esta es la teoría actual detrás de la Magia Espiritual”.

“Bastante. La magia moderna es realmente impresionante si es capaz de generar este tipo de teoría”.

“Entonces, para los parásitos que se adhieren a las formas espirituales de los seres humanos y causan mutaciones, ¿de dónde provienen sus cuerpos de información?”

Después de escuchar las palabras de Mikihiko, Tatsuya sospechó que los parásitos eran cuerpos de información que podían afectar la Eidos humana. La alusión de Yakumo a las bacterias y enfermedades solo sirvió para profundizar esa impresión.

“Parásitos... ¡Qué forma tan inglesa de expresarlo! Por desgracia, desconozco dónde se originan estos cuerpos de información. Dado que son capaces de afectar el espíritu humano, me imagino que provienen de un origen similar”.

“Cuerpos de información del espíritu humano...”

“Creo que, independientemente de si el monstruo viene en forma humanoide o de bestia, lo único que puede causar que las criaturas vivientes de este mundo se alteren de esa manera debe provenir de demonios que se originan de los cuerpos de información espiritual. Después, al igual que la manifestación física de estos espíritus tiene un paso en nuestro mundo y la sombra alternativa de este mundo, los demonios que se originan en el espíritu también se sitúan en el paisaje mental y el éter. La razón por la que los encuentros espirituales son poco frecuentes no es porque no existan, sino porque no estamos equipados con la capacidad de observar el espíritu humano. Si bien esta línea de pensamiento definitivamente sería una herejía a los ojos de Londres, estos son mis verdaderos sentimientos al respecto”.

Como se esperaba de una gran autoridad en Magia Antigua, ese nombre no era solo para presumir.

Había pasado mucho tiempo desde que Tatsuya pensó de esa manera.

◇ ◇ ◇

Dos días después, Leo todavía estaba confinado a la cama. La persona promedio ya estaría en un estado crítico de inconsciencia, por lo que no poder salir del hospital por tres o cuatro días se consideraba normal. Por otro lado, la gente estaría más preocupada de que él se estuviera esforzando demasiado o que fuera imprudente si realmente podía abandonar el hospital tan rápido.

Al menos, eso es lo que Tatsuya pensó.

Sin embargo, en cierto nivel, era natural que hubiera personas que no pensaran de esa manera.

“Leo-kun, ¿cómo te sientes...?”

Mizuki era precisamente el tipo que no pensaba de esa manera.

“Debería estar bien. Dijeron que no había signos de lesiones externas además de algunos hematomas, y no hay signos de fracturas o dolor interno. ¿A menos que creas que Erika está mintiendo?”

Como nota al margen, Tatsuya en realidad sospechaba que la Erika actualmente ausente era menos que sincera.

“Eso no es lo que quise decir...”

Aun así, basado en el temperamento de Mizuki, incluso si albergara tal pensamiento, no había forma de que pudiera acusar a su amiga de mentir.

Incluso si la persona en cuestión no estaba presente, rayando con eso, fue precisamente porque la persona en cuestión no estaba presente que ella evitó hablar a sus espaldas.

Además, la razón por la que Erika no estaba en el aula, antes de que comenzara la clase, no era porque estuviera cuidando a Leo en el hospital, sino simplemente porque aún no había llegado a la escuela.

Ayer, ella también entró corriendo justo antes de que sonara la campana. Hoy probablemente sería un caso similar.

“Ahora que lo mencionas, Mikihiko tampoco está aquí todavía”.

Este comentario no fue hecho con ninguna consideración previa en mente. Esto fue solo porque mientras meditaba sobre por qué Erika aún no había llegado, recordó que Mikihiko también estaba ausente.

Ante esas palabras, el rostro de Mizuki se puso un poco rígido.

Tatsuya rápidamente reprimió sus músculos faciales que estaban a punto de relajarse en una sonrisa y debatió si decir algo o permanecer indiferente. Realmente creía que lo que estaba preocupando a Mizuki no podía suceder, pero no podía juzgar si era un buen momento para abordar el tema.

“Buenos días ~”.

“Buenos días, Tatsuya-kun, Shibata-san...”

Justo cuando Tatsuya estaba desconcertado sobre qué acción tomar, Mikihiko y Erika entraron al aula con expresiones igualmente exhaustas.

Justo cuando los dos se sentaron, el monitor de la pantalla mostró la señal de que la clase había comenzado.

Durante el descanso del almuerzo ese día, Tatsuya y su grupo se comportaron un poco diferente de lo normal. En lugar de ir a la cafetería, Erika estaba desplomada sobre su escritorio. Si uno prestaba atención cuidadosamente, se podían escuchar pequeños ronquidos emanando de ella.

No había forma de tomar una siesta durante la clase porque estaban conectados a sus terminales, pero ahora estaba profundamente dormida.

Mikihiko dijo que “su cabeza estaba zumbando” e inmediatamente se fue a la enfermería después de terminar el almuerzo. Parecía que su dolor de cabeza, también era provocado por un agotamiento excesivo.

Como esperaba que esto fuera un simple cansancio, dejó todo lo relacionado con Mikihiko a Mizuki.

Entonces, en cuanto al propio Tatsuya.

“Shizuku, lo siento por llamarte tan de repente”.

“Hm, ¿qué pasa?”

“Bueno, Tatsuya-kun dijo que tenía algo que absolutamente tenía que preguntarle a Shizuku”.

Le pidió a Honoka que llamara por teléfono a Shizuku.

“Mis disculpas por llamarte a tan avanzada hora. Quería enviar un correo electrónico, pero sentí que definitivamente era necesario preguntarlo directamente”.

Incluso los dispositivos de mano más pequeños en los sistemas de comunicación modernos podían representar imágenes que eran casi como conversaciones cara a cara. La imagen que llegó a través de su dispositivo de mano personal fue Shizuku, que también estaba usando un dispositivo similar para comunicarse. Aunque solo ha sido un mes desde la última vez que se vieron, ella parecía haber madurado visiblemente un poco.

“No hay problema. Son solo las 8 PM aquí”.

La chica en la pantalla entrecerró los ojos mientras sonreía. Como de costumbre, esta era una expresión bastante vaga para leer, pero a esta altura todos sabían que esta sonrisa significaba que estaba excepcionalmente complacida.

Honoka y Miyuki miraron a sus propias terminales.

Desafortunadamente, Tatsuya había puesto a Shizuku en la pantalla principal y viceversa. Los dispositivos de mano personales diferían cuando se miraba a través de la pantalla principal o las pantallas laterales porque era difícil para este último diferenciar las expresiones faciales.

“¿Entonces qué hay de nuevo?”

“Ah, escuché de Honoka que también tienes un incidente de vampiros cerca de ti. Si conoces algún detalle, me preguntaba si podrías divulgarlos”.

La cabeza de Shizuku se inclinó hacia un lado en la pantalla.

“¿...Shizuku?”

“...Ah, ese incidente. Um, ¿realmente están apareciendo vampiros en Japón?”

“¿Qué quieres decir con Japón?”

“Todavía lo están tratando como una leyenda urbana aquí en Estados Unidos. Por lo menos, no hay cobertura de medios”.

Aunque algo diferente de los mitos o las criaturas de los libros de cuentos, los vampiros, o más exactamente los demonios devoradores de espíritus, realmente existieron.

Dado que una entidad real fue relegada a un rumor, algo debe estar en marcha. En otras palabras, este incidente todavía estaba siendo censurado en la USNA. Ahora existía la posibilidad de que la red fuera más compleja de lo que había imaginado previamente.

“Los rumores están bien. Me gustaría saber todo lo que sea posible”.

Shizuku se inclinó hacia adelante en la pantalla.

Tatsuya deliberó sobre cuándo informar a la joven en suelo extranjero por sí misma que uno de sus amigos había sido atacado.

“Leo fue atacado por lo que sospechamos es un vampiro”.

Sin embargo, inmediatamente tomó la decisión de que ella tenía derecho a saber.

Al final, el propio Tatsuya no pudo explicar por qué hizo esa elección.

Esto pudo haber sido una respuesta instintiva.

También podría haber sentido una premonición de lo que está por venir.

“Afortunadamente, su vida no está en peligro”.

“¿Cómo...?”

Aun así, hacer que la persona del otro lado de la línea se preocupe innecesariamente no era su intención original. Aunque Tatsuya añadió otra oración para ayudar a aliviar el shock que sintió Shizuku, desafortunadamente parecieron caer en oídos sordos.

“No, él está realmente bien, así que por favor no tengas esa expresión, ¿de acuerdo? Leo usó su propia fuerza para repeler al perpetrador, excepto que fue levemente herido por los poderes especiales de su oponente durante ese tiempo. Actualmente, él está descansando en el hospital”.

Las “palabras reconfortantes” de Tatsuya no fueron ni remotamente útiles. Cualquier palabra como el descanso en el hospital solo avivaría su inquietud si ella tuviera una constitución más débil.

“¿De verdad? Gracias a dios...”

Afortunadamente, Shizuku no era del tipo que se hundía en la desesperación o el pesimismo. Al ver a Tatsuya asentir enérgicamente, suspiró aliviada.

Este tipo de conversación solo se puede lograr a través de video llamadas.

“Ya veo, así que es por eso que Tatsuya-kun quiere saber algo relacionado con esto”.

Tatsuya una vez más dio una respuesta afirmativa a las palabras de Shizuku que no fueron formuladas como una pregunta.

“Sin embargo, eso no significa que tengas que investigar demasiado”.

Antes de todo eso, absolutamente tenía que recordarle sobre esto.

“Si pudieras decirme algo de lo que estés enterada, sería más que suficiente”.

“Pero crees que hay pistas en Estados Unidos, ¿verdad?”

“Más como buscar pistas. Para ser honesto, creo que el autor del incidente de los vampiros vino de Estados Unidos”.

Shizuku no fue la única a quien su asombro la traicionó.

Ni siquiera le había informado a Honoka o incluso a Miyuki sobre este salto en la lógica.

“Es por eso que no quiero que hagas nada peligroso, Shizuku. Definitivamente evita hacer cualquier cosa que te ponga en riesgo. La información de tu parte no es absolutamente crítica”.

“...Entiendo, no voy a actuar precipitadamente. Entonces, por favor espérenme sin grandes expectativas”.

“Quería preguntar, por si acaso, me estás diciendo que no tenga muchas esperanzas sobre la recopilación de información y sobre no sobre hacer nada imprudente, ¿lo entendí bien?”

“Por supuesto”.

Aunque Shizuku no era ni una idiota ni una tonta torpe, todavía no se sentía completamente a gusto incluso después de recordárselo una vez más.



Según la inteligencia de Erika, actualmente había tres grupos organizados que tomaban medidas contra los incidentes seriales de vampiros en la ciudad.

El primer grupo estaba encabezado por la policía, y la unidad de investigación especial del departamento de policía (básicamente la versión japonesa del FBI) lideraba varias divisiones de seguridad pública en la búsqueda.

El segundo grupo de investigación estaba compuesto por miembros de los Diez Clanes Maestros, con el Clan Saegusa liderando y el Clan Juumonji justo detrás de ellos. Tenían el respaldo de Asuntos Internos (Departamento de Control de Información del Gabinete) y ayudaron a la policía en un papel medio oficial, medio civil. La única diferencia era que, contrariamente a lo normal, la mitad “civil” tenía la ventaja.

El tercer grupo era el equipo privado de vigilantes montado por la familia Chiba con la famosa autoridad en Magia Antigua, la familia Yoshida, como apoyo.

En resumen, este era el grupo de Erika.

“¿No sería mejor si uniéramos fuerzas con nuestros senpai...?”

La naturaleza de la solicitud de la Familia Chiba a la Familia Yoshida podría no ser un asunto oficial, pero la solicitud de ayuda en sí fue completamente de acuerdo a las reglas. En respuesta, Mikihiko fue nombrado inmediatamente como enlace, a lo que expresó la misma pregunta por décima vez desde ayer.

Sobra decir que el objetivo de sus palabras era su compañera en esta operación, Erika.

“Creo que seríamos mucho más eficientes si tuviéramos acceso al Sistema Anti-Delitos provisto por las cámaras de la calle”.

“Sin preocupaciones. Incluso la policía, que tiene el mayor acceso a los sistemas de vigilancia, todavía tiene que olfatear un rastro”.

“Entonces, en términos de mano de obra, creo que cooperar sería mucho mejor que tratar de hacerlo solos”.

“Por eso te pedí ayuda, ¿verdad?”

“No, no solo nosotros dos...”

Mikihiko se dio por vencido tratando de convencer al rápido avance de Erika y rápidamente corrió para alcanzarla hasta que estuvo de pie hombro con hombro.

“No vamos a encontrar nada con solo dar vueltas inútilmente...”

Estaba hablando solo, pero también gruñendo al mismo tiempo. Este no era un volumen que Erika pudiera escuchar, pero probablemente lo ignoraría aunque lo escuchara. Esta fue la verdadera razón por la cual Mikihiko fue seleccionado como compañero de Erika.

La familia Yoshida era un clan que transmitía la magia antigua en el estilo sintoísta. Aunque no era exactamente lo mismo que las familias especializadas como Onmyouji, su destreza en el combate era sobresaliente. Originalmente, este país permitía un fácil acceso a las técnicas entre los grupos religiosos. Basado en el hecho de que un grupo de estilo sintoísta usaba talismanes como medio, no eran muy estrictos con las reglas.

Después de escuchar de Toshikazu que un enfoque científico de la investigación arrojó pocos resultados, el comandante de la familia Chiba (el padre de Toshikazu y Erika) decidió confiar en las habilidades en las que los usuarios de Magia Antigua se destacaron y solicitó formalmente la cooperación del jefe de la Familia Yoshida, que era su mejor amigo entre las familias usuarias de la Magia Antigua. Como el jefe

de la familia Chiba era un “misterioso excéntrico” que se autodenominaba un “inútil sin habilidades mágicas”, probablemente sintió que “lo oculto solo podía combatirse con poderes sobrenaturales”.

Basado en eso, Mikihiko no acompañaba a Erika como guía, sino como un “adivino”.

“Miki, ¿hacia dónde?”

Al detenerse en la intersección, Erika giró su cabeza para preguntar.

Realmente desearía que pudieras ser un poco más educada, Mikihiko suspiró mentalmente mientras colocaba el bastón de madera de tres pies de largo a menos de un metro, en el camino. Como nota al margen, después de que Lina decidió subirse al carro de llamarlo “Miki”, oficialmente se dio por vencido tratando de cambiarlo.

En lugar de llamarlo bastón de madera, era más bien como un gran bastón de madera cubierto de pequeños caracteres escritos en tinta negra. La punta del bastón era casi perfectamente redonda.

Puso una mano en un extremo para asegurarse de que estaba derecho y luego le quitó ligeramente la mano.

Si bien era perpendicular al suelo, el suelo debajo era pavimento, por lo que un simple bastón de madera no podría atravesarlo.

Sin embargo, sin puentes de apoyo, el bastón de madera de Mikihiko estaba de pie en el suelo.

Mikihiko retrocedió tres pasos y rápidamente se giró. En el momento en que su cuerpo se dio vuelta, el bastón de madera perdió su soporte invisible y cayó al suelo.

Con un sonido triste, rodó por el suelo y finalmente señaló hacia la derecha de la intersección.

“De esta manera...”

Erika caminó en la dirección en que apuntaba el bastón. Olvidándose de esperar a su compañero, ni siquiera se molestó en voltear a verlo.

Mikihiko se rio con ironía y tomó su bastón antes de apresurarse detrás de Erika. Justo antes de alcanzarla, de repente pareció recordar algo y sacó un terminal de información de su bolsillo interior. La terminal se configuró en emisión. Después de verificar que la terminal aún estaba transmitiendo su posición a la red de información que registró de antemano, la volvió a guardar en su bolsillo.

La sonrisa irónica desapareció del rostro de Mikihiko. Tenía la premonición de que se estaban acercando a su objetivo.

Redujo la velocidad después de estar un paso detrás de Erika y sacó la terminal otra vez mientras mantenía la misma distancia.

Llamó a una lista de nombres de ubicación. Después de arrastrar otra entrada nueva a la lista, Mikihiko guardó su terminal y caminó junto a Erika mientras avanzaban.



Llevaba un gran abrigo y un sombrero. Debajo del sombrero, había una tela gris con un patrón de murciélagos negros que le cubría toda la cara. Charles Sullivan, el que había recibido el nombre de *Demus Second* dentro de STARS, estaba usando todas sus fuerzas para huir por su vida.

Sin embargo, no importa cómo lo intentara, no podía escapar de la persecución. El cazador que lo perseguía no era de Stardust, sino un verdugo que llevaba el nombre de la estrella más brillante en el cielo nocturno.

Un mago con cabello rojo llameante y ojos dorados perseguía a Sullivan. Después de transformarse en Angie Sirius, Lina ya había estado inmersa en el ruido Psion varias veces. Cada vez, sentía que iba a perder el rastro de Sullivan,

“Comandante, tome la siguiente a la derecha”.

Pero la ubicación de Sullivan estaba completamente cerrada por el radar de psion que emanaba de la base móvil disfrazada de furgoneta de noticias. En este sentido, la USNA estaba un paso adelante de Japón. Con un radar que podría identificar las firmas de onda psion, era prácticamente imposible escapar desde dentro del rango de sensibilidad del radar. Además, mientras Lina tuviera esa pequeña emisora de señales de radar de mano, huir fuera del alcance del radar era imposible.

“Clara, Rachel, cambien a la vanguardia de Sullivan”.

Lina llamó a su transmisor. Clara y Rachel eran los apodos de los cazadores Q y R, respectivamente. Lina, que odiaba referirse a las personas como letras, fue quien les dio esos nombres, ya que no eran sus verdaderos nombres. Por supuesto, “Clara” se deletreaba con una “C” y no una “Q”, pero a Lina realmente no le importaba ya que solo eran apodos.

Veinte o treinta metros más adelante, el aura de combate mágico se intensificó. Los dos estaban actualmente estancando el progreso de Sullivan. Para Lina, esta era la simple cuestión de un solo paso. Ella ahora estaba completamente en control de la posición de Sullivan.

A pesar de la hora tardía, las calles no estaban completamente desprovistas de gente. Aun así, esto no justificó ninguna preocupación cuando se dedicaban a perseguirlo a una velocidad que rivalizaba con la de una motocicleta. Ignorando por completo la posibilidad de intervención policial, Lina sacó una cuchilla pequeña: una daga.

Tal vez fue porque sus movimientos fueron demasiado rápidos, pero los peatones dispersos no se dieron cuenta de la daga. Además, la coloración oscura y opaca habría pasado desapercibida incluso a plena luz del día. Sin molestar en ocultar su intención, Lina arrojó la daga hacia adelante.

Esta daga era un CAD con armamento integrado. Solo el acto de tirar fue suficiente para activar la magia tipo movimiento, lo que permite al usuario manipular la trayectoria arrojada hacia el objetivo. La daga que Lina arrojó cambió de dirección varias veces en el aire antes de volar hacia la espalda de Sullivan.

Un instante antes de que la daga comenzara su vuelo, Sullivan era consciente de que incluso la capacidad física de un vampiro no era suficiente para esquivar la daga a tiempo. Sin embargo, si fuera él mismo con sus poderes mentales restaurados, entonces debería poder lanzar la [Alteración de Trayectoria] a tiempo.

Con esto en mente, Sullivan se concentró en la daga e intentó hacerla volar hacia uno de los cazadores que se acercaba a su espalda. *Fuego amigo*, Sullivan susurró mentalmente. Ahora, la daga en el camino debería haber alterado su trayectoria de vuelo hacia la espalda del cazador.

Un grito silencioso de terror resbaló de los labios de Sullivan.

Su habilidad [Alteración de Trayectoria] no pudo afectar por completo la magia de movimiento de Lina.

La diferencia en la fuerza de interferencia fue simplemente demasiado grande.

Sabiendo que su habilidad era ineficaz, Sullivan levantó apresuradamente su brazo derecho, donde la daga de Lina se hundió profundamente.

El cuerpo de Sullivan se puso rígido.

Su espalda fue cortada por el cuchillo de combate de R. Esas habrían sido lesiones fatales en una persona normal.

Sin embargo, Sullivan se giró y envió a R y su cuchillo de combate a volar.

En este momento, apareció el mago enmascarado. Esas pupilas doradas asomándose por detrás de la máscara vieron los ojos de Sullivan. Lina se detuvo y levantó una pistola.

De repente, las sombras en la calle lanzaron un ataque eléctrico hacia Lina.

Q, R y Lina fueron completamente incapaces de detectar este ataque sorpresa antes de que surgiera.

No obstante, la descarga eléctrica simplemente emitió un destello y se desvaneció antes de entrar en contacto con el cuerpo de Lina.

Lina había activado la interrupción de área amplia por reflejo y anuló la magia del vampiro.

Durante este tiempo, el brazo de Lina permaneció en su posición de apuntar. El cañón apuntaba directamente al corazón de Sullivan.

El dedo de Lina apretó el gatillo.

La bala, reforzada por [Data Fortification] (*Fortificación de Datos*), ignoró toda apariencia de defensa y destruyó el corazón de Sullivan.

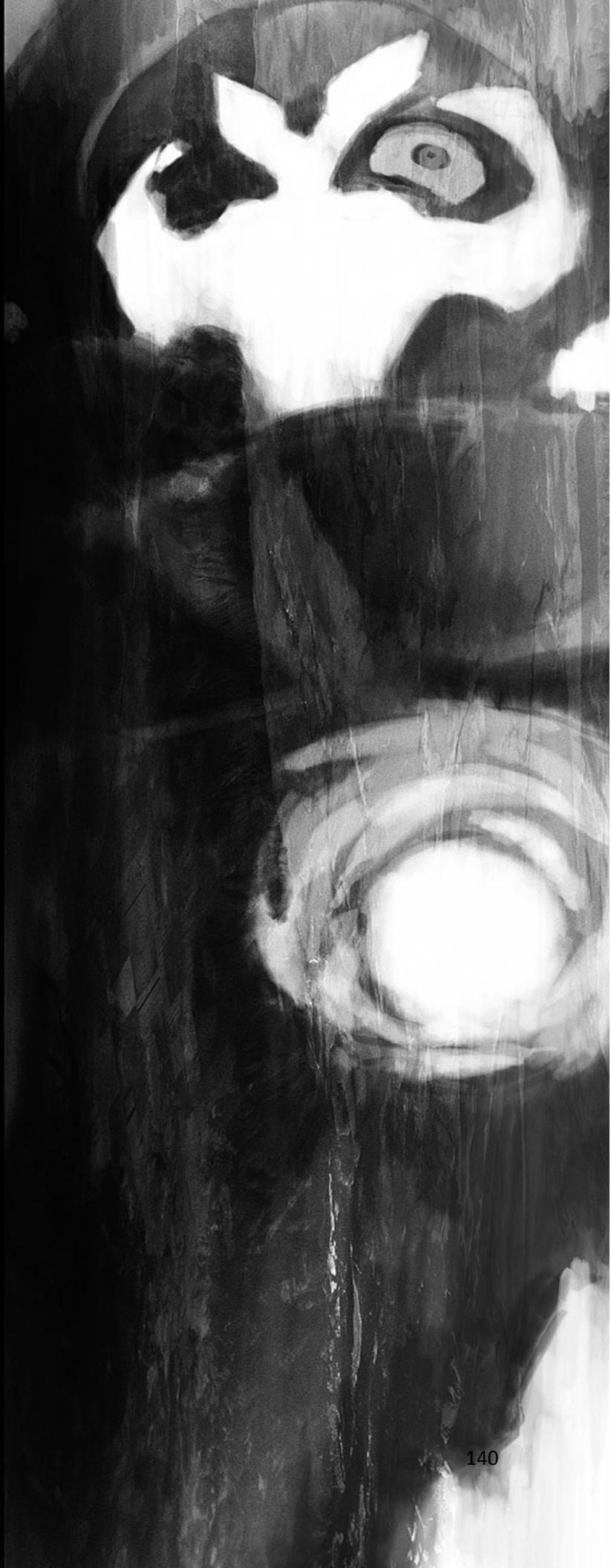
Lina no se sumergió en este éxito por mucho tiempo y comenzó a moverse nuevamente.

Sus ojos estaban fijos en la imagen que desaparecía gradualmente del vampiro que lanzó el ataque eléctrico.



Después, usaron la adivinación para señalar el camino dos veces más. Después de caminar durante aproximadamente diez minutos, los dos escucharon el ligero sonido de pasos corriendo. Eran los sonidos de los zapatos de tacón de goma, con un par de pasos huyendo y los otros pasos en su búsqueda.

Uno de ellos probablemente fue un fugitivo, el otro probablemente el perseguidor.



Los dos intercambiaron una mirada.

Luego, sin intercambiar ninguna señal adicional, los dos salieron corriendo.

Con diferentes métodos, llegaron a la misma conclusión.

—Lo encontraron.

Erika estaba un poco más adelante, con Mikihiko pisándole los talones.

Mientras corría, Erika metió la mano en la delgada y larga caja que llevaba sobre su espalda y sacó una espada que no estaba envainada. Como reemplazo de la cuchilla, todo el cuerpo de la cuchilla estaba cubierto de grabados, dado que era un arma forjada por la Familia Isori.

Este fue un regalo de Isori Kei para Erika como un reemplazo para el Orochimaru que era demasiado vistoso. Si bien no puede alcanzar el mismo poder que Orochimaru, todavía estaba equipado con la capacidad de ejecutar [Cancelación de Inercia].

En el otro lado, Mikihiko sostenía un bastón de madera en su mano derecha mientras que a su izquierda, fue lanzada rápidamente hacia afuera. Disparando fuera de su manga, un objeto parecido a un abanico estaba ahora apretado en su mano izquierda. El objeto que parecía ser un abanico de hierro contenía delgadas tiras de metal parecidas al papel unidas en un solo punto. Cada tira de metal estaba cubierta de grabados de diversos conjuros y formaciones. Estas tiras se combinaron para formar el abanico de hierro que fue el conductor para los psions favorecidos por los practicantes de magia antigua. La borla que se extendía desde el abanico llegaba hasta la manga, donde estaba conectada al dispositivo que contenía la secuencia de activación que reemplazaba cualquier necesidad de unconjuro o talismán.

Este fue también un tipo de CAD. Basado en la sugerencia de Tatsuya y en las propias ideas de Mikihiko, este nuevo tipo de CAD complementario de Magia Antigua fue diseñado para simplificar el proceso en el que la Magia Antigua utiliza conjuros y talismanes.

Los dos se prepararon para el combate inmediato y se acercaron a los pasos. Ocasionalmente, su ritmo se alteró mucho porque ambos estaban preparados para la batalla.

Incluso sin esto, el ritmo de Erika era aún más rápido. Tomando un atajo a lo largo del pequeño callejón entre la ordenada hilera de edificios y entrando en el pequeño parque utilizado para fines de evacuación (en realidad, más como el lugar de evacuación temporal durante los desastres), los dos finalmente vieron su objetivo.

Había dos figuras humanoides chocando entre sí. Uno llevaba un gran abrigo y un sombrero para ocultar cualquier rastro de rasgos faciales y físicos, y el otro llevaba una máscara para cubrir todo lo que rodeaba sus ojos.

Ambos parecían ser femeninos.

“Miki, cuídate del que está con el abrigo. ¡Me encargaré de la máscara!”

Basado en el testimonio de Leo, el del abrigo y el sombrero parecía el culpable, pero alguien que caminaba en la oscuridad de la noche usando una máscara para ocultar sus rasgos también era muy

sospechoso. Lo que es más importante, incluso desde lejos, la hoja grande en la mano de la mujer, así como su manejo experto de dicha arma, provocó que la sensación de cautela de Erika aumentara.

Sin recurrir a la Magia de Aceleración Personal y solo confiando en la Magia de Grabado que aumentaba la fuerza de la hoja, Erika atacó a la mujer enmascarada. Aunque la magia no se usó para acelerar la espada, este era todavía un grado de velocidad que era extremadamente difícil de evitar solo con habilidades físicas, excepto por una pequeña porción de personas que eran maestros en artes marciales.

El manejo de esa espada por parte de esa mujer fue sin duda de primer nivel, pero no lo suficientemente alto como para ser calificado como maestro.

Por lo tanto, incluso si ella pudiera tomar uno de los golpes de Erika, no debería haber forma de esquivarlo. —Si ella fuera solo un ser humano normal, claro está.

Un destello de luz.

La espada de Erika no tocaba más que aire mientras su objetivo ya se había movido a tres metros de ella.

La luz no era una manifestación física, sino la luz psion que acompañaba la activación de la magia. Después de darse cuenta de eso, Erika no se inmutó por completo de que su ataque hubiera sido esquivado.

El único detalle digno de sorpresa era la velocidad de la magia.

Erika estaba segura de que su oponente no había detectado su ataque hasta un instante antes del golpe. En resumen, durante el breve instante en que levantó su espada y golpeó, su oponente pudo seleccionar una respuesta mágica, activarla y evitar el ataque con éxito.

El mago enmascarado se movió a un lugar directamente debajo de la lámpara de la calle. No había forma de saber, ni era necesario, si a la persona en cuestión realmente le importaba que alguien presenciara su forma.

Esa imagen estaba profundamente grabada en los ojos y la conciencia de Erika.

Lo que llamó su atención no fueron las características femeninas seductoras que se burlaban de la capacidad de la máscara para ocultarlas, ni el cuerpo físico bien tonificado que se podía ver a pesar de la ropa pesada, sino el color de su cabello iluminado por las luces de la calle. Era un color que uno no podía asociar con los seres humanos, un color profano.

Lo suficientemente oscuro para confundirse con el negro, un pelo del rojo más oscuro.

Junto con las pupilas doradas que parecían dibujadas, mirando a través de los agujeros de la máscara.

“— ¡Agresor!”

Su entrenamiento de esgrima se activó como reflejo y se liberó de ese desenfunde. Erika se recuperó y amplió su visión, al ver todo el cuerpo del mago enmascarado. Erika redujo el trabajo de preparación al mínimo y corrió hacia esa mujer.

Ella eligió no usar ninguna Magia de [Refuerzo]. Contra este tipo de oponente, la asistencia mágica solo lograría el efecto contrario, por lo que confió en sus instintos y en su capacidad de leer a su oponente.

Sin usar magia, Erika usó una velocidad que era definitivamente mágica para acercarse a esa mujer.

En el lado del Mago enmascarado, se podían ver indicios de vacilación. Sin ninguna vacilación, Erika levantó su espada.

El mago enmascarado lanzó otra luz mágica. Esto no fue Magia de aceleración personal, sino una Magia de tipo de movimiento personal.

Erika no tenía la capacidad de identificar la Secuencia Mágica en un instante.

En comparación, Erika poseía una serie de ojos penetrantes dignos de un espadachín bien entrenado.

Sin esperar a que su oponente terminara el movimiento, ella ya había determinado la dirección del movimiento en ese mismo instante y alteró el camino de su espada.

Su espada giró bruscamente en dirección contraria y pasó sobre el oscuro cabello carmesí de la extraña mujer que estaba directamente debajo de la dirección de su swing.

Activó la capacidad de cancelar la inercia y frenó su swing.

La mujer enmascarada mantuvo su posición de cuclillas y saltó horizontalmente.

Erika detuvo a la fuerza sus pasos. Justo ante ella, una daga golpeó el suelo.

Aprovechando la inactividad de Erika, la mujer enmascarada se levantó de una rodilla.

Las trenzas de color rojo oscuro fluctuaban violentamente.

La espada sin filo de Erika había cortado a través de la banda para la cabeza, deteniendo el cabello de la mujer enmascarada solo con la velocidad.

Los hilos dispersos estaban a la altura del pecho. El viento ligero hizo que su cabello revoloteara, dando un ambiente totalmente profano a su apariencia.

(Si su piel también fuera negra, sería como si Kali⁴ hubiese renacido...) Después de considerar esto brevemente, Erika mantuvo la guardia alta mientras examinaba atentamente a su oponente estancado. Su apariencia puede parecer una broma, pero sus habilidades eran indiscutiblemente de primera clase. En cuanto a su habilidad mágica, en este momento, fue suficiente para calificarla más allá de la primera clase. El espíritu competitivo de Erika le dijo que a este ritmo, ella perdería la iniciativa y se vería obligada a defenderse, lo que culminaría en una aplastante derrota que estaba más allá de lo imaginable.

El resultado podría ser fatal si ella pasaba por alto cualquier oportunidad. Afortunadamente, la mujer parecía estar bastante distraída. Incluso con este tenso enfrentamiento con Erika, su máxima atención aún estaba dirigida hacia el “vampiro”.

La mujer estaba actuando por su cuenta, mientras que Erika y Mikihiko se movieron en equipo.

⁴ En el marco del hinduismo, **Kali** es una de las diosas principales. Es la shakti (o ‘energía’) del dios masculino Shiva, y es considerada una de sus consortes.

Erika concluyó que había una oportunidad que explotar allí. La mujer enmascarada y la joven espadachín se miraron. Detrás de Erika, se escuchó el rugido de un trueno.

Las pupilas doradas se alejaron de Erika.

En ese instante, Erika balanceó su espada hacia adelante.

Detrás de él llegó el sonido del viento impetuoso.

Mikihiko entendió perfectamente cuán capaces eran las técnicas de Erika. A pesar de que no estaba entrenado formalmente en el manejo de la espada, la magia antigua y las artes marciales tradicionales estaban profundamente entrelazadas hasta el punto de que era casi un conocimiento general.

Dentro de la familia Chiba, no era una exageración decir que las habilidades de Erika eran inferiores a su padre y sus hermanos mayores. Sin embargo, en términos de esgrima pura, ella ya había superado la técnica de su padre y estaba persiguiendo a su segundo hermano quien era considerado un genio.

Y contra la cuchillada de Erika, su oponente esquivó ese ataque en lugar de recibir el golpe. Basado solo en esto, el oponente al que Erika se enfrentaba no era un don nadie. Sin embargo—

...El que está aquí tampoco es fácil de vencer.

No había ninguna posibilidad de que él ofreciera ayuda.

El oponente que se enfrentó a él fue justo como Leo había descrito: sombrero desgastado, máscara de tela blanca, abrigo largo.

Ella no sostenía un arma, aunque podría estar ocultando una. Aun así, esto fue suficiente para constituir una amenaza.

El cuerpo de Leo no contenía ninguna herida salvo algunos hematomas ordinarios. No hubo signos de laceraciones o quemaduras. En otras palabras, Mikihiko creía que su oponente no utilizó fuego, trueno o espadas contra Leo durante su pelea.

Cualquier arma involucrada tendría que ser una herramienta contundente. De lo contrario, ella podría haber recurrido a sus puños.

Hasta ahora, los ángulos de ataque estaban dentro de sus parámetros predichos.

Dicho eso, si algo escapaba a su atención, tendría que ser la velocidad y la fuerza extravagantes del enemigo.

Restringido a la Magia de Fortificación, Leo era un practicante de primera clase.

La vampira femenina —Mikihiko asignó a su oponente un género por el bien de la simplicidad— giró su puño hacia Mikihiko. Los guantes gruesos usados sobre las manos le impedían infligir heridas externas, pero a cambio, podían dar golpes contundentes a los órganos internos de un oponente.

Como era de esperar, Mikihiko extendió su abanico de hierro (CAD compuesto) y tocó las tiras de metal con un dedo.

[Wataboshi] (Estrella de Algodón)

Invocando el hechizo sin sonido, los psions activados pasaron a lo largo de la yema del dedo y activaron el hechizo.

El puño demoníaco estaba acompañado por un viento impetuoso. Incluso a través del abrigo, esa muñeca esbelta contenía un poder inimaginable y poseía una velocidad casi sónica.

Aunque Mikihiko había obtenido habilidades físicas superiores gracias a un intenso entrenamiento, todavía no había manera de que pudiera evitar un golpe que viajara a la velocidad del sonido dentro de ese marco de tiempo.

—Un bloque de aire comprimido corrió hacia Mikihiko antes de que llegara el golpe físico.

—Atrapado a lo largo del viento, el cuerpo de Mikihiko flotaba ligeramente. Evitó la trayectoria del puño moviéndose con el flujo de aire.

Inmediatamente después del flujo de aire, el golpe se cerró. Esta fue la aplicación del concepto de Magia antigua [Montar el viento] al combinar la anulación de la gravedad y la inercia en la alteración de los fenómenos.

Mikihiko se movió al costado de su oponente y al mismo tiempo aterrizó ya que el efecto se desvaneció, agitó el bastón que sostenía en su mano derecha hacia arriba en la muñeca derecha extendida de su enemigo, apuntando a la articulación.

Originalmente con la intención de romper la muñeca con el golpe descendente, el bastón se rompió en dos con un sonido seco.

Inconscientemente sintió el adormecimiento viajando a lo largo del bastón de regreso a su mano, mientras que la otra mitad lo impulsó a soltar el bastón roto.

¿”Una barrera”? ¿O es esto “marchitarse”?

Mikihiko saltó proactivamente hacia atrás para evitar el corte de karate, y de inmediato sacó una daga arrojadiza de su bolsillo oculto. Lanzó lo que solo podría llamarse una pequeña cuchilla arrojadiza hacia la muñeca extendida de su oponente.

Desafortunadamente, la cuchilla pequeña solo hizo un agujero en el abrigo y no pudo perforar más antes de rebotar hacia atrás.

“Una barrera”, eh!

No hubo ningún signo de activación mágica en respuesta a la daga arrojada, lo que significaba que su oponente normalmente se rodeaba con un campo repelente de proyectiles. El análisis de Mikihiko lo llevó a creer que el poder poco común detrás de esos golpes y cuchilladas probablemente también estaba vinculado a esta barrera.

En ese caso...

Movió su dedo y abrió la primera tira de metal que había sido sellada previamente.

En la ranura más accesible, había preparado el hechizo más complejo.

Dentro del conocimiento de Mikihiko, no había una técnica mágica lo suficientemente compleja como para crear una barrera que bloqueara la materia física y la energía mágica.

Aunque la posibilidad de que haya múltiples barreras involucradas definitivamente no era cero, todavía era digno de ponerla a prueba.

[Thunder Child] (Relámpago Joven)

[Thunder Child], o más tradicionalmente conocido como [Thunder Spawn] (*Trueno*), era una magia que recreaba un rayo de pequeña escala en un espacio pequeño.

Esta era solo una imitación inferior de la verdadera magia que realmente manipulaba las nubes, [Nube de Truenos], pero su descarga y voltaje eran igual de potentes.

Un rugido de destrucción resonó a través del cielo y aceleró sobre él mismo hacia el otro extremo donde yacía sobre la cabeza del vampiro y soltó la electricidad. En el instante en que la magia se activó, un golpe ya estaba predeterminado. Electricidad alojada en la cabeza del vampiro a 100 millones de metros por segundo.

El sonido resultante solo podría describirse como una bestia aullando de dolor. Rápidamente, la voz cambió a una voz masculina más apropiada. La luz que impregnaba al objetivo después del ataque fue transferida a las manos de la vampira mientras sostenía su cabeza. Sus dedos temblaban haciendo ruido y soltaban chispas. Allí, la electricidad en cantidades excesivas de lo que Mikihiko produjo se estaba reuniendo.

[;Magia de Dispersion!] (;

La extracción de electrones de un objeto era una de las técnicas en los Cuatro tipos principales y ocho sistemas, y era una técnica fundamental en la magia de dispersión. Como parte de los “fenómenos” los electrones se reemplazaron, la magia de dispersión fue capaz de canalizar mayores cantidades de electricidad en comparación con las habilidades eléctricas de la magia antigua.

La electricidad se descarriló cuando intentó golpear a Mikihiko mientras rodaba hacia atrás para evitar el golpe.

Al comparar la magia de dispersión de la magia moderna con la magia eléctrica de la magia antigua, el poder de la primera era mayor a costa de un menor control. Mikihiko solo pudo evitar el primer golpe gracias a esto. Aun así, cuando literalmente se enfrentó a un poder que se movía a la velocidad de la electricidad en este rango, Mikihiko no estaba seguro de poder seguir esquivando para siempre.

Mikihiko lamentó su error inconsciente al dejar un aspecto del ataque de su oponente sin explicación mientras comenzaba a diseñar magia defensiva. Mikihiko no estaba tratando de igualar su poder y simplemente trató de crear un bloque denso de aire como un escudo mágico.

Sin embargo, este era un estado donde su oponente ya había lanzado magia.

De alguna manera, ella logró lanzar magia sin recurrir a Secuencias de Activación y no había signos de que los hechizos se debilitaran.

En resumen, esto fue una verdadera magia.

No hay tiempo—.

Mikihiko ya se había enfrentado a su situación desesperada, pero ese futuro condenado no se cumplió.

—Fue como si una tormenta hubiera extinguido la llama de una vela.

—Un disparo del cuerpo de información psion desapareció junto con la electricidad en la mano del vampiro.

La mujer enmascarada levantó su brazo izquierdo para bloquear la espada oscilante hacia abajo de Erika.

Acompañado por un sonido sordo, el impacto no logró dar la impresión de una fractura ósea o trituración a través de la carne. Probablemente haya una armadura ligera de cuerpo compuesta de metal o amortiguación, algo así como un brazalete involucrado.

Incluso si no había un intento de asesinato involucrado, Erika no mostró ninguna piedad.

Su oponente sostenía un arma en su mano derecha. Incluso si la máscara de su oponente fuera hilarante, se había sometido a un riguroso entrenamiento como personal de combate y no simplemente como un Mago. —La serenidad impregnaba cada centímetro de la conciencia de Erika mientras deseaba que su cuerpo exprimiera una onza extra de poder.

El brazalete que se acercaba al mentón se hundió, solo porque la hoja que golpeaba hacia abajo había sido retraída.

Antes de que la muñeca que sostenía el arma pudiera levantarse, Erika se movió hacia el flanco izquierdo de su oponente.

Medio golpe antes de que el arma levantada pudiera ser apuntada, Erika ya había golpeado el arma.

Gracias a la naturaleza supresora del silenciador, el disparo fue muy ligero.

La mujer enmascarada extendió su mano izquierda hacia el rostro de Erika.

Ella formó un círculo con su pulgar y su dedo medio.

Ante su mano abierta, una pequeña bola de electricidad bailaba alrededor. Erika activó automáticamente la magia de aceleración personal.

Su cuerpo alcanzó un grado de movimiento que superó el sentido común.

Retirándose para evitar la bola eléctrica, Erika se abalanzó sobre los ojos del Mago antes de que el cañón pudiera apuntar hacia ella.

La tengo, pensó Erika.

Justo cuando este pensamiento cruzó por su mente y cuando Erika se acercó a la distancia de su espada,

Fue golpeada por una fuerza repentina que se elevó desde el nivel de los pies y solo fue consciente de lo que había sucedido en el momento siguiente.

El impacto hizo que su conciencia aflojara su agarre sobre la espada por un instante.

Erika recuperó su equilibrio inmediatamente.

Sin embargo, su oponente no pudo aprovechar la apertura para un ataque continuo.

El mago enmascarado presionó su hombro derecho con su mano izquierda. Tal vez era magia de tipo aceleración o tipo movimiento, pero antes de que su oponente la derrotara, Erika logró conectar un golpe brutal con su espada sin filo contra el hombro derecho de su enemigo.

El mago enmascarado mantuvo una mano en su hombro mientras miraba en dirección a Mikihiko y la pelea en curso del vampiro.

Para ser precisos, ella estaba buscando aún más. Estaba observando a un joven que montaba una motocicleta con un CAD plateado apuntando al vampiro.

El rostro del joven estaba oscurecido por el casco, por lo que sus rasgos no podían ser identificados.

¿Tatsuya-kun...?

A pesar de esto, a pesar de apenas mantener un agarre débil en su conciencia mientras mantenía una postura de combate, Erika claramente vio con los ojos la forma de su compañero de clase bajo las luces de la calle.

Erika, Mikihiko y el vampiro.

Tomando a la vista de amigo y enemigo entremezclándose, Tatsuya miró hacia el mago enmascarado como atraído por esas pupilas doradas.

El mago enmascarado levantó su mano izquierda hacia Tatsuya. Como un sello, la premonición de la invocación mágica ya estaba en sus manos en un instante.

Sin embargo, esa premonición se desvaneció a medida que el mundo se sobrescribía.

Esas pupilas doradas estaban muy commociadas.

Tres veces intentó activar diferentes tipos de magia, y tres veces fue suprimida.

Todos escucharon un “Ah”. El que llamó fue Mikihiko, y no había necesidad de indicar la razón.

El vampiro estaba huyendo.

Oculto bajo la visera, la mirada de Tatsuya se alejó del mago enmascarado.

Solo por el más breve de los instantes.

El mago enmascarado no iba a dejar pasar ese instante. La siguiente técnica no fue mágica.

Incluso si su mirada se desviara, siempre que fuera mágica, nada podría escapar a la “visión” de Tatsuya.

En otras palabras, el mago enmascarado también notó ese detalle.

La oscilante mano derecha que sostenía el arma apuntando hacia abajo escupió una bala.

Dirigida a sus pies, las chispas volaron e inmediatamente se convirtieron en destellos.

El sonido sordo de los disparos resonó cinco veces, hasta que el mago enmascarado quedó completamente oscurecido por los flashes.

Tatsuya dirigió su magia hacia el cuerpo del Mago enmascarado.





Él apuntó a sus piernas e intentó usar la Magia de [Descomposición], o al menos ese era el plan.

El cuerpo de información que debería haber representado la forma física real solo contenía datos de superficie y ningún contenido real.

Si bien hubo registros de color y apariencia externa, no hubo información relacionada con la masa, el diseño físico o la composición química.

Tatsuya suspendió su magia y bajó su brazo.

Después de que los destellos desaparecieron del parque, no había señales del mago enmascarado o el vampiro.

“¿Están bien ustedes dos?”

Abandonando la persecución, Tatsuya se bajó de la motocicleta y se quitó el casco antes de verificar la situación de los demás.

Parece que Mikihiko no sufrió heridas físicas.

Erika por otro lado...

“...Me estoy avergonzando un poco por las miradas”.

“Ah, lo siento”.

Copiando el ejemplo ante él con Mikihiko sonrojándose y dándose la vuelta, Tatsuya lo imitó.

Esto no quiere decir que había mucha piel revelada. La ropa interior protectora parecía no haber sufrido daños. Es solo que había cortes y rasgaduras a lo largo de la ropa y cerca del área del pecho había indicios de sus curvas.

Como la vocalista de una banda de rock demasiado emocionada en el escenario.

Esto solo difícilmente calificaría como indecoroso, ya que esto era comparable a usar un traje de baño en la playa o en una piscina, pero llevar esto en la calle probablemente sería un poco embarazoso.

“... Oye, ¿puedes prestarme un abrigo o algo así?”

A manera de mostrar su lado solidario. Como si escuchara a alguien decir esto, Mikihiko se quitó frenéticamente su chaqueta y se la tiró al costado de Erika. (Tatsuya llevaba una pistolera debajo del abrigo, así que no podía hacerlo).

“Gracias, estoy bien ahora”.

Ella no estaba desnuda, ni estaba casi desnuda. “Demasiado exagerado” eran los sentimientos no disimulados de Tatsuya al respecto, pero tal vez este era otro sentido de la estética. Al final, esto fue mucho mejor que ser completamente descarado o carente de vergüenza.

“Erika, ¿estás herida?”

Ella parecía estar bien por lo que él podía ver, pero aún quería preguntar para estar seguro.

“Afortunadamente me puse armadura interior. De lo contrario, estaría en serios problemas”.

La frase armadura interior estaba ciertamente desactualizada, aunque Tatsuya no estaba seguro de si era una bendición o una maldición que él supiera que significaba “armadura interior”. En lugar del pesado engranaje usado debajo de la armadura que protegía contra el impacto y las laceraciones de la piel, la “armadura interior” a la que se refería Erika era un conjunto de ropa interior de caucho sintético que poseía cualidades múltiples como resistencia a las balas y cortes. A diferencia del pesado Kevlar, había ventajas, como una restricción mínima de movimiento, así como permanecer discreto incluso si se usa debajo de la ropa normal.

Por otro lado, estrictamente desde una perspectiva material, el diseño de ajuste de forma no era popular entre los que deseaban ocultar sus características físicas. Normalmente, esto no sería un problema con otras prendas en la parte superior, pero esta vez, el traje representa un peligro para los ojos que acompañan en lugar de la persona en cuestión.

“Parece que el Kamaitachi⁵ se mezcló con la ráfaga”.

“Creo que tienes razón. En serio... Esa maldita enmascarada. Ella va a pagar mi ropa la próxima vez que nos veamos”.

“Aun así, la clavícula de tu oponente parecía estar causándole bastante dolor”.

“Esto es esto. Eso es eso”.

Como dijo Tatsuya, Erika no solo era receptora y había logrado un contra-ataque por su cuenta. Aunque el golpe fue levemente profundo, la espada de Erika definitivamente hizo contacto con el hombro derecho del Mago enmascarado antes de que la ráfaga la arrastrara.

Incluso si Tatsuya no hubiera presenciado personalmente la ocurrencia, todavía habría deducido con precisión lo sucedido en función de la apariencia del Mago enmascarado, así como la magnitud del daño causado a la ropa de Erika.

“Ahora que lo mencionas, Tatsuya-kun, ¿por qué estás aquí?”

Dada la expresión de su rostro, esta era una pregunta que Erika estaba muriéndose por hacer desde el principio en lugar de algo con lo que acababa de tropezar. En cuanto a cómo responder eso, Tatsuya reflexionó sobre varios ángulos diferentes antes de finalmente decidirse por la respuesta directa...

“¿Por qué me lo estás preguntando? Obviamente porque recibí el mensaje de Mikihiko”.

Mikihiko hizo una mueca y envió una mirada de “Traidor” a Tatsuya.

“Hm ~~”

Sin embargo, frente a ese nivel de disgusto, Mikihiko de mala gana giró sus ojos hacia Erika.

⁵ El *kamaitachi* (del japonés: 突奇, y algunas veces también *kama-itachi*: 錪鼬), traducido del japonés como el arniño de la hoz; es un Yōkai del folclore japonés con aspecto de mustélido y velocidad extraordinaria. “Kama” es una especie de hoz japonesa, también usada con algunas modificaciones como arma por los campesinos de la época. Itachi significa comadreja.

“Así es como pudiste llegar en un momento. Buen trabajo, Miki”.

La frase fue complementaria en la superficie, y esta era una situación en la que las felicitaciones estaban en orden.

Obviamente, las únicas respuestas que Mikihiko pudo reunir en ese contexto fueron “Ah” y “Eso”.

No importa cómo lo escuchó, la voz que se movía en sus oídos no sonaba a mentiras.

“Hablando de eso, ¿cuándo exactamente estableciste contacto? Yo, no creo que haya sido consciente de esto”.

“...”

Por supuesto, ella nunca escuchó sobre esto, ya que nunca le dijeron a Erika en primer lugar. Tener a Tatsuya siguiendo su señal fue una decisión independiente tomada por Mikihiko. Naturalmente, también tuvo que informar todos sus hallazgos a Tatsuya. Después de reflexionar, incluso el propio Mikihiko tendría dificultades para explicar cómo llegó a esta conclusión.

Bajo la fría mirada de Erika, el sudor frío rodó por la frente de Mikihiko.

Esto era exactamente como “una rana congelada bajo los ojos de una serpiente”. Parecía que no podía extraerse por su propio poder, Tatsuya concluyó con un “Eso es suficiente”.

“Chicos, me disculpo por irrumpir en su conversación, pero ¿no deberíamos movernos?”

Al escuchar otro salto de voz en la conversación, Erika parpadeó dos veces y de mala gana sacó un terminal de información en su mayoría sin daños.

“¿Creo que la gente viene hacia aquí?”

Ante la insinuación de Tatsuya, Mikihiko miró frenéticamente su propia terminal de información.

Erika verificó el tiempo. Habían transcurrido casi cinco minutos desde que hicieron contacto con el vampiro y el mago enmascarado. Los otros grupos probablemente llegarían en breve.

Mikihiko desplegó la pantalla de persecución. Las luces brillantes que indicaban que los investigadores aliados avanzaban a lo largo de líneas irregulares, una clara indicación de que definitivamente no estaban actuando en concierto con los otros equipos de investigación.

“No tienes la aprobación de la reunión de los clanes, ¿verdad?”

Si bien no formaban parte del equipo de investigación liderado por el Clan Saegusa, actuaron sobre cualquier cosa digna de castigo.

Aun así, de ser posible, valía la pena evitar notificar al equipo de investigación de los Clanes Saegusa y Juumonji que habían participado en combates dentro de su jurisdicción. Esto podría ser especialmente problemático si chocan con la ex Presidenta del Consejo Estudiantil.

Mientras los dos agonizaban por esto, Tatsuya se estaba preparando para evacuar sin cuidado alguno.

“Erika, ¿necesitas un aventón?”

Una vez más abordando su motocicleta, Tatsuya preguntó en voz alta,

“Claro, gracias”.

A lo que Erika saltó al asiento trasero y envolvió sus brazos cómodamente alrededor de la cintura de Tatsuya.

“Tatsuya, ¿y yo?”

“Lo siento, sobrecupo”.

En respuesta a la agitada pregunta de Mikihiko, Tatsuya activó el interruptor del motor.

“¡Serás multada por montar sin casco!”

Al escuchar el grito detrás de él entremezclándose con la frustración (y la falta de voluntad para admitir la derrota), Tatsuya aceleró en la motocicleta. (Hablando de eso, la multa por no cumplir con el deber de usar un casco ya no existía. En cambio, el conductor podría ser acusado de homicidio vehicular dependiendo de la magnitud de las lesiones de los pasajeros).

Después de perder su chaqueta y quedarse atrás, Mikihiko solo podía quedarse allí de pie por el momento.



Después de regresar a la base móvil que estaba disfrazada de furgoneta de noticias, Angie Sirius, o la forma actual de Lina, dio la orden de retirarse incluso antes de tomar asiento.

Nadie cuestionó sus órdenes porque esta era la acción esperada. En el momento en que ella se sentó, la base móvil comenzó a moverse silenciosamente. Aun así, el interior del vehículo se llenó de confusión, un tipo de atmósfera casi como “quiero preguntar pero tengo miedo de hablar”.

La ruina de su cabello y las botas sucias causadas por el flash prácticamente gritaban que ella “huyó”. No obstante, la palabra “huir” era simplemente incompatible con el Comandante de STARS, “Sirius”.

“Mayor”.

El interior poseía la altura suficiente para constituir un techo, pero a pesar de esto, los otros dos miembros aún estaban doblados por la cintura frente a Lina.

“Lo lamentamos muchísimo”.

La razón por la que ambas se disculparon fue porque se retrasaron durante la persecución. Lina se enfrentó al vampiro por su cuenta porque sus dos compañeras no pudieron mantener el ritmo de su velocidad.

“No se preocupen. Aunque un tercero interfirió, tengo la responsabilidad por dejar que el objetivo se escapara”.

“...Muchas gracias”.

“Además, hemos llevado a cabo con éxito el castigo del Sargento Sullivan, por lo que no podemos calificar esto como un fracaso completo. ¿Hemos recuperado el cadáver del sargento?”

“Recuperación confirmada”.

“¿Eso es así?”

Al escuchar la voz detrás de los dos que tenía enfrente, Lina se relajó y asintió con la cabeza.

“Se procederá inmediatamente con la autopsia el cadáver del Sargento. Además, ¿fueron capaces de identificar al otro que estábamos persiguiendo?”

Sin embargo, inmediatamente apretó su expresión y soltó la siguiente pregunta.

“Lo siento mucho. Aunque pudimos grabar una firma de onda psion, actualmente no hay coincidencias en nuestra base de datos”.

“Entonces no es un desertor... De lo contrario, la firma de la onda psion puede haber cambiado”.

“Me temo que es probablemente lo último”.

“Entendido. Continúa la búsqueda en base a la firma de la onda psion grabada”.

“Sí, señora”.

Al escuchar esta respuesta, Lina ordenó a las dos ante ella que volvieran a sus asientos y se recostó en su silla.

Lina presionó una mano sobre su hombro derecho y lanzó magia de tipo curativo sobre sí misma. Afortunadamente, pudo mantener una expresión imperturbable frente a sus subordinados gracias a su disfraz mágico, pero ella había disparado un arma mientras su clavícula estaba agrietada, causando una fractura completa que fue lo suficientemente dolorosa como para casi hacerla llorar.

¡¿Cómo es que nunca escuché que Erika era tan fuerte?! Y Tatsuya usó algún tipo de habilidad misteriosa para anular por completo mi técnica... ¡¿Qué demonios les pasa a los estudiantes de preparatoria japoneses de hoy en día?!

Ignorando completamente su propia edad, Lina se quejó amargamente en la privacidad de su propia mente.



“¿Huh? ¿A Oba-sama?”

Después de echar un vistazo a su hermano mayor, que rápidamente había salido de la casa después de echar un vistazo al terminal de información de su bolsillo y acaba de regresar mientras explicaba la situación, Miyuki no pudo evitar hacer esta pregunta.

Inmediatamente después de la pregunta, ella se sonrojó avergonzada después de darse cuenta de su comportamiento inapropiado.

Aun así, Tatsuya sintió que su pregunta era solo un curso natural de los acontecimientos, por lo que no iba a reprender a su hermana por un detalle menor.

“Hay algo que deseo discutir con Oba-ue”.

En otras palabras, ¿podrías llamarla por favor? Fue la petición de Tatsuya a Miyuki.

La mayoría de los que trabajaban para la Familia Yotsuba sabían que Tatsuya era el sobrino de Maya. Al mismo tiempo, también sabían que Tatsuya no servía más que como una herramienta. —Excepto, solo una minoría selecta tenía acceso a la información de que estaba siendo utilizado como arma. A la luz de esto, incluso si Tatsuya se acercara a su tía por teléfono, la llamada sería inevitablemente restringida.

En otras palabras, olvídate de Tatsuya, ni siquiera Miyuki sabía el número de su línea directa. El control de la información que rodeaba a la Familia Yotsuba era varias veces más intenso que el del gobierno, y eso no era una exageración ociosa de aquellos que lo sabían.

“Si Onii-sama lo dice... ¿Puedes darme un minuto?”

“Ah... me voy a cambiar también”.

A pesar de que estaban relacionados por la sangre, la llamada telefónica ocasional o video llamada no se materializó. Ese era el tipo de relación que su tía (y otros miembros de la familia) tenían.

“Me disculpo por llamarla tan tarde”.

“Está bien. Comparado con eso, es bastante raro que Miyuki me llame”.

Como de costumbre, Maya apareció en la pantalla de la videollamada con su belleza habitual y desafiante de la edad y su sonrisa misteriosa. Hayama estaba parado a su lado, vestido cuidadosamente en un traje de tres piezas. Mientras Tatsuya aplaudió la rareza de tener a Hayama atendiendo una llamada familiar, Tatsuya también estaba de pie junto a Miyuki con un traje negro, por lo que probablemente eran más o menos lo mismo.

Después de las habituales palabras de bienvenida que enmascararon cuidadosamente la creciente agitación, Miyuki usó un tono objetivo, una tarea definitiva para ella en este caso, para transmitir los aspectos más destacados del mensaje de Tatsuya.

“¿Tatsuya también? Esto también es algo raro”.

Al elegir renunciar a cualquier intento de ocultar su interés, Maya permitió que Tatsuya hablara.

“Oba-ue, de hecho, hay una cosa que me gustaría preguntarte y otra que me gustaría solicitar”.

“Adelante”.

Maya asintió de excelente humor. Bueno, al menos eso parecía.

“En ese caso, permítanme seguir adelante... Oba-ue, ¿pueden decirme cómo funciona la magia de contraataque [Parade] de la familia Kudou?”

Al lado de Tatsuya, Miyuki emitió un pequeño sonido mientras el shock inundaba su rostro.

En la pantalla, Hayama levantó una ceja de manera significativa. Incapaz de ocultar su expresión, Maya estalló en carcajadas.

“Vamos...Tatsuya-kun, [Parade] es uno de los secretos mejor guardados de la familia Kudou. ¿Pensaste que sabría este secreto?”

En medio de su risa, Maya desvió la pregunta.

“Oba-ue una vez aprendió directamente de Elder Kudou. Incluso si no conoces la secuencia mágica, estoy seguro de que al menos conoces lo básico, ¿correcto?”

Después de establecer que “ella no podía enseñarle”, Tatsuya continuó presionando con su propia pregunta.

“La magia de contra ataque [Parade] aplica Fortificación de Datos en tu propio Eidos y reescribe o altera tu apariencia. Para ser precisos, es una Secuencia Mágica que aplica una apariencia diferente o una máscara falsa en el Eidos y crea una apariencia falsa, usando la nueva apariencia para enmascarar la original a fin de proteger la forma real de los efectos mágicos hostiles, ¿correcto?”

No solo estaba presionando, también suministraba su propia hipótesis.

“... ‘Alteración’ La magia es algo que no se puede lograr en el mundo real, pero creo que ya lo sabes, ¿no?”

Maya respondió directamente a la hipótesis de Tatsuya. Solo esto fue suficiente para informar a Tatsuya sobre la verdad de sus palabras, pero esto no fue suficiente para satisfacer a Tatsuya.

“En lugar de usar ‘Alteración’, sería suficiente un simple ajuste en el nivel visual usando Magia de Refracción de la Luz. El problema radica en que la Magia de la Refracción de Luz no puede escapar de mi ‘ojo’, por lo tanto, ahí es donde radica el problema”.

“Onii-sama, eso...”

La que respondió verbalmente mirando completamente sorprendida fue Miyuki.

“No puedo creer que haya un oponente que no pueda ser identificado por Onii-sama...”

“No solo eso, también evitaron [Mist Dispersal]”.

Pálida, Miyuki se quedó muda.

Como si también hubiera recibido un golpe, Maya arrugó las cejas en un instante al otro lado de la pantalla.

Aunque recuperó rápidamente su rostro sonriente, la tangente en la conversación se había disipado.

“Si [Mist Dispersal] es inútil, entonces Trident no debería tener ningún problema”.

“¿Se puede lanzar [Parade] encima de sí mismo?”

A la sugerencia de Maya, Tatsuya soltó otra pregunta. Sin embargo, la respuesta de Maya se refería a un tema totalmente no relacionado.

“Por lo que recuerdo, cuando se trataba de [Parade], era el hermano menor de sensei el que era más experto en [Parade] que el propio sensei”.

“Muchas gracias. Oba-ue, parece que no podré manejar este incidente solo. Aquí, formalmente, solicito refuerzos”.

“¿Es esa la solicitud que quieres que conceda?”

Al otro lado de la pantalla, tía y sobrino se miraron a los ojos.

“...Muy bien. Es cierto que las cosas han progresado mucho más allá de nuestras estimaciones iniciales. Permitiré que te pongas en contacto con el comandante Kazama”.

Tatsuya se inclinó y se retiró de la pantalla de video.



Capítulo 7

Era una nueva mañana, otro día de escuela. Tatsuya salió de la estación junto a Miyuki y ambos fueron a reunirse con sus amigos, luego se fueron a la escuela. Uno de sus amigos se había ido a principios de año, y la semana pasada otro se había ausentado, pero aparte de eso, era lo mismo que desde la primavera.

Esta mañana, sin embargo, algo diferente le esperaba a Tatsuya. Antes de que pudieran encontrar a sus amigos, escuchó la voz de una senpai desde la puerta de entrada. Tanto Tatsuya como Miyuki ya habían sido conscientes de su presencia antes de que ella los llamara.

En este momento, la mayoría de las personas que usaban la estación eran estudiantes de la Primera Preparatoria y personas asociadas. A diferencia de los trenes de tránsito masivo de antaño, ahora es raro ver grandes multitudes de pasajeros en la estación al mismo tiempo. Sin embargo, para alejarse del camino de los estudiantes que llegaban a cada momento, los hermanos se acercaron a donde se encontraba Mayumi, de pie junto a la pared.

Más de unos pocos estudiantes lanzaron miradas hacia su dirección, pero ninguno de ellos estaba excesivamente preocupado. No había nada particularmente maravilloso acerca de la anterior presidenta del Consejo Estudiantil y la actual vicepresidenta conversando, añadiendo que el hermano de la actual vicepresidenta era uno de los favoritos de la Presidenta anterior —aunque solo desde el punto de vista de un chismoso— era un hecho bien conocido entre la Primera Preparatoria.

En verdad, ni siquiera hubo una conversación. Tampoco caminaron juntos a la escuela, Tatsuya y Miyuki pasaron por la puerta de entrada. Mayumi había pronunciado una sola frase:

“Después de la escuela, ven a la segunda sala del club de cross-field”.

El club de cross-field (un club de juegos de supervivencia de combate mágico) era un club al que Katsuto había pertenecido una vez. Su segunda sala del club servía como un lugar de reunión informal, y entre los que lo sabían, era un secreto a voces que Katsuto continuaba usando esta habitación para reuniones después de haber dejado el club. Efectivamente, cuando Tatsuya apareció, tanto Mayumi como Katsuto ya estaban esperando.

“¿Estás solo?”

No fue solo Katsuto quien le preguntó esto, sino que también sorprendió a Mayumi.

“Sí, me llamaron solo a mí después de todo”.

A decir verdad, Miyuki había insistido con vehemencia en acompañarlo, pero de alguna manera finalmente había logrado convencerla de que cooperara. El precio había sido tan barato como prometer acompañarla de compras y llevarla un bufé de tartas.

De todos modos, era evidente que Tatsuya había venido él solo. Si bien era cierto que Mayumi solo había llamado a Tatsuya, realmente no había esperado que Miyuki realmente no viniera. A pesar de eso, ella inmediatamente se lanzó al tema en cuestión.

“Tatsuya-kun, anoche, ¿saliste?”

La pregunta de Mayumi estaba dentro de las expectativas de Tatsuya.

“Sí”.

Él no agregó ‘¿Qué pasa?’

“¿En motocicleta?”

“Sí”.

Las personas normalmente se vuelven más locuaces cuando intentan engañar a otro. Sin embargo, Tatsuya en este momento no tenía necesidad de fingir ignorancia.

“... ¿Puedo preguntarte a dónde ibas?”

Más bien, fue Mayumi quien tuvo que preguntarse cuál sería la mejor forma de proceder. Ella no tenía la astucia ni la experiencia para tan sutil exploración. Katsuto, esperando a su lado, ni siquiera parecía molestarte en absoluto.

“Fui llamado por Yoshida, quien estaba enfrentándose al vampiro, y vi allí tanto al vampiro como a un mago no identificado que lo estaba siguiendo”.

A este ritmo as cosas podrían tomar un tiempo, pensó Tatsuya, mientras voluntariamente decidía avanzar en la discusión. Mayumi parpadeaba con asombro, él mantuvo su expresión sin emociones. Incluso a un adulto más experimentado, por ejemplo el padre de Mayumi, le habría resultado difícil leer su expresión.

Ella no tenía idea de lo que estaba pensando.

Eso simplemente alimentó la ansiedad de Mayumi, y sus defensas psicológicas comenzaron a vacilar.

“¿Desde cuándo?”

Tal vez intervino para apoyar a Mayumi, o tal vez no, Katsuto soltó una pregunta en su lugar.

“Simplemente me precipité a actuar ayer porque me llamaron. No participé en la búsqueda real del vampiro”.

Ya que no preguntaron por quién, o para qué, Tatsuya omitió esos detalles en su respuesta. Tampoco tenía ningún interés en descubrir lo que Katsuto o Mayumi pensaban.

“Los dos saben que Saijou Leonhard de Clase 1-E fue atacado, ¿no es así?”

No había forma de que ellos no lo supieran. Él estaba haciendo más una declaración que una pregunta. La respuesta fue, por supuesto, afirmativa.

“No soy solo yo quien quiere saber qué está pasando exactamente. Hasta que los responsables sean encontrados y detenidos, no puede haber paz. Ya sea que haya un único culpable o un grupo, sea contagioso o no contagioso, necesitamos al menos algunas pistas”.

Haciendo esto mirándolos a los dos mientras hablaba, Tatsuya ahora cambió su mirada solo hacia Mayumi.

“Senpai, si no me dices al menos cuánto saben sobre la situación o qué piensan hacer al respecto, no puedo ayudarles”.

Su toma de la iniciativa fue probablemente lo contrario de lo que se esperaba. Tomando un respiro, la expresión de Mayumi se volvió seria.

“Si Tatsuya-kun promete ayudar, con mucho gusto le daremos la información que tenemos. Como estoy segura que lo entiendes, no debes filtrar nada de lo que escuches aquí”.

“Entendido. Cooperaremos”.

Tatsuya estuvo de acuerdo inmediatamente con la propuesta de Mayumi. Era la respuesta que ella había querido escuchar, pero al ser incapaz de comprender sus verdaderas intenciones, continuó observándolo un poco más.

“... ¿Eso significa que te unirás a nuestros grupos de búsqueda?”

“A eso me refería”.

“¿Por qué ahora, tan de repente? No es como si no hubieras visto el aviso de la conferencia”.

Eso fue Katsuto hablando. Los Clanes Saegusa y Juumonji habían establecido conjuntamente equipos de “Caza de Vampiros”, y se habían enviado avisos a las cabezas de los Diez Clanes Maestros, las 18 casas auxiliares y las Cien Familias solicitando cooperación. Si uno no está conectado con los ‘Números’, entonces ciertamente no es algo que un simple estudiante de secundaria debiera saber, sin embargo, Katsuto básicamente estaba hablando como si ya fuera un hecho.

“Considerando que ni siquiera pertenezco las Cien Familias, pensé que no era asunto mío”.

Por su parte, Tatsuya no se molestó en tratar de ocultar que realmente estaba enterado. Obtener avisos no clasificados no era algo difícil de hacer, después de todo.

“Sin embargo, que se me pregunte directamente, es una historia diferente”.

Fue una respuesta bastante vaga, pero aunque no estaba del todo claro, no había nada irregular o particularmente extraño en ello. Por lo tanto, tanto Mayumi como Katsuto se sintieron obligados a aceptar.

En términos de experiencia previa, la exposición de Mayumi a la personalidad terrible de Tatsuya era diferente de la de Katsuto.

“...Aun así, ¿está bien? Antes de cualquier cosa, creo que antes de cooperar sería necesario divulgar información”.

“Si ninguno de los dos hacemos concesiones, no llegaremos a ningún lado. Además, incluso si se retractan, puedo hacerlo con la misma facilidad”.

Ante sus palabras, que aunque parecían demasiado directas, parecían contener varios significados ocultos dentro de ellas, Mayumi soltó una carcajada. Había una sensación de sigilo saliendo de ella, sin embargo, en su mayor parte parecía que ella simplemente quería terminar las cosas.

“Entiendo~. Entonces, te contaré todo lo que sabemos hasta el momento. Antes de eso, ¿puedo decir solo una cosa?”

“¿Qué?”

“Tatsuya-kun, tu personalidad es realmente terrible”.

“...”

En la información que Mayumi compartió, Tatsuya aprendió tres cosas en particular.

Lo primero, fue la escala del daño. Esto superó con creces sus expectativas previas, y aún no parecía estar en un nivel crítico.

Segundo, era cada vez menos probable que todo esto fuera obra de un solo perpetrador. Tatsuya había considerado la posibilidad de colaboradores antes, pero la idea de que hubieran muchos vampiros no se le había pasado por la cabeza.

Y finalmente estaba la presencia de una tercera fuerza que interfería con los esfuerzos de Mayumi y los demás. Al principio Tatsuya había pensado en el grupo de Erika, pero al escuchar los detalles, pronto se dio cuenta de que se trataba de un grupo completamente diferente.

El segundo y tercer punto particularmente molestaron a Tatsuya. Ese mago enmascarado probablemente fue uno de los que interrumpió a los grupos de búsqueda. También podía adivinar su identidad.

Sin embargo, no podía entender el motivo por el que tendrían que hacer tal cosa. Sintió que si solo él pudiera entender, las cosas serían mucho más fáciles, pero eso solo sirvió para irritarlo más.

“¿Qué piensas hacer después de atrapar uno?”

Para evitar quedar atrapado en esos pensamientos indirectos, Tatsuya cambió el tema. Aunque solo había prometido cooperación, no podía simplemente ignorar lo que vendría después.

“Los interrogaremos, descubriremos su verdadera identidad y propósito. Después de eso...”

“Serán eliminados”.

Katsuto terminó la oración de Mayumi. Bueno... Tatsuya no estaba especialmente interesado en escuchar una frase como “eliminación” proveniente de la boca de una chica de preparatoria, así que no pensó que fuera suave o ingenua.

Además, el humanitarismo no era uno de los puntos fuertes de Tatsuya. Ni en términos prácticos ni emocionales.

“Lo tengo. Entonces, ¿qué debo hacer?”

“Acompáñanos entonces, supongo. Si es posible desde esta no—”.

“No Shiba, muévete por tu cuenta. Informa si encuentras algo”.

Con Katsuto volteando sus instrucciones, Mayumi simplemente se quedó mirando en silencio. No había ninguna incomodidad en sus ojos, sino una dramática sensación de sospecha.

“Entendido”.

Para ser honesto, hubiera sido más fácil para Tatsuya seguir las instrucciones de Mayumi. En cualquier caso, nunca había sido tan serio con su promesa de ‘cooperar’, por lo que asintió sin vacilar ante las palabras de Katsuto.

Sin revelar nada de su propia mano, y habiendo escuchado todo lo que quería oír, Tatsuya dejó a los dos y se fue.

Cuando los pasos de Tatsuya ya no se escuchaban “había micrófonos escondidos como contramedidas de espías en la habitación”, Mayumi habló.

“Juumonji-kun, ¿por qué le dijiste a Tatsuya-kun que se movilizara por su cuenta?”

No había reproche en su tono, sino una sensación de incomprendión.

“Pensé que sería más eficiente de esa manera”.

La voz de Katsuto mientras respondía carecía de confianza.

“Pero tal como están las cosas, ¿no iría simplemente con los Chiba?”

Mayumi sabía que el grupo de Erika estaba dando vueltas de forma contraria al aviso. Aunque los Diez Clanes Maestros son líderes, no son gobernantes, por lo que no pueden imponer su voluntad o condonar a otros fácilmente. Pero en una situación donde se pueden vislumbrar las sombras de las potencias extranjeras, ser testarudo y hacer las cosas a su manera era un molesto inconveniente. Si bien el grupo de Chiba Erika y Yoshida Mikihiko era inevitable, las verdaderas intenciones de Mayumi habían sido mantener al menos a los hermanos, Tatsuya y Miyuki, a la vista.

“A decir verdad, ese será probablemente el caso”.

Sin embargo, Katsuto rechazó las preocupaciones de Mayumi.

“Mientras mantengamos la fe, Shiba tampoco nos traicionará. Ese es el tipo de hombre que es”.

“... ¿Entonces es una forma absoluta de dar y recibir? Qué sutil confiabilidad”.

“Incluso el código del samurai proviene del ‘favor’ y el ‘deber’, o dar y recibir. Yo diría que es mucho más confiable que la sumisión ciega”.

“... Y la lealtad absoluta es ‘dependencia’. Eso no es algo que se espera de Tatsuya-kun”.

Ante el asentimiento del Katsuto satisfecho, Mayumi giró la cabeza.



Aunque todavía le faltaban varias piezas cruciales, lo que sólo significa que ya había reunido suficientes piezas como para darse cuenta de que aún no tenía nada definitivo, lo que había recopilado hasta el momento seguía siendo un resultado satisfactorio. Repasando la información que tenía, Tatsuya corrió a la sala del Consejo Estudiantil donde Miyuki estaba esperándolo.

Aún permanecía oscuro. Perfectamente natural, teniendo en cuenta que era un sábado. La escuela había terminado, pero era apenas pasado el mediodía. Tatsuya no se apresuraba porque se estaba haciendo tarde para irse a casa, sino porque se estaba haciendo tarde para almorzar.

No existía forma en que Miyuki comenzara a comer sin esperar a Tatsuya. Sería diferente si él le pidiera (*ordenara?*) que comiera sin él, pero él no lo había hecho hoy porque no había pensado que terminaría tardándose tanto. De hecho, Miyuki no habría esperado tanto tiempo, pero el simple hecho de pensar que estaba haciendo esperar a su hermana fue suficiente para impulsar sus pies hacia adelante.

La destreza física de Tatsuya estaba en plena exhibición cuando saltó por un tramo entero de escaleras, para detenerse frente a la sala del Consejo Estudiantil. En el momento en que lo hizo, casi como si estuviera esperándolo, la puerta se abrió.

Oro brillante destelló en su vista.

Tatsuya se deslizó a un lado mientras Lina se alejaba de la puerta casi al mismo tiempo. Habían intentado salirse del camino del otro, pero viendo la situación humorística en que estaban ahora las esquinas de la boca de Tatsuya se crisparon cuando entró en el espacio que alguna vez ocupó quien estaba bloqueando su camino.

Técnicamente estaba ignorando el acuerdo de ‘las damas primero’, pero él no ignoró a la dama en sí.

“Hola, Lina. ¿Cómo te va?”

Se giró hacia ella mientras pasaba y le dio una suave palmadita en el hombro.

“Hola, Tatsuya. Estoy bien. Gracias”.

Siendo tocada de repente, Lina no gritó ‘¡Acoso sexual!’ o algo. En cambio, sin levantar una ceja, ella simplemente sonrió mientras respondía, devolviendo las palmaditas de Tatsuya dos veces.

Tanto Miyuki como Honoka se levantaron jubilosas al ver a Tatsuya, mientras se sentaba ante lo que se suponía que era una mesa de conferencias. Él no quería pensar que estaba allí únicamente para que los miembros del Consejo Estudiantil simplemente comieran y bebieran el té.

No había señales de Azusa o Isori. No es que hubiera estado preocupado si estuvieran allí, pero se sentía más cómodo de esta manera. No era que estuviera tenso cerca de los senpais, sino que tenía que ser cuidadoso. Particularmente alrededor con Azusa, quien por la asuntos menores (o eso pensaba Tatsuya) inmediatamente comenzaría a verse aterrorizada.

Mayumi lo había llamado por completo de improviso. Entonces, él no tenía nada preparado para el almuerzo. Además, si de repente sacara lo que había sucedido, definitivamente causaría pánico en lugar de ayudar.

Ir a la cafetería en este momento probablemente solo haría que lleve a una vista carteles de ‘Agotado’ en todas partes, por lo que decidió dejarse a cargo del dispensador de almuerzos del Consejo Estudiantil.

Honoka estaba operando el panel de cocina, mientras Miyuki preparaba bebidas. El papel de Tatsuya era sentarse en silencio y esperar a que le sirvieran.

...Mirando las cosas objetivamente, sería “qué maldito afortunado”, pero cortó esos pensamientos improductivos antes de que alcanzaran su conciencia.

“Ahora que lo pienso, ¿qué estaba haciendo Lina aquí?”

En cambio, desvió su mente a otro asunto.

“La escuela sugirió hacer de Lina un miembro especial del Consejo Estudiantil durante su estadía”.

Poniendo una taza de café delante de Tatsuya, Miyuki se inclinó y respondió su pregunta.

Su brillante cabello negro azabache caía en cascada ante los ojos de Tatsuya. Estupefacto mientras acariciaba suavemente su cabello detrás de su espalda, su mente sin embargo procesó resueltamente la información que sus oídos acababan de recibir.

“Ah... Eso me recuerda, antes, ella había dicho que no se podía decidir por ningún club y que se sentía preocupada”.

“Sí. La solicitud desde detrás de la escena se había vuelto bastante intensa... Parece que al presidente Hattori se le ocurrió esta idea”.

Quien respondió esta vez fue Honoka, trayéndole una bandeja humeante. De esa manera, Honoka, haciendo un giro y Miyuki, caminando alrededor de la mesa, trajeron sus propias bandejas a la mesa y la hora del almuerzo comenzó.

“Ella solo está estudiando aquí este semestre, por lo que ni siquiera podría asistir al festival de atletismo”.

“Estoy bastante seguro de que había más motivos ocultos detrás de esto”.

Una sonrisa bastante malvada revoloteó en el rostro de Miyuki.

“Hubo incluso idiotas que querían hacer álbumes de fotos de Lina para vender”.

Cuando Honoka suspiró frunciendo el ceño.

“¿Hay un club de fotografía en esta escuela?”

Tatsuya no se habría sorprendido si lo hubiera, pero no recordaba que hubiera uno.

“El equipo de fotografía del departamento de Arte. Querían hacer algo tan estúpido como hacer que Lina se uniera al club de gimnasia ligera y tomar fotos de eso”.

La gimnasia ligera es una especie de gimnasia para magos con los límites de la gravedad y la inercia baja, realizando ejercicios en el piso como si estuvieras en un trampolín sin usar trampolines. La competencia Mirage Bat en la que Miyuki y Honoka habían competido era un desarrollo de la gimnasia ligera.

“Ya veo... Sin duda, esa sería una buena foto”.

“¿O-nii-sa-ma?”

“Aunque no estoy seguro acerca de venderlas”.

“...”

Cuando Miyuki lanzó una mirada de sospecha en su dirección, Tatsuya desvió rápidamente su mirada.

Sin embargo, una mirada similar también miraba hacia atrás desde esa dirección.

“...Espera, esa fue una manera bastante mala de decirlo. Lo siento”.

Al girarse para ver a su hermana, levantó la bandera blanca. Si se hubiera enfrentado a esas miradas feroces en una “competencia fija”, era probable que las chicas se hubieran derrumbado primero, pero explotar sus sentimientos sobre algo tan trivial como esto parecía una muy mala idea.

Por parte de Miyuki, se dio cuenta de que Tatsuya no había querido dar ese significado a esas palabras, sin embargo, había actuado de manera tan reprochable, que no pudo contener su vergüenza y bajó la cabeza.

“De todas formas. Historias similares abundaban, y la situación estaba llegando al punto en que el reclutamiento era problemático no solo para Lina sino también para el personal...”

Honoka, a menudo vista como alguien bastante intenso pero de hecho una persona delicada (o tímida), comenzó a preocuparse por la extraña atmósfera.

“Así que se decidió hacerla miembro del Consejo Estudiantil”.

Inmediatamente entendiendo la consideración de Honoka, Tatsuya se unió para apoyarla.

“Sí. Si usa los deberes del Consejo Estudiantil como fachada, debería ser suficiente para evitar a cualquier club”.

Y Miyuki la siguió.

Al ver que el aire tenso que se había movido entre los hermanos se disipó, Honoka suspiró aliviada. La chica que esperaba una disputa entre ellos era, por desgracia, una chica diferente.

“Entonces, ¿cuál fue la decisión de Lina?”

“No parecía muy entusiasta”.

“Parecía que ella no estaba interesada en pasar tiempo después de la escuela. Creo que esa también podría ser la razón por la que todavía está indecisa por los clubes, a pesar de ser tan solicitada”.

Ante las respuestas de Miyuki y Honoka, Tatsuya asintió con una mirada de ‘Tal vez ese sea el caso’.



Después de la cena, Tatsuya estaba sentado en el sofá de la sala de estar mirando una gran pantalla montada en la pared.

Miyuki estaba acurrucada junto a él.

La pantalla estaba dividida en tres. La sección principal mostraba una transmisión de video en tiempo real de Tokyo vista a través de cámaras de vigilancia estratosféricas y tres puntos brillantes que se movían a través de ella. La subsección superior tenía carreteras y mapas que se superponían a los mismos tres puntos, mientras que en la parte inferior, el texto se desplazaba en intervalos de 30 segundos.

La razón por la que tuvo acceso a la plataforma de cámaras estratosféricas fue gracias a Sanada.

La razón por la que tenía acceso y podía monitorear las señales de seguimiento de los grupos de búsqueda de Saegusa / Juumonji no se debía a que Mayumi le hubiera proporcionado los códigos de autenticación, sino a la incomparable hacker Fujibayashi Kyousuke.

Él rastreó la señal del grupo de búsqueda Chiba al mismo tiempo.

Las manchas de luz aparentemente eran de interferencia, cuyas ondas fueron detectadas por interceptores montados en la plataforma estratosférica y procesada por la supercomputadora perteneciente al Batallón Mágico Independiente.

Siendo una fuerza mágica experimental, y por lo que Tatsuya sabía vagamente, estando equipado con tecnología de punta (de lo contrario no tendrían los trajes móviles), se le recordó nuevamente sus peculiares habilidades.

Y hablando de tecnología.

“Parece que STARS posee una mejor tecnología para detectar parásitos que nosotros”.

Viendo los movimientos de STARS mientras se fijaban en un punto de fuerza de interferencia, Tatsuya murmuró con una voz impresionada.

Aunque es imposible rastrear los movimientos de los parásitos directamente, al analizar el camino de la energía que dejaban los tres parásitos a los que estaban siguiendo les permitieron rastrearlos. Y a pesar de no tener el beneficio de los sensores de las cámaras de la calle ni de los equipos de observación de la plataforma estratosférica, los que Tatsuya estimaba que eran STARS rastreaban más rápido los movimientos de los Parásitos que ellos. Tatsuya no sabía si eso se debía a alguna habilidad especial o a alguna tecnología avanzada. Tampoco sabía si era específico para rastrear los parásitos, o si era capaz de detectar otras señales mágicas. Todo lo que sabía era que la USNA estaba por delante de Japón en este campo.

Tatsuya nunca había considerado que la tecnología mágica de Japón estuviera a la vanguardia del mundo. Tampoco se consideraba tener un conocimiento exhaustivo de la tecnología actual. Sin embargo, aun así, no pudo evitar sentir algunos remordimientos y debido a su sed de conocimiento.

“Sin embargo, este no es el momento para eso”.

Diciendo eso y cortando pensamientos innecesarios, Tatsuya se enderezó.

“Onii-sama, ¿vas a ir?”

Cuando Tatsuya se levantó, Miyuki habló mientras levantaba la vista del sofá.

“Eres una buena chica, así que espera aquí, ¿de acuerdo?”

Tatsuya acarició su mejilla.

Miyuki levantó su mano y presionó la palma de Tatsuya contra su mejilla. Era como si estuviera imprimiendo su calidez en ella.

“Te estaré esperando”.

“Sí. Sin duda, en algún momento cercano, se necesitará de tu fuerza. Cuando llegue ese momento...”

“Sí. Entonces, lo haremos juntos, es una promesa, Onii-sama”.

“...Bueno, no creo que esta situación resulte tan peligrosa como Yokohama”.

Mientras Tatsuya bromeaba, Miyuki, también sonreía mientras soltaba la mano de Tatsuya.

Miyuki vio a Tatsuya en la entrada, equipado con su CAD favorito y otros equipos, mientras iba a la batalla.

Ella continuó mirando hacia la puerta cerrada hasta que la presencia de su hermano se desvaneció.

Entonces, en el momento en que ella ya no podía darle sentido a su paradero, se dio vuelta con un chasquido.

No había rastros de tristeza. Dentro de su expresión determinada, sus ojos ardían con una luz brillante.

Miyuki regresó a la sala de estar, y presionó el interruptor de la pantalla. Aunque de ninguna manera era mecánicamente incompetente, en términos de fortalezas y debilidades, lo que ahora tenía a mano definitivamente no era su área de especialidad.

Sin embargo, ella fue bendecida con una extraordinaria memoria. Aunque no era tan buena como la de Tatsuya, que tenía una gran capacidad de memoria como efecto secundario de su remodelación mental, reproducir los procedimientos operativos que acababa de ver no era un problema.

Ella abrió la pantalla que había estado mirando hace un momento con su hermano. La velocidad de desplazamiento de los datos de texto era demasiado rápida para ella, pero no sabía cómo cambiarla, así que lo soportó.

Intentó desesperadamente calcular el paradero de su hermano a partir de los puntos de luz que se movían. Le habían dicho que simplemente ‘esperara’, pero esta vez no tenía la intención de ‘solo esperar’. Incluso si eso significaba ir en contra de las órdenes de su hermano, incluso si eso significaba que la regañarían cuando él regresara, eso era preferible no hacer nada y esperar que hirieran a su hermano.

Ciertamente, había pocas posibilidades de que estallara un conflicto a gran escala. En ese sentido, el peligro era ciertamente menor que Yokohama.

Pero a pesar de que la escala era pequeña.

Aunque la situación limitaría en gran medida el uso de la fuerza. Su oponente, con toda probabilidad, terminaría siendo esos STARS.

A pesar de haber dicho eso, no había nada que Miyuki pudiera hacer.

Como individuo, a los 15 años de edad, poseía uno de los más altos niveles de poder en el país. Podría ser fácilmente uno de los niveles más altos de poder en el mundo.

Pero su poder no se enfocaba en la visión lejana o la clarividencia.

Tampoco tenía la autoridad para movilizar a los Yotsuba.

A diferencia de su hermano, ella no tenía una red creada personalmente. Tampoco ninguna de las habilidades de hackeo de Fujibayashi.

Sin magia especializada para encontrar a Tatsuya, ni contactos ni experiencia, Miyuki solo pudo abrazar su pecho mientras miraba la pantalla.

Fue una acción inconsciente.

En su pecho estaba su corazón. Y aunque su ropa estaba en el camino y no podía sentirlo, podía sentir algo más en su lugar.

Dentro de su pecho, en su corazón,

Ella podía sentir su conexión con Tatsuya. *Aborrecible*, las cadenas de su hermano.

El Limitador reconfigurado.

La cerradura y las cadenas no eran otra que ella misma. Ella misma también era la llave.

El obligarla a atar a su hermano, no era más que una maldición.

Sin embargo, a pesar de todo eso, todavía era una conexión definida que la unía a ella y a su hermano.

“Si solo yo también pudiera ver.” Pensó Miyuki.

Por más lejos que Tatsuya estuviera de Miyuki, él era capaz de conocer su situación. Ella había escuchado que su ‘visión’ podía analizar información existencial, y cosas como su paradero y su condición siempre eran conocidas por él en forma de datos.

En cierto sentido, eso significaba que no tenía privacidad en absoluto, pero eso no molestaba a Miyuki en lo más mínimo.

Ella no tenía ni un solo secreto que guardarle a su hermano. Si alguna vez hubiera algo que no pudiera decir escondido en su corazón, ella quería que lo supiera a través de su poder. Ella pensó que incluso cuando sabía que su ‘visión’ no se extendía al reino mental.

Por otro lado, Miyuki no tenía forma de “ver” a su compañero desde la distancia.

En cambio, para Miyuki que nació con la magia de la Interferencia mental, pudo “sentir” la “ubicación” de la “mente”. Al liberar el Limitador en Tatsuya y liberar sus propias habilidades, Miyuki podría “tocar” las mentes de los demás. Ella podría incluso ser capaz de tocar los espíritus a la deriva en el mundo.

Sin embargo, ella no podía sentir el “ser” de alguien muy lejos. No podía transmitir como su hermano en la dimensión de la información, donde la distancia física no tenía ningún significado.

Esa fue la diferencia entre la vista y el tacto. Incluso si pudiera tocar algo que ‘está allí’, no podría usarlo para encontrar algo que no pudiera localizar.

Sintiendo a su hermano en su pecho, lo que solo aumentó su sensación de frustración, Miyuki pensó mucho.

Impulsada por una ominosa e inexplicable sensación de presentimiento, deseó poder correr hacia él.

No sabía cuánto tiempo había seguido sintiéndolo, mientras miraba la pantalla.

Despertándola, el timbre sonó anunciando un visitante inesperado.

Para empezar, miró el reloj.

De acuerdo, dejaré que se vayan, pensó Miyuki. No había ninguna falla en fingir no estar en casa, ya que era demasiado tarde para visitar a otros de todos modos.

Echó un vistazo al monitor de intercomunicador Al reconocer al visitante, Miyuki inmediatamente modificó sus planes. Mientras consideraba qué ponerse, también calculó cuánto tardaría.

“Por favor, espere un momento, Sensei”.

De pie allí estaba Yakumo.



Tatsuya observó la lucha entre el parásito y el mago enmascarado desde la sombra de un árbol.

Había llegado al parque tres minutos antes de que estallara la batalla. Cuando alcanzaron el punto de captura previsto, dejó escapar un sonido a su pesar, pero ahora ocultó su respiración y borró su presencia, esperando la oportunidad de intervenir.

Según la información de Mayumi, había varios vampiros y múltiples cazadores detrás de ellos, pero al ver a los dos ante él, estaba seguro de que eran los mismos dos de ayer. Simplemente había observado el movimiento de los grupos y había predicho dónde se produciría el primer contacto, pero no había identificado a los individuos.

...*Esto es una coincidencia, ¿verdad?*

Un escalofrío recorrió la columna vertebral de Tatsuya y casi inadvertidamente reveló su posición. De alguna manera, reteniéndolo, se quejó en su mente. Algo como “*si esto es el destino, es demasiado desagradable*”.

Él miró hacia atrás al estado de la batalla. El impulso estaba claramente del lado del mago enmascarado. En comparación, el vampiro con máscara blanca intentaba escapar. Y la red para bloquear ese escape aún estaba incompleta.

Cuatro personas. Como pensé, no es suficiente.

Como tres fuerzas, si incluyes a la policía que no trabajaba con los Saegusa, serían cuatro, corrieron juntas y se metieron entre sí, cuatro magos convergían desde cuatro direcciones diferentes.

Eran el equipo de fuera, sin ningún equipo de monitoreo en la calle, pero habían logrado llamar impresionantemente a otras cuatro personas sin que los demás lo notaran, es lo que él hubiera pensado, pero al final del día, era seguro decir que esos números no podían esperar cortar todas las rutas de escape en esta ciudad tridimensional.

Por eso, esta situación pronto no se convertiría en un “esconde y encuentra” sino en un “etiquetado”...

El enemigo de tu enemigo es, al final, solo otro grupo. Ese solo hecho no los convierte automáticamente en aliados, ¿eh?

Si todas las fuerzas que persiguen a los parásitos trabajaran juntas, cada equipo solo tendría que enviar a esta gran cantidad de gente y luego acorralarlos, esa sería una cuestión sencilla. Pero debido a las diferencias en los motivos, no funcionaría. Incluso sus propios objetivos no coincidían por completo con los de Mayumi o Erika.

Pero por el momento, el vampiro era más un enemigo.

Ahora bien, cómo haré mi entrada.

Mientras predecía las diversas reacciones que el personaje enmascarado podría hacer, Tatsuya sacó algo de su cintura no era su CAD sino un arma. Por supuesto, era ilegal, pero eso era lo último que tenía en mente en este momento. Apuntó con el arma al vampiro que acababa de dar un gran salto para evitar un golpe con total calma, apuntó alrededor del vientre, y casualmente apretó el gatillo.

El alcance efectivo medio de una pistola es de 50 metros, mientras que en combate real se dice que el alcance efectivo está dentro de los 20 metros. Esto había cambiado poco desde el siglo pasado, y la razón era porque las pistolas eran un arma hecha con esas necesidades en mente.

La distancia entre el árbol bajo el cual se escondía Tatsuya y la silueta que llevaba una capa larga era de unos 10 metros. Aunque Tatsuya había excedido el tiempo de entrenamiento mínimo necesario, de ninguna manera practicaba con una pistola todos los días, y aún era una distancia bastante difícil.

La pistola en su mano era una pistola de cámara única diseñada para una bala especial. No habría segundas oportunidades. Hubiera preferido apuntar a un área de piel expuesta, pero tuvo que renunciar a lo que no podía hacer.

Además, como el objetivo llevaba un sombrero sobre los ojos, así como una capa larga que se extendía hasta los tobillos, además de una máscara blanca que cubría completamente su rostro, era una apuesta segura que no habría piel expuesta en ningún caso. No había nada por lo que preocuparse.

La bala pesada de baja velocidad absorbió más de la descarga que un supresor, sin embargo, como se apuntó, la bala golpeó el abdomen de la capa. Mientras que el peso de la bala era el doble de un estándar de 9 mm, la falta de velocidad se vio compensada por el hecho de que el vampiro había estado cayendo hacia la bala.

El mago enmascarado se giró hacia Tatsuya. Las pupilas doradas brillaban con una luz intensa mientras lo observaban.

Dentro de ellos, podía detectarse una inconfundible hostilidad.

Ella abandonó su cuchillo al mismo tiempo que Tatsuya soltó su arma. Su mano se disparó a su cintura, cuando la de Tatsuya se acercó a su pecho.

La mano de Tatsuya llegó primero a su destino.

Pero su dedo se congeló a la mitad al apretar el gatillo de su CAD.

En la mano de su oponente había una pistola automática de tamaño mediano. La visión de Tatsuya discernió una fórmula mágica ya formada dentro de su barril.

La velocidad de activación era comparable a la Descomposición de Tatsuya. Era un dispositivo especializado que comenzó una secuencia de activación en el momento en que se apretó, reduciendo el tiempo y el esfuerzo necesarios para operar el interruptor y aprovechando así la iniciativa.

La magia que se activó fue Fortificación de Datos. Una magia que fortaleció cualquier bala que pasara por el cañón.

Tatsuya movió el selector de su CAD, cambió de una magia para descomponer Eidos a una para la descomposición de entidades y comenzó la activación.

Su objetivo era la cámara del arma que sostenía el mago enmascarado. Más precisamente, las balas que se dispararían desde allí.

El tiempo pareció ralentizarse durante ese momento de procesamiento de información de alta densidad durante la activación de la magia, mientras Tatsuya observaba al mago enmascarado retirar el dedo del gatillo de su pistola automática, Tatsuya hacía lo mismo con su CAD.

La distancia entre el mago enmascarado y Tatsuya era de aproximadamente 15 m. Las balas subsónicas disparadas desde esa pistola reprimida, que enfatizaban el sigilo, tardarían 0.05 segundos en alcanzarlo.

Eso era casi instantáneamente.

Sin embargo, el tiempo después de ser mejorado con Fortificación de Datos sería aún menor.

Mientras que las balas aumentaban la velocidad, se desintegraban en polvo.

Una sacudida fue evidente por detrás de la máscara.

Ella ciertamente se sentía confiada, pensó Tatsuya.

Las simples ‘suspensión’ o ‘modificación del vector’ no habría sido suficiente para detener esas balas. Si uno tuviera suficiente habilidad como Katsuto sería una historia diferente, pero el mago promedio no tendría ninguna posibilidad. Incluso un mago de la clase de combate de los Diez Clanes Maestros estaría en apuros.

En el caso de Tatsuya, [Descomposición] era un fuerte contraataque a [Fortificación de datos] por lo que fue capaz de hacer frente, pero si ese no hubiera sido el caso, definitivamente habría estado en problemas sin contramedidas.

Eso fue todo, sin embargo, una simple conjetura. Y ahora, el mago enmascarado había creado una brecha ante Tatsuya.

Disparó la magia en el instante en que se dio cuenta de esa brecha.

La magia que no había podido disparar inicialmente, ahora golpeó al mago enmascarado de frente.

Reflejado en la visión de Tatsuya, cosas como ‘color’, ‘forma’, ‘sonido’, ‘calor’ y ‘posición’ se escribieron como información. Él no apuntó al mago, sino que, uniéndose a su magia de disfraz, lanzó la anti magia, [Gram Dispersion].

Descomponiendo la fórmula mágica en sí misma, le quitó su cubierta exterior y la dispersó.

—En ese instante,

—el demonio renació como un ángel.



El cielo nocturno estaba lleno de estrellas. Dentro del motor del sedán que corría a lo largo de la carretera en el corazón de la ciudad, las vistas del exterior llegaban como imágenes tridimensionales, ya que ni el sonido ni las vibraciones se transmitían.

“...Sensei”.

Sentada en el asiento trasero de esa tranquila cabina, Miyuki abrió la boca vacilante.

La persona a la que se dirigía era el usuario de Ninjutsu sentado junto a ella, Kokonoe Yakumo.

“Nn, ¿qué pasa?”

Yakumo abrió los ojos, y se giró para mirar a Miyuki.

“¿Por qué en este momento... estás ayudando? Si recuerdo, tu regla siempre ha sido no involucrarte en el mundo real”.

Fue la precaución, o más bien el cumplimiento de los principios budistas. Los significados fueron diferentes, pero los resultados fueron similares. Y los mandamientos que Yakumo se había impuesto a sí mismo involucraban a ambos.

“Bueno, hay algunas circunstancias involucradas”.

El tono de Yakumo fue frívolo como siempre, y fue difícil para Miyuki ver las verdaderas intenciones debajo.

“Aunque descarté todos los lazos terrenales cuando comencé mi purificación, no descarté mi trabajo como shinobi. Después de todo, no fue solo mi llamado”.

No es que no sea capaz, ni que él “no pudiera”. No tenía ningún sentido de arrepentimiento, sino la sensación de que Yakumo lo consideraba perfectamente natural... eso fue lo que Miyuki leyó.

“Hay quienes lo llaman la responsabilidad u obligación de aquellos que han heredado habilidades... se puede considerar el colmo de lo mundano, pero incluso en el budismo, la autoridad no está libre de la tradición, por lo que debería ser aceptable, ¿no?”

Aunque técnicamente había hecho una pregunta, Miyuki no tenía respuesta. No hay que olvidar, Miyuki, no era algo que se le preguntaría a una chica de 15 años en general.

“Haah...”

Lo mejor que pudo hacer fueron palabras ambiguas de apoyo. Parecía que el discípulo de Yakumo en el asiento del conductor estaba enviando señales que recordaban las cejas levantadas, pero eso pudo haber sido solo su imaginación.

“El caso es que escuché de Kazama-kun que el enemigo que Tatsuya-kun estaba enfrentando podría haber estado usando el [Parade] de los Kudou. Si ese es realmente el caso, tendremos que darles una advertencia. El que enseñó el [Matoi] (纏 - Vestidura) a los Kudou, quienes lo desarrollaron en [Parade], fue mi predecesor después de todo”.

Todo es tan doloroso, suspiró Yakumo. Sin embargo, ese comentario indiscreto superó a Miyuki.

“El precursor de la técnica secreta de los Kudou [Parade], fue el maestro de Sensei...”

Si hubiera sido Tatsuya, probablemente hubiera dicho ‘ah, ese tipo de cosas pasan’ y simplemente lo aceptaría. Pero para Miyuki, no fue tan fácil de tragarse.

“Oh, no sabías... El propósito del Noveno Instituto había sido desarrollar magos que pudieran implementar la magia antigua simplificada y sistematizarla en la magia moderna. Con ese fin, el Noveno Instituto reunió a muchos usuarios antiguos. Mi predecesor estaba entre ellos”.

Naturalmente, Miyuki no tenía idea.

Más bien, la idea de que una niña de escuela secundaria estuviera bien informada sobre el lado oscuro de la magia moderna, las miserias selladas que eran los Institutos de Desarrollo de Habilidades Mágicas, era más absurda. Incluso Miyuki, heredera de los resultados del más infame, el Cuarto Instituto, no tendría idea de lo que los otros institutos habían estado haciendo.

“... ¿Entonces, el apellido de Sensei podría ser?”

Los ojos de Miyuki se abrieron de par en par cuando ella jadeó, y ella preguntó con una expresión pálida.

“No, estás pensándolo demasiado”.

Probablemente adivinó lo que Miyuki estaba pensando de inmediato. Riendo amargamente, Yakumo sacudió sus manos en negación.

“Kokonoe es simplemente algo que heredé de mi predecesor”.

El aire en el auto se relajó un poco. Pero ese calor se desplomó casi de inmediato.

“De todos modos, fue en esas circunstancias que mi predecesor enseñó el [Matoi] a los Kudou quienes lo desarrollaron en [Parade]. Se trata de técnicas secretas propias. Por lo tanto, si el mago enredado con Tatsuya-kun está realmente usando [Parade], tendrán que ser advertidos de que no se muestren más. Y si no están dispuestos a escuchar, bueno, sería muy desafortunado”.

El tono y la expresión de Yakumo eran tan despreocupados como siempre. Y sin embargo, Miyuki sintió un escalofrío recorrer su espina dorsal. Tampoco era solo ella. Agarrando el volante, los hombros del discípulo de Yakumo estaban rígidos como la piedra.



Un demonio convirtiéndose en un ángel. Esa era la impresión que quedaba en la mente de Tatsuya, tan vívido era el cambio.

El cabello escarlata, que recordaba a la oscuridad del abismo, resplandecía en oro que brillaba en la tenue luz.

Cruellos ojos dorados transformados en el sereno azul de un cielo despejado. Las curvas de su rostro se suavizaron, y su figura se adelgazó.

Incluso su altura parecía reducirse ligeramente.

Tal belleza no podría haber sido escondida por una máscara tan pequeña.

Por supuesto, si uno pudiera cambiar incluso su físico, no es de extrañar que pudieran haber engañado al mundo.

Si varias pruebas no se hubieran acumulado hasta ahora, incluso Tatsuya probablemente no lo habría descubierto.

La mano de Tatsuya se movió inconscientemente. De la mano de la chica de ojos de zafiro de pelo dorado volaron otras cinco balas, todas las cuales se desintegraron antes de alcanzarlo.

Entonces, justo antes de que pudiera disparar más balas, el deslizamiento de su arma salió volando y el cañón se cayó.

Cuando se vio obligada a dejar de disparar, sin mencionar que su dispositivo fue imposiblemente destruido por arte de magia, la chica enmascarada se congeló.

“¡Es suficiente, Lina! ¡No quiero pelear contigo!”

Aprovechando la pausa, Tatsuya trató de contener la situación. Su objetivo de hoy fue la captura del parásito. Para restringirlo, y descubrir su identidad. Por eso había tomado el duro camino de disparar una bala que dispararía una aguja anestésica con esa pistola de un solo disparo.

Para él, la pelea con el mago enmascarado / Lina, era una inútil pérdida de tiempo. Esa línea debería haber sido el final de la batalla, pero...

Fue un mal movimiento, logrando el efecto opuesto. Desde detrás de la máscara, los ojos azules brillaban con una intensa luz.

Devolvió el CAD especializado destruido a su funda con la mano derecha y desenfundó unas dagas arrojadizas en miniatura.

Los magos de la USNA favorecen y hacen un uso generalizado de CADs de armamento integrado. Era más que posible que esas dagas no fueran simples cuchillas, sino algún tipo de dispositivo de armamento.

Botas cortas lanzadas desde la superficie del softcourt. No era una velocidad que uno esperaría de una joven, pero no excedía los límites de los hombres comunes.

Tatsuya sacó una bola de plomo de su bolsillo.

Silbando en el aire, voló directamente hacia la mano derecha de Lina, y pasó directamente a través de ella.

No hubo rocío de sangre. No había golpeado carne, sino más bien una ilusión.

En ese momento, Lina retiró su brazo. La daga aceleró hacia Tatsuya a un metro de donde lo había percibido su ojo desnudo.

Saltando a un lado para esquivar, los ojos de Tatsuya rastrearon su trayectoria. Cuando sus ojos lo guiaron, vio una ilusión arrojando otra daga.

Sus ojos desnudos vieron a una pequeña chica enmascarada, pero el ojo de su mente sabía que era solo una imagen estereoscópica insustancial.

“¡Qué problemático!”

Tatsuya dejó escapar una queja sin palabras. La diferencia entre conocer y tratar con algo realmente era bastante pronunciada.

La técnica [Parade] creaba un cuerpo de información que contiene todos los elementos ‘color’, ‘forma’, ‘sonido’, ‘calor’ y ‘posición’. Era lo mismo que el [Matoi] de Yakumo.

A diferencia de [Matoi], que proyectaba un cuerpo idéntico al original en color, forma, sonido y calor pero con una posición diferente, el [Parade] de Lina enfatizaba la proyección de diferentes colores y una forma diferente. Sin embargo, eso no significaba que [Parade] tampoco pudiera cambiar de posición. La técnica que los Kudou idearon, y Lina heredó, también era perfectamente capaz de hacerlo.

En este momento, Lina estaba enfocando la potencia de cálculo para cambiar el color y dar forma a todo en una posición diferente, evitando que Tatsuya encontrara su ubicación real. Y sin las coordenadas del

objetivo, no pudiera lanzar magia. La magia que requería coordenadas basadas en la determinación de la información visual dejaba de ser útil una vez el objetivo ya no estaba a la vista. Y la diferencia entre [Parade] y una ilusión era que la posición falsa se transmitía incluso en la dimensión de la información.

Para que la magia surta efecto, la secuencia mágica debe proyectarse sobre el Eidos del objetivo. Por ejemplo, para ejecutar un archivo en una computadora, se debe especificar la ruta del directorio donde se encuentra el archivo y se debe ejecutar un comando de ejecución, pero dado que especificar la ruta cada vez es difícil, a menudo se usa un atajo. Si el acceso directo se cambia para especificar una ruta que conduce a un archivo ficticio不存在, a pesar de llevar a cabo el mismo procedimiento que antes, en lugar de ejecutar el archivo real, se producirá un error.

Aplicando este principio al proceso mágico, en la mayoría de los casos, la información visual es el ícono de acceso directo, y dentro de ella está la información auditiva y de temperatura táctil. Si la información visual se interrumpe debido a una ilusión, la magia no se activará, sin embargo, si la ilusión y el verdadero cuerpo se superponen, la secuencia puede alcanzar al Eidos a través de la información de coordenadas la mayor parte del tiempo. En este caso, a pesar de un retraso, la magia funcionará normalmente.

Incluso si la ilusión está en un lugar diferente, todavía es posible diferenciar entre la ilusión y el cuerpo verdadero como una clave e intentar localizar la posición del verdadero. Pero si las coordenadas son falsas y hay un maniquí presente en la dimensión de información, la fórmula mágica liberada tomando la información de los cinco sentidos como un atajo actúa en cambio hacia el maniquí, cuyo resultado es ‘nulo’.

Este es el sistema del [Parade] anti-magia.

Así que para romper con [Parade], es necesario ubicar el cuerpo entre el momento en que la vieja ilusión se rompe y se crea una nueva ilusión, o ignorar los cinco sentidos para encontrar las coordenadas del cuerpo directamente en la dimensión de información.

El primero actualmente no estaba yendo tan bien. Para empeorar las cosas, la activación mágica de Lina fue deslumbrantemente rápida. Su velocidad de activación superaba incluso la de Miyuki. Sin mencionar, ella habría practicado especialmente esta magia en particular hasta la muerte. La velocidad a la que reactivaba la magia era completamente monstruosa.

Para Tatsuya, el último método era una posibilidad. Sin embargo, estando bajo constante ataque físico, la mayoría de su percepción estaba en el ámbito material, y cambiar a lo inmaterial sería una apuesta considerablemente peligrosa.

No hay elección

Mientras sacaba la quinta daga, Tatsuya decidió. Incapaz de encontrar el cuerpo antes de que surgiera una nueva ilusión, ni capaz de localizar el Eidos de su objetivo en la dimensión de la información, se conformó con la tercera opción.

Sacó una pequeña lata cilíndrica del bolsillo de su chaqueta. Y lo arrojó ligeramente hacia arriba.

Por una fracción de segundo, una expresión confusa flotaba en el rostro de Lina, pero al reconocer lo que era la ‘lata’, sus ojos se abrieron de par en par.

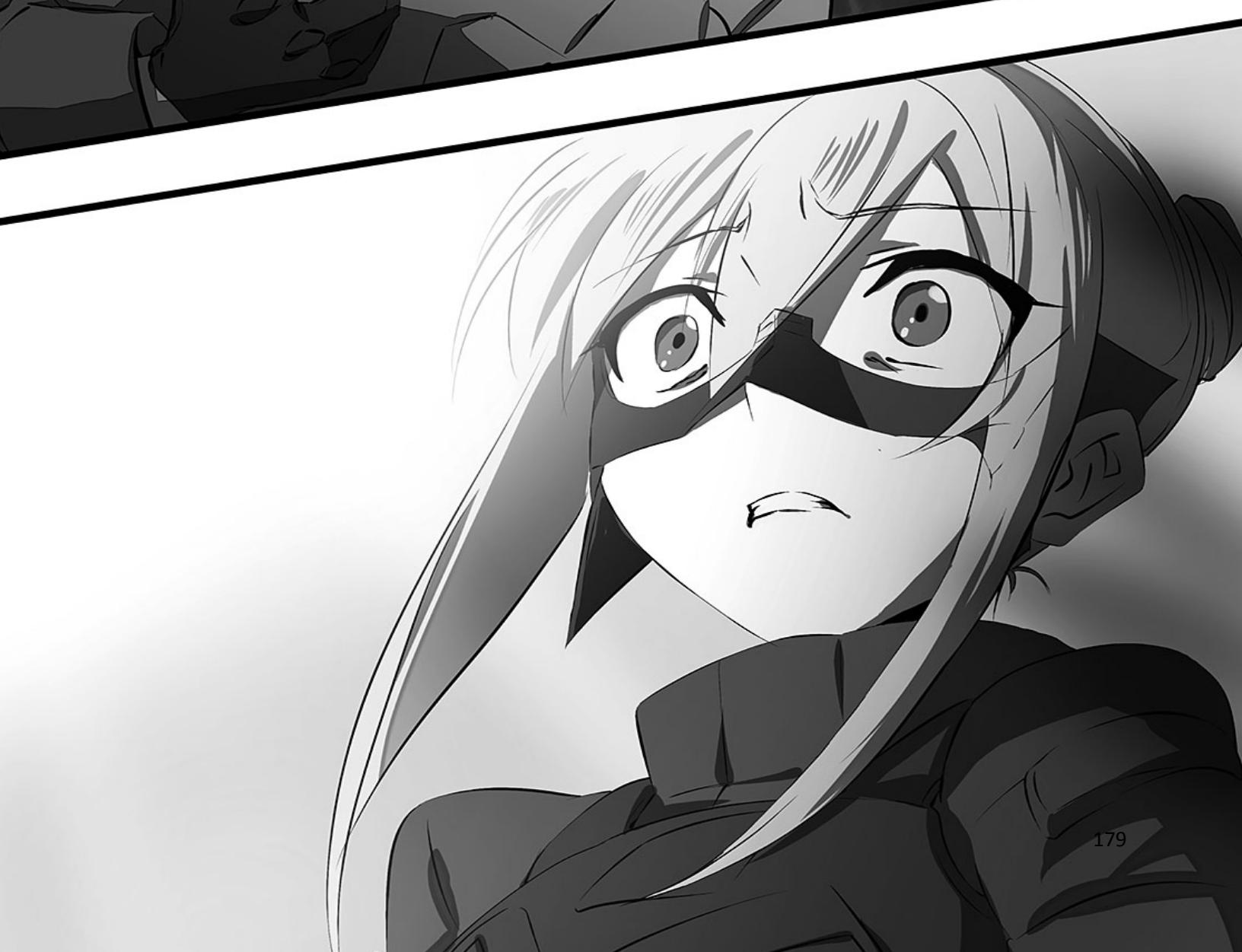
Era una granada de fragmentación en miniatura.

“Je —” Jesús, era probablemente la palabra que ella estaba buscando. Pero Lina no tuvo la oportunidad de terminar. Sin perder el tiempo en siquiera pronunciar esa corta palabra, ella arrojó una barrera objetiva.

Deceleración fija

Por otro lado, Tatsuya, en un parpadeo, lanzó una magia para desacelerar constantemente la velocidad de movimiento de los objetos. Si hubiera intentado crear una barrera débil con su área mágica virtual, le hubiera sido imposible bloquear completamente su propia granada de fragmentación. (*una granada especializada para arrojar metralla*).





Y si hubiera usado la velocidad para detener la magia de suspensión, era posible que perdiera la pura energía cinética de los proyectiles y no modificara el evento.

Por eso usó la desaceleración fija. Incluso entonces, no habría sido capaz de lograr una desaceleración a gran escala como una centésima o una milésima de velocidad.

Combinando el hecho de que era un arma que había preparado y sabía todo con la fuerza de interferencia de su área de cálculo mágico virtual, fue capaz de producir la magia del mínimo necesario para tener éxito.

Sin embargo, la desaceleración fija sola no pudo detener la metralla. No era una magia diseñada para esa tarea. Cuando se giró hacia un lado y se arrodilló, pequeños fragmentos le salpicaron el flanco, el muslo y el brazo que había levantado para cubrirse la cabeza.

Muy pocos penetraron en la tela del cuero artificial con una menor capacidad a prueba de balas, pero todavía más de una docena ahora se estaban clavando en la carne de sus extremidades.

[Auto restauración / inicio automático] *Cancelación de auto restauración.*

Reprimiendo deliberadamente su auto restauración que automáticamente trató de iniciar, Tatsuya saltó hacia Lina quien estaba completamente indemne detrás de una barrera. Inmediatamente comenzó a trabajar para descomponer la barrera antipersonal que Lina acababa de extender. Siendo completamente tomada por sorpresa, incluso Lina no pudo hacer nada más que eso.

“...Qué imprudente, Tatsuya”.

Lina fue arrojada al suelo, y Tatsuya presionó desde arriba. Fijada al suelo, Lina habló con voz asombrada. Sus labios, los cuales no estaban escondidos detrás de su máscara, estaban curvados en una sonrisa, pero no era difícil ver a través de su valentía.

“Es un ataque básico de libro de texto, cuando se trata de un oponente que no puedes localizar simplemente debes provocar ataques en todas las direcciones, ¿verdad?”

“Eso se llama ataque indiscriminado”.

“Siéntete libre de pensar lo. Desafortunadamente, no tengo la habilidad para lanzar magia de efecto de área. Bueno, si eres Lina, estoy seguro de que habrías podido defenderte de eso de todos modos, así que con eso dicho, por favor perdóname”.

“Si te incapacitas a ti mismo en el proceso, creo que eso frustra todo el propósito”.

“Sin recurrir a esto, no habría otra forma de atraparte”.

“¿Querías atraparme? Si vas a declarar tu amor, hubiera preferido una forma más romántica”.

Mirando hacia esos ojos azules, Tatsuya sonrió. Estaba sujetando ambas manos de Lina sobre su cabeza con una palma.

Cuando él movió su mano libre hacia su máscara, el hombro de Lina se crispó. Los dedos de su mano izquierda envueltos en guantes gruesos intentaron moverse, pero Tatsuya los abrió por la fuerza.

“...Duele, Tatsuya”.

“Desafortunadamente, conozco el truco de ese CAD. Ahora bien...”

La mano de Tatsuya se apoderó de la máscara.

Lina cerró los ojos y se alejó. A pesar de que la misma había estado expuesta desde hacía tiempo, todavía se mantenía reacia a revelar su verdadero rostro. Tatsuya no entendía el pensamiento detrás de tal razonamiento, pero no era como tratarse de ultrajarla, por lo que no tenía motivos para detenerse.

“¡Activar, [Dancing Blades]!” (*Cuchillas Danzantes*)

En el momento en que su mano tocó la máscara, Lina se alejó gritando.

Las cinco dagas que Lina había arrojado respondieron al sonido de su voz, y giraron hacia Tatsuya.

Un armamento activado por voz es... un dispositivo que activa una secuencia de activación y un disparador de retardo, es bastante interesante.

Sintiendo las dagas apresurándose hacia él, Tatsuya murmuró para sí mismo.

Dos apuntaban a su mano derecha sosteniendo la máscara, una en su hombro derecho, una en su brazo izquierdo y otra en su pierna.

Ninguno apuntaba a sus signos vitales.

Ahora que lo piensas, todos los ataques de Lina tenían la intención de inhabilitar, ninguno tenía la intención de matar... mientras consideraba las cosas, las dagas llegaban a su carne.

Y en el momento en que hicieron contacto, se disolvieron en polvo.

“Corrosión... no, ¿Descomposición...?”

Los ojos de Lina volvieron a mirar a Tatsuya, mientras se ensanchaban en estado de shock. Sin importarle nada, Tatsuya comenzó a quitarse la máscara.

Lina intentó resistir, sacudiendo violentamente su cabeza, pero la mano de Tatsuya era inamovible.

“¡Te arrepentirás de esto, Tatsuya!”

“En el momento en que el objetivo que debería haber capturado exitosamente huyó, sentí suficiente arrepentimiento”.

Durante la riña con Lina, el parásito había escapado a una buena distancia. A pesar de que tenía un seguro, no pudo evitar la frustración de todo el asunto. Lina debería haber estado detrás del vampiro también, entonces cuales eran sus intenciones al ayudarlo a escapar llenaba los pensamientos de Tatsuya.

A pesar de enfrentarse a esos ojos llorosos, al ser suplicado con una voz tan desesperada, Tatsuya no sintió la obligación de dudar. Él retiró los receptores que actuaban como broches en sus orejas. Como se esperaba, parecía que la máscara actuaba como un terminal de información.

Gentilmente le quitó la máscara que estaba hecha de un material sorprendentemente firme. Incluso Tatsuya, que estaba más que acostumbrado a las buenas vistas, no pudo evitar soltar un suspiro ante la belleza que ahora se revelaba.

Lina apretó los labios y miró a Tatsuya.

Al momento siguiente, gritos desgarradores emitidos por esos labios. En ese desarrollo totalmente abrupto, Tatsuya quedó atónito.

Sin embargo, su brazo que sujetaba las manos de Lina no se aflojó, habiendo sido educado sin piedad como subordinado del inescrupuloso Kazama.

“¡Alguien, cualquiera ayuda!”

Era como si estuviera llorando para salvarse de un violador.

Aunque no era un violador, los fríos y muy convincentes ojos de Tatsuya no estaban ayudando a su caso.

Como si estuviera esperando el grito de Lina como una señal, se podía oír el sonido de pasos apresurados. Vistiendo uniformes azul marino bajo chalecos antibalas escarlata forrados con pintura reflectante blanca, cuatro personas se apresuraron a entrar desde cuatro direcciones. El emblema que brillaba en sus gorras era el escudo de Sakura.

Agarrando el brazo izquierdo de Lina, Tatsuya le arrancó por la fuerza el guante de la mano izquierda.

Con la sensación de una cuerda rasgándose, la mano blanca de Lina fue revelada.

“¡Pon tus manos en el aire y date la vuelta!”

Un policía, o al menos un hombre disfrazado como tal, gritó mientras corría mientras apuntaba con una pistola.

Tatsuya giró detrás de Lina, y se apresuró al hombre.

Lina fue empujada al pecho del hombre mientras él soltaba un grito. El hombre la atrapó.

Y Tatsuya, saltando sobre sus cabezas, aterrizó en los hombros del hombre. Como si lanzara una pelota de fútbol, le dio una patada en la cara.

Saltando del hombro del hombre que se desplomó hacia atrás sin hacer ruido, Tatsuya se escabulló de entre los falsos policías que lo rodeaban.

“... ¿Qué demonios hubieras hecho si hubiera sido un policía de verdad?”

La voz de Lina era absolutamente incrédula.

Sin embargo,

“Es hora de que abandones el acto, Angie Sirius”.

Ante la respuesta de Tatsuya, la atmósfera se endureció.

“Si te están ayudando, no importa si son reales o no. Aunque hace 100 años era diferente, el derecho penal moderno establece que incluso instigar involuntariamente a agresores extranjeros no es motivo de persecución. Si piensan que disfrazarse de policías es suficiente como para asustar a la gente, estás gravemente equivocada. No subestimes la resolución de los magos de Japón”.

Los tres oficiales falsos, con la excepción del caído, se volvieron para esperar la decisión de Lina, de su comandante Angie Sirius.

Con un suspiro, Lina se enfrentó a Tatsuya y, doblando levemente su rodilla, hizo una educada reverencia.

“Sentimos la rudeza. En verdad, te hemos subestimado. Hay una gran diferencia entre escuchar y observar. Como compañero mago, me disculpo”.

Luego alineó sus pies, se paró derecha y puso su mano derecha al lado de su frente. Incluso sin un tope militar, fue inconfundiblemente un saludo.

Anteriormente había sido simplemente otra maga, pero ahora estaba actuando como la capitana del cuerpo de magos militares de la USNA. Eso fue lo que Tatsuya interpretó como su gesto.

“Soy el capitán de la fuerza mágica integrada del ejército de Estados Unidos STARS, reportando directamente a los Jefes de Estado Mayor, la Comandante Angelina Sirius. Angie Sirius fue el nombre bajo el que me escondí durante mi disfraz anterior, así que sigue llamándome Lina como siempre lo has hecho. Ahora entonces”.

La intención asesina que había mantenido oculta en aras de la cortesía, ahora atacó a Tatsuya con toda su fuerza.

“Ahora que conoces mi verdadero rostro y tu verdadera identidad, Tatsuya, STARS no tienen otra opción que aniquilarte. Si hubieras dejado la máscara, podríamos haber evitado esto, por más engaño que haya sido, es una pena”.

“¿Me estás diciendo que te arrepientes de esto?”

En medio de esa sed de sangre, Tatsuya se rio sin miedo.

“Si te hubieras quedado callado y te hubieras dejado atrapar, podríamos haberlo terminado sin matarte”.

“Que mal. He dejado que tu consideración sincera se desperdicie”.

“No, lo que tomará tu vida es nuestra circunstancia egocéntrica, así que no hay nada por lo que disculparte. Incluso puedes sentirte libre de resistirte”.

Uno de los policías falsos le entregó un cuchillo de combate en una mano y una pistola de tamaño mediano en la otra. Una cuchilla forma un dispositivo de armamento, y una pistola en forma de CAD especializado.

Tatsuya también desenfundó su CAD.

“Esto realmente es una pena, Tatsuya. Me habías gustado bastante”.

Estirando su mano izquierda, Lina apuntó su CAD a Tatsuya.

Extendiendo su mano derecha, Tatsuya apuntó su CAD a Lina. Los subordinados de Lina tomaron posiciones detrás de él. Él estaba rodeado.

“...Adiós, Tatsuya”.

“¡No te dejaré, Lina!”

De repente en ese momento, una voz dominante y fría como el invierno más profundo congeló el aire.

Con una luz asustada flotando en sus ojos, Lina se giró hacia el sonido de la voz.

Como si estuvieran cubriendo a su superior ahora abierto, los subordinados de Lina se movieron para atacar simultáneamente a Tatsuya desde tres lados.

Grandes cuchillos de combate se balancearon hacia Tatsuya. Extiéndose desde los bordes de las cuchillas era [Molecular Divider]. (*Divisor Molecular*)

Tatsuya apretó el gatillo de su CAD. El territorio virtual, diseñado para invertir los enlaces que mantienen unidas las moléculas, desapareció a pesar de la intención del operador.

Ahora que los cuchillos de combate eran simples cuchillas, Tatsuya salió de la red. Uno de los subordinados de Lina, pasando por delante de Tatsuya, repentinamente se llevó una mano al estómago y se cayó. Lo que fluía de entre sus dedos era sangre.

Su mano izquierda, empapada de sangre, salió despedida. La sangre salpicó hacia los otros policías falsos.

Uno de ellos se detuvo en seco, y el otro corrió directo hacia él.

La mano derecha de Tatsuya regresó para señalar a Lina.

La mano izquierda de Lina apuntaba a la persona que se había cruzado en su camino: Miyuki.

La secuencia de activación que ella inició fue disipada por el [Gram Dispersion] de Tatsuya.

Antes de que un hombre pudiera saltar sobre Tatsuya, un frío gélido que enfrió la sangre de todos los atacantes descendió.

Los pasos del hombre se detuvieron abruptamente. Detrás de él acechaba una sombra.

Sin palabras, el hombre cayó inconsciente.

La única persona que quedaba ya estaba en el piso.

“Bueno, Tatsuya-kun, eso fue bastante peligroso”.

Habiendo incapacitado a dos de los miembros de STARS en un instante, Yakumo se paseó con la misma expresión despreocupada de siempre.

Al ver a esa figura capaz de mantenerse “como siempre” incluso en esta situación, Tatsuya reconoció su propia inexperiencia.

“Qué descarado, maestro. A pesar del hecho de que estabas esperando hacer la entrada perfecta”.

Estar impresionado a pesar de sí mismo era molesto, por lo que arrojó sarcasmo en su lugar.

En esa línea, los ojos de Lina se abrieron de par en par.

Frente a ella estaba Miyuki, preparado con su CAD listo para la batalla. La mano derecha de Tatsuya apuntaba directamente a Lina.

Los ojos de Yakumo estaban dirigidos hacia Tatsuya, pero Lina también estaba completamente dentro de su campo de visión.

Quien estaba rodeada ahora era Lina.

“Bueno, supongo que esto está bien. De todos modos, hay cosas que quería preguntarte”.

“Eh, ¿Así lo fue Onii-sama?”

Miyuki volteó consternada. Mirando lejos de Lina, dejando una apertura a sí misma, pero debido a la presión creciente de Tatsuya y Yakumo, Lina estaba paralizada.

Inmediatamente notando su propio error, Miyuki también devolvió su enfoque hacia Lina a toda prisa.

“Te permitiste estar rodeado a propósito para sacarles información correcta... y sin considerar eso, simplemente irrumpí. Por favor, perdóname, Onii-sama”.

Girando nuevamente hacia Lina, Miyuki habló con voz de disculpa mientras le pedía perdón a Tatsuya.

“No, realmente era peligroso, por lo que tu juicio no estaba equivocado. Por lo tanto, no hay nada por lo que disculparse. Por el contrario, debería ser yo quien exprese mi gratitud. Gracias, Miyuki”.

“Onii-sama... no hay necesidad...”

Miyuki murmuró con una expresión aturdida. Bueno, Miyuki se disculpó con Tatsuya y luego de que esto sucediera fue una ocurrencia garantizada. O como una especie de ritual. A pesar de nunca quitarle los ojos de encima a Lina, Miyuki solo estaba prestando la mínima atención.

“Además, simplemente puedo comenzar a preguntarles ahora”.

Esto fue hablado hacia Miyuki, pero también fueron hechos para Lina. Por la forma en que hablaba cada palabra claramente, Lina se dio cuenta de su intención.

“... ¿Intentarás obligarme a hablar?”

“El interrogatorio generalmente implica fuerza”.

Lina habló a través de los dientes, y Tatsuya le devolvió una confirmación indirecta.

“¡Tres contra uno es hacer trampa! ¡Es Injusto!”

“Injusto... ¿cuántos de ustedes estaban rodeando a Onii-sama antes?”

Ante ese molesto grito de queja, Miyuki respondió atónita.

“Vamos, no digas eso”.

Antes de que su sorpresa se convirtiera en ira, Tatsuya calmó a su hermana.

“Justo es una fachada cuando está en una posición favorable para mantener esa condición, e injusto es una conveniencia cuando se está en desventaja a las concesiones desde el otro lado. Desde una perspectiva táctica, usar palabras para evitar el conflicto cuando no se puede ganar con la fuerza no está mal. En el momento en que te atraen es cuando pierdes, Miyuki”.

“Ya veo, así que eso era”.

Fue bastante directo, pero al menos logró su efecto de calmar a Miyuki.

“¿Fachada? ¿Experiencia?”

Al mismo tiempo, tuvo el efecto de desconectar a Lina. Por cierto, Yakumo solo estaba amortiguando su risa todo el tiempo.

“¡No quiero que me lo digan japoneses que no se avergüenzan de ocultar tus verdaderas intenciones con una fachada!”

“¿No eres 1/4 japonesa?”

“...”

“El [Parade] que usas fue desarrollado en Japón, y la razón por la que puedes usarlo es por la sangre de los Kudou, en otras palabras, japoneses, que fluye dentro de ti ¿no? Además de eso, los dobles estándares son el sello distintivo del establecimiento blanco. Todavía tengo que escuchar hablar de un pueblo que no separa sus verdaderos sentimientos de su fachada”.

Lina silenciosamente miró a Tatsuya, su piel blanca se sonrojó de un rojo brillante. En silencio, ya que ella ni siquiera dejó escapar un gemido.

Frente a los ojos de Lina con su terrible sonrisa, Tatsuya notó que su sed de sangre se había desvanecido por completo y sonrió con ironía.

“... ¿Hay algo extraño?”

“No, solo estoy pensando que interrogar a Lina a este ritmo la hará más obstinada”.

“¡Al menos llámalo orgullo!”

Sabiendo la diferencia entre la obstinación y el orgullo, su japonés realmente no es malo, pensó Tatsuya, impresionado. No, eso era muy relevante.

“Los otros grupos también estarán aquí pronto...”

“¡Espera! ¿Me estás escuchando?”

Lo mejor era ignorar las cosas irrelevantes.

“Lina, vamos a darte un trato justo. Si crees que tres contra uno es injusto, ¿qué tal uno contra uno? Si ganas, te dejaremos ir por hoy. Si gano, tendrás que responder con sinceridad a nuestras preguntas. ¿Qué te parece?”

Incluso si Lina ganaba, Tatsuya aún sabía su verdadera identidad, y si ganaba, tendría que hablar. Aunque el partido sería uno a uno, las condiciones aún no estaban equilibradas.

“...Bien”.

“¡Por favor espera!”

Cuando Lina aceptó amargamente, Miyuki habló al mismo tiempo. Tatsuya y Lina miraron a Miyuki.

Impávida, Miyuki habló claramente.

“Onii-sama, por favor déjame el encuentro con Lina a mí”.

“Miyuki, ¿qué estas...?”

“Lina, recuerda esto. Nunca voy a perdonar a aquellos que pretenden dañar a Onii-sama. Pienso en ti como mi rival y mi amiga, pero cuando declaraste tu intención de matarlo, aunque fueran simples palabras, absolutamente no lo perdonaré. Por mis propias manos, haré que se den cuenta de su pecado”.

Los ojos de Miyuki brillaron con una luz completamente seria. Al ver esa obsesión demasiado profunda, parecía que Lina se reiría de ella como un engaño, pero solo soltó una risita.

“No te preocupes, no te mataré”.

Las palabras de Miyuki declararon que ya era su victoria.

“Hmph... Miyuki, ¿crees que puedes ganar contra mí? ¡¿Yo, que tengo el nombre de Sirius?!?”

Al escuchar eso, las llamas de la batalla se encendieron en el pecho de Lina. Las dos reinas se miraron furiosas.

“Está bien. Miyuki, te lo dejo a ti. ¡Está bien para ti, Lina?”

“Muchas gracias, Onii-sama”.

“Hazlo a tu manera. Si pierdo, te diré lo que quieras. ¡Aunque eso no pasará nunca!”

El acuerdo fue hecho. Y así fue que las dos bellezas extraordinarias, estuvieron dispuestas a levantar el telón en un magnífico duelo.



La destreza de Miyuki con la magia de enfriamiento y congelación no tenía rival.

Sin embargo, la naturaleza de su magia proviene de cerrar el movimiento de la vibración molecular, y no se deriva del aprovechamiento de espíritus de la nieve o demonios de hielo. Por supuesto, no era como en esos entornos comunes a las fantasías dirigidas a los niños pequeños, donde recibir el patrocinio de un espíritu así se otorga la inmunidad al frío. El punto es que...

El frío es frío.

Montado tandem en una bicicleta en medio de esta noche de pleno invierno, no había forma de que no tuviera frío.

Así que-

No hay problema en estar así, claro... después de todo, hace frío.

Mientras se aferraba fuertemente a Tatsuya, presionando su mejilla contra su espalda y su pecho, Miyuki repitió tal excusa en su cabeza.

¿Hay algún punto para dar excusas en este momento? Era algo que era mejor no decir.

Echando un vistazo a los faros de la motocicleta justo detrás de él, si alguien hubiera visto su expresión, solo podría haber sido descrita como “traviesa”.

Desde su posición, no podía ver a Miyuki detrás de la sombra de Tatsuya, pero era perfectamente capaz de predecir cuáles serían sus acciones, su condición y su expresión. Para él, los sentimientos que los hermanos tenían el uno por el otro eran algo bastante interesante.

Cuando las comisuras de su boca se crisparon, sintió una tensión creciente a su lado. Parecía que su sonrisa había sido malinterpretada.

“No hay necesidad de tanta preocupación. Mientras sigas el acuerdo, no tengo intención de hacerte daño”.

“...Considerando la posición en la que estoy, ¿realmente me estás diciendo que crea eso?”

Con los ojos fijos hacia adelante, Lina respondió con voz áspera. No, en lugar de “áspera”, sería “rígida”.

“Bueno, puedo ver de dónde vienes”.

Atrapada entre Yakumo y su discípulo en el asiento trasero del sedán, si alguien hubiera visto su posición, sin duda habría asumido que la escoltaban. Conociendo el poder de los hombres sentados a su lado, esa sensación solo se profundizó.

Yakumo había derribado dos STARS en un abrir y cerrar de ojos.

Sin que ninguno de ellos se diera cuenta, ese ninja vestido negro apareció de repente detrás de ellos. La parte posterior del hombre que agarraba el volante tampoco tenía aberturas.

Incluso con probabilidades de tres a uno, no creía que hubieran sido oponentes a los que no pudiera vencer, pero sabía que lo más probable era que tampoco escapara ilesa.

“Pero puedes estar tranquila”.

Al percibir su tensión y estimar que provenía de su vigilancia y hostilidad, Yakumo habló en un tono relajado.

Para Lina, eso fue aún más desconcertante.

“No tengo ningún interés en lo que sucede entre ti y Tatsuya-kun. Mi único interés es la correcta transmisión de nuestros secretos. Todo lo que pido es que, como dije antes, no reveles a los demás lo que les enseñamos a los Kudou. Para que aquellos que no tienen el privilegio de saber no aprendan”.

“... ¿No te importan ni siquiera tus intereses nacionales?”

“No”.

“¿Ni siquiera la paz mundial? ¿El futuro de la humanidad?”

“Ni en lo más mínimo. Soy un recluso”.

“Tú también eres un mago, ¿verdad?”

Las palabras de Yakumo eran simplemente incompatibles con los valores de Lina. Y entonces, ella innecesariamente no fue capaz de creerle.

“Soy un shinobi. No soy un mago”.

Yakumo le respondió con voz tranquila. Una refutación decisiva.

“... ¿No son los usuarios de Ninjutsu un tipo de magos?”

“Solo porque podemos usar magia, no significa que debemos convertirnos en magos”.

Ella sabía a qué se refería. Ella podía entender.

Sin embargo, aun así, Lina no pudo aceptar lo que dijo Yakumo.

“De la misma forma, el hecho de que uno se convirtiera en mago no les impone automáticamente la obligación de servir a su país”.

No podía estar de acuerdo, pero por alguna razón, tampoco podía objetar.



El auto en el que viajaba Lina se detuvo en algún lugar a la orilla de un río.

‘Algún lugar’ fue en el sentido de que Lina no tenía idea de dónde estaba, pero adivinando por su tiempo de viaje todavía debería estar dentro de la ciudad o los suburbios. Lina estaba sorprendida de que una ciudad metropolitana como Tokyo todavía tuviera este tipo de lugares.

No se veían luces en absoluto.

Con los faros del sedán apagados, al igual que las luces de la motocicleta, el lugar estaba completamente oscuro.

Sin luna, y solo con la luz de las estrellas para guiarlos a través de la oscuridad, Tatsuya y Miyuki caminaron hacia arriba.

De repente, Lina fue atacada por la ansiedad.

Su CAD no había sido tomado, pero ya no tenía su transmisor o terminal de comunicaciones. No había sido sometida a un chequeo corporal, pero todo su equipo había sido reconocido y no había tenido más remedio que entregarlos obedientemente.

Se le aseguró que se lo devolverían más tarde, pero por el momento, no tenía forma de informar a sus compatriotas sobre su paradero. Un satélite debería haber estado monitoreando sus movimientos, pero los que la llevaron aquí eran hábiles en el arte del ‘Ninjutsu’, conocido por su magia de sombras ilusorias. Era más que plausible que pudieran engañar incluso a las cámaras satelitales de alta resolución de grado militar.

Es posible que la hayan traído a este lugar aislado para confinarla. En el peor de los casos, ella incluso podría ser asesinada.

Lina apretó con fuerza el CAD en su pecho a través de su ropa.

—En el peor de los casos, ella tendría que jugar su carta de triunfo.

“Puedo intuir lo que estás pensando, pero vamos a mantener nuestra palabra así que relájate”.

Todo lo que Lina tenía quería hacer era no gritar. Habiéndole hablado de repente, no pudo reprimir un escalofrío. Cuando se dio la vuelta, vio a Tatsuya, que se había acercado lo suficiente como para que su expresión fuera visible a la luz de las estrellas, riendo en silencio.

“Solo te estoy recordando las condiciones. Si respondes las preguntas que tengo, te dejaremos en la estación”.

Siendo la otra parte, fue una risa muy escandalosa.

“Eso solo si ganas”.

Naturalmente, la voz de Lina era agria.

“Por supuesto. En ese caso, llevaremos a cabo los términos también”.

Su desvergüenza, que no disminuía en lo más mínimo, la irritaba cada vez más, pero Lina sabía que el hecho de que todo fuera bien aquí solo empeoraría su posición.

Apretó los dientes con fuerza y fijó sus ojos detrás de Tatsuya, hacia Miyuki.

Los ojos llenos de espíritu de lucha le devolvieron la mirada. Miyuki también estaba llena de motivación.

“Ahora bien... Lina puede estar insatisfecha con esto, pero el árbitro será el Maestro. Todo lo que arbitrará será decidir quién gana y quién pierde, por lo que no hará ninguna pausa ni interferirá”.

“Sabía que no habría nadie más que enemigos aquí desde el principio, así que no hay nada por lo que estar insatisfecha”.

“Eso es muy buena gracia”.

Tatsuya fríamente cruzó su comentario sarcástico.

Su frustración había estado hirviendo, pero ahora Lina de repente se sintió calmada.

“Entonces, este humilde servidor Kokonoe Yakumo será tu árbitro para este encuentro. Las condiciones de victoria son cuando una de las partes se rinda, o sea incapaz de continuar el combate. Sin matar por favor. Eso solo llevaría a la mala voluntad”.

“Entendido. Eso está perfectamente bien”.

“Terminaré todo mucho antes de eso”.

Miyuki asintió en silencio, mientras que Lina dio un energético acuerdo.

Si bien su actitud fue contrastante, su fe absoluta en su propia victoria fue compartida.

Todo estaba al límite.

“Entonces, ¿debemos comenzar?”

“Maestro, un momento por favor”.

Lamentablemente, alguien que era totalmente incapaz de leer el estado de ánimo estaba allí. Absolutamente haciendo caso omiso de las miradas que Yakumo y Lina le enviaban, Tatsuya se acercó a su hermanita.

Se acercó a menos de dos pies de ella, pero aun así no se detuvo.

“Um, ;Onii-sama?”

Sin responderle a Miyuki, quien confusamente no pudo adivinar la intención de su hermano,

Un pie.

Él continuó

Finalmente se detuvo lo suficientemente cerca para poder sostener a Miyuki si se estiraba—

—y la abrazó.

“Ummmmumumum”.

Sosteniéndola con tanta fuerza en la cintura, Miyuki sonrojándose furiosamente comenzó a entrar en pánico. Un tercero probablemente habría encontrado eso extraño, teniendo en cuenta lo mucho que lo había abrazado apenas antes, pero abrazar y ser abrazada eran dos cosas completamente diferentes.

La otra mano de Tatsuva acarició la cabeza de Miyuki. Miyuki ya no era capaz de hacer sonido alguno.

Pasando sus dedos por el cabello de su hermana, su rostro había cesado toda resistencia a sus labios, Tatsuya le dio a Miyuki un beso en la frente.

Cuando finalmente lo soltó, el rostro de Miyuki estaba impactado con los ojos abiertos. No hubo vergüenza, solo commoción congelada.

“Esto, ¿por qué...?”

“Me enseñaste a hacer esto antes, y aunque es imperfecto, recordé su esencia. Aunque solo es temporal, te devuelvo tu poder. Por favor compite hasta contentar tu corazón”.



“... ¡Sí!”

Tomando las palabras de su hermano, con toda seriedad, Miyuki asintió con una sonrisa indomable.

“Perdón por hacerte esperar, maestro”.

Lina, de pie junto a Yakumo, estaba haciendo una mueca como si hubiera comido demasiado y tuviera ardor de estómago.

“Lina también... Sé que fue grosero, pero no te importa unos momentos ¿verdad?”

“No... no, está bien”.

Escuchando a Tatsuya completamente indiferente, Lina respondió con su voz más sarcástica.

Miyuki no siguió detrás. Parecía que no tenía la intención de participar en un combate cuerpo a cuerpo.

De las observaciones de Lina hasta el momento y a la luz de esto, Lina determinó que Miyuki era un mago típico, deficiente en habilidades físicas. Para el mago ejecutor encubierto conocido como ‘Sirius’, eran el tipo más fácil de presa.

¡Terminaré esto de una vez!

Todavía no había una señal de partida, pero Lina no tenía intención de esperar tal cosa. No había habido nada en los arreglos sobre una señal después de todo.

Cerrar la brecha con magia de auto-aceleración, neutralizar la magia del oponente con Fortificación de Datos, luego eliminar en CQC. (*Close Quarter Combat // Combate en espacios cerrados*)

Luego, mientras Tatsuya y el otro estaban distraídos por la pérdida de Miyuki, utilizar la magia de alta velocidad para escapar.

Ese era el plan.

Sin embargo, ella solo pudo soltar un grito silencioso.

Un paso más rápido de lo que ella podía activar la magia, una tempestad se precipitaba apresuradamente.

En el momento en que Lina saltó a un lado, un torrente de aire helado pasó velozmente. Cuando levantó la cabeza, esta vez vio una tormenta de nieve que entraba desde un costado. Al manipular la densidad del aire y crear una pared de vacío, Lina pudo escampar la tormenta de alguna manera.

“Supongo que esto no es suficiente”.

Mientras Miyuki murmuraba para sí misma, el aire de la noche comenzó a reunirse a su alrededor.

Lina apretó los dientes.

En términos de velocidad de activación, Lina superaba a Miyuki.

Para Miyuki haber hecho el primer movimiento, significaba que ella debió haber empezado antes.

Sin mencionar que las dos descargas anteriores fueron secuencias diseñadas para maximizar la velocidad a costa de la potencia.

Lina se sintió el doble de avergonzada.

Tanto en su intención de explotar la ingenuidad de su oponente, y ser atrapado por sorpresa a su vez.

Ella había pensado que podía ganar incluso con ataques de baja potencia y de hecho, se había acercado peligrosamente.

¡Pero ahora es mi turno!

La brecha era favorable para lanzar una magia más fuerte para el golpe decisivo. Pero eso sería fatal, pensó Lina. Ella simultáneamente activó la auto-aceleración y la Fortificación de Datos.

Al revestirse con una magia de auto aceleración que redujo la gravedad y la inercia, Lina corrió directamente hacia Miyuki. Su mano derecha agarró lo que parecían botones decorativos en su chaqueta.

Ella no había sacado su arma, pero esto debería ser más que suficiente para dejar fuera a una chica de preparatoria.

Entonces, en el momento en que Lina estaba a cinco metros de distancia, su intuición gritó que se detuviera.

Plantó sus pies firmemente para resistir un vendaval que de repente amenazó con derribar su cuerpo.

Ella aplicó una magia estática sobre sí misma para contrarrestar esa fuerza de arrastre.

En esa posición, ella activó la magia de movimiento sobre los botones en su mano. Los botones, preparados para moverse a 300 km/h sin aceleración, se ralentizaron y cayeron al suelo antes de haber recorrido siquiera un metro.

Los sentidos de Miyuki habían percibido a Lina más rápido de lo que el ojo podía ver.

A pesar de que no podía extraer datos directamente de la dimensión de información como Tatsuya, era posible percibir las huellas de la modificación del evento dejado por la magia. Esto era algo que cualquier mago podía hacer a diferentes niveles, y cualquier cosa que un mago pudiera hacer, Miyuki podría hacerlo al más alto nivel.

La magia de auto aceleración era una magia que causaba la modificación de eventos en el usuario mismo. Por lo tanto, al rastrear las huellas de la modificación del evento en tiempo real, fue posible determinar la posición del lanzador.

Miyuki había aprendido a explotar esa debilidad de la magia de auto aceleración de Tatsuya.

Todo hasta ahora había procedido tal como estaba planeado. Ella dijo “supongo que esto no es suficiente” había sido deliberado, una estrategia para provocar al otro lado.

El factor decisivo sería esta próxima magia.

[Zona de desaceleración]

La técnica en sí misma era bastante común. Era una magia ampliamente utilizada tanto en Japón como en el extranjero para ralentizar el movimiento de un objetivo.

Pero cuando Miyuki usa esta magia, sus objetivos pueden extenderse incluso a las moléculas de gas.

La velocidad de movimiento de las moléculas de gas es proporcional a su presión. Para ser precisos (aunque esto sigue siendo solo una aproximación) en un espacio cerrado, la presión de un gas es proporcional al cuadrado de su velocidad de movimiento. Al desacelerar por la fuerza la velocidad de movimiento de las moléculas de aire en una región, la presión disminuye y el declive de presión resultante hace que el aire del espacio circundante se mueva hacia adentro.

Rápido y energético.

No solo aire, sino personas y objetos también.

Si una persona atrapada en esto tiene poder insuficiente para oponerse a la magia, se vería privado de su velocidad de movimiento y quedaría atrapado.

Y si la persona tuviera suficiente poder de interferencia para apagar la magia, las moléculas de gas muy desaceleradas recuperarían repentinamente su velocidad y se produciría una expansión a una presión adecuada; en otras palabras, una explosión.

Una magia que originalmente solo se usaba en la batalla como segunda opción para reducir el impacto de los proyectiles cuando carecían del poder para detenerlos por completo, se había transformado en una doble magia antipersonal gracias al abrumador poder mágico de Miyuki.

Sin embargo, Lina se mantuvo firme contra la furiosa fuerza de succión. Lo que ella había disparado habían parecido botones ornamentales.

Simplemente dada cierta velocidad inicial, no había forma de que esos grupos de resina pudieran atravesar la [Zona de Deceleración] de Miyuki, pero lo más importante, habían informado a Lina exactamente sobre qué tipo de magia estaba usando Miyuki.

¡Si ese es el caso!

Siempre prepárate dos o tres pasos por delante de tu oponente, fue algo que Tatsuya le enseñó repetidas veces a diario. Si el plan para atraer al oponente a la [Zona de Desaceleración] y eliminarla allí fallaba, ella había planeado estrategias para llevarla fuera del área también.

Mientras doblaba sobre la zona interior, Miyuki liberó el área exterior. Las moléculas de aire volvieron a su velocidad original a la fuerza.

El aire, una vez contenido en un área pequeña, se liberó en una gran descarga de presión y envolvió a Lina en una explosión.

Las huellas de una alteración de los fenómenos a gran escala desaparecieron.

De acuerdo con su instinto, Lina se aplastó en el suelo y arrojó una barrera objetiva hacia arriba.

Una onda expansiva se extendió por la parte superior del escudo. El flujo de aire a alta velocidad amenazó con levantar su escudo y todo el suelo, y después de sostenerlo aplicando un gran aumento inercial de magia varias veces mientras permanecía inclinada, Lina levantó la cabeza y buscó una oportunidad para contraatacar, o más bien para evaluar la situación.

Lina no tenía la menor intención de quedarse en quieta. Esperando la oportunidad de levantarse. Hasta este momento, ella había estado totalmente a la defensiva.

Su oponente era una simple estudiante de preparatoria, mientras que ella era la capitana de la unidad de magos más fuerte del mundo.

Naturalmente, ese orgullo había estado allí, pero ahora más que eso, la conciencia de que estaba perdiendo terreno creó su propia presión mental.

Si no tomaba represalias al menos un poco, sería vencida.

A menos que uno tenga una abrumadora magia defensiva, en una batalla mágica la ofensiva era más fuerte que la defensa. Así era la teoría.

Lina sintió que la presión del viento se debilitaba. No se debió tanto a la cancelación de la magia como a la explosión que ocurrió como resultado; después de que todo el aire comprimido había sido liberado, no era de extrañar que el viento hubiera caído.

Lina agarró su cuchillo de combate con su mano derecha.

Su arma había sido tomada, pero este cuchillo capaz de operar [Molecular Divider] no lo había hecho.

El dispositivo de armamento de la magia desarrollada por el Sirius anterior, y ahora la carta de triunfo de STARS.

Cuando se materializa, esta magia, similar a un área virtual extendida, debe superar la potencia de interferencia del oponente.

Además, como una victoria a medias no era una opción, en realidad tendría que ser ir más allá.

Por lo menos, sin embargo,

¡Esto debería ser suficiente para llamar la atención de Miyuki!

Con su mano izquierda que todavía estaba plana en el suelo, esparció dagas donde Miyuki no podía ver.

Ella canceló su aumento inercial, y luego se levantó a toda velocidad,

[Molecular Divider].

En su rodilla, ella balanceó su cuchillo.

Ella activó el área virtual casi al mismo tiempo. En ese momento, Lina sintió una abrumadora fuerza de interferencia que sobrepasaba cualquier cosa que hubiera visto estallar en el espacio entre ella y Miyuki.

El área virtual, en medio de la formación, fue invadida por el torrente de interferencia.

Ella sabía que ella sería detenida. Incluso podría decirse que ella había contado con eso.

“[¡Dancing Blades!]”

Incluso antes de confirmar que [Molecular Divider] había sido desactivado, Lina activó su siguiente magia.

Sus dagas discretamente dispersas se levantaron y volaron hacia adelante en un abrir y cerrar de ojos.

Al rozar el suelo, evitaron el espacio dominado por Miyuki.

Si eres capaz de detener cuatro cuchillas atacando desde el frente y la espalda en esta oscuridad, ¡Adelante, intentalo!

Sintiendo los objetos teñidos de magia acercándose a alta velocidad, Miyuki canceló su secuencia de magia ofensiva parcialmente, y cambió a una magia defensiva de área.

Las dagas que se acercaban a Miyuki perdieron su impulso de vuelo y cayeron al suelo.

Su magia, que se defendía indiscriminadamente contra todas las direcciones, era más mucho más difícil que una que apuntaba a objetos individuales, pero Miyuki, en su estado actual, podía llevarlo a cabo con facilidad.

Incluso podría detener este ataque lleno del poder mágico de Sirius, Lina.

Si su control hubiera estado atado al sello de Tatsuya como de costumbre, le hubiera sido difícil defenderse de eso.

Lo más probable es que no hubiera sido capaz de administrar el control necesario para una técnica tan densa.

Si hubiera desafiado a Lina a una batalla sola, habría perdido sola... pensando eso, Miyuki ofreció una oración de gratitud en su corazón.

Onii-sama está cuidando de mí... No perderé. ¡No puedo perder!

Al ver su elaborado ataque sorpresa aplastado a través del poder absoluto, Lina sintió una creciente sensación de temblor y euforia.

Su mente de repente regresó a esa vista dulce.

En ese momento, ella pensó que simplemente estaba jugando con la pelea.

Pero en ese momento, Tatsuya ciertamente le había susurrado algo a Miyuki.

Pensando en eso, era completamente posible que Tatsuya le hubiera estado informando sobre [Dancing Blades]. Ella había visto a Tatsuya descomponer cinco cuchillas entrantes a la vez.

No era una secuencia para cualquier fuerza intermolecular que neutralizara la magia que ella conocía, pero a juzgar por los resultados, supuso que debía haber deshecho de algún modo los enlaces que unían las moléculas.

Pero ese no era el punto.

Lo que era crítico era que se había dirigido a proyectiles múltiples que se acercaban al mismo tiempo, y los resolvió al mismo tiempo. Lo que había detenido su ataque, no era solo la fuerza de Miyuki.

Ya veo... así que él no hará un movimiento, pero él continuará y hablará ¡No está mal!

Miyuki pensó.

Absolutamente no puedo perder.

Lina pensó.

Tendré que usar toda mi fuerza.

Los dos gritaron al mismo tiempo.

“¡Miyuki!” “¡Lina!”

“¡Eso es todo!”

El mundo se congeló.

El mundo se quemó.

La magia de ambas reflejó la realidad misma, cuando dos mundos colisionaron. Brillando con luz de cristal, una llanura interminable de hielo y nieve.

Rugiendo con truenos, una infernal tormenta de fuego y rayos.

Un infierno que congeló el aire en el eterno invierno, [Niflheim⁶].

Un infierno que consumió el aire en el purgatorio abrasador, [Muspelheim⁷].

Por un lado, una magia de área que desaceleró la vibración de las moléculas de gas congelando no solo el vapor de agua y el dióxido de carbono, sino también el nitrógeno.

Por otro lado, una magia de área que descompone las moléculas de gas en plasma y, además, separa por la fuerza los iones de los electrones, creando un campo electromagnético de alta energía.

El frío puro enfrió el plasma de nuevo a gas, y el plasma fundido revirtió el aire congelado.

La furia de los dos poderes ahora enfrentados creó una aurora en el suelo.

Realmente fue una vista muy bonita.

Casi lo suficiente como para hacer que uno olvidara que la vida y la muerte estaban en juego.

⁶ Niflheim (también escrito 'Niflheimr' o 'Nifelheim', «Hogar de la niebla»), en la mitología nórdica, es el reino de la oscuridad y de las tinieblas, envuelto por una niebla perpetua.

⁷ Muspelheim, también llamado Muspel (del nórdico antiguo Múspellsheimr y Múspell, respectivamente), es el reino del fuego en la mitología nórdica.

Tatsuya, con su dedo en su gatillo CAD, escudriñó cuidadosamente la escena. Si cualquiera de los lados perdiera el control, borraría inmediatamente los hechizos.

Esperaba una dificultad considerable para cancelar la magia de estas dos al mismo tiempo, pero era un mago especializado en restauración y descomposición. Tenía la plena intención de superar esa dificultad.

En medio de esa aurora, cuando el fuego y el hielo se encontraron en lo que pareció una eternidad de destrucción mutua, en menos de un minuto la marea se reveló.

El aire frío se expandía y el plasma se encogía.

En primer lugar, Miyuki era un mago que sobresalía en la magia a gran escala y de área amplia.

Por otro lado, el poder de Lina se centraba en objetos individuales, sobresaliendo en magia severa sobre aquellos.

Desde el principio, este tipo de enfrentamiento había favorecido a Miyuki.

Agregando a eso, sin embargo, Lina ya había luchado contra el vampiro y luego contra Tatsuya, convirtiéndola en su tercera batalla consecutiva.

A pesar de que ella misma no estaba al tanto de los síntomas, ya comenzaba a sentir fatiga.

Con su oponente sosteniendo la ventaja y ella misma con discapacidad, el resultado fue claro.

El encuentro entre Miyuki y Lina nunca había sido una competencia de poder mágico, pero debía decidirse por quién podía mantener la calma y tomar las decisiones más racionales.

“Kuh...”

Ella misma probablemente también lo sabía. Lina gimió dolorosamente.

Y movió su mano hacia su espalda. Ella sacó otro dispositivo de armamento. La multidifusión en esta situación, por hábil que sea un mago, era un prácticamente suicidio.

“¡Es suficiente, ustedes dos!”

Gritando, Tatsuya apretó el gatillo de su CAD.

Su [Gram Dispersion] disipó tanto el [Niflheim] de Miyuki como el [Muspelheim] de Lina al mismo tiempo.

El aire frío y caliente se mezcló rápidamente, creando un vendaval que causaría tanto congelación como quemaduras. Preparándose para el dolor severo que estaba seguro que estaba entrando, la tormenta de frío y calor abrasador fue bloqueada justo delante de él por una pared invisible.

“¡Onii-sama! ¡Eso fue demasiado imprudente!”

Con su rostro pálido, Miyuki vino corriendo. Aturdida, Lina solo podía mirar.

Para esos dos, protegerse de las consecuencias térmicas era pan comido, independientemente de la fatiga. Sin embargo, ese tipo de cosas era imposible para Tatsuya. Fue en momentos como estos que Tatsuya,

que miraba con indiferencia sus propios talentos, estaba algo envidioso de las habilidades de los magos ordinarios.

“Vaya vaya... Tatsuya-kun, ¿qué vas a hacer ahora?”

Sin haber hecho ningún movimiento para defenderse y sin embargo apareciendo ileso, Yakumo habló con fingida sorpresa. No, viendo lo sucio que estaba su discípulo después de él, probablemente se había zambullido en el suelo. Llamado jutsu de lanzamiento de la tierra.

“Maestro... ¿quéquieres decir?”

Sabía cómo Yakumo había escapado del calor y del frío, pero no entendió la pregunta. Hacia Tatsuya que había respondido directamente, o más bien reflexivamente, Yakumo mostró una cara realmente sorprendida.

“Bueno, ya sabes... las condiciones de victoria se habían decidido como cuando un lado se rinde, o queda incapacitado. Este fue un partido originalmente concebido por ti, y ahora que lo has arruinado, ¿qué vas a hacer?”

Tatsuya no tenía palabras para responder.

En esa situación, si él no hubiera intervenido, habría ido en contra de la condición de ‘no matar’, por lo que no se arrepintió de la intervención en sí misma.

Pero todo el encuentro, después de todo, simplemente había sido una excusa para eludir las regulaciones.

El hecho es que su tratamiento de Lina era una situación muy complicada.

Como soldado real, Lina tenía derechos garantizados como prisionero de guerra. Si ella hubiera permanecido de incógnito eso no habría sido un problema, pero Tatsuya había escuchado por su propia boca que ella era la “Capitana de STARS”, y una “comandante del ejército de la USNA” por no mencionar haberlo reconocido antes de eso. Sus derechos como prisionero de guerra no pueden ser ignorados.

Incluso sin un estado legal de guerra, prácticamente cualquier persona capturada durante una operación militar tenía los derechos de un prisionero de guerra. Agregando a eso, el grupo de Tatsuya como civiles técnicamente no se les tenía permitido detener al soldado Lina.

Si él pudiera probar su conexión con el Batallón Independiente Equipado con Magia, podrían tomarla prisionera, pero desafortunadamente no existía la posibilidad de que su estado altamente clasificado saliera a la luz en un incidente de esta escala.

Si interrogaban o detenían a Lina sin derecho legítimo, solo podían ofrecer las excusas políticas de USNA. Esto ni siquiera estaba comenzando a considerar el castigo.

Por supuesto, por otro lado, podrían plantear el problema de Lina atacando a civiles, pero desafortunadamente los derechos de un mago para protegerse como civil todavía estaban muy restringidos. En un tribunal de derecho internacional, Tatsuya y compañía estarían muy desfavorecidos.

Sin embargo, dicho esto, considerando el futuro, no había forma de que pudieran dejarla ir sin hacer nada. Cómo vamos a resolver esta situación... Tatsuya pensó mientras sentía un acercamiento de dolor de cabeza.

“Está bien, admito mi derrota”.

Sin embargo, no había necesidad de esa preocupación. Una mano amiga extendida desde el lugar más inesperado.

“En ese momento, sin duda estaba siendo vencida. Si hubiera transferido la capacidad a otra magia en ese estado, probablemente podría haber sido abrumada por la magia de Miyuki y haber perdido la vida. Por lo menos, no habría estado en condiciones de luchar más adelante”.

Dirigiéndose a Tatsuya y Miyuki, Lina reconoció con gracia su propia derrota.

“Así que he perdido, Miyuki. Tatsuya, no tengo intención de ninguna otra resistencia indigna”.

Sin embargo, la sensación de alivio fue prematura.

“Fue una promesa. Voy a responder lo que sea que pidas. Sin embargo...”

“¿Pero qué?”

“Sin embargo, mis respuestas solo serán ‘sí’ o ‘no’. Cualquier cosa que no pueda ser respondida por eso, no puedo revelarlo. Interferiste y cambiaste las condiciones acordadas entre Miyuki y yo, así que déjame cambiar nuestras condiciones a mi manera, Tatsuya”.

Ella era bastante más terca de lo que él había pensado.

A Lina, que estaba sonriendo tan radiamente que uno difícilmente pensaría que ella había perdido, Tatsuya solo pudo asentir.

Continúa en el volumen 10....